
Sena

コウミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sen a

【Nコード】

N3774E

【作者名】

コウミ

【あらすじ】

『アリオン』（漫画・映画・小説）を下敷きにした二次創作です。セネカの視点で物語が展開します。

小さな新参者（前書き）

『アリオン』（漫画・映画・小説）を下敷きにしたお話です。主人公セネカは、映画版仕様のセネカをベースとしています。セネカの視点で『アリオン』の物語が展開します。

セネカはアリオンと出会う前です。

小さな新参者

オリンポスの峰から幾里か離れた山の麓ふもとに小さな村があった。

その村は決して裕福とは言えなかったが、村の民たちは土地から得られる収穫物と獲物を糧に、皆が慎ましくも懸命に暮らしていた。

その日 村の家々が間もなく黄昏色に包まれようとする頃、だらだらとゆるく下る尾根づたいの坂道を一人の男が歩いていった。

狩りからの帰宅の途なのだろう。その男は牝鹿を担ぎ、手には兎を二羽ぶらさげていた。

狩り場で仕留めたのは久しぶりの大物だったに違いない。男は鼻歌まじりのほくほく顔だった。

担ぎあげている牝鹿は決して小さな獲物ではなかったが、その足取りはさも軽そうにも見える。

実際、その男は鹿の重量などものもしないほどの大男であった。その意気揚々と歩く男の後ろを、一人のやせっぽちの子どもが、身の丈ほどもある弓と数本の矢が挿しまれた矢筒をしつかりと腕に抱えながら、懸命になつてついて来ていた。

抱え込んだ弓と矢は男の持ち物だということは誰の目から見ても明らかだった。

なぜならそれは小さな子どもが携えるにはあまりにも大きく、不釣り合いだったからだ。

このちぐはぐな二人連れは、ほどなく、今度はゆるやかに上る小路にさしかかった。

その先には数軒の民家が立ち並んでいる。

おそらくその内の一軒がこの二人の住まいなのだろう……。

「ミダイが狩りから帰ってきたよ」

一人の若い娘が、家の窓からひょっこりと顔を覗かせながら言っ

た。

「それじゃ。私、そろそろ帰らないと。レダ、仕立ててくれてありがとう」

「気をつけてお帰りよ。転ばないように。もう、あんた一人の体じゃないんだからね？ テオドラ」

家の奥で釜戸に熾した焚きつけの様子を見ていたレダは、いとまを告げるテオドラを気遣うように戸口まで送り出した。

テオドラは愛しげに自らのお腹をさすりながら、ゆっくりと頷いた。

せり出し始めたお腹には、数ヶ月のちには産声をあげることになっている新しい命が宿っていた。

テオドラは、レダから受け取った衣服を大切そうに抱え、にこやかな笑顔を浮かべた。

「平気よ。もう子どもじゃないんだし　あら。サミュエ。上手にできたね」

家の外では一人の少年が地べたに座り込み、せつせと粘土をこねあげ手製の瓶かめを仕上げていた。

サミュエと呼ばれたその少年は、テオドラに向かって無邪気な笑みを浮かべながら嬉しそうに頷いた。

「ずいぶんと上達したんだよ。この村で水瓶を作らせたならピカイチさ……おや？」

ふと、レダが怪訝けげんそうに眉をひそめた。

夫のミダイが獲物を担いで家路を急ぐ姿を認めたからだだが、それと同時に、レダの目は夫の後方にいる小さな子どもの姿を捕らえていた。

「誰だろうね？」テオドラも不思議そうに呟いた。「村では見かけない子だよ？」

「村の子じゃない。ミダイったら、どういっつもり　？」レダは、気難しげな様子で腕組みをした。

レダは、器量良しの部類ではなかったものの、前向きで勝気しょうきな性

の彼女は、村の女衆の中でも頼りになる存在であった。

しかし気さくで親しみやすい印象とは裏腹に、黒みを帯びた瞳はどこか悲しげな影をたたえていた。

そんなレダの目に映る見知らぬ子ども姿は、まるで主人に随行する手下のように狩り道具を抱えて、ミダイに追いつこうとしていた。

この二人連れが到着するまでにしばらくの間があつたため、レダはテオドラと共に家の戸口まで行き、二人を出迎えた。

「レダ！ サミュエ！ 喜べ！ 今日のは大物だぞ！」

どさりと肩から牝鹿を担ぎ下ろすと、夫のミダイは野太い声を張り上げ、誇らしげに言い放った。

ミダイは木炭のように黒い頭髮と髭をぼうぼうに生やし、大柄でがっちりした体軀たいくの男だった。

見上げるほどの大男ではあつたが、熊のような外見とは似つかわしくない少年のように澄んだ瞳と穏やかな眼差しは、彼の素直で朴ぼく訥とつな性格を表していた。

獲物を前にしたサミュエは歓声をあげると、作りかけの瓶をほっぽり出したまま、ずるずると牝鹿を家の奥へと運び入れた。

「よお！ テオドラ！ 調子はどうだ？ 腹ん中の赤ん坊は元気に育つとるか？ ああ？」

ミダイはテオドラに向かつて、彼流の愛想たつぷりな言葉を投げかけた。テオドラは、少し困ったような微笑をもらしながら「おかげさまで」と、短く答えた。

ミダイは、次に二羽の兎を足元に置くと際に立つ子どもから弓と矢を受け取った。

「おお、すまんな。ご苦労ご苦労。……？ お？ おお。それとな

ミダイはようやくレダの動けるような視線に気づくと、子どもの腕を掴み、ぐいと自分の前に引っ張り出した。

その子は。歳の頃は十歳くらいだろうか。

一目で潮焼けと分かる浅黒い肌に、ざんばらに刈りこまれた褐色の髪の毛が子どもの小さな顔を覆っていた。

痩せた体は鎖骨と踝の骨がくつきりと浮き出すほどか細く頼りなかったが、面持ちは硬く、多少のことでは挫けないといった気丈さが見て取れた。

身にまとった短い丈の衣服からは、膝小僧の目立つ細い足が突き出している。

中性的な顔立ちのため、その子は一見、男の子なのか女の子なのか見分けがつかなかった。

「この子は……いったい？」

レダは戸惑いを包み隠すことなくミダイにたずねた。

子どもは口を真一文字に結び、その目はレダをジッと見据えていた。

「拾った」

「ひ、拾った!? って……ミダイ、どういうこと?」

ミダイの返答にレダは思わず言葉を喉に詰まらせた。

「おお。狩り場の山の中でな。住んどった村を焼け出されたらしい。ほれ。お前も覚えておろうが。村の丘の頂から見えた黒煙を」

「覚えているさ。このあいだの……満月の頃だったね。確か」

「おおよ。そいで命からがら逃げ仰せて、方々をさ迷い歩いとるうちに山野に入って雨風をしのいでおったということだ」

「じゃあ、この子はそれからずっと一人で山の中にいたってことかい!?」

レダが思わず驚きの声を上げて、テオドラと目を見合わせた。

「そのようだ。雨水と木の実で食い繋いで、ようよう野垂れ死にしかけるとこを俺が見つけた。そうして拾われた、ちゅうわけだ。全くもって運のいい奴よ。余程の加護と生命力があるとみえる」

「かわいそう……辛かっただろうに……」テオドラが小さな呟きをもらした。

ミダイの一通りの説明を聞き、事の経緯と事情が呑み込めたレダも、改めて子どもの方に目を移した。

しかし、子どもは憐れみのこもった二人の視線を跳ね返すようにそっぽを向き、さらにその表情を硬くした。

途方に暮れたレダは溜め息を一つつくと、ミダイの同情と満足感を含んだ態度に釘を刺すように言った。

「でも……どうするんだい？ ミダイ。うちは上の息子を城に取られて 手にかかるサミュエもいるし。これ以上食いぶちを増やす余裕が無いってことは分かっているはずなのに」

「それよ！」

レダの指摘をさらりとかわして、ミダイは待つてましたと言わんばかりに大げさな身振りをした。

「今からルイザ婆のとこへ行つて来る」

「えっ！？ ルイザのところへ？ 今から？」

「前々から気になつとつたんだ。若い居候でもおれば一人暮らしの助けにもなるう、とな。ルイザ婆には俺も、^{せがれ}倅たちも世話になつてるし。恩返しくらいせにや」

「恩返し……ねえ。話し相手と飯炊きの役に立つだろうけど……」

「なあに！ じきに立派な働き手になるって。なあ？ ボウズ！」

「ボウズ！？」

「うかうかしていると日が暮れちまう。ボウズ、行くぞ！」

ミダイは、大きく顎をしゃり出発を促した。

「じゃ、行つてくるぞ！ 帰つたらすぐに飯を頼む。腹ぺこだ。あ。こいつは婆さんへの手土産に持つていくからな！」

ミダイは足元に置かれた二羽の兎をひよいと肩に引っ掛け、踵を返した。

レダは、夫が子どもを引き連れ大股で家をあとにするのを呆れ顔で見送った。

「やれやれ。世話好きなんだか。お節介なんだか……」

「ミダイらしいよ」

溜め息交じりに肩を落とすレダに、テオドラが優しく声をかけた。

「でも……。あの子……男の子？」

「あの人の目はまったくの節穴だね！ あの子……あんな”なり”をしてるけど、女の子だ」レダはきっぱりと言った。

「やっぱり。そうだよな？ 私も女の子だと思った」

レダとテオドラは肩をすくめ、困惑した面持ちでお互いを見あった後、小さくなっていく二人の姿を目で追った。

ミダイは、その少女を従えて、今度は村外れの一軒家に向かうために大股で歩みを進めていた。

小さな新参者（後書き）

アクセスありがとうございます。

『Sena』の作者 コウミ と申します。

おぼろ気に描いていた妄想があたたまり、更に具体化し、ラストシーン完結のイメージまで描けたということもあって、お話（小説）を立ち上げました。

「形にしてみたい」という熱い思いもありました。

こちらは『アリオン』大好き故の妄想の産物です。

あくまでもファンフィクションですので、その旨ご了承いただけたらと思います。

作者の コウミ は執筆は初挑戦です。

文章力、表現力、語彙、構成など拙い部分が多々あるかと思いますが、頑張つて精進していきますので、長い目で見ていただけましたら幸いです。

また、ひと言、感想などいただけますと、とてもありがたいです。

『Sena』は、セナ と読みます。今後、第十章に出てくる予定です。

コウミ

以下は追記です。

章タイトルタイトルを「プロローグ」から「序章」に変更。

サブタイトルを「小さな新参者」としました。

2011.3.4

「1」

「ルイザ婆よ！ 手伝いにうってつけの子を見つけてきてやったぞ！」

ミダイはルイザの家に着くや、ずかずかと入口をかいくぐり、明け透けな大声で言い放った。

囲炉裏端で夕餉ゆうけの支度をしていたルイザは、その手を止め、夕暮れ時に訪れた異端な二人の客人を訝いぶかしげに迎え入れた。

ルイザは銀髪をひつつめにし、やや背中の曲がった小柄な老婆だった。

顔に深く皺が刻まれているところを見ると相当な歳のようなだが、足腰はしゃんとしていて年寄りくさいところはなく、むしろ精悍せいかんさを感じられた。

頑固で気難しそうな一人暮らしの老婆は、いかめしい目つきでじろりとミダイを睨んだ。

「浜育ちか……。名は、何という？」

ルイザは、今度はミダイの脇に立つその子に視線を移すと、日焼けした顔から、むき出しの素足までをなめるように見渡しながらたずねた。

脇からミダイに頭を小突かれて、ようやくその子がぼそりと呟くように答えた。

「……セネカ」

「ほおう？ 男名おとこなではないか。すると、お前さんは坊か？」

この問いはミダイにとって相当おかしかったらしく、ミダイは腹の底から声をあげて笑った。

「ルイザ婆。こんなチンケなおなごがおろうか！ のう？ ポウズ！」

ひとしきり豪快に笑ったあと、ようやくミダイは笑いを噛み殺しながら言った。

ミダイはセネカをすっかり男の子と思い込んでいるようだったが、しかし、これは無理もない話だった。

みてくれは華奢まろやかではあったが、獣を思わせるような瞳はどこか鋭い光を帯びていて、少女のような可憐さはどこにも感じられない。それに男の子と間違えられても、セネカの口からは文句の一つも出てこなかった。

それどころか、ミダイに調子を合わせるかのようにこくと頷いている。あたかも自分は男の子だと言わんばかりに。

ミダイは事の次第をルイザに説明した。

ルイザは黙ってミダイの話に耳を傾けていた。

「話をしてみるとなかなか面白い奴だな。口も達者だ。いい話し相手にもなるだろうし、あと三、四年もすれば立派な養い手になって食わせてくれるて」

ミダイは滔々たうとうと続けた。

「こいつは仕込み甲斐があるぞ。畑仕事はうちの女房に教えさせよう。男手はいくらあってもいいからな。俺は 何なら狩りに連れて行ってやってもいい」

「おっちゃん！ じゃあ、おいらに弓を教えてくださいかい？」

それまでおとなしくミダイの話を聞いていたセネカが息せき切るようにたずねた。

「ようしようし。だが、まずはこの婆にしつかり奉仕してから。それからだ！」

ミダイは饒舌じょうぜつに喋るだけ喋ると、狩りで獲た二羽の兎をセネカに押しつけた。

「大獵おほいだったからな。ほんの気持ちだ」

ミダイはルイザに向かってそう言つと、来た時と同様に意気揚々と引き上げて行った。

セネカは去つていくミダイを眼で追った。

村外れの小さな家の中には、老婆と少女の二人きりになった。

あたりは既に夕闇に包まれていた。

「まったく。お節介で早とちりな奴よ……何をつつ立っておる。火のそばに来て座らんか。ああ 獲物は、そこに置くがいい」
ぼつねんと立ち尽くしていたセネカは、兎を壁際に置くと囲炉裏に寄り、ルイザの際に腰を下ろした。

ルイザは煮えたつ粥を杓子で鍋の底から混ぜ返した。
セネカは膝を抱えてその様子をジッと見つめていた。

「住んどった村はどうした？ 焼かれたと言ったな」
しばし沈黙ののち、ルイザはおもむろにたずねた。

「……テイターの奴らが、火を放ったんだ」
「親はどうした？ 家族は？」

「……父ちゃんは死んだ……。テイターの奴らにやられたんだ。
姉ちゃんは、分からない……」

「母親はどうした？」
「……。母ちゃんはおいらが生まれてすぐに死んじゃったよ」

セネカは言葉少なにそれだけを言うと、黙りこくってしまった。
ルイザは炊きあがった粥を器によそい、セネカに手渡した。

セネカは短く礼を言うと、貪るように粥をすすった。
よほどお腹が空いていたらしく、セネカはあつという間に器を空にした。

ルイザは二杯目の粥をセネカにすすめた。

セネカは目をぱちくりと瞬かせてルイザの方を見た。

「わしはちいとあれば十分じゃ。お前さん、骨と皮ばかりではないか。遠慮せずに食え」

ルイザのすすめにセネカは素直にこくりと頷くと、今度は味わうようにゆっくりと器を傾けた。その横顔はまだあどけなく幼い。

人心地ついた頃を見計らい、老婆は遠慮なくたずねた。
「お前さんはなぜ、嘘をつく？ 本当はおなごであるうっ？」

セネカの小さな肩がびくと跳ね、鳶色の瞳に驚きの色が浮かんだ。

見た目で性別を暴かれるとは思ってもみなかったのだろうか。

しかしルイザの目は節穴ではなかった。

「その”セネカ”とかいう名。本当の名ではないな？ なぜ名を偽る？ 真の名は何というのじゃ？」

ルイザの有無を言わせぬ問いかけに、セネカは戸惑い、しばらく言葉を失っていたが、やがて観念したように重々しく口を開いた。

「本当の名は……。セナ……だ」

「ほう。セナ、か。よい名ではないか。では、セナ」

「でもおいらはセネカだ。セナは　セナはもう、いない」

セネカはルイザの言葉を遮り、きつぱりと言った。

「やれやれ。おかしなことを言う子だわい」

ルイザはますます呆れかえったように肩をすくめた。

「そんな”なり”で、セネカなどという男名なんぞ名乗っておつたら、男と間違えられるぞ　ほれ、さっきのミダイのようにな。お前はおなごなのだから、きちんとした身なりをして、髪も鋤すいて、

言葉遣いも　」

「間違えられてもいい。おいらは構わない」

そう言つと、セネカはかたくなに口を結んだ。

「……」

ルイザは何も言わずセネカを見据えた。

セネカもルイザを見返していたが、諭されるような眼差しに耐えきれず、ふつと視線をそらした。

「なぜにそれほど頑固になるのかのう　どれ。この婆に話してみんか？　んん？」

一瞬、セネカの表情にためらうような戸惑いの色が浮かんだ。

しかし、それも束の間。セネカはぎゅつと唇を噛み締め、激しくかぶりを振った。そして、食べかけの器を床に置くと膝を抱え込み、それからはルイザが何を聞いても答えようとしなかった。

「やれやれ　」

ルイザは、それ以上何も訊ねることはしなかった。

夕餉の器を片付け終わると、ルイザはセネカに床に就くように言った。

一日歩き通しだったのだろう。元気を振る舞っていたが、その表情に疲労の色が濃く浮かんでいるのをルイザは見て取った。

「納屋から藁わらを一抱え持って来い」

そしてルイザは家の中の一角を指し示した。

「そこが空いておる。蓆むしろを敷いくがいい。上掛けはそこじゃ。布は貴重だから、大切に使い」

こうしてセネカは村外れに住む老婆と一緒に暮らすこととなった。

「2」

「見たか？ あの黒いの」

「見たよ。見た見た！」

「流れモンだつてさ」

「ありや、まるでカラスだよな？」

村の共同井戸へ水汲みに行く度に、子ども達の囁き声がセネカにつきまとつた。

朝の水汲みは子どもの居る家では彼らの仕事と決まっていたので、セネカはルイザの家で初めて目覚めた朝から手桶を持たされた。

セネカは、自分の肌の色をとやくと言われるのはさほど気にならなかったが、村の子どもたちが自分の方を盗み見ながらひそひそ声で話すのは、どうしようもなく勘に触つた。

セネカはうんざりしながら、その日も水汲みの行列に加わつた。

ミダイが、狩り場の山中で孤児を拾ってきたという噂は、いつしか村全戸に知れ渡つていた。

そして、その子は村外れに一人で住む気むずかし屋の老婆ルイザに引き取られたということも間もなく周知のこととなつていた。

「よお！ サミュエ。お前、オレんとこの順番と替われよな！」

赤茶けた短髪で目が針のように細く、顎のとがつた少年がセネカから二つ前のサミュエににじり寄り、口元を偉そうに歪めた。

少年はサミュエよりも体格が一回り小さいが、年は上のようなだった。「ご苦労だったな。お前んちの順番はあつちだ。聞こえたな？ 分かるだろ？ あつち！ 早く行けよ」

きよとんとしたサミュエに、少年はわざと大袈裟な身振りで列の最後尾に行くよう命じた。

「カルラだ」

「ヤな奴！ 今朝は大人がいないから」
すぐ後ろの二人のひそひそ声がセネカの耳に入った。

カルラは意地悪い笑みを浮かべながら、今やサミュエの腕を取り、列から引つ張り出そうとしていた。

サミュエは困り果て、不安そうに瞳をうろろろさせていたが、誰一人サミュエに加勢してくれる者はいなかった。

カルラが今にもサミュエと入れ替わりに、列に割り込もうとしたその時。

「おい！ 順番守れよ」

強い口調で誰か言った。

そこにいた皆が一斉に声のする方を見た。

声の主はセネカだった。

「な なにお！？」

カルラの目が斜めにつり上がり、青白い頬にさつと血の気が指した。

「順番守れって言ったんだ。聞こえただろ？」

セネカは怯むことなく言い放った。

明らかにカルラの方がずるいことから、当然のことをしたまですた。

カルラは子どもらのあいだでは鼻つまみ者だった。小賢しい性質で人を撒くし、何か言つと口八丁で倍返しされるので皆は彼に口出しするのを避けていた。

「流れ者のくせに生意気な口をきくんじゃねえよ！」

凄みを効かせながらカルラはセネカに近づいた。

井戸の周辺は険悪な雰囲気になった。

「おはよう！ いい朝だね」

その時、テオドラが朗らかに水汲みの列に加わってきた。

テオドラは何事もなかったかのようににつこりとほほえみ、素早くセネカに目くばせをした後、誰に言うともなしにたずねた。

「一番最後はここだね？」

カルラが、さつと身を翻した。

そして当たり前のようにテオドラの後ろに並んだが、その目は射抜くようにセネカを睨みつけていた。

子どもたちは口々に小さく感嘆の息をもらした。

「へええ。すげえ」

「ずるのカルラをへこましたぞ」

この日以来、セネカに対する囁きが全く別のものになり、子どもらの敬意の眼差しがセネカに注がれるようになった。

やがて季節は晩秋に差し掛かり、村には乾いた北風が流れてくるようになった。

来るべき極寒の時期に備えて、村の家々では薪や食料などの蓄えや、防寒などの冬越しの準備に追われていた。

セネカがルイザの家に行って来てから、ひと月半。最初は心を閉ざしていたセネカだったが、時の流れと安住の地を得た安心感がかたくなな心を溶かしていったようだ。

セネカは徐々に打ち解け、口数も多くなっていた。根っからの人なつっこさと器用さもあつたのだろう。村の生活に馴染むのにそれほど多くの時間はかからなかった。

セネカ自身が喋る男言葉や、仕草、またその容姿が村の子どもたちの気を引きつけ、セネカは大抵の子どもたちから慕われた。

しかし、カルラと数名の取り巻きたちはセネカのことを『カラス』とか『おとおんな』とか『捨て子』などと言ってからかった。

セネカは『カラス』や『おとおんな』は、聞き流すことができたが『捨て子』と言われるのには我慢がならなかった。

「おいらは捨てられてなんかいない！！」

セネカはカルラにからかわれる度に激怒した。

カルラもツボを心得るや、更に凶に乗った。セネカの逆鱗に触れる度に面白がっては、幾度となくセネカを焚きつけた。

「言わせたい奴には言わせておけばいいんじや。相手にするな。間違つても手を出したりするでないぞ。喧嘩は先に手を出した方が負けだからな」

ルイザにはきつく言われていたので、セネカは振り上げたくなる拳を必死で抑えた。

手を出してはいけないなら口で言い返すしかない。しかし、口で応酬するも弁舌に長けるカルラも負けていない。

二人は取っ組み合いを始めんばかりの険悪な状況に陥ることもしばしばだった。

「カルラは母親を病で亡くしておる。寂しいんじやよ。大目に見てやれ」

ルイザはどこまでも慈悲深かった。

だったらこちらも境遇は同じだ。なのにこの言われようは理不尽すぎる。

セネカは憤慨せずにはいられなかった。

顔を合わせれば突っかかってくるし、こちらから手を出せば叱られる。残る途はただ一つだった。

セネカはカルラを徹底的に無視した。

どこの馬の骨とも分からぬセネカだったが、ルイザの言いつけには従順でよく働いたので村人の受けはよかった。

村人たちは粗野ではあったが、あたたかくセネカを迎え入れてくれた。

ルイザもセネカを自分の孫のように慈しみ、時には叱咤しつたしたりと家族同然に扱った。

セネカも気難しい一人暮らしの老人の気性を心得ており、何より二人はウマが合った。

セネカは毎日、朝の水汲みから炊きつけ用の木切れ集め、洗濯などの雑用などをせつせと片づけ、更にミダイの家の畑仕事の手伝いまでこなした。

また、歳で足腰の固くなったルイザの代わりに家の畑をも耕して、春の種植えに向けての土作りにも精を出した。

「眠つとつた畑が蘇るようじゃの」

これにはルイザも目を細めて喜んだ。

それまで一人で細々と暮らしていた老婆の家には冬を越せる程の収穫物はなかったが、村でルイザの世話になった者からは途切れることなく何かしらの物が施された。

ルイザは村きつての産婆だったのだ。

臨月間近の逆子もルイザの手にかかったら、くるりと向きを換えて頭から産まれてきたというのが語り草となつていているほどだ。

ミダイ本人も、ルイザに取り上げられたという。

「あの馬鹿デカイ図体も、まあ産まれてきた時には、人並み以下の小ささでの。乳もよう吸わんと、母親も難儀して育てとつたもんじや」

ミダイにも赤ん坊の頃があつたのか　と、セネカは少し不思議な気持ちになった。

セネカはルイザから、ミダイが赤子だった頃の事や幼い頃の思い出話を何度となく聞かされた。

そしてそれと同じくらい頻繁に、サミュエの面倒をみるようにと言いつけられた。

サミュエはミダイの二番目の息子だった。

ミダイの息子二人の出産もルイザが面倒をみていた。

「あすこは上の息子を城に取られてな……嫁のレダは大そう落胆しておつた。ようやっと畑仕事も狩りも一人前にこなせるようになってたのにのう。オリンポスの衆も理不尽なことをしよる。年貢を絞り取るだけでは足らんのか」

ルイザは時としてオリンポスを拠点として勢力を振るうテイターンに対する憤りを露にした。

この村ではオリンポス城下の下働きや兵卒として十代後半から若い盛りの青年らを徴収されたばかりで、働き手が不足していた。

セネカはしばしばサミュエを川沿いや雑木林などに連れ出し、散歩や木切れ拾いなどをして時間を過ごした。

ミダイから受け継いだ黒髪と純真な瞳を持つサミュエは、セネカよりも三つばかり歳が上で背も頭一つ分セネカより大きかったが、心は幼子のままで成長することがなかった。

サミュエは時々ふらりとそこらをほつつき歩いては家に戻らないことが多々あった。これにはレダもほとほと手を焼いていたので、セネカの手助けは大いに役に立った。

狩り場で拾われて以来の縁で、セネカはミダイとその家族ともお互い行き来する付き合いが続いており、特にミダイからは息子同然に扱われていた。

ミダイは約束通りセネカの弓を覚えてくれたし、手製でセネカの体格に合わせた弓と矢をこしらえてくれた。

「肘はしっかりと伸ばしているな？ そう！ そうだ！ 拳は肩の高さ。そうして こうやって矢をつがえて、力をゆるめずに獲物を狙う！ 親指の腹を獲物に向けるんだ。よし！ いけ！」

放った矢は獲物を模した丸太になかなか命中しなかったが、セネカは何度も挑戦したしミダイも根気よく教示した。

ミダイは、どうしたことが相変わらずセネカを男の子だと思いつけていた。

その様子を妻のレダは物言いたげに見ていたが、口出しするのを控えていた。

不思議なことにしばらくするとレダは、セネカが女の子であっても男の子であってもどちらでも構わないのでは とさえ思うようになっていた。

二人は親子のように打ち解けていたし、息子のサミュエも傍らでにこにこ笑顔をたたえながら、楽しそうにその様子を見ていたからだ。

やがて厳しい冬が到来し、村は「ぞぞって冬ごもりに入った。

「2」（後書き）

アクセスありがとうございます。

原作漫画の第2巻のエピソードに繋がりたいため、この章では同居する老婆と、村での生活を濃く描写しました。
やや説明口調気味なのが難点でしょうか…。
オリジナルキャラも何人か出演させました。
オリジナル色の強い展開は、まだしばらく続きます。

次回は第二章『いのち』です。

コウミ

「1」

村は真冬を迎えた。

山頂から吹き下ろす風が家々の合間を始終吹きすさび、村人たちを凍えさせた。

村人は細々と暖を取りながら寒さをしのぎ、冬が通り過ぎるのを辛抱強く待っていた。

そのさ中、村では二人のお産を控えていたので、ルイザは臨月を迎える妊婦のもとへ足しげく通う日々が続いていた。

三人目の子を産むサロメが月満ちた。

出産の日、セネカは手伝いのためにと、赤ん坊を取り上げるルイザに同行してサロメの家へと向かった。

上の二人の子どもたちは、お産の手伝いをするには歳が足りなかったたので、家の片隅へと追いやられていた。

セネカと同一年のオリビアと三つ年下のターナの二人姉妹だ。

姉妹はお喋りをしながら藁の束を撚りよ合わせたものを固くねじり、薪の代用になる焚きつけをこしらえたり、乾いたトウモロコシの実を挽いたり、こまこました家の仕事を片付けていたのでセネカも一緒に手伝った。

「ねえねえセネカ。なんであんたは男の子みたいにしてるの？」

小さな手で藁の束を撚りながら、妹のターナが無邪気にたずねた。

「セネカはなんでそんなに肌が黒いの？ どこから来たの？」

ターナはセネカの答えを待たずに質問を連発した。

「およしよ、ターナ。セネカが困ってるじゃないか」

オリビアが姉らしくたしなめた。

しかし、オリビアにとつてもセネカは興味の的だった。

カルラを一喝した井戸での一件は人づてで噂となり、セネカの評判は子どもたちの間でも高かった。オリビアもそんなセネカを慕い、

崇拜する一人だった。

セネカは年下のあどけないターナの問いにきちんと答えた。家族のことを聞いてこないのは、サロメから言いつけられていたのだろう。大人たちの間にもセネカが孤児だということは既に伝わっていた。

「おいらは浜で生まれて、浜で育ったんだ。だから、日に焼けて肌がこんななんだ」

「はま？」

「海の近くってことだよ」

「へええ。うみ？ うみってなあに？ どこにあるの？」

ターナは興味深げに質問を繰り返し、その度にセネカは丁寧に答えた。

海は山をいくつか越えた西の方にあること。

海は川よりもうんと大きくて、その水は塩辛いこと。

海で獲れる魚は、川で獲れる魚と違うこと。

セネカが答える一つ一つに、ターナは目を丸くして聞き入った。

一通り答え終わったセネカはオリビアが何か言いたげにこちらを見つめているのに気がついた。

セネカは藁を擦る手に力を込めながら言った。

「ああ おいらが男みたいにしてるのは 女が、面倒。だからだ」

「ふううん……」

オリビアは神妙な顔つきでうなずいた。

「まあ、確かにあるよ。面倒なことは、さ。私もそんな時、あったなあ……。でも、すぐに飽きちゃったけどね」

言いながらオリビアがもっと詳しく聞きたそうに、ちらりとセネカの方を見やったが、セネカは黙々と藁の束と格闘するばかりだった。

藁をねじった焚きつけが家の隅に小高い山を作る頃、サロメは無

事に元気な男の子を産んだ。

姉妹は小躍りして喜び、代わる代わる頬ずりするやら撫でるやら、大騒ぎだった。

セネカは、そんな姉妹の様子と、生まれたての赤ん坊を抱くサロメと傍らに寄り添う夫の姿を羨望の眼差しで見つめていた。

村でもう一人出産を迎えたのは、初産のテオドラだった。

テオドラの夫はオリンポス城下に働きに出ていたが、とうとうこの日までに戻って来ることはなかった。

お産の手伝いはテオドラの姑しかいない。

手が足りなかったのでセネカもいっぱしの働き手として用事を言いつけられた。

釜戸に火を焚いて湯を沸かしたり、家の中が冷えないよう囲炉裏に絶え間なく薪をくべたり、いよいよという時にはテオドラの額の汗を拭ったり、口に含ませる水を瓶から汲んできたりした。

「ねえ、セネカ？ あんた たまには髪を鋤きなさいよ」

「え？」

陣痛と陣痛の狭間、汗びっしょりのテオドラの額を布片で拭っていたセネカは突然、そう言われて驚いた。

「だって、とても綺麗な髪をしてるんだもの 伸ばすといいよ」

テオドラは絶え間なく喘ぎながらにつこりほほえんだ。

セネカはどぎまぎしながらテオドラを見つめ返した。その手が無意識に髪の毛を撫でつけた。

こんな風に容姿を誉められたのは初めてだった。顔がみるみる赤らんでいくのが分かる。

テオドラは、櫛を持っていかたとセネカにたずねた。セネカは小さくかぶりを振った。

セネカは自分の櫛を持っていなかったし、ルイザが苦心して髪の毛の手入れをさせようとしても、他人事のように知らん顔を決め込んでいたのだ。

「古いやつだけどさ、あんたにあげるよ。何本か歯が折れてるけど。持っしておいきよ。あとで」

「まだ下りてこんかね？」

テオドラの姑がじりじりしながらルイザにたずねた。初産のせい
がお産が長引いているのだ。

「ふむ……輪もよう軟らかくなってきとるし、強くていい”いきみ”もきとる……心配ないじやろう。何せ若い躰からだだしの赤子はゆつくり下りてきておるぞ。心配するな」

ルイザのこの最後の言葉はテオドラに対してだった。テオドラは小さく顎あごを引いてそれに応えた。

それから テオドラは夜通し唸ったり、走りこんだあとのように息を荒げたりしていたが、ついに土壇場を迎えたようだった。

セネカが囲炉裏端でうとうとと船を漕ぎ出した頃 およそ人が発するそれとは思えないほどの、低く押し殺したような唸り声がか中に響いた。

声の主はテオドラだった。

セネカがびっくりして飛び起きると、テオドラは今まさに赤子を産み落とそうとしているところだった。

「これですまないだ！ 気張っていきめ！ あと少し！ あと少しだ」

ルイザのこんなにも必死な形相を見たことがない。

テオドラの姑は妊婦の背後にまわりこみ、その体を支えている。

「もうじきだ！ もうじきに産まれるよ！」

テオドラは、今や目蓋まぶたが頬に食い込むほどに固く目を閉じ、歯を食いしばっている。

セネカはどうしていいか分からず、ただおろおろと立ち尽くしていた。

ルイザの声色が変わった。

「おお もうよい。そこまでだ！ もういきんではいかなぞ！」

力を抜け！ 力を抜いて」

テオドラの目が見開かれた。空を仰ぎ、口から大きく大きく息を吸っては、吐いた。

「そう。ゆっくり ゆっくり息を」

セネカは興味と好奇心に打ち勝てず、思わずルイザの手元を覗きこんだ。

その時テオドラが、あつと声をあげた。セネカも、あつと息を飲んだ。

セネカはテオドラの膝頭と膝頭の間から小さな体が、するりと引き出されるのを見た。

「セネカ！」

いきなり名前を呼ばれてセネカは跳び上がった。

「釜の湯を桶に入れて持ってこい。ああ、その前にそこにある巾きれを取るんだ」

ルイザはきびきびと指図した。

セネカは慌てて釜の湯を汲み入れようと手桶に手を伸ばしたが、ルイザの言葉に忤えて反対方向へと一歩踏み出し体を擦った。

あんまり急いだので、足がもつれ膝をついた。持ち損ねた手桶は派手にはねあがり、もう少して釜の湯ごとひっくり返すところだった。

「慌てずともよい。湯浴みはあとだ。まず赤子の体を拭うだけだて
まずは巾を」

ルイザはセネカから巾を受け取ると、赤ん坊の顔と背中とを丹念に拭いた。

ややあつて、口の中から何やら吐き出した赤ん坊は泣き声をあげた。

「やれやれ」ルイザが安堵の息をもらした。「一時はどうなるかと思っただわい……」

テオドラの赤ん坊の産声は、サロメのところまで聞いたそれよりも心なしか優しくかった。

「おなごじゃ」

ルイザが愛しげに言った。

「なんて可愛い子だろう……早くあの人に見せてあげたい」

テオドラはルイザから赤ん坊を受け取ると感極まった様子で、涙を浮かべてた。

セネカは恐る恐るテオドラの胸元を覗き込んだ。

とても可愛いとは思えないくしゃくしゃの顔をした小さくて真っ赤な子が、甘えるように鳴き声をあげていた。

そこへレダが駆け込んできた。

「ああ 何もかも終わっちゃったんだね！」

レダは戸口を用心深く閉じると残念そうに言った。

外は風がひどく吹き荒れていたのだらう。防寒のため、レダは獣の毛皮をしつかりと体に巻きつけていたが、髪の毛はひどく乱れていた。

「サミュエが調子悪くてね。ずっとむずかっただもんだから……」

レダはテオドラに抱かれた赤ん坊を慈しむように見つめた。テオ

ドラは赤ん坊に乳を与えようとしているところだった。

「手伝いが遅くなってしまって……でも、よくやったねテオドラ」

レダは母親がするように、テオドラの頭を撫でた。

「ありがとうレダ ルイザもありがとう。それから。セネカも

」

テオドラはやや疲れた様子ではあったが、安堵と幸せを噛みしめているようだった。

それから三人の女の衆は、てきぱきと後始末をしてテオドラの身を清めた。

やがて赤ん坊は真新しい産着くもに包まれ、母親の腕の中ですやすやと寝息をたて始めた。

「サロメの産後の肥立ちはどうだ？ 聞いておるか？」

ルイザが、振る舞われた暖かな飲み物をすすりながらレダにたずねた。

「……!？」

セネカはルイザの言葉に敏感に反応した。

「上々だよ。三人目だから何かと無理をしがちだけど、オリビアたちが手伝いになるからね。あの子たちすごくしっかりしてきた」

レダの言葉に安心したようにルイザは何度も頷いた。

その後、レダはサミュエルの事が気がりだからと言って、身支度を整えると早々に家へと帰って行った。

大きな役目を終えてルイザもホッとしていたし、テオドラの姑も無事に生まれた初孫を眼を細めては眺めていたので、誰もセネカが硬く物憂げな表情でうつむいていることに気がつかなかった。

夜が白々と明ける頃、テオドラの姑から丸焼きにした芋を一つずつ渡されたルイザとセネカは帰宅の途に就いた。

芋を布きれでくるみ懐に入れると、家までの道中、寒さがしのげるし、後で食べることもできる。

ルイザとセネカはひと塊りになって毛皮にくるまり、家路へと急いだ。セネカは芋と、テオドラから貰った櫛を大事に懐に収めていた。

村外れのルイザの家は冷え切っていた。

セネカは凍えながらも素早く火を熾おこした。

家の中が暖まるまでの間、ルイザとセネカは毛皮にくるまり丸くなってお互いの体を温め合った。

「どうした？ 疲れたか？」

ルイザはセネカが先程からずっと押し黙っているのに気づいていた。

セネカは答える代わりにたずねた。

「婆ちゃん」

「んん？」

「サンゴノヒダチって、なんだい？ 何かの病気かい？」

「……うむ。産後の肥立ちは、な。赤子を産んだあとの母親の体の調子の良し悪しのことだ」

「……」
ルイザは、囲炉裏の一点を見つめ身じろぎもしないセネカを気にしながらも続けた。

「赤子を産みおとすことは、おなごにとって一仕事以上の大仕事だ。産んだあとはしばらく体を休め、無理のないように努める。そうすれば、やがて体はやがて元通りになる。が」

ルイザは一旦言葉を切ったのち、声を落として言った。

「稀に体が戻らず、弱っていくこともある。時として、命を落とすことも……」

言い終わるとルイザはセネカが口を開くのを辛抱強く待った。

ようやくセネカはぽつりと話し始めた。

「……おいらの母ちゃんは、おいらが赤ん坊の時に死んだんだ」

「んむ。お前が生まれてすぐに、だったな」

「父ちゃんからは『サンゴノヒダチ』が悪かったんだ、って聞かされてた。『サンゴノヒダチ』が悪かったから母ちゃんは死んだんだって。だからおいら、ずーっと病気のことだと思ってた」

「……そうか」

やはりな　と、ルイザは思った。セネカから母親のことを聞いた時からピンときていた。赤ん坊を産んですぐに亡くなるのは、たいていこの為なのだ。

「可哀想なことだが、これは寿命だったと思わねばな。お前の母はお前を生むことがお役目だったのだから」

ルイザは諭すように言った。

セネカにはルイザの気遣いがセネカにもよく分かった。しかし、その言葉の意味は、よく分からなかった。

それから数日もの間、セネカはふさぎこんだように寢床で伏せることが多くなった。

病気ではない。動きたくないだけだ、とセネカは言った。

ルイザは疲れが出たのだろうと思い、何も言わなかった。

そして、この子はきつと顔も知らない母のことを想い、憂いに浸っているのだろう　と、そっとおいた。

「2」

厳しい冬も終焉を迎え、ようやく春の息吹が感じられるようになった。

村はまるで腐葉土の中で眠っていた虫たちがつごめき出すように活動を始めた。

男衆は冬の間鈍った体を奮い起こすべく狩りに出かけ、女衆は春の植え付けの準備に余念がなかった。

そして子どもたちは、草の根や冬眠から覚める手前のカエルなどを掘り起こしたりして、食べ物が乏しかった冬の間の飢えを満たそうと躍起になっていた。

やがて、村人たちが皆、纏まとっていた毛皮や皮製の足覆いを脱ぎ捨て、村のあちこちに野の花が咲き始める頃　村外れの小さな家に不穏な変化が訪れた。

ある日ルイザは発熱した。

季節の代わり目の体の不調と思い、油断をしたのもいけなかった。熱は下がる気配をみせず、何日も続いた。

連日の発熱は老体には堪え、ルイザは日に日に衰弱していった。セネ力は献身的に世話をしたが、快復の兆しを見ることができなかった。

村の長老が熱さましの薬草を煎じたり、心ある衆が滋養になりそうなものを持参したりと、ルイザの元を幾人の者が訪れた。

しかし、トウモロコシの芽が風になびく頃になってもルイザは床から起き上がることができなかった。

ルイザは食も徐々に細くなっていた。

毎日ルイザを見舞っていたレダはある日、深刻な面持ちで村外れの家をあとにした。

この日、ルイザはとうとう一口も粥を口にしなかったのだ。

レダは努めて明るく振る舞っていたが、セネカには半ば諦めたように目を伏せ、首を横に振った。

「何かあつたらすぐに呼びに来るんだよ。朝だろうが夜中だろうが構わないから」

レダはセネカによく言い聞かせた。その目にはつつすら涙が浮かんでいた。

「婆ちゃん」

セネカは寝台に横たわるルイザの際にひざまずいた。

「苦しくないかい？ どこか痛いところは……？」

「……なんの」

ルイザは目を閉じたまま、しわ枯れた声で弱々しく呟いた。

その日、まどろみの中で、セネカは誰かが自分の名を何度も呼んでいるのに気がついた。

誰かが呼んでいる？ 誰だろう？

聞き覚えのある声だ。歳を重ねてはいるが、張りがあつて、どこか凜とした……。

でも、名前が違う。それは本当の名前じゃないんだ。本当の名前は……。

セネカはハッと目を覚ました。

いつの間にかルイザの寝台に伏して眠っていたのだ。

名を呼んでいたのはルイザだった。

セネカはぎよつとした。

ルイザは寝台の上に起き上り、あぐらをかいて座っていた。

「セネカ」

ルイザは半眼のままセネカに眼差しを向けた。心なしかその目には光が宿っている。

「婆ちゃん 起きていいのかい？ 体が楽になつたんだね？」

セネカは安心のあまり自然と顔がほころんでいた。

「すまんがひとつ走りして長老を呼んできてくれんかの……ああ……

…あとミダイもじゃ。ここに呼んできておくれ」

セネカの問いに答えることなく、ルイザは淡々とした様子で言った。

「え？……でも……」

セネカは戸惑った。

起き上がれるほど体が良くなったのに、人を呼ぶなんて。それに

辺りはまだ薄暗く、夜明け前の頃合いだ。

「頼んだぞ」

言つとルイザはそれきり目と口をぴたりと閉ざしてしまった。

何かがセネカを急き立てた。

「待つてて。すぐに」

セネカは村外れの家を飛び出した。

セネカはまずミダイの家に寄り、戸口を叩いた。

すぐにレダが現れた。

レダはセネカからルイザの言伝ことづてを聞くと困惑顔でミダイを起こしに行った。

程なくミダイが現れた。眠気を振り払おうとしきりに目をしばたたかせている。

ミダイはセネカと共に長老の家に赴き、長老を背負つと、村外れのルイザの家へと急いだ。

ルイザはセネカが家を飛び出した時と同じく寝台の上に座り込み、静かに佇んでいた。

「ルイザよ、どうした？ まさか いよいよというわけではなからうな？」

長老がミダイの背から下りると、ルイザの前に座した。

「そのいよいよじゃ。迎えがきた」

ルイザの口調はしつかりしていた。

長老は喉の奥から低く長い唸り声をもらした。

ミダイとセネカはぼかんとしている。

「セネカや。こちらにおいで」

ルイザがセネカを呼び寄せた。

セネカは促されるままに傍らに寄り、ルイザの隣に腰かけた。

ルイザの手がセネカの膝の上にのせられた。無意識にセネカは、その枯れた木切れのような手を握った。

「わしはもう永くはない」

ルイザが口を開いた。

「わしもよう生きた　　が、潮時のようだ」

セネカの手が思わずルイザの手を強く握り返した。

「家にこの子がいてくれたおかげで、世話をしてくれたおかげ、今の今まで生きながらえていられた　　そうでもなかつたら、もうとつくに死んでおつたわい」

ルイザが穏やかな笑みを浮かべ、セネカを見た。

「おいおいルイザ婆。何を言つとる。こんなにしやんとしておるのに、悪い夢でもみたのか？　縁起でもない……」

ミダイが信じられないといった様子で言った。

「ミダイよ。セネカを頼んだぞ。この家は　　まあ、こんなへんぴなところだし　　貰い手もないだろうからセネカに遺す。畑もだ。

……。しかし、しばらくはこの子の面倒をみてやつておくれ。お前の言つた通り、この子は仕込み甲斐があつた」

ミダイはますます訳が分からないといった様子で腕組みをし、眉間に皺を寄せた。

長老は真剣な目つきでルイザの言葉に耳を傾けていた。

それからルイザは長老に形見に遺す物を申し伝えた。

生前の夫が使っていた装束や農機具、機織り機、そして　　。

「セネカ」

名前を呼ばれ、セネカは面を上げた。

「壕へ行って、籠を持ってきておくれ。棚段の一番上にある大きい籠じゃ」

セネカがのろのろと動き、壕から編み目の詰まった蓋付きの籠を

抱えてきた。

籠の蓋を開けると 虫よけの藻草のつんとした匂いと共に中から古い衣装類があらわれた。

やや色あせてはいたが丁寧に仕立てられており、縁には見事な刺繍が施されていた。

「これがさつき言った晴れ着じゃ。ヤニスのとこの娘が年頃じゃつたな。わしが死んだら、その子にあげておくれ。それから」

晴れ着の下にくすんだ朱色の布が現れた。更紗の布で、布端が丁寧に刺繍で縁取られている。

「それはセネカに、じゃ」

セネカは布を取り上げた。しなやかな手触りの生地だった。

「お前の肌の色によろ映える」

ルイザは満足そうに目を細めた。

セネカは頭の中が痺れたようにぼうつとなった。

自らの死を目前にして、ルイザが形見分けをしているということがようやく呑み込めた。

「ルイザ婆よ。セネカにはちいと派手すぎやせんか？ それに、これは女物だろう？」

ミダイが遠慮がちに意見した。

「何をぬかしてある。セネカはれっきとしたおなごじゃ。まだ気がつかんのか！ いつまでたっても鈍感な奴め」

ルイザの体は再び寝台に横たえられ、長老とミダイは揃ってルイザの家をあとにした。

セネカはもう片時もルイザの側を離れる気はなかつたので、二人を見送ることはなかつた。

ミダイは未だにセネカが女の子だということを受け入れ難いようだったが「あとでレダをよこすから」と言って、帰って行った。

「やれやれ……少し、疲れたのう」

ルイザが先ほどとは打って変わり、消え入りそうな呟きを漏らし

た。

「泣くことはない」

セネカの目からは涙が溢れていた。

「産まれ出るのも、死に逝くのも自然の理。日常とかわらん……だが」

ルイザが瘦せた手をのばし、セネカの頬に触れた。涙がルイザの手を濡らした。

「親御を失ったお前には少し酷な言い方かもしれんな。不憫なことだが、まあ……逆も、な。辛いものぞ……」

ルイザが目を閉じた。

「ほんに良い子を拾ってきてくれたの。ミダイに感謝せねばな

お前の行く末だけが気がかりじゃが、まあ……大丈夫だろうて。お前は生きていく力が、生き抜いていく力が強いからな」

命の灯が消えかかっているのだろうか。ルイザの言葉は今や吐息のようだった。

「自分を貰いて、まっすぐに生きていくがいい」

ルイザがゆるやかにその手を自らの胸元に置いた。

セネカは涙を拭った。

別れの時が近い。

でも、その前に　セネカはルイザに言っておかなければならぬ
いことがあった。

セネカは耳元に顔を寄せた。そして、小さく唱えるように感謝の
言葉をつぶやいた。

ルイザのいかめしい口元が、ふっと穏やかにゆるんだが、閉じら
れた目は開くことがなかった。

「2」（後書き）

アクセスありがとうございます。

生まれくる『いのち』と、去りゆく『いのち』……。今後のセネカの成長に欠かせないエピソードとなりますので、本筋と離れますが一章分割かせていただきました。

この章の「後」は、少し重くて、書くのが辛い回でしたね。

次回 第三章『来訪者』では、いよいよあの方が出ます。

コウミ

2011・3・7『いのち』本文改訂

「1」

それからのち、ルイザはまるで眠るように息を引き取った。

ルイザの死は村人たちに静かな衝撃をもたらした。

村人は誰も申し合わせたかのように弔いに訪れ、その亡骸は手なきから厚く葬られた。

気難し屋の老婆は村人たちにとって愛すべき老婆だったのだ。

小高い丘の頂に、ルイザの墓碑が建てられた。

そしてその墓碑に供物を供えるのがセネカの毎朝の日課となった。

「これでようやくルイザも自分の息子と会えるだろうね。あの世でさ……」

セネカと共に墓碑を訪れていたレダが、しんみりとした様子で言った。

セネカは驚いた。先立たれたルイザの亭主の事は何となく耳にしていたが、そのルイザに息子がいたというのは聞いた事がなかったからだ。

「ああ 聞いていなかったのかい。そう ルイザには息子がいたのさ と言っても、生まれてすぐに亡くなっちまったらしいけどね。ルイザからは、ほとんど死産だったって聞いたよ」

「……。知らなかった。そんなことがあったなんて」

「まあね。あまり人には言いたくない事だよ」

レダは声を落としてうつ向くセネカを促し、丘をあとにした。

「ルカスを……。ああ、うちの上の息子のことだけどね」

歩く道すがら、レダが打ち明け話をするような口調で静かに喋り出した。セネカは黙って耳を傾けていた。

「オリンポスからの徴兵の時に ルカスを連れて行かれた時にさ

あれは、ほんと堪えたねえ……」

レダは過去を思いおこすような遠い目をして、ふと苦笑をもらした。

「もう畑も飯炊きも何もかも手につかなくなっちゃってさ……。そんな時にね。聞いたんだよ。ルイザから生まれてすぐに亡くなった息子のことを。そして慰めてくれたんだ。『生きていれば必ず会える』ってね」

「……………」

「なんだか、うだうだ泣き言たれてる自分が馬鹿らしくなっちゃってさ。それからもう、きっぱりとルカスのことは忘れることにしたんだよ」

「え？ 忘れる……………って？」

「ああ。忘れてて、ひよっこり息子が戻って来たら、こんな嬉しいことないじゃないか。城を恨んだり、『まだ戻らない戻らない』ってうじうじしながら暮らすよりも、ずっと前向きってモンだ。ああ、これもルイザの受け売りだけどね」

言いながらレダが心のわだかまりを吹き飛ばすように朗らかに笑った。

「もういいよ。この話は。で、セネカ。支度は出来ているかい？」

「支度？ ああ、そっか」

「そうさ。あんたはあの家を畳んで私たちと一緒に暮らすんだから。今日中には、何とかなるかい？」

「……………」

セネカはしばらく黙りこんでいたが、やがて決心したように口を開いた。

「行かない」

「……………は？ なんだって!？」

「行かない。おいら。あの家を出ない。一人で暮らす」

セネカは初めてルイザの言いつけを破ろうとしていた。

一旦心を決めたセネカは頑として意志を曲げず、取り付く島もない。

とうとうレダは退散せざるを得なかった。

入れ替わりにミダイが村外れの家にやって来た。セネカを説得するためだ。しかし、セネカの答えは決まっていた。

「いかん！ それはいかんぞ！ 絶対にいかん！ 俺はルイザからお前を引き取るように言われたんだ」

「大丈夫だつて。婆ちゃんも大目に見てくれるさ。あ でも婆ちゃんは『面倒をみてやってくれ』とは言ってたけど『引き取ってくれ』とは言わなかったぜ？」

「子どものクセに屁理屈なぞぬかしおつて！」

結局ミダイもセネカを説き伏せることが出来なかった。

「気兼ねがあるのなら心配は無用だぞ？」

帰り際にミダイが諦め半分に言った。

恩人であるミダイを困らせている セネカは良心がちくりと痛んだが、すぐに小さくかぶりを振った。

「しばらく一人でいたんだ。それに、おいらがこの家から出ていたら婆ちゃんが寂しがるとような気がしてさ」

「……。気持ちは分からんでもないが……しかしなあ、セネカ」

「そんなに心配なら毎日様子見に通えばいいじゃんか。おいらがミダイんちに行ったら、婆ちゃんがくれた畑の世話で毎日ここに来なくちやいけないんだ。こつちだつて色々大変なんだぜ？」

「口の減らない奴め！」

とうとうミダイはサジを投げた。

「どうしたもんかなあ」

その日の夕刻、ミダイが狩りに使う矢の鏃を磨きながら、誰に言うともなしに呟いた。

「じきに寂しくなつて、あつちから『住まわせてくれ』って言うてるよ」

せつせと麵麩の生地をこねながらレダが言った。

「結局、人は一人つきりじゃ生きていけないってことが、身にしみるわ」

「ふうむ……」

ミダイは溜め息をもらした。かたわらではサミュエが無心に藁を
縛なっていた。

「まったく。どうしたもんかなあ」

ミダイはまた、そう独りごちた。

セネカの独り暮らしが始まった。

しかしその生活はルイザが生きていた頃と何ら変わりがなかった。
ルイザの担っていた仕事をセネカが引き受けた分、毎日が慌ただ
しかったが、忙しくしているとルイザがいなくなつたという現実を
しばし忘れることが出来たし、孤独感も紛れた。

村では種まきの時期がとうに過ぎていたが、冬に土を起こしてお
いた小さな畑にセネカはトウモロコシと芋を植えた。セネカの日課
に水まきと草抜きが加わつた。

ミダイに教わり、雑木林には小動物を捕獲するための罠をこしら
え草蔭に仕掛けた。捕れるものは大抵、蛇や蛙などだった。

またミダイの家では弓矢作りの手伝いをした。

ミダイはあれから、なんだかんだ言つてはセネカを狩りへ連れて
行くのを後延ばしにした。

セネカは、ミダイがずっと自分を男の子だと勘違いしてくれてい
たらよかつたのにと思った。

一日中、身を粉にして働いていても、さすがに夜になると一人き
りの生活の寂しさがひしひしと感じられた。

セネカは寢床で身を縮め、眠れぬ夜を過ごすことも少なくなかつ
た。

「悠々自適だねえ！ セネカさんよ！」

独りで暮らしを始めてからしばらくすると、カルラの冷やかしが
始まつた。

困つたことに、周りの子どもたちの中に同調する者も出はじめた。

皆が皆、面白がってセネ力を焚きつけようとした。

セネ力はこのテの輩には完全無視を貫いたが、これ以上こんな嫌がらせが続くようならミダイの家に住まわせてもらわないといけな
いだらうと思いはじめた。

セネ力は囲炉裏端に座り、愛しげにルイザと共に暮らした家を眺
めた。

この村に来て以来、馴染みのこの家との別れの時がいよいよ来る
のかもしれないと思うと、切なさで胸がきゅっと痛んだ。

その夜、セネ力は夢を見た。

セネ力は家の外に立っていた。

村外れにあるルイザの家は、村の家が見渡せる場所に建っており、
隣には厠かわやと小さな納屋があった。

いつもの見慣れた風景だ。
そう。

悠然とした足取りでこちらに向かって歩いてくる四つ脚の黒くて
大きな獣以外は。

セネ力はその獣を見るのは初めてだった。

太い四肢、しなやかな胴体、長い尾、そして 顔のまわりを取
り巻いているふさふさとした鬣たてがみ。

何という獣だろう？ 狼？ いや違う。

馬とは似ても似つかない。見たこともない。そしてセネ力の想像
も及ばないその獣は、ある種の気高さを漂わせながらセネ力の目の
前をゆっくりと歩いていった。

間近で見ると思わずすくんでしまうような猛獣である。

しかし、不思議と恐れはなかった。

セネ力は獣が大事そうにくわえている小さな若い獣に目を奪われ
ていた。

親子 なんだらうか？

もしかしたら死んでいるのかもしれない　と、セネカは思った。
若い獣は全身が酷く傷だらけでぐったりしていた。

親の獣は萎えた子の躰からだをくわえ、セネカの前を通り過ぎると納屋へ入って行った。

しばらくすると、獅子は納屋から姿を現した。

そして同じくゆっくりとした足取りでセネカの前までやってくると、ぴたりと歩みを止めた。

子の獣は納屋の中に置いてきたのだろうか。もう何もくわえていない。

獣がセネカを見、セネカも獣を見た。

お互いの目と目が合った。

獣の目が何かを訴えている。懇願するような眼差しが、まるで突き刺すかのようなだった。

しかしその瞳は、どこか温かみと優しさをおびていた。

(なぜ　そんな目で見るの?)

セネカは獣に問いかけようとして口を開いた。

しかし言葉は音を失い、虚しく喉元を通り過ぎるだけだった。

何も発しない。

何も発することがない。

そこは静寂の世界だった。

獣は向きを変え、来た方向へゆらりと歩いていった。

どこからか霧もやが立ち込め、辺りが白く霞かすみんでいた。

そして。

セネカは目覚めた。

まだ辺りは暗く、日の出前の時間帯だ。

不思議な夢は目覚めてからもはつきりと脳裏に焼き付いていた。

セネカは寝台に仰向けに横たわったまま、ぼんやりと反芻はんすうした。

正夢かもしれない。

そんな思いが頭をもたげた。

やがて、うつすらと辺りの景色が見て取れる彼誰時かわたれどときになる頃、セネ力は寢床から起き上がり納屋へと向かった。

目に飛びこんだのは納屋の片隅に積まれた藁の山に横たわる人の姿だった。

セネ力は一気に眠気が吹き飛んだ。

夢ではない。

納屋に人が倒れている！

セネ力はとつさに身を翻し、家へと駆け戻った。そして再び寢床に潜り込むと、上掛けを頭からすっぽり被って丸くなった。

心臓が早鐘のように鳴っている。

誰だろう？

村の誰かか？

いや、もしかしたら盗賊？ 浮浪者？

倒れていた。いや、しかし眠っていたのかもかもしれない。

起き上がって家に入ってからこれなら、どうしよう？

色んな不安が頭の中を渦巻き、セネ力は怖気づいた。

ミダイに助けを乞いに行こうか。

そう考えた時、セネ力は以前サミュエがふらりとこの家へやって来た時のことを思い出した。

サミュエかもしれない。

夜中に寝ぼけてやって来て、納屋に入りこんで眠りこけたんだ。

そうだ。そうに違いない。

セネ力は無理矢理、自分自身に言い聞かせた。

先ほど臍へらげに見えたのは、確かに少年の背格好だった。

朝になったらレダが大慌てでサミュエを探しまわるはずだ。

セネ力は先ほどからの緊迫感から解き放たれた気持ちだった。

それでも、まんじりともせず朝日が昇るのを待ったセネ力は、再び恐々と納屋に向かった。

藁の上に倒れていたは、やはり少年だった。

そして、その少年はサミュエではないことが一目で分かった。

セネカの鼓動がまた、激しく胸を打ちつけた。

少年は目を覚ます気配がない。藁束の上に、木偶のように倒れ伏している。

セネカは恐れと興味の入り混じった気持ちで少年を見た。

その少年は。

むき出しの腕と足にまともな皮膚があるのだろうかと思うほど、生傷だらけだった。

傷は肩と背中が特にひどい。

無数のみみず腫れと破れた皮膚。

鞭を当てられたのだろうか。

裂けた衣服の隙間からのぞいている乾ききっていない赤錆色の血の固まりが痛々しい。

セネカは思わず顔をしかめた。

まるでボロ雑巾だ。もしかして、死んでいるのかも……。

その時、少年の口からうめき声が漏れた。

生きている！

セネカは恐る恐る少年の顔を覗き込んだ。

やはり、この村の住人ではない。

髪は黒髪。瞳は固く閉ざされてはいたが、しっかりとした眉、すっと通った鼻筋の端正な顔立ちをした少年だ。

熱い。

そつとその肩口に触れたセネカは、腫れたあがった皮膚が思った以上に熱を帯びているのに驚いた。

少年は口を微かに開き、浅く苦しげな呼吸を繰り返している。

セネカは転がっていた手桶を掴むと、井戸に向かって駆け出した。

「2」

井戸端は人影がまだまばらで、水汲みの順番はすぐにまわってきた。

セネカは水を桶にたっぷり汲み入ると、もと来た道を急ぎ足で戻って行った。

「よお。セネカ。えらくご機嫌じゃないか」

途中、最も出会いたくない相手、カルラにばったりと出くわした。セネカは困惑した。傍はたから見たら自分はそんなに機嫌が良いように映っているのだろうか？ いや、そんなことはないはずだ。

まったく！ 言いがかりもいいトコだ！

セネカはだんまりを決めこみ、カルラを無視した。

「気取り屋のセネカさあん！」

カルラの冷やかしが追いかけて来たが、セネカは構うことなく先を急いだ。

しかしセネカはこの時、カルラの目がずる賢く光っているのに全く気がついていなかった。

家に戻るとセネカは手桶の中の水を半分だけ大瓶に移し、残りの水を口の広い瓶に注ぎ入れた。

少年はまだ目覚めていない。

セネカは布巾を水に浸してゆるく絞り、少年の傷口にそっと押しあてた。

体が微かに反応したものの、少年は目を覚ますことはなかった。

少年の体にこびりついた血と泥を一通りふき終えるとセネカは家へと走った。

壕には傷薬の軟膏がある。

セネカが転んでひどく擦りむいた時に、ルイザはその軟膏を持ち出して塗ってくれた。

高価な薬だから　と、ほんの少しづつしか使うことを許されなかったが、セネ力は少年の傷にたっぷり塗りと塗りこんだ。おかげで軟膏を詰めた貝殻がほとんど空になった。

手当てを一通り終わると、セネ力は朝餉あさけの支度にとりかかった。

囲炉裏に仕掛けた土鍋の粥が、ぐつぐつ煮えたつ頃になっても、少年は瞳を閉じたままだった。

セネ力は昏々と眠り続ける少年の顔をジッと見つめた。

どこかの異国の王子なのかもしれない。

粥を盛った器を脇に置きながら、セネ力はふと思った。

少年はみすばらしい衣服を纏まとってはいるが、面持ちはどこか高貴で、明らかに平民とは違った風格が感じとれた。

それに。

セネ力は今までにこんな綺麗な少年を見たことがなかった。

男なのに”綺麗”と例えるのはおかしなことかもしれないが、他に相応ふさわしい言葉は考えつかなかった。

セネ力はこの少年にすっかり心を惹ひきつけられ、吸い寄せられるようにまじまじとその顔を見つめていた。

そんなセネ力の視線を感じ取ったかのように、少年が反応した。

少年はうめき声と共に、小さな呟つぶきをもらした。

「…………レ、ス…………イ…………」

喋喋った！

セネ力は息を殺し、耳をそばだてた。

「レス…………ファイ…………」

人の名前　？　レスファイ　？

少年は苦しげに息を荒げ、さらに喘あせいだ。

「レスファイ…………ナ…………」

レスファイナ？　レスファイナだ。女の名前だ。

セネ力は、少年がレスファイナという名前の女のことを思い、うなされているのだという事を知った。

少年が再び深い眠りに落ちるのを見届けてから、セネカはルイザの墓碑へ朝の挨拶に出かけた。

道々に生えていた花を束ね、墓標に供えた後、セネカは仕掛けた罠に獲物がかかっていたのか確かめに雑木林へと向かった。

少年はもうしばらくすると目覚めるにちがいない。もしも獲物が捕らえられていたら、ちよつとしたご馳走を少年に振る舞える。

セネカの気持ちは逸り、自然と急ぎ足になった。

(レスフィーナ……か)

セネカは、先ほどの少年の口から出た女の名前が頭から離れなかった。

少年は、うわ言のように何度もその名前を呟いていた。

レスフィーナ。

上品で、不思議な響きのする名前だった。

うわ言で名前を呼ぶくらいだから、きっと少年の意中の人なのだろう。

そう思うと、セネカの心は、なぜだか妙にちくちくと疼いた。

「残念だったなセネカ。獲物は逃げちまったぜ」

雑木林には先客がいた。

カルラとその取り巻きの男の子が二人、そして サミュエだった。

セネカは訝しんだ。

罠を仕掛けている場所を知っているのはセネカの他はサミュエしかいないはずだ。

サミュエがカルラたちに教えたのは明白だった。

でも、なぜ？

「なんでつるんでるのかって顔してんなあ？ セネカ」

カルラは、これ見よがしなにやけ顔だった。

「俺達、仲間だもんな？ なあ。サミュエ」

サミュエは奇妙にはにかみながら頷いた。

セネカにはさっぱり訳が分からなかった。強要されているようには見えない。が、サミュエの本意ではない。

「サミュエ。レダは、お前が、ここに、いることを、知ってるのかい？」

セネカは一句一句丁寧にたずねた。

意外な問いにサミュエは「えっ」という驚きと困惑の表情が浮かべ、急いでかぶりを振った。

「やっぱりだ！」

サミュエはカルラの巧みな口車に乗せられたに違いなかった。

「行くう」

セネカはサミュエの手を取り、カルラたちから離れた。

サミュエは小さく頷くと、おとなしくセネカに手を引かれて行った。

その様子をカルラがにやつきながら見ていた。

口八丁のカルラが何も言い返さない。セネカは嫌な胸騒ぎがした。サミュエをカルラたちから引き離すと、セネカはそのまま村の集落に向かって歩き始めた。

しばらく行つたところで後ろからカルラの、狂喜を含んだ大声が聞こえた。

「おおーい、サミュエ！ 今だぞ！ やれえ！」

「！？」

いきなりサミュエがセネカの正面に回り込み、行く手を塞いだ。握られていた手首からセネカの手を振りほどくと、今度は逆にセネカの両腕を掴み取った。

あつという間の出来事だった。

サミュエはセネカの両腕を握り、向かい合わせに立っていた。

「！！！」

突然のサミュエのこの行動に、セネカは驚き、思わず身を硬くした。

サミュエは、セネカを微妙な面持ちで見つめていた。

「セネカ。前から聞こうと思ってただけどよお。お前さ、なんで女なのに男のなりをしてんだよ？」

いつの間にかカルラが二人の傍らまで近づいて来ていた。

セネカはカルラの口調があまりにもいやらしく感じたので、思わず背筋がざわついた。

「サミュエ。手を離してくれ　いい子だから」

セネカは急いで言った。

しかし、サミュエは握った手を離さない。その目はちらちらとカルラの方を盗み見ている。

カルラはサミュエに何を吹き込んだんだ！？　セネカは憤りながら奥歯を軋きませた。

「なんでか気になってしょうがないのさ。そいつを今日、聞かせてもらおうと思つてたまでさ。サミュエも知りたいっていうし」

「ばかばかしい！！」

セネカが一喝した。

その剣幕に圧され、サミュエの手の力が弛んだ。

その隙をみてセネカはするりとサミュエのいましめから両手を振りほどいた。

「どうだつていいだろ！　んなこと！　それより！」

セネカがカルラをじろりと睨み、反撃に出た。

「それよりカルラ。こつちだつて前から聞こうと思つてたことがあるぜ！　なんでお前さんは男なのに女の名前なんだよ？」

カルラの頬が、上気したように赤くなった。

セネカは、カルラが自分の名前が女のような名前であることを少なからず気にしているということを、前々からオリビアから聞かされていた。

これが本当かどうかは分からなかったが、今、はつきりした。カルラの様子を見る限り、カルラはこのことを相当気にしている。

相手が黙りこんだ隙に、セネカはサミュエを促した。

「行こう！　こんなヤツ相手にするなんて時間のムダだ」

「へええ！　やっぱりそうか！」

カルラはわざとらしく大声で言い放った。口調が乱れ、苛立ちのあまり頭がのぼせ上っている。

「お前たちがねんごろな仲だつてことは知ってたんだぜ。まあ、こいつの脳みそはいつまでも赤ん坊のままだし、嘘つきのよそ者とはお似合いだけだな」

カルラがこれみよがしに鼻で笑った。

取り巻きたちも冷やかすようにはやしたてている。

「ま。せいぜい施してやるんだな。なにせそいつはてんで能なしだ。おい、行こうぜ！」

カルラはむかむかするような嘲り顔を二人に向けると、取り巻きたちを引き連れ、その場から立ち去ろうとした。

「おい。待てよ」

セネカが唸るように低く静かに言った。その目は怒りに燃えていた。

「こつちの罫の獲物を横取りした挙げ句に　今、嘘つきとか能なしって言ったな。てめエだつて嘘つきで能なしの最低野郎じゃないか！」

「何？　もう一度言ってみろ！　このオレが最低だと!？」

「何度でも言つてやるさ！　嘘つきで、汚い、すくいようのない最低なヤツだ！」

「んだとおお！」

セネカとカルラはお互いに睨みあい、一触即発の状態になった。

脇にいたサミュエはおろおろし、二人の取り巻きもただならぬ雰囲気にならぬため、

「お前と一緒にすんなよ！　オレのどこが嘘つきで最低だつて言うんだ！」

「はン！　お前がズルをしてオリンポスの呼び出しを逃れたつてことは、村のみんなが知つてることだ！　カルラはやり方が汚いつて

な！！」

セネカの挑戦的な物言いを聞くや、カルラの顔色が変わった。

「そ、それは……」

「ほーらみる！ 何も言い返せないじゃないか！ 歳をごまかしたんだったよな？ あ！ あと、耳が聞こえないって？ この大嘘つきめ！！」

オリンポスから村の若者らを徴収するための審査があった時、セネカはまだこの村の住人ではなかった。

しかし、カルラが歳を偽り、体の不遇を訴えて徴兵を逃れたという噂は今でも密かに流れ続けていたのだ。

「な……何、言ってるやがんだ……。お前だって、お前だって村中が噂してるのを知ってるのかよ！」

「うわさ？」

「ああ、そうさ！ 皆、口々に言ってるぜ！ お前がミダイに色仕掛けで迫って拾ってもらったってな！」

「な……ッ！」

セネカは絶句した。

「ミダイのバカぶりは天然以上だからな。レダの尻にひかれてまくりだし おっと、話はお前の事だったな。噂はまだあるぜ！ 前にいた村じゃ男をたぶらかして渡り歩いていたってな。凶星だろ？ あーあ嫌だねえ。チビのくせによくやるぜ！ いっちょまえの女の体にもなつてないクセによ！ 色気だけは一人前のつもり」

カルラの反撃もそこまでだった。

なぜなら、セネカがカルラの横面を思いつきり引つ叩いたからだ。まともにビンタを喰らった衝撃でカルラの体がぐらりと傾いだ。

「てめええ！！」

カルラは我に返るとたちまち反撃に出たが、不意打ちを食らったためか照準が定まらない。その拳は大きく空を泳いだ。

すかさずセネカはカルラの腹に頭から突っ込こんだ。

カルラはたまらず地面に仰向けにひっくり返った。

セネカ悔しさのあまり我を忘れて激昂していた。

『先に手を出してはいかん』

ルイザの言いつけは、どこかに消し飛んでいた。

セネカの暴走は駆け付けたミダイによって食い止められた。

事の重大さに気が付いた取り巻きの一人が大人を呼びに村に戻るうとしたところ、途中でサミュエを探しに来たミダイに出くわしたのだ。

もう一人の取り巻きは、カルラに加勢しようと組みつくセネカを引きはがしたものの、既に狂気に駆られたセネカの応酬を受けた。

「こらあ！！ お前たち、やめんか！」

ミダイが間に入った時には、双方ひどい有りさまだった。

カルラは容赦なく殴打の洗礼を受けたので、体のそこらじゅうアザだらけだったし、頬と首筋のに走るミミズ腫れの痕が醜く赤紫色にくつきり浮き上がっていた。

セネカもそれ相当の代償を払った。

カルラがめちやくちゃに振り回した拳が顔に当たったのだ。

双方とも傷だらけの泥だらけで目もあてられない。

おこぼれを頂戴した取り巻きも目のまわりにアザを作り、ひいひいと喚わめいていた。

「いったい何があった？！ ああ？」

ミダイは二人を交互に見ながら問いただした。

「こいつだ！！」

カルラが叫んだ。

「こいつが先に手を出した！！」

「本当か？ セネカ！」

ミダイが驚きと落胆の表情を露にしてセネカを見た。

その目が「女の子なのにこんなことをして！」と言っている。

「ちがうよ！」

サミュエが堪りかねたように大きな声を出した。

「ボクが先だった。セネカじゃないよ」

「はあ！？ サミュエが？ どういうことだ！」

ミダイは訳が分からない。

「説明するんだ。ああ。お前たちはいい。セネカ。言うんだ」
ミダイがセネカを見据えた。

セネカは応える代わりに地面を蹴ってその場から遁走した。

「この あばずれ ！！ 『捨て子』の癖に ！！！」

カルラの罵倒を背中で聞きながら、セネカは疾駆した。

殴られた跡がズキズキと痛んだ。

鼻腔の奥から苦い血の塊が喉に下りてきて吐き気がした。

カルラに蹴りあげられた腹や、地面に組み伏せられた時に打ち付けた背中 身体がどこもかしこも痛かった。

セネカは滅茶苦茶に駆けて、一目散に家へ帰り着いた。

がらんとした家の中に、セネカは一人きりだった。

「セネカ。どうしたその顔は！ さては、とうとう喧嘩をやらかしたな？ 泉へ行って洗ってこい！」

ルイザがいたら、こんな風に言っただろう。

しかし、今は叱咤したり、庇かばってくれる優しい同居人はもういない。

切なさがどつと込み上げてきて胸が押し潰されそうだった。

殴られたことよりも、屈辱を受けたことよりも、『捨て子』呼ばわりされたことよりも。

今は一人で居ることの方が辛かった。

セネカは熾おきが静かに燻くすぶる囲炉裏の端で、体を胎児のように丸めてうずくまっていた。

喧嘩の昂たかぶりはおさまったものの、胸の苦しみは次第に強まり、今にも張り裂けそうだった。

セネカは固く目を閉じ、その苦しさに必死で耐えた。

その時。

肩に何かが触れた。

セネカは驚きのあまり、弾かれたように撥ね起きた。
触れたのは人の手だった。

そしてその手の主は　あの黒髪の少年だった。

「君……どうしたの？」

少年は起き上がったセネカの顔を覗きこむと、ハツとした様子で言った。

「怪我をしてるね……大丈夫？」

少年は心配そうに眉をひそめ、セネカを見つめた。

セネカは言葉を失っていた。

先ほどの騒動でこの家に少年がいることなど頭からすっかり消し飛んでいたのだ。

なんてキレイな目をしているんだろう。

少年のその紺青の瞳は、美しい深海を思わせるようだった。

セネカはその優しい青に吸い込まれそうになりながら、しばらく
我を忘れた。

「あの……君？　大丈夫かい？」

少年がもう一度心配そうにたずねた。

セネカは現まっくらに引き戻された。

自分は今、ひどい顔をしているはずだ。

セネカは少年に背を向けると、手の甲で顔をこしこしと擦りつけた。

「見るな、よ……ッ！」

意思とは裏腹に声がかくぐもった。

喉の奥がくくつと鳴り、熱いものがこみあげてきた。

心を寄せられ、優しい言葉をかけられて、セネカの中で何かが弾けた。

涙が、今にも堰^{せき}を切つて溢れ出しそうだった。
まさかこんな見ず知らずの少年の前で涙をみせるなんて　あり
えない。

セネカはうつむきながら必死で涙を飲み込み、湧き上がってくる
熱いかたまりをも無理やり抑え込んだ。

と、その時、セネカはその背中に何かに触れるのを感じた。

その温かく、包まれるような感触は。

少年がセネカの背中を労^{いたわ}るように擦^{さす}り始めていた。

「さわるな!!」

セネカは少年の手を乱暴に振り払った。

「……………あ……………ごめん……………」

少年は驚いたようだった。

「あっちへ　行けよ……………もお　、行けたらあ!!」

セネカは声を嗔^からして怒鳴った。

鼻の奥が突き抜けるようにつんと痛んだ。

顔がみるみる歪んだ。

もうそれ以上、堪えることができなかった。

セネカはその場につつ伏し、とうとう耐えきれずに泣いた。

悔しさと、寂しさと、悲しさと、恥ずかしさと、そして嬉しさと

色んなものが入り混った涙だった。

「3」（後書き）

アクセスありがとうございます。

突然やって来た黒髪の少年、やっと目覚めました。

当たり前のようにセネカを気遣うのは、彼の優しい性格からです。

次回は第四章『夢幻』です。

コウミ

2011・3・8 本文改訂

「1」

どれくらい時間が経っただろうか。誰かの手が、突っ伏してるセネカの肩に触れた。

また、あいつだ。

セネカはぴたりと泣くのをやめた。

涙にぬれた顔を見られまいと、うずくまったままの姿勢で涙を拭い、セネカは起き上がりざまに怒鳴りつけた。

「あっちへ行行って言っただろッ!!」

しかし。

「びっくりした。私だよ?……誰か来てたのかい?」

そこにいたのは、レダだった。

レダはセネカの様子を見に、村外れ家へとやって来たのだ。

セネカはまた、言葉を失った。

いぶかしがるレダの視線をさっとかわすとセネカは急いでかぶりを振った。

「なんでも……ない」

セネカはようやく言葉を喉の奥から引っ張り出した。

「……ふうん」

レダは刺すような視線をセネカに向けた。

セネカは焦りと疾しさでどぎまぎした。

「あああ……もお、なんてざまだろう」

レダはまじまじとセネカの顔を見るや、悲観的な声をもらした。

そして物干し綱に掛けてある布を一枚取り上げ、セネカの顔を拭いた。

セネカは涙と血の跡を拭き取ってもらう間、おとなしくされるがままでいた。

「いいかい? セネカ。あんたは女の子なんだから。取っ組みあいの喧嘩なんて真似はもうおよしよ?」

それはらレダの説教が始まった。

「もうカルラたちと付き合うのはおやめ。いいね？」

何も好き好んで付き合っていた訳じゃない。絡んできたのは向こうだ。

セネカは心の中で反論した。

「これからはサロメんとこの姉妹と遊ぶんだよ。ああ、それから乱暴な男言葉も、もうおやめ。今日からだよ。分かったね？ それから」

レダが説教を繰り返すあいだ中、セネカは気が気ではなかった。

レダはいつまで居座るつもりなのだろうか。

あの少年は姿が見えないところをみると、納屋に戻ったに違いない。

レダがわざわざ納屋の中を覗き込みに行くことは、まずないと思うが この家に見ず知らずの少年がいるところを見つかったりでもしたら……。

セネカはレダに気取られないように時折、ちらちらと上目使いで家の入口の方を垣間見た。しかし、セネカがどこか上の空なのはレダにはお見通しだったらしい。

レダはおもむろに振り返り、入口の方を見た。

「あ！ そ、そうだ。サミュエは？ サミュエはどうしてる？」

セネカは、何か言いたげなレダが口を開く前に慌ててたずねた。

レダの顔がさつと翳^{かげ}った。

「……セネカ、何があつたんだい？ 林の中で。サミュエは、今は、家にいるよ。ミダイは……あんたとカルラが取っ組み合ってるのしか見ていないというし。サミュエの説明はアテに出来ないし……。カルラたちからは、取りあえず話は聞いたけど」

レダは眉根を寄せながらためらいがちに言った。

カルラたちが本当の事を話すとは到底思えなかった。セネカはレダに、雑木林での一部始終を話し始めた。

レダはしばらくの間、黙って聞いていた。

セネカはサミュエが今回の騒動にほんの少し加担したことを包み隠さず伝えた。話を濁してもしょうがないと思ったからだ。

「カルラは、ひどいことを言ったんだ。おいらに対してだけじゃない。サミュエやミダイにも あいつ、人をバカにするような事を平気で言いやがった。許せない！」

セネカは憎らしげに拳をぎゅっ握り締めた。

「それで？」

レダが床の一点を見つめるセネカの顔を覗き込んだ。

「え？」

「それで、あんたは何を言ったんだい？ カルラに」

「ああ……」

セネカは億劫そうに口を開いた。

「村で流れているウワサのことを言ってやったんだ。あいつ、歳をごまかしてオリンポスの呼び出しを逃れたんだ。正直モンはバカだつて言ってるようなもんだ。それに、悪くもないのに耳が聞こえないなんて ウソばっかし！ 汚いよ！」

セネカはいまいましたげに顔を歪めた。

「……」

レダはセネカの剣幕がおさまるまで待つてから、残念そうに言った。

「カルラは歳の割に小柄だからね。それで撥ねられたんだよ。歳をごまかしたわけじゃない」

「え！？」

「それに 「レダは続けた。」

「カルラのところは親父さんと二人暮らしだ。母親は病気で亡くなってる。このことは知ってるね？ セネカ？ もしも、カルラがオリンポスに取られたら、親父さん一人つきりになっちまうんだよ。それで 「」

「でも！ それだからって！」

「耳が不自由だから働き手としては相応しくないって言ったのは親父さんの方だよ。カルラじゃない」

「……」
セネカは押し黙った。

「親父さんはカルラを取られたくないばかりに、オリンポス兵に嘘をついたんだよ。だからカルラに非があるわけじゃない」

レダは静かに言葉を結んだ。

一方のセネカはやや血の気の失せた顔で、黙りこくっていた。

「それで？」

レダは出来るだけ素っ気ないふりをしてセネカにたずねた。

「カルラは、あんたになんて言ったんだい？」

セネカは唇を強く噛んだ。

「先に手を出したのは、あんただったよね？ カルラはどんなこと言っただあんたをそんなに怒らせたのか、言っただらん」

「……言わない」

「セネカ。あのね……」

「言いたくない」

セネカはかたくなそう言つと、そっぽを向いた。

レダは溜め息を一つついた後、声を落として言った。

「カルラは……ね。まあ、あんたに殴られたのがよっぽど悔しかったと思うんだけど……」

レダはとても言いにくそうだった。

「隠しておいても、いずれ分かることだから カルラは……あんに林に呼び出されたって。わけのわからない言いがかりをつけられて、反論したらいきなり殴りかかってきたって」

「わけわからないのはカルラの方じゃないか！！」

レダの言葉が終わらないうちにセネカはすつくと立ち上がった。

その顔色は赤く上気していた。

「私にあんたがそんなことするなんて思っちゃいけないよ」

レダはセネカを落ち着かせようと、立ち上がって優しく肩を抱き、かつてルイザが使っていた寝台に腰を下ろすよう促した。

セネカの胸には再び、カルラに対する怒りがふつふつと込み上げてきた。

「……サミュエのことは、悪かったね。私からお詫びするよ」

隣に座ったレダレダがすまなそうに言った。セネカは首を横に振って応えた。

「カルラのことだから、村中にふれ回るかもしれないね。まあ、口八丁のカルラの言うことだもの。尾ひれを付けて話してるってことは皆、承知してるさ」

「……」

セネカは再び固く口を結んでいた。

「噂なんて気にしなればいいのさ。当の本人がしゃんとして、まっとうにしていれば、時が解決してくれるって」

レダは明るく言い放ったあと、少し声色を変えた。

「でもねセネカ。その前に……ここは一つ、人としての落とし前だけはつけないといけないね」

「落とし前？ 人としての？」

「そう」

レダの目が凜々しく光を帯びた。

「カルラに謝りにいこう」

「な な、なんだっ て!？」

セネカはレダの無慈悲な宣告に驚きの声をあげた。そして、レダがこれを言うために村外れの家までやって来たのだということ、この時覚さとった。

「嫌だ」

セネカが無然とした面持ちで答えた。

「あんたもやられたけど、カルラの方も相当なもんだよ。なにせ

「

嫌だッ！」

セネカがもう一度、語気を荒げて言った。

レダはやれやれといった様子で、またため息を一つついた。

「あんたは大分村に馴染んできたけど……よそ者だ。つまらないことでこじれたら村八分にもなりかねないよ？ そうなったら村で生きていけなくなる」

「上等だ！ だったらおいらは村を出ていく！」

セネカはきつぱりと言い張った。

「馬鹿なこと言うもんじゃないよ！」レダは呆れ声で言った。

「誰も一人で生きていけっこない。あんたもミダイに拾われるまでの事を忘れた訳ではないだろう？」

レダは続けた。

「明日の……そうだねえ。朝のうちがいい。さっさと謝ってしまおうんだ。いいね？」

セネカは目を逸らせ、押し黙ったままだった。

「とにかく今夜一晩、頭を冷やして考えるんだよ。あんたは賢い子だから分かってくれると信じてる。さあ 言いたいことはこれだけだよ」

レダがいとまを告げ、立ち上がった。

「セネカ」

レダが穏やかに言った。

「そろそろ私たちと一緒に暮らさないかい？ 私は、いつかあなたの方から言い出すんじゃないかと思っていただけ なかなかそうもいかないみたいだしさ。あんたはしっかりしてるけど、一人だと村からの風当たりが何かと強いだろう？ うちのことなら心配いらぬよ。夏までにミダイが一棟建てることになってる。ミダイとサミュエには別棟で寝てもらおうから。ね？」

レダは結局、セネカの事を気につけ、慈しみ愛していた。

セネカにもレダの思いやりは痛いほど分かったし、これ以上ごねるのは心を尽くしてくれているレダへの不義理になるだろう。

しかし、一旦かたくなになった心はすぐには解けるわけでもなく

セネ力は膝を抱えこんだまま身じろぎもしなかった。

「あ！ そうだ！ あんたまた髪の毛を削いだね？」

レダが思い出したように切り出した。

「せっかく結べるほど伸びてきたと思っただのに」

セネ力はテオドラに髪の毛の事を褒められてから伸ばしていたものの、肩にかかる頃になるとつつとおしくなり、短く削ぎ切っただけでまっていた。

「もうしばらくは削ぐんじゃないよ。一緒に暮らすようになったら、私があんたを女にしてあげるから」

レダはもうセネ力との同居を決めているような口ぶりだった。

「ああ、あと……これ。差し入れだよ。晚におあがり」

レダは一つの包みを指し示した。そして、言いたい事を全て言い尽し、さっぱりした様子で戸口をくぐった。

予感が走った。

セネ力は即座に立ち上がると、戸口に取り付いた。

間一髪！

レダは今まさに納屋の中を覗き見ようと納屋の入口に足を踏み入れようとしているところだった。

「レダ！！」セネ力は大声でレダを呼び止めた。

「行かないからな！！」セネ力は更に大きな声で言った。

「絶対に、謝りになんか行かない！ 絶対に 絶対に 行くもんか……」

レダの気を反らすために威勢よく発した声は次第に空しく、小さくなっていった。

結局、明日の朝カルラの家に行きことになる。レダ自信たっぷりの口元を見たセネ力は、悔しかったが、そう認めざるを得なかった。

レダは踵を返して納屋をあとにした。後ろ向きのまま、ひらひらと手をかざしている。

セネ力は、まずは、安堵の息を漏らした。

「2」

レダの姿が見えなくなるのを見届けると、すぐさまセネ力は納屋の入口を覗きこみ、中にいるはずの少年を探した。

少年は納屋の隅で窮屈そうに体を折り曲げていたが、セネ力の顔を見ると安心したようににっこりと微笑んだ。

セネ力は顎を引き、少年に納屋から出てきてよいことを示した。

少年は顔をしかめながらぎくしゃくと立ち上がった。

その黒髪の少年は　セネ力よりも頭一つ半ほど高い長身で、すらりとした脚と引き締まった体格、そして際立った美貌の持ち主だった。

漆黒の髪には、セネ力が今まで見たこともない鍔かんを冠かんっている。

歳の頃はセネ力よりも四つか五つくらい上だろうか。

「よかった。元気になったみたいだね。もう、大丈夫？」

少年はセネ力の目の前までやって来ると優しい眼差しでじっと見下ろし、そうたずねた。

セネ力はその言葉の意味を汲み取ると、先ほどの事を思い出しハッとなった。

自分はこの少年の前で大泣きしたんだっ！

セネ力はたちまち気恥ずかしさで顔が真っ赤になった。

「この納屋は　」

少年はセネ力の心中を知ってか知らないでか、無邪気に続けた。

「羊おやか山羊を飼っていたみたいだね」

羊や山羊どころではない。セネ力はいたたまれなくなって家へと取って返した。

「あ、待って！　ねえ、君　」少年が後を追いかけて来た。

「さっきの人　レダ、っていうんだよね？　行ってしまったけど

……君のお姉さんじゃないのかい？　君、あの人と一緒に暮らしていないの？」

びたりとセネカの歩みが止まった。

「違う」背中を向けたまま、セネカが答えた。「姉ちゃんなんかじゃない」

少年は腑に落ちないといった様子で首をかしげた。

「そうか……。じゃ、この家の主は今、どこあそこにいるんだい？」

「この家の？ 主、だつて？」

セネカが振り返り、怪訝そうに眉を寄せた。少年はこくりと頷いた。

「この家の主に……。お礼が言いたいんだ。すっかり厄介になつてしまつて。傷の手当てもしてもらつたし、食事もご馳走になつたから……。君のお父さんかお母さんかい？ 今、どこかに出かけているの」

「目の前にいる」

セネカは我慢できないといった様子で、低く呻いた。

少年は意外そうに目をぱちくりとさせた。

「え？」

「目の前にいるつて言つてんだろ！ 今はおいらがこの家の主だ。

悪いかよ！」

少年の勘違いに悪気はないのは分かつていたが、あまりにも呑気な言い様にセネカは苛立ちを抑えきれなかった。

その剣幕に気圧されて、少年が驚きの表情のまましばらく静止した。が、やがて素早くかぶりを振った。

「悪いだなんて　そうか、君だつたのか。あ、ありがとう　その。いろいろと……。あの、えええと……。じゃ……。」

少年が少し慌てふためきながら言葉を継いだ。

「じゃ……。君が、セネカ？」

「な……。ッ！？」

今度はセネカが驚きのあまり固まる番だつた。

「な、なんだつて！？　なんで、お前がおいらの呼び名を知ってるんだ！？」

少年は「しまった」という顔をして、手で口を覆った。

セネカはたちまち警戒心を露にした。

「さては、立ち聞きしていたんだな？ 家の中で話してたことを！」

「違う！ 立ち聞きなんてしていない。本当だ」

「じゃあ、なんでお前おいらの名前を知ってたんだよ！！」

「……」

少年がぴたりと押し黙ったあと、諦めたようにゆっくりと口を開いた。

「夢に、見たんだ」

「は？ 夢？」

「そう。夢だ」

セネカはあからさまに疑いの眼差しを向けた。

「へーそうかい。じゃ、おいらが夢枕に立って自己紹介でもしたっていうのかよ。ハツタリもいい加減にしろ！」

言うなり、セネカは家の中へ駆け込んだ。

「待ってくれ！ セネカ！」

「馴れ馴れしく人の名前呼ぶんじゃないやねえや！ コソ泥みたいに勝手に人んちの中に転がり込んで来やがって おいつ！ そこ！」

セネカが堪りかねたように大声をあげた。

「勝手に家ん中に入つて来んな！」

家の入口から中に入りかけた少年が、動きを止めた。

「一つだけ教えてくれないか？」

次にセネカの口からは「出て行け！」という言葉が飛び出すであらうと予測してか、少年が急いで言った。

「君、獅子の顔をした人を見なかったかい？」

セネカが一旦開きかけた口をへの字に曲げた。

「獅子？」

「そう。獅子だ。体は人間で、顔だけ獅子 いや、獅子の仮面をつけていたのかもしれないけど……僕はその人にここまで運ばれたんだ」

セネカはムツとした表情のまま顎を突き出した。

「獅子……って、何だよ」

セネカには『獅子』が何なのか、さっぱり分からなかった。しかし目の前にいる少年にその事を告げるのはあまりにも癪しゃくだったので、口調は自然と愚痴を溢すような低い呟きになった。

「あ。ああ……獅子は……。ほら、獣の獅子だ」

少年が説明を始めた。

「獅子というのは、四つ脚の獣で、とても大きな体をしていて、聞きながらセネカは、次第に自分の胃袋が奇妙にねじ曲げられるような気がした。」

少年が懸命に説明している獅子は　今朝、セネカが見た夢に出てきた獣そのものだった。

「普通、獅子の体と鬣は黄金色をしている。でも、その人の鬣は黒い。真つ黒だった」

少年は記憶を辿り、思い起こすように言うと、言葉を結んだ。

セネカは、自分の胸の鼓動がどうにかなくなってしまったに違いないと思った。それほど激しく高鳴っていた。

「で　？」

セネカは、動揺を気取られまいとわざとらしく声を荒げた。

「その獅子っていう獣の顔をしたヤツに会わなかったのか、って聞いてんのかよ」

少年は小さく頷いた。

「あほくさ！　そんな妙ちくりんなヤツ、見たことも聞いたこともねえや」

言いながら、セネカの動悸はまだ落ち着きがなかった。

夢で見た獣と、少年が口にした獣が、これほどまでにぴたりと一致したことに内心驚き、心がかき乱されていた。

聞けば、その黒い獅子の顔を持つ男が少年の夢に現われたという。セネカはまた、どきりとした。

獣と人との違いはあるが、黒い獅子がそれぞれ二人の夢の中に出

てきたことになる。

これは単なる偶然だろうか？ セネカは思わず身震いした。

「ち、ちつとはマシな嘘をついたらどうなんだよ？ 正直に立ち聞きしましたって言やあいいのにサ。かわいくねえの！」

セネカは、わざと突き放すような投げやりな言葉をぶつけた。

少年の顔が一瞬、強張ったあと、落胆したかのように視線を足元に落とした。

セネカは少し言いすぎたことと、この少年が嘘をついていないということを、その時確信した。そして、たちまち後悔の念に包まれた。

「…………。じゃあさ。その獅子の顔したヤツが夢の中で何をしたのか…………言ってみろよ。面白そうだから聞いてやるよ」

「獅子の顔をした男は 黒の獅子王 自らをそう名乗っていた。その人は、僕を助けてくれたんだ。僕の、命の…………恩人だ」

しばらくしてから、少年はゆっくり訥々と話し始めた。

「黒の…………獅子王？ 命の恩人？」

「そう。僕はもう少しで…………死ぬところだったんだ。でも、黒の獅子王が救ってくれた。そして、僕をここまで運んでくれた…………らしい。僕もその時のことはよく覚えていないんだ…………。気を失っていたから」

「…………」

「その、黒の獅子王は、僕の夢の中に出てきた。そして…………この家の主に世話になっていることと、その者の名前が『セネカ』ということを僕に伝えた。だから」

「ふうん。だから、最初っからおいらの名前を知ってたってことなのか…………でもさ、その獅子王ってヤツ、なんでおいらの名前を知ってたんだよ？」

「分からない。実は、僕も分からないことだらけなんだ。それに…………」

少年がためらいがちにセネカの方をちらちらと窺い見た。いかに

も何か言いたげな様子だ。

「 ? なんだよ? まだ続きがあんのかよ」

少年はセネカの目をじっと見据えたあと、意を決したように頷き、静かに続けた。

「……それから黒の獅子王はこう言った。その者と……セネカと共に旅に出ることになる、って……」

「は?」

「つまり、僕は君と旅に出ることになると」

「なんでおいらがお前さんと一緒に旅に出なくちゃならないんだ?」

セネカは二、三度、目を瞬かせると、頓狂な声とんきやうを上げた。話がありにも飛躍し過ぎていて啞然となった。

「分からない……でも、黒の獅子王は確かにそう言ったんだ。だから僕は、セネカという人はきつと大人の男の人かと思ってた。君のお父さんが誰かなのかと まさか、君みたいな子どもだなんて思っってみなかつた」

ここまで言い終えると、少年は黙り込んだ。

セネカはじつとこちらを見つめる少年の眼差しを無意識に避けた。

バカらしい 。 。 。

本当なら笑い飛ばしてもいいくらいの戯言たしな言のはずなのに、どこかセネカの心に妙に引つかかった。

『 だったらおいらを村を出ていく! 』

そう 。

ついさっきのことだ。セネカは、レダにこうタンカを切っていた。もしかして 。

もしかしたら、本当に村を出ていくことになるのかも?

セネカの脳裏に、そんな思いすら湧いてきたほどだった。

しかし、セネカはそんな馬鹿げた考えを振り払った。

そして一瞬でも真に受けてしまった自分を愚かしく思った。

しばし、奇妙な沈黙が流れた。

少年は小さく息をつくと、体を家の壁にもたせ掛けた。傷がまだ完全に癒えていないためか、少し顔色も悪い。

セネカが遂に沈黙を破った。「ったく！ もう！！」

悪態をつきながら家の中の壁に掛けてある籠と、鍬を掴み取った。

「……？ 君、どこかに行くの？」

少年は少し驚いたようにたずねた。

「仕事に決まってるだろ！ こちとら家の中でごろごろしてるほどヒマ人じゃないんだ。今日はまだ一日分の半分もこなさしちやいし。

働かざる者なんとやらだ ほら！」

セネカは家の中から蓆と上掛けを引つ張り出すと無理矢理、少年に押しつけた。

「言っとくけどな！」

セネカが念を押すように少年を睨んだ。

「納屋の中だけだ。家ん中には絶対に入るなよ！ こんな村外れまでやって来るモノ好きは……さっきのレダくらいだけど、もしも誰かに見つかったりでもしたら とにかく、納屋からは出ないようにしな！ 分かったか！？」

緊張していた少年の顔が和らぎ、穏やかな笑みが広がった。

「分かったよ。……ありがとう」

「一働きして帰ってきたら 晩飯くらい、食わせてやるよっ」

礼を言われ、背中あたりが無性にむずかゆくなったので、セネカは慌てて大声を張り上げた。

そして少年が壁づたいに納屋へ向かうのを見届けると、まるで逃げ出すように駆け出した。

セネカは家から下るなだらかな小路を大急ぎで駆け抜けながら、ふと、あの少年の名前をまだ聞いていなかったことを思い出していた。

「セネカ！ カルラの奴をやっつけたんだって！？」

ようやく一日仕事を終えたセネカは、今日の稼ぎの芋を河原の水で洗っていた。

面をあげると、オリビアとターナの親しげな顔があった。野菜の入った籠を提げている。

何でこの二人が雑木林での一悶着を知っているんだろうと、セネカは思った。そして、普段はあんなに羨ましいと思っていた姉妹の頬に浮かぶ片えくぼが、今はヤケに気に障った。

「やっつけたんじゃない。あいこだ」

セネカは不機嫌そうにふんと鼻を鳴らし、水をはね上げながら芋にこびりついた泥をこそげ落とした。

興味の目を向けるはオリビア姉妹ではなかった。

家から駆け出してからこっち、仕事の最中でも村人の視線がセネカをちくちくと刺した。

レダが言っていた通り、根も葉もない噂が広まっているのだろうか。

オリビアがセネカの顔を遠慮なく覗きこむと、したり顔で言った。

「うーん……あたしの目から見ると、顔の痣はカルラの方が多いね。この勝負はセネカの勝ちだよ」

オリビアはきっぱりと、そう断言した。

「ねえセネカ。カルラに”せまった”って本当？」

妹のターナが小首を傾げた。

セネカの眉がさつと斜めに跳ね上がった。

「迫った……って、そんなウワサが流れてんのかよ！？」

セネカが思わず大声を上げた。ターナは無邪気にこくと頷いた。「バカだねえ、ターナ。そんなのハツタリに決まってるよ！ どの誰がカルラなんか言い寄るかっての」

オリビアが姉らしくターナをたしなめた。

「あんなケチで不細工なの　まだサミュエのほうが男前ってもんさ。ね？　セネカ？」

セネカは肩をすくめただけで黙々と芋を洗い続けた。オリビアのこの言い方には、少々かちんときた。

「カルラってさ、何かとセネカにつつかかってくるよねえ？」

と、ターナが誰に言うともなしにたずねた。

「あたし、知ってるよ。カルラはセネカに気があるんだ」

オリビアがさらりと言った。しかし、ターナのその言葉を「待ってました」といわんばかりの勢いだ。

セネカの手から籠が滑り落ち、洗い終えた芋がぼとぼと全て水面に落ち込んだ。

「な、なに　言ってたんだ！　アイツがそんなこと抜かしてたのかよ！？」

「言っていないけどさあ　だって好きな相手には何かとちよっかいだすもんじゃないの？　カルラはしょっちゅうセネカに構ってるし、全く気が無かったらそんなことする？」

セネカが食ってかかるのをものともせず、オリビアは物知り顔で頷いた。

「そんなこと　ぜ　っ　たい　に　ない　！」

セネカは顔を力を込めて反論した。

オリビアはこれ以上の確な読みはないと自負していたのを、セネカに全面的に否定され少々気を悪くした様子だった。が、すぐに気を取り直してぺちやくちやくと村での様子をお喋りしはじめた。

やれテオドラのところの赤ちゃんがお座りをしたのだ、やれ共同井戸に誰かが蛙を放り込んだという噂があるが本当だろうか？……だの、呆れるほどにかましい。

「セネカあ。明日セネカんちに遊びに行ってもいいーい？」

ターナが甘えたようにセネカの腕に絡み付いてきた。

「あたし、ルイザ婆ちゃんがセネカにあげたっていうさらさら布を

見てみたいなあ」

「ターナ。」さらさら布”じゃなくて、更紗布オシロイ！ね。セネカ。実はあたしも見たいんだ。明日遊びに行ってもいい？」

オリビアも話に加わった。

「……明日は……こっちが遊びに行くよ。布を持って。お前んちの赤ん坊も見たいし……」

セネカは今、家にいるはずの少年の事を思い出していた。さすがに、こんなチヨコマカしたのが二人も家に来られた日には。
「ほんと!？」

セネカの提案にターナは大喜びだった。セネカは頷くと芋をすべて収めた籠を提げて立ちあがった。

「約束だよ！ 明日！」

「ああ。明日。約束するよ」

きつと明日はこの姉妹たちとこっこ遊び付き合わされることになるだろうな、とセネカはぼんやりと考えた。

日が暮れはじめていた。

セネカとオリビア姉妹は各々さよならを言って、家路へと急いだ。

村外れの家へと続くゆるい坂道を一気に駆け上がったセネカは息せき切ったまま家の中に飛び込んだ。

薄暗い家の中は 囲炉裏には火の気がなく、ひっそりと静まり返っていた。どうやらあの少年は約束を守ったようだ。

寂しく侘しい様子だったが、いつものことだ。独り暮らしのセネカにとつて、普段と何ら変わりがない。しかし、今日は少し違う。

セネカは鍬を壁に立てかけ、芋の籠は掲げたまま納屋へ向かった。暗くなるまでに手早くかまど竈と囲炉裏に火を熾さないといけなかったが、セネカはあの少年のことが気になっていた。

きつとお腹を空かせているに違いないと思い、セネカは逸る気持ちを抑えて納屋を覗き込んだ。

（言っとくけどな。うちの死んだ婆ちゃんが「困った人を見たら助

けてやなきやならん」って、しょっちゅう言ってたからだからな。誰が好き好んで見ず知らずの奴を家ん中に入れてやるもんか)

セネ力は、幾度となく心の中で練習した台詞をもう一度繰り返した。

しかし。

セネ力は小さく息を飲んだ。

納屋の中は、もぬけの空だった。

「……」

セネ力の鳶色の目がくまなく納屋の中を見渡したが、少年の姿はどこにもなかった。

納屋の奥には、蓆と上掛けが丁寧に畳んであるのが見えた。

(そうか。出て行ったんだ)

大きなため息を一つついたあと、セネ力はようやく自分を納得させた。

それまで高揚していた気持ちが一気に萎え、肩を落とさずにはいられなかった。

そして、あの少年のために一喜一憂していた自分がとても腹立たしく思えてきた。

「つたく もお！ なに浮かれてんだか……。バツカみてえ……。

今晚の食いぶちが増えただけだつてのにさ……。まったく」

「おかえり」

「わッ！！」

ぶつぶつと毒づいていたところに、何の前ぶれもなく後ろから声をかけられ、セネ力は仰天した。あんまり驚いたので手にした籠をもう少しで取り落としそうになった。

振り返ると、黒髪の少年がにこやか表情で立っていた。両手いっぱいには枯れ木やら枯れ草やらを抱えている。

「何か手伝えることがないかなと思って。焚きつけを探してきたんだ」

「ど、ど」

「あ。家の中には入っていないからね」

「な、な」

「そうだ！ さっき言い忘れていた。お粥、ありがとう。とても美味しかったよ」

「……」

セネカは一瞬黙りこくつたあと、ハツと我に返った。

「バ バカ！！ どこに行つてたんだよッ！！」

「この家の裏の茂み……だけど……？」

少年はあっけに取られたような様子だった。

「心配かけてしまったかな。ごめんよ。ああ、傷の方はもう大丈夫だから。動いても平気」

「違う！！」

セネカがますます顔を上気させて叫んだ。

「お前さん、ヤバいんだろ？ ワケありなんだろ？ 勝手にうるうるしてもいいのかよ！？」

「ああ、そのことか 大丈夫だよ。誰にも会わなかったから」

セネカは一呼吸置いたあと、がっくりとうな垂れながら呟いた。

「誰かに会つてからじゃ遅いだろ……」

「君？ どうかしたの？」

少年は不思議そうにセネカの顔を覗き込んだ。

「もお……。いいから来な！」

セネカは家の中へと入った。少年も促されるままに家の敷居を跨いだ。

焚きつけの草や枝を竈にくべると、少年は物珍しそうに家の中を眺めまわした。

セネカは手際よく火打ち石を打ちつけて火を熾した。それから薪に炎がしっかりと燃えうつるのを確認すると、土鍋に水を注ぎ夕餉の支度にとりかかった。

「これは君が使うのかい？」

少年は、黒光りし年季の入った機織り機はたを指差した。

セネ力は芋の芽を石包丁でえぐり取りながら、少年に一瞥を投げた。

「それは死んだ婆ちゃんのだ。おいらには使えない」

短くそう答えると、芋をごろごろと大まかに切り、土鍋にぶち込んだ。

「そうか、君のお婆さんは……じゃ、この家には……」

「婆ちゃんは、このあいだ死んだ。だから今はおいらひとりだ」

「……。そうだったのか……」

少年は目を伏せた。

セネ力少し肩をすくめただけで、てきばきと乾物や醸造酒を貯えある壕に下りて行き、手慣れた様子で干した蛙を数匹、鍋に放り入れた。

しばらくすると少年は、今度は壁にぶら提げである弓と矢を指さした。

「あの弓矢は君のかい？ 君、弓ができるの？」

セネ力は鍋の中を杓子でかき混ぜながら短く「まあね」と、答えた。

「ねえ、君」

「今度はなんだよ」

セネ力が少年をじろりと睨みながら唸った。

「あ……いや。君は一人で暮らしているだね？ お父さんや、お母

さんは？ 出稼ぎか何かかい？」

「父ちゃんと母ちゃんは、いない。とつくに死んじまったよ」

呟くように言うと、セネ力は黙り込んだ

「……」

少年も同じく黙り込んだので、しんとした家の中は囲炉裏の熾きが爆ぜる音と、ぐつぐつと芋の煮え立つ音だけになった。

セネ力はルイザが亡くなったことや親のいないことには慣れっこになっていたので気に留めることはなかったが、少年はそうは思っ

ていないようだった。少し気まづくなつたせいか、それ以上にも喋ろうとしない。

セネカは重苦しい沈黙に耐えきれなくなり、口を開いた。

「まだ、お前さんの名前、聞いてなかつたぜ」

「あ ああ、そうか」

うつむいていた少年が顔を上げた。

「僕は 。 僕の名前は……アリオン。アリオンという名だ」

アリオン 。 どこか気高く、高尚な響きのする名前だった。

「ふうん」

セネカは興味のないふりをした。

ふと 。

セネカは思いついた。

コイツには色々と驚かされているし、これくらいはいいだろう

と、セネカは何の前置きもないまま、少し意地悪くたずねた。

「レスフィーナ、って誰だよ？」

案の定、アリオンの顔色が変わった。明らかに戸惑い、狼狽しているのが見て取れる。

「そんな顔しなくなつていいだろ。今朝お前さんが眠っている時、うわ言で言つてたんだ。だから、聞いたままでさ」

セネカはにやりと悪戯っぽい目つきでアリオンの顔を窺った。

アリオンは固い困惑顔をしていたが、やがてふつとその表情を和らげた。

「レスフィーナは……」

少年は追憶の彼方を見つめるような遠い眼差しで、囲炉裏の灰の一ヶ所に目を落として言った。

「……レスフィーナは、僕の 。 大切なひとなんだ……」

セネカの心がずきんと音をたてた。

なんでこんな事を聞いてしまったのだろう。知らない方がよかった と、セネカは後悔した。

「ふうん」

しかし、そんな気持ちとは裏腹に、セネカはどうでもいいというふりをした。それから二人とも、夕餉の支度が整うまでは一言も喋ろうとしなかった。

やがて煮えたてのおかずが器に盛られると、アリオンは小さな歓声を上げた。

熱い湯気に包まれた芋、レダが置いていった包みの中身。レダは今晚と明日用にと、包んでくれたのだろう。胡桃入りの硬焼き麴と鹿の干し肉のかたまりが二切れつつ。今夜は思いがけず、素晴らしいご馳走になった。

「こんな上等な晩ご飯は本当に久しぶりだよ」

少年の顔にこぼれんばかりの笑みが浮かんだ。

お腹がぺこぺこだった二人は、目の前のご馳走に文字通り喰らいついた。そして、若者らしい食欲で夕飯をすべて平らげた。

食事を終えると、片付けもそこにセネカは藁を縛なって縄をこしらえ始めた。お腹がくちくちになったが、まだ休むわけにはいかなかった。

「へええ、上手だねえ」

アリオンが感心したように言った。

「おいらが縛う縄は細くても丈夫だって評判なんだ」

褒められてセネカも悪い気はしない。セネカは喋りながらもせつせと手を動かし、縄を縛っていった。

ルイザが亡くなって以来、久方ぶりに一人つきりでない夕餉を済ませた後だ。セネカの心は自然に和んでいたし、アリオンに対する遠慮も警戒心も解けかけていた。

ところが。半時も経たないうちに、ぐらりとセネカの体が傾かいだ。

昼間の疲労が一気に押し寄せて、セネカは船を漕ぎだしたのだ。

セネカは次第に目蓋まぶたが重くなっていくのを懸命に引き上げた。

「疲れてるんだらう？ お眠りよ。セネカ」

「……まだダメだ。今日の分が終わっちゃいけない……これをやってしまわないと……明日に間に合わない」

セネカは眠気を覚ますように頭を振り、目をごしごし擦った。

しかし、セネカのがんばりも長続きしなかった。実際、今日のセネカはひどく疲れていた。

縄を縛う手は次第にゆるみ、とうとうセネカの手から藁の束が滑り落ちた。

「眠ったほうがいい。明日、早く起きて作るといいよ。ね？」

アリオンの声が、どこか遠くから響いてくるようだった。

セネカは強固な眠気に打ち勝つことが出来なかった。薄れゆく意識の中、とうとう囲炉裏端の敷物に体を横たえた。

「火の始末はしておくから。おやすみ」
「そんな声を聞いたよ
うな気がした。」

そして、ふわりと上掛けを羽織られる感触。

温かな安心感に包まれながらセネカは、とろりとした心地いい深い眠りの中に落ちていった。

セネカは走っていた。

視界がほとんど効かない、濃い闇に閉ざされていた中を、セネカはただひたすらに走っていた。

暗い闇の中を進む恐怖よりも、立ち止まる方が何倍も怖かった。

セネカは執拗に迫り来る追手から逃れるために走り続けた。

洞窟の中なのかもしれない。

幾度かごつごつした地面に足を取られそうになった。

怖気づき、後ろを振り返ったが、底知れぬ威圧感が伝わってくるだけで追手の姿は見えない。

セネカは走り続けるしかなかった。

しかしセネカは一人ではなかった。

セネカの前を先行する者がいた。

ヒトではない。

獣だ。

獅子。

そう。まぎれもなく、傷だらけのあの若い獅子だ。

獅子はセネカを先導するかのようになり、セネカの斜め前を疾走していった。

セネカは置いていかれまいと必死で走った。

獅子が闇の中の角を曲がった。

セネカもそれにならった。

獅子の足並みは疲れを知らない。

速度が衰えないまま、獅子は闇の中を駆け抜けていく。

速い。

もう。もう。ついて行くのは無理だ……。

息が切れ、口の中が乾き、喉がひりひりと痛んだ。

心臓が今にも破裂しそうだ。

セネカはたまらず減速した。

すると、先行する獅子が察したかのように速度をゆるめた。

獅子とセネカの距離はみるみる縮まり、二人は今や平行して走っ

ていた。

どこからか白い霧が現れた。

視界が白に覆われていく。

見えない。何も見えない。

そして。

セネカは夢から覚めた。

窓からは朝の陽射しが差し込み、遠くから銅鑼ウツの鳴る音が聞こえていた。

「3」（後書き）

アクセスありがとうございます。

アリオンが少々天然なのは『Senar』アリオンの傾向です（笑）

さて、セネカは二度目の獅子の夢を見ます。

今回は第五章『疑念の心』です。

コウミ

2011・3・9 タイトル変更、及び本文改訂。

「1」

寝坊した！

セネカは上掛けを撥ね、飛び起きた。朝日は既に山際を昇りきっている。

迂濶だった。こんなに陽が高くなるまで眠りこけるなんて！

セネカは思い切り頭を振って眠気を吹き飛ばした。

首をめぐらすと、一人の少年が困炉裏端で丸くなっている。

セネカは一瞬ぎよっとしたが、次第に昨日のことを思い出した。縄を縋いながら眠気に負けてしまったこと。

久しぶりの一人きりではない食事。

納屋の中に倒れていたアリオンと名乗る少年。

夢で見た黒い獅子のこと……。

夢。

そつだ！ 夢だ！

セネカはつい先ほどまで見ていた朧げな夢を思い起こした。

夢に出てきた若い獅子。

セネカは再びアリオンを見た。

アリオンは規則正しく安らかな寝息をたてている。

黒い獅子が納屋に傷だらけの若い獅子を置いていく夢のあと、アリオンが現れた。

アリオンから聞かされた獅子の顔の男の話とすり合わせると、半分は夢の通りだ。

もしも？

もしもまた、先ほど夢が何かを暗示するものだとしたら？

銅鑼の音がまだ鳴り響いていた。

セネカはその音が意味する事を知っていた。ぐずぐずしてはられない。

銅鑼は村の一大事の知らせだ。滅多に打ち鳴らされることはない。以前、セネカがこれを聞いた時は村で一軒が焼け落ちるほどの火事が起きていた。大人たちは皆、煙の立ち上る家に水をかけるため、桶を持って駆け付けた。

しかし。

セネカは窓から外を見た。煙は村のどこにも立ち上っていない。

『銅鑼が鳴ったら、食事の手を止めてでも広場に行け』

ルイザからこう聞かされていた。

知らんぷりをして村から反感を買うのは利口ではない。

セネカは身支度もそこに家を飛び出した。

一旦走り出したセネカは、あつと叫ぶと直ぐに取って返し、未だ眠りを貪っているアリオンを揺さぶった。

「起きろ！ おいッ！ 起きろつてば！」

「うつつ　ん……もう、朝かい？」

アリオンが寝ぼけまなこで身を起こした。

「出かけてくるから。誰か来そうになったら隠れてるよ。いいな！」

セネカは急いで言った。

「……どこに隠れたらいい？　また納屋かい？」

アリオンは寝起きで呆ほうけていた。

セネカは少しの間考えした後、地下に掘られた小さな貯蔵庫を指し示した。

「あの壕の中だ。分かったな！？」

アリオンが頷くのを待たずにセネカは家を飛び出し、納屋の入口に転がっていた手桶を掴むと、一目散に小路を駆けたおりた。

村のほぼ中央に位置する場所に、拓ひらけた土地があり、村人は広場と称して集会などの大人の集まりの場としていた。

セネカが息を弾ませながら広場に向かって走っていると、二人の人影が見えた。

見知らぬ男たちだ。

あたかも村のそこかしこを嗅ぎまわっているかのように家の窓から顔を突っ込んだり、路地などを覗き込んでいる。

セネカの心臓がざわついた。

その男たちは兜を被り、甲冑を身につけ、手には槍を持っている。セネカは、その物々しい出で立ちに見覚えがあった。

足の力が萎え、セネカは歩みが止まった。両の足に根が生えたように動かなかつた。

息苦しい。誰かに胸がぎゅっと押さえつけられているかのようなうだ。貴様！ 何をしている！ 呼び出しの音が聞こえんか！ 早く行け！！」

棒立ちのセネカはたちまち見つかった。

一人の男に威圧的に一喝され、セネカは弾き飛ばされたようにその場から駆け出した。

鼓動が早鐘のように鳴っていた。まるで耳元で脈打っているようだった。

さっきの夢は、このことだったのかもしれぬ。セネカは思った。

そして、背後を振り返ることなくセネカは走った。

つまずき、つんのめりながらセネカは人だかりのする広場まで来た。

そこには老若男女、村中の者が全て集まっているかのように、人々がひしめき合っていた。

「遅かったじゃないか、セネカ。今、誰かを呼びにやろうかって話してたんだよ」

セネカが人の群れの端っこに加わると、そこにはテオドラがいた。赤ん坊を抱えている。

「どうしたんだい？ 顔色悪いよ？」

「急いで……走って……来たから」

セネカは息を整えながら、かすれた声で答えた。喉がカラカラだ

った。

「ごらんよ。オリンポスの兵だ。ふん、まだ何か取り立て足りないのかね」

テオドラが、らしくなく毒づいた。

人垣の向こう側に、先ほどの男と同じ甲冑を付けた男たちが数名垣間見れた。

「何、話してるんだろ……」

男たちは村の長老と何やら話している。

「……さあね」

セネカの独り言にもとれる呟きに、テオドラは短く答えた。

テオドラの腕に抱かれた赤ん坊が何やら喃語なんごを喋っては手足をばたつかせている。

「イローナ」

セネカは赤ん坊の顔を覗きこんで挨拶をした。

冬のさなかに生まれた赤ん坊はイローナと名付けられ、すくすくと育っていた。

「抱っこする？」

「えっ！？ でも……」

テオドラがためらうセネカにイローナを抱かせようと身を屈めた。セネカは慌てて手にした桶を地面に置くと、おっかなびっくりでイローナを受け取った。

見た目よりずっと重い赤ん坊はまた、手足を元気よく動かした。

「可愛いなあ……」

セネカは心からそう言った。あどけない赤ん坊の顔を見ながら、自然と笑みがこぼれた。

「オリンポス城より通達だ！！」

前方にいる厳いつい体格をした兵士の一人が大声を張り上げた。

「城内にて狼籍を働く不届き者が現れた。その者は、何者かの手引きにより脱獄し、逃亡した。その者は重罪人である。然るべき裁き

を受け、相応の報いを受けねばならん。その者を捕まえ、引き渡した者には褒美を遣わす。以上だ！」

村人たちは一斉にざわついた。

「お尋ね者はこの辺りに逃げ延びたと聞き及んでおる。年格好は

」

違う兵士が村人を見渡し、一人の村人を指示した。

「その若僧と同じくらい背丈。歳もほぼ同じくらいだ！」

兵士に示されたのは、眠そうに眼を擦っている少年……サミュエだ。

「髪は黒髪。頭には鬘かんを冠かむっている！」

セネカは胃の中にどすと砂袋を落とされたような気がした。

「それとおぼしき奴を見た者はおらんかあー！？」

兵士がまた、大声で言った。

ざわめきが起こった。

「謀反むはんを起こすくらいだから、どんな極悪人かと思えば、なんとまあ子どもとは……」

「恐ろしや……」

セネカはイローナ抱く手に思わず力が入った。イローナがいきむような呻き声をあげた。

「おおいやだいやだ。物騒なこと……」

何も知らないテオドラがむずかるイローナをセネカから受け取った。

「その者は手負いである！　そう遠くへは行けぬはずだ！　見つけたものは直ちに知らせよ。隠しだてをする者は、その者に加担したとみなし、制裁を受けることとなるぞ！　分かったな……！」

セネカは顔から血の気が失せていくのを感じた。ひどく頭がぐらぐらする。

黒髪でわっかを冠かむってて、サミュエと同じ背格好

年も同じくらい

手負い

条件がぴったり合った。

間違いない！

そのお尋ね者は今、自分の家にいる。

それから二言三言の通達のあと、兵士たちは解散を言い渡した。ばらばらと人の波が解れていった。

セネカはテオドラにさよならを言うのももどかしく、家へ向かって駆け出した。

さっきの見回りをしていた兵士が村外れまで足を延ばしたのだからか。

いずれにせよ、のうのうとはしていらなかった。

人波をかきわけていると、ふいに誰かに襟首を掴まれた。

セネカは振り返った。

レダだった。

「セネカ。約束だ。行くよ」

忘れてた　！　でも　でも！！

「お尋ね者が近くにいるかもしれない！　こんな時に！？」

心の中のそれとは裏腹にセネカは言った。声が無性にうわずっていた。

「それとこれとは話が別！　どさくさに紛れてうやむやするのは感心しないね」

しかし、レダは信念を曲げるつもりはない。セネカは観念した。

さつさと事を済ませてしまった方がよっぽど早い。

セネカはレダの後をじりじりしながらついて行った。

カルラの家に向う道すがら、セネカはアリオンのことを考えていた。

謀反　。

脱獄　。

重罪人　。

セネカは、アリオンの　あの寝ぼけまなこの少年が、そんな大

それたことする者にはどうしても思えなかった。

それに。

アリオンは優しく肩を擦ってくれたし、横になった時には上掛けを掛けてくれた。

兵士のハツタリかぬれぎぬで罪をきせられたに違いない。それがセネカの出した結論だった。

カルラの父親はセネカに対して寛大だった。

「おもてをあげなさい。倅も反省して、自分も悪かったと言っておるで。」

カルラの顔は青あざと引っかき傷で腫れあがり異相と化していたが、父親の言葉に更に色をなした。

「親父！ オレがいつそんなこと！」

「何を言つとるか！ 喧嘩両成敗だ。ほれ。お前も頭を下げろ。」

カルラの父親はそう言つて、カルラの頭をがつきと掴み無理矢理頭を下げさせた。

これでこの件はおしまいになった。セネカの方から下手に出たのが功を奏したようだ。これで村人と気まずくなる芽は早々に摘んだことになる。

しかし、セネカはカルラのことを許していなかった。

すっかり事を済ませる、とセネカはレダと共にそそくさとカルラの家をあとにした。

二人とも急いで家に帰りたかったからだ。

「案外簡単だっただろう？」

「急ぎ足をゆるめることなくレダが言った。」

「さあ、急いで朝の支度に取り掛らないと……ああセネカ。すまないけどあとで畑の豆もぎを手伝ってくれるかい？」

セネカは、行くと約束した。オリビアたちとの約束は豆もぎのあとになった。

「おい！ セネカ」

レダと別れたあと後ろから誰かに呼び止められた。

カルラだ。セネカを追いかけて来たらしい。

「お尋ね者狩りしないか？ お前は腕がたつから、オレの一番の子分にしてやるぜ。もちろん女子分、な」

セネカは首をめぐらしてカルラを一瞥したが、髪を振り立ててこれみよがしに無視した。

「いつでも来ていいんだぜ！」

カルラの、声が追いかけてきたが、セネカは振り返ることなく家路へと急いだ。

「おかえり」

アリオンが朗らかにセネカを出迎えた。

走りこんで家に到着したセネカは息を弾ませながら、鋭く家の中を見渡した。

あの兵たちはやはり村外れまでは足を延ばさなかったようだ。

しかし、ここでセネカはある事に気が付いた。

「つて……おい！ 誰かが来そうになったら隠れてろって言ったじゃないか！ さつき！」

「あ……」

「あ、じゃない！ まったくもお！」

「いいじゃないか。君だったんだし」

セネカは全身の力が抜けていく気がして、がくつと膝をついた。

「おいッ！」

セネカはアリオンになぜ、罪人の濡れ衣を着せられたのかは問いただすつもりだった。

「？」

アリオンは目を数回瞬かせ、きよとんとした。セネカはまた体の力が萎えそうになった。

「あのさ……」

「……？」

瞳の濃い青に見つめられた。

セネカはどきまぎを振り払うように大声で怒鳴った。

「ええい！ もお お、お前オリンポスで何をやらかしたんだよ！」

途端にアリオンの表情が硬くなった。

「村に城の役人が来てたんだ。この近くにお尋ね者が潜んでるかもしれないって、言ってた」

セネカは先ほどの広場での様子をアリオンに説明した。

アリオンはうつ向き、ふうと大きなため息をついた。顔がみるみるこわばっていく。

「もしかして……それって……」

セネカはアリオンが否定するのを待った。

しかしアリオンは一言も発しようとしないう。それどころか、うつむいたまま一心不乱に何かを考えているようだった。

とうとうセネカは痺れを切らした。

「言ったよな？ ほら、獅子の顔をした奴に助けられたってさあ命を狙われてたんだらう？ それで」

「セネカ」

アリオンがセネカの言葉を遮った。

「今まで黙ってて、ごめん」

「え？」

セネカには予想外の返答だった。

「その役人が探しているのは僕だ。きつと……僕に違いない」
アリオンが虚ろな眩きを漏らすように言った。

「嘘だろ……？」

セネカには信じられなかった。

アリオンは力なく首を横に振った。

「僕がここにいと君に迷惑がかかる。追手の目的は僕だ。だから」

だから。

そのあと、アリオンが何を言おうとしたのか、セネカは知ることが出来なかった。

アリオンはセネカの背後を見上げたまま、凝然としていた。

セネカが急いで振り仰ぐと、そこには 髭もじやの大男、ミダ
イが立っていた。

「2」

「……」

ミダイは無言のままアリオンを見下ろしていた。

眉間には深い皺が寄り、髭に覆われた口元がひくひくと歪んでいる。

ミダイは持っていた手桶を戸口に置き、二人の間まで歩み寄った。桶の中は水で満たされている。

セネカはここではじめて水汲み用の手桶を広場に置き忘れてきたことに気が付いた。テオドラの赤ん坊を抱っこした時だ。ミダイがそれを見つけて、ご丁寧に水まで汲んで持って来たのだ。

ミダイの瞳がめまぐるしくアリオンの容姿をなめまわした。

徐々に目が見開かれ、眉がみるみる斜めに釣り上がっていく。

「おい」

唸るようにミダイが凄んだ。

「まずい！」

鈍感なミダイでも完全に気付いたはずだ。目の前の少年が、オリポス兵の探しているお尋ね者であるということ。

「ちょ　ちょっと待ったミダイ！　落ち着けよ。な？」

「……かくまっていたのか？」

たちまち矛先がセネカに向けられた。ミダイは、信じられないと叫んだ目つきをしている。

「な　何言ってるんだよ！　オリポスの役人が村に来たのは、ついさつきじゃないか」

セネカが慌てて取り繕った。

「おいら、知らなかったさ　だって昨日のことなんだ。こいつが転がりこんだのは……まさか、そんな　ヤバいとは……思わなかったし……」

最後の方はしどろもどろになった。要するにかくまっていたこと

に相違ない。

「昨日　だつて!?!」

ミダイが驚愕した。

「……あ。ええと……おととい、かな……」

セネカはちよつと考えこむように、人差し指をこめかみに押し付けながら言い直した。

ミダイの双眸そうぼうがますます見開かれていく。

「おととい！　泊めたのか!?　コイツを！　ここに！」

セネカは自分が喋り過ぎていることに気が付いた。

「怪我をしてんだ。ほつておけないじゃないか！」

「かばうのか!?!」

ミダイは執拗しつごうにくいさがつた。

セネカはとうとう癩癩かんしゃくを起こした。

「じゃあどうしろつて言うんだよツ!?!」

「……こうすればいいんだ　おい！　貴様、来るんだ!?!」

ミダイはセネカの手を振りほどくと、座しているアリオンの腕をむんずと掴み、乱暴に引っ張った。

はずみでアリオンの体が一瞬ふわりと宙に浮いた。

「この悪党め！　役人のところにひつ立ててやる。来い！」

ミダイは今や憤怒の形相で、なおもアリオンを無理矢理に引っ張り、踵を返して戸口に向かつて歩き出した　アリオンの足がもつれようが体が引きずられようが、お構いなしだ。

ミダイの勢いに気圧あいつがされていたアロンだったが、強引に掴まれた腕を振りほどこうと抗った。

しかし、ミダイは腕を離さない。

「抵抗する気か！　貴様！」

ミダイがアリオンの腕をあらぬ方向に締めあげた。今にもねじ切られそうだ。

アリオンはたまらず苦痛に呻き、顔を歪めた。

セネカの体が動いた。

力ではミダイにかなわない。

とつさに戸口まで駆け寄ると、両手を広げてミダイの前に立ち塞がった。

「……情が移ったな。退^どくんだセネカ」

ミダイはセネカの目を見据え、辛抱強く言った。

「お前もさつき役人が言った事を聞いただろうが。コイツは謀反をはたらいた罪人だ。そいつを 知らなかったとはいえ、かくまっていたと知れたら、酷い目にあうんだぞ！」

「嫌だ。どかない」

セネカは頑として言った。何とかしてミダイを止めなければならぬ。そのことしか頭になかった。

「そいつを役人に引き渡したら、かくまっていたおいらも売られちまう。だからどかない」

「はあ？ 何を寝とぼけたこと言っとる！」

ミダイの声が感情的に裏返った。

「じゃあ聞くけど、ミダイは役人に何て言ってそいつを引き渡すつもりなんだ？」

「見損なうな！ お前がかくまっていたなどと誰が役人に言うもんか！」

「だったら何て言うんだよ！」

セネカはミダイの勢いに負けじと声を張り上げた。

「……林の中に隠れていたとでも言うさ」

歯噛みしながら暫く考えたあと、ミダイは唸るように言った。

「役人たちがたむろしているのは雑木林のこつち側だ。雑木林から出て来たように見せかけるんだったら、裏手からぐるっと回って行かないと不自然に思われる」

家へ駆けもどる途中で、セネカは兵士たちが駆ってきたと思われぬ数台の馬車の居場所を確認していた。

「あほう！ そんな七面倒臭いことするか。林にいたってというのは方便でいいんだ」

「雑木林で捕まえて、家に戻って一服してからやって来ました、とでも言うのかよ。そんなの無理だ」

セネ力はきつぱりと言った。

「ミダイには嘘はつけない。おいらがコイツをかくまっていたのは事実なんだし。そのことを役人に問い詰められでもたら、もうおしまいだ」

ミダイは、ぐっと言葉に詰まった。

村では自他共に認める正直者で通っているミダイだった。隠し事ができない。すぐに顔に出してしまう。セネ力はミダイの性格の事はルイザから耳に蛸ができるほど聞かされてきた。

ミダイの顔がみるみる赤く上気していった。

「こ、子どものくせに大人を馬鹿にするんじゃない！ お前に言われなくてもちやんとやってみせる」

「しくじったらレダとサミュエにも迷惑がかかるんだぜ？」

セネ力は容赦なく畳みかけた。

「たとえ役人を上手くまるめこめたとしても そいつがおいらのことを役人に言いつけるかもしれない」

ミダイとセネ力がアリオンの視線を移した。

歯をくいしばって苦痛に耐えいたアリオンは、まさかという表情を浮かべ、セネ力を見た。

すかさずセネ力は とびきり素早く、アリオンの目配せをしてみせた。

「どこで傷の手当を受けたとか、役人に問い詰められでもしてみろよ。そいつが絶対に黙ってられると思うかい？」

ミダイは眉根を寄せてアリオンの見据えていたが、うつぶと低く唸り、握っていた手を離した。

やっとのことで解放されたアリオンはよろよろと後ずさりした。

「奴ら人でなしのテイターンだ。こっちが素直に言うことを聞いたからって、はいご苦労さん、って簡単に褒美をくれるわけではないだ」

セネカが憎々しげに言い放った。

「褒美が目当てだと思ってるのか!? 俺が!」

ミダイが食ってかかる。

「そんなこと思ってない! あいつらの言うことを真面目に聞く方が馬鹿げてるっていうんだ。あんなやつら 誰が、誰が信用できるもんか!」

セネカは声の限り叫んでいた。

しばし沈黙が流れた。

ミダイの眉間には深くしわが刻まれていた。

とにかく目の前のお尋ね者を疑われずに引き渡すには、役人を欺かなければならない。しかし、これは思った以上に難題だ。ミダイは考えに考え抜いてようやく答えを絞り出した。

「おい。お前。今すぐここから出ていけ」

「ちよつと待った! こんな真つ昼間だ。役人もそこらじゅうに見張ってる。すぐに見つかつちまうよ!」

セネカが突っ込んだ。

「なら」

ミダイの瞳に自信に満ちた光が宿った。

「なら、夜になったら出ていけ。村中が寝静まったら、だ。それまではこの家に潜んでじつとしている。暗くなるまで絶対に家を出るんじゃない」

ミダイはこれ以上は何も言わない、と固く決心したように言葉を結んだ。

「分かったな?」

「……はい」

アリオンはしっかりとした声で低く、短く答えた。

「わッ! な なに、するんだよ!」

ミダイは、今度はセネカの二の腕を掴み、半ば引きずるようにし

て戸口の外へと連れ出そうとしていた。

セネ力はミダイの突然の行動にうるたえ慌てた。

「お尋ね者と一緒にここに置いておけるか。お前は俺の家に来るんだ！」

ミダイはじたばたするセネ力をものともしない。

セネ力は腕をがっちり掴まれ、半分持ち上げられたまま坂道をミダイとともに下って行った。

「ミダイ、いい加減に放せよお。おいら逃げやしないからさ」

セネ力はミダイの歩幅に合わせるため、つま先で小走りになりながら恨めしそうにミダイを見上げた。

しかし、ミダイは押し黙ったまま鼻息も荒く黙々と歩き続けた。

ちぐはぐな歩みで並行する二人は、傍から見たら奇妙な極まりない小路を下り切ったところでセネ力はたまらず叫んだ。

「ええい！ もお！ はなせ！ 人が見たら変に思うだろ！！」

ようやくミダイはセネ力を解き放した。

セネ力は家の方を振り仰いだが、戸口からも窓からもアリオンの姿は垣間見ることができなかった。

二人はしばらくの間、おし黙ったまま歩いた。

「セネ力、お前なあ……なんであんな奴、かくまつたりしたんだ？」
ミダイがため息交じりで半ば嘆くように言った。

「あんな見るからにワケありそうな輩が転がり込んできたら、さつさと追い出すのが普通だ。だのに　よくもまあ！　何ですぐに俺を呼びに来なかつたんだ？」

ミダイの問いに、セネ力はすぐに答える事が出来なかった。

そう言われてみれば……なぜ、見ず知らずの者を家に置いたりしたんだらう？

「……わかんないけど……。なんか、放っておけない気がして、さ」
これはセネ力の率直な気持ちだった。

ミダイはうつむと唸ると、頭髪をばりばりと掻きむしった。

「あいつ　。テイターンだな」

「え……！？」

「多分、間違いない。しかも格が上の、な。そこいらにいるオリンポス兵とはワケが違うだろう。厄介なことにならなきゃいいが……」

ミダイは深刻な面持ちで声を落とした。

「とにかく、あいつのことは　レダには内緒だ。いいな」

ミダイは前に向けた視線を外すことなく、低く静かに言った。

「……わかった」

セネカは困惑しながらも、小さく頷いた。

しかし内心は　きつとレダにはすぐに勘繰られるに違いない。

少なくとも、すべてを聞き出されるのは時間の問題だろう　と確信していた。

「それから、今日からお前は俺たちと一緒に暮らすんだ。いいな」

「は？　何を急に　」

「今日からだ。いいな」

ミダイはセネカの言葉を遮り、ぴしゃりと言い放った。

「このことは世話になったルイザ婆が言い遺したことだ。忘れたわけではあるまい」

ミダイはきつぱりと言い切った。今日からセネカを引き取るという意志を曲げるつもりは毛頭ないらしい。

「……」

痛いところを突かれたセネカは、今はおとなしく従うほかなかった。ミダイにこんな頑固な一面があるとは思ってもみなかった。

「おかえり　おや？　セネカも一緒なのかい？」

夫を出迎えたレダはミダイと同行してきたセネカを家の中に招き入れた。

「飯めし！」

ミダイがぶつきらぼつに言った。

飯台はんたいには温かな粥と干し肉、温野菜などが並んでいる。

セネカは自分がまだ朝食を済ませていないことに気が付いた。当

然アリオンも、だ。

そういえば朝餉の支度どころではなかった。今頃きつとお腹を空かせているに違いない。家にある食べ物と言えば、地下の貯蔵庫にあるひなびた芋とカエルの干物くらいだ。それ以外はセネカがその日のうちに稼いでくるしかない。アリオンは果たして壕の中にあるなけなしの乾物を見つけられるだろうか……。

ミダイが、むっつりしたまま席に着いた。

「朝ご飯は食べてきたのかい？」

レダの問いかけにセネカはちらりとミダイの方を見てから、かぶりを振って応えた。

「セネカは今日から俺たちと一緒に暮らすことになった」

ミダイが慥然とした表情のまま言った。

「……」

レダは ミダイのその態度と、ものの言い方に何か引っかかったようだった。

「そりゃあよかった。やっとその気になったんだね。で、支度はどうしたんだい？」

セネカは手ぶらだった。

レダはセネカを席に着かせ、粥をよそった器を手渡しながら言った。

「セネカ、これを食べたら荷物をまとめておいで」

「ダメだ」

ミダイが口を挟んだ。

「今日、あの家に戻ることは許さん」

「は……？」

レダは呆気にとられた様子で首を傾げた。

「いや、明日。明日ならいい。荷物は明日の朝、取りに行くんだ」

「明日の？……朝あ？」

レダはますます首を傾げた。

「なんでまた明日なんだい？ 今日からここに暮らすのに……。セネ力だつて着のみ着のままという訳にはいかないし、それに」
「狩りに行く」

レダの意見に耳をかすことなく、ミダイはかきこむように朝餉を食べ終わると立ち上がった。

「弁当の支度は出来ているだろうな」

レダは慌てて弁当の入った包みと飲み水を詰めた革袋をミダイに手渡した。

「畑の具合はどうなってる？」

ミダイが腰帯に弁当の包みを結わえつけながらレダに聞いた。

「豆がいいあんばいだから採ってしまおうと思うよ。セネ力も手伝ってくれるし」

「セネ力。東の畑の草抜きも手伝ってくれ。あと芝刈りもだ。頼むぞ」

「……。ミダイ？ セネ力は自分とこの畑もあるんだよ」
「分かったな？ セネ力」

ミダイはレダの言うことに耳を貸す素振りさえ見せない。

セネ力にはミダイの意図が手に取るように分かった。仕事を与えるだけ与え、何があるうとアリオンのいるあの家に行かせない魂胆なのだ。

セネ力は応える代わりにため息をついた。

「まるでセネ力を家に戻らせたくないみたいだね？ あの家に何かあるのかい？」

遂にレダが冷ややかな眼差しをミダイに向けた。

鋭い！ セネ力は舌を巻いた。

「な、何を言つとるか　そ、そんなことある訳がない　俺はただ、今はなんだかんだで　その　物騒だからそう言ったまでだ」
「ずばり核心を突かれ、ミダイはたちまちしどろもどろになった。」

「行つて来るからな。ああそうだセネ力。オイノスの爺が縄はまだ出来んのかと気にしとつたぞ。まだ作れとらんようなら、今日中に

何とかしろ。いいな」

ミダイはだめ押し一撃を振りおろすと、弓矢の道具を肩にかけ、狩りへと出かけて行った。

昨夜、自分は縄を縋いながら眠ってしまった。

やるべきことが多すぎて、セネカは頭を抱えこみたい気分だった。

「やれやれ。分かり易い人なこと」

レダは呆れ果てていた。

「何かあったんだね？ セネカ？ ん？」

レダはセネカの顔をジツと覗き込んだ。

セネカは顔を上げることが出来なかった。レダの視線が刺すように痛い。

粥の底に何かを見付けようとするように、セネカは杓子で器の中身を必死にまぜ返した。レダと目を合わせた途端、お尋ね者をおかくまっていることを見透かされてしまいそうだ。

「ミダイに口止めされてるんだね……まあ、いいよ。ミダイが帰ってきたらとつちめてやればいいんだから さあさあ。あんたたち、さっさとお上がり」

セネカは喉元に悶つかえていた固い塊がおりたように、ほっと息をついた。

「でも……あの人があんなに不機嫌なのは久しぶりだね。あの時依頼だ……」

「え？ あの時って？」

レダの憂いに満ちたものの言い方にただならぬものを感じて、セネカは顔を上げた。

「ルカスをオリンポスに取られちゃった時も、あんな調子だったのさ 不機嫌で、邪険で」

セネカはいつかルイザから聞かされたレダの上の息子のことを思い出した。

レダは未だ帰らぬ長男を想い、深くため息をついていた。

「2」（後書き）

アクセスありがとうございます。

ミダイ、いろんな意味で少しうるたえました。

女の子が見知らぬ男の子をひと晩も泊めてしまったのですから（笑）

今回は第六章『逃避行』です。

コウミ

2011・3・20 タイトル及び本文改訂

セネカは大急ぎで朝餉^{あさけ}を済ませると、藁を借り、手早く^な縛^なって縄を一巻き仕上げた。そしてオイノスの家まで届けに行くために猛烈な速さで村の路地を駆け抜けた。

とにかく今日は仕事がたくさんあった。

縄は約束の半分しか出来上がらなかつたが、残りは明日必ず届けるからとオイノスに約束し、駄賃を半分だけ受け取った。

次はレダに頼まれていた豆もぎに取りかかった。

よく肥えた豆のさやを選び分けてはむしり取り、腰に提げたカゴに放り込む。籠の中身はみるみるうちにさやつき豆でいっぱいになった。

セネカが仕事の手を止め、豆畑の向こうに目をやるとサミュエがいた。サミュエは水やり用の桶を重そうに提げていた。

その姿を遠巻きに見ているとアリオンのことが思い出された。二人とも背格好がよく似ていたからだ。

夜になったら。

セネカはふと思いきこした。

アリオンは夜、村人たちが寝静まる頃になったらこの村を出ていくと、ミダイに約束させられていた。

セネカの胸に言いようのない鈍い感覚が押し寄せた。

再び豆をむしり始めたが、頭の中ではぼんやりとアリオンの事を考えていた。

村を出て行ったあと、行くアテはあるのだろうか？ いや、ないに違いない。それに一人ぼっちだし、あんなりのまま放り出されたら、野垂れ死にしろと言うようなものだ。

せめて、少しでも何か持たせてあげられたら。そう考えた時、セネカの頭にある考えが浮かんだ。

もしかして、お節介かもしれない　と、セネカは迷った。
でも、生前ルイザは常々言っていたではないか。

『困っている人には親切にするようにな。それが巡り巡っていずれは自分に還って来る。お互い様ということじゃ　』

セネカは何度も何度もうなずき、自分を納得させた。そして、すぐに行動を起こした。

「おおい！　サミュエー！」

セネカは野良仕事に取り掛かろうとしているサミュエーに向かって声をかけた。

サミュエーはが振り返りセネカの姿を認めた。

近くに寄ると、サミュエーは遠慮がちにセネカを見返した。そのおどおどした様子は明らかにセネカの顔色を伺っていた。

「ああ……おいら別に怒っていないから。心配しないでいいって」「ホントに？」

サミュエーは安心したように満面の笑みを浮かべた。

セネカは、サミュエーが自分に好意を寄せていることは前から気づいていた。

きつとあの時　雑木林でカルラに、ああしないとセネカに嫌われるとでも言われたのだろう。

「サミュエー。お願いがあるんだ。聞いてくれるかい？」
セネカはサミュエーに「人助けがしたいから」と、協力を頼んだ。

最初はきよとんとしていたサミュエーだったが、セネカの熱心な物言いに何かを感じ取り、快くそれに応じた。

「ありがとう！　えええーと……まず、服が欲しいんだ。サミュエーが持つてるやつの中で一番古くて構わない。そいつを袋に　ほら。麦を入れる麻袋。あれに入れて持ってきてほしいんだ」

セネカは、レダには内緒にしたいから、絶対に見つからないようにと付け加えた。

サミュエーはセネカの説明を聴きながら何度もうんうんとうなずき、

最後には自信ありげに元気よく胸を叩いた。

畑の二画で落ち合う約束をすると、サミュエがすぐに早足で家へと向かった。

サミュエの姿が見えなくなるのを確認すると、セネカは麦畑へ向かった。

程なく、一仕事を終えたレダがこちらに向かってやって来るところだった。

サミュエが事を済ませるまでレダを足止めしたい。

セネカはおずおずとレダの側に寄ると、わざと歩調をゆるめた。

そしてオリビアの家に遊びに行きたいことと、弁当を作ってほしいことを伝えた。

「昨日、オリビアたちに誘われて、それで約束したんだ。今日、遊びに行くって。赤ん坊も見せてほしいし……お昼も一緒に食べようって。あと、今日はまだ婆ちゃんここに挨拶もしてないんだ、だから仕事は後回しになっちゃうけど……」

嘘はほとんどついていなかった。

オリビアとターナとの約束は本当だし、今朝はまだルイザの墓へも参っていない。

ただ、お昼を姉妹と一緒に食べる約束はしていなかった。

セネカは、自分が今から密かに実行に移そうとしている事がとても後ろめたく思えて、胃がしくしくと痛んだ。

どうか怪しまれませぬように。

セネカは心の中で祈りながら、必死で取り繕った。

しかし、そんなセネカの心配をよそに、レダはセネカの頼みを快く引き受けた。女の子同士遊ぶことに、なんの反対があるろう。そう言わんばかりだ。

「ありがとう、レダ！ 草抜きは帰ってから必ずやるから」
セネカはレダに感謝した。

「草抜きはサミュエにやらせるからいいんだよ。だから心配しない

で行っておいで。もしも時間が余ったら、その時は自分ちの畑に行
って仕事を片付けなよ。ミダイには私からうまく言っておくからさ」
セネカは心の中で謝りながらレダに礼を言った。

それからしばらくの間、レダとセネカは一緒に歩いた。

足並みはこれ以上ないと思うほどゆったりと進めた。幸い、レダ
に気づかれた様子はない。

家に着くと、誰もいなかった。

サミュエはうまくやったのだろう。セネカはホッと胸を撫で下ろ
した。そして飯台の上に取ってきた豆を広げると、踵を返して豆畑
に向かった。

「残りの豆をもいでくるよ！」

約束の場所にサミュエは立っていた。麻袋を大事そうに抱えてい
る。

「ありがとう！」

セネカは麻袋を受け取った。

中には　なんと真新しい衣服が一式収まっていた。

「……これ……新しいのじゃないか！　レダに仕立ててもらったば
かりのдар？　いいのかよ？」

セネカは目を真ん丸にして驚いた。

サミュエは何度もうなずき、ニツと白い歯を見せた。

「……ありがとう。本当に。恩にきるよ」

セネカは心から言った。

サミュエに仕事に戻るよう促し、セネカも豆もぎの続きにとりか
かった。麻袋は畑の隅に丸めて置いておいた。

豆のさやをむしり取りながら、セネカはこれからやろうとしてい
る事を頭の中で練り直した。

レダから弁当の包みを受け取ったら、すぐに村外れの家に帰ろう。
麻袋には服と弁当、あと家にある火打ち石や水を溜める皮袋なんか
も入れてやる事が出来る。それをアイツに渡して、あとはなに食

わぬ顔をしてサロメの家に行き、オリビアたちと遊べばいいんだ。オリビアたちはセネカの持つている朱色の更紗布を見たがっていた。もしも、ミダイにあとあと咎められるような事があったとしても、布を取りに行くというちゃんとした理由があつて家に戻つたと言えはいい。

これ以上完璧な段取りは他にないとセネカは思った。そしてセネカはこれらを全てをうまくやり通せる自信があつた。

収穫した豆を持って家に戻る頃にはレダが弁当を包み終わつていた。セネカはサミュエと一緒に豆をさやから取り出す作業に取りかかった。

「セネカ。手を出してごらん」

レダが何やらしたり顔で握り拳セネカの前に差し出した。

セネカの手の平にそつとのせられたのは、一本の組み紐だった。

「え……っ！？ うそ。これ……！？」

セネカは信じられないといった眼差しでレダを見上げた。頬は紅潮し、思わず声を詰まらせた。

「……くれるの？」

セネカの問いに、レダは当たり前のようにうなずいた。

「本当に？」

「かしてごらん。結んであげよ」

レダは答える代わりに紐を受け取り、セネカの首にゆるく巻き付け、しっかりとした結び目をこしらえた。

「なんで？」

セネカがおずおずとたずねると、レダが茶目っ気たっぷりに目くばせをした。

「そりゃあ、もちろん今日からセネカがうちの子になるっていうお祝いのしるしさ！」

レダは装飾用の組み紐の作り手だった。各々に染め上げた麻紐を器用に編み込んだ美しい組み紐は、村ではめっぼう評判が高かった。

そして、その組み紐は輿入れの時などの祝いの時の品として贈るものだというのをセネカは聞いたことがあった。

「似合うよ。とても」

レダがにっこりと微笑んだ。

首元を飾る組み紐の感触を確かめたセネカは、嬉しさのあまりじんわりと胸が熱くなった。しかし、次の瞬間にはレダに嘘をついている自分を心の中で責めた。

良心の呵責に耐えかねて胃袋がまた痛みだしたので、セネカは小さくお礼を言ったあと、あたかも照れ隠しをするかのようにうつむいた。

「ミダイは夕方には帰って来るんだろ？」

豆のさやに取り掛かりながら、セネカは出来るだけさりげなくたずねた。

「いいや。そうとも言えないね。粘れば夜近くまで帰らないけど、からきしダメだと分かるど昼過ぎには帰ってくるさ」

レダの返事にセネカはどきりとした。

となると、ミダイが帰宅する途中にあらぬ場所ではったり出くわすということもあり得るではないか。

セネカはたちまち気が急いだ。

さやを開く指がもつれ、ぼろぼろと豆が床にこぼれ落ちた。

突然、レダが吹き出した。

「もう、いいよセネカ」

今やレダはお腹を抱えて笑っていた。

「隠し事があるって事がみえみえなんだよ。ミダイもセネカもセネカは驚いた。口をあぐりと開けたまま、目もしばらくまばたきするのを忘れていた。」

「豆はもういいから、行きなよセネカ。用事があるんだろ？ そのかわり」

レダはセネカの顔を真正面から見つめ、その額を指先で優しく小

突いた。

「帰ってきたら全部話すんだよ。いいね？ 全部だ。分かったかい？」

セネカは立ち上がると、ありがとこの代わりにレダの体にギュッと絡みついた。

「おいら……レダがおいらの姉ちゃんみたいだって言ってる奴を知ってるよ」

「え？ なに？ 似てるってことかい？」

「違う。それだけ若く見えるってことさ」

顔をほころばせながら、セネカはレダから離れた。

セネカはレダと家族になれることが 新しい家族が出来ることが嬉しくてたまらなかった。

「へええ。嬉しいじゃないか。誰だい？ そんなこという子は」

「帰ったら話すよ。全部。サミュエ、それじゃ！ あとで！」

セネカはサミュエの肩をぽんと軽く叩いてから、弁当の包みを大事そうに抱えると、家を後にした。

「遅くなるんじゃないよ！」

レダの声を背中で聞きながら、セネカは走り出していた。

「1」（後書き）

アクセス頂きありがとうございます。

今回はひたすら根回しに徹するセネカです。
そして頭の中はアリオンのことについて。

ただし、本人、自覚がないようですが…

セネカの旅立ちの時、近いです。

コウミ

「2」

セネカは畑の隅に隠してあった麻袋の中にレダから受け取った弁当の包みを押し込んだ。そして急ぎ足で村外れの家に向かった。

急ぎ足が速足になり、やがてセネカは駆け出した。

家々の脇道を通り抜けながら辺りに目を配ったが、オリンポス兵たちの姿はどこにも見えなかった。

昼時のためなのか。もしかすると、兵たちは村を移動して行ったのかもしれない。と、セネカは考えた。

村外れの家に通ずる坂道まで来ると、歩調をゆるめ呼吸を整えた。アイツはお腹を空かせているだろうし、この差し入れを見たらきつと喜ぶに違いない。

セネカは浮かんでくるはにかみを何度も抑えながら、まっすぐ村外れの家を見つめた。

家の戸口をくぐると同時にアリオンと目が合った。

アリオンは家に入ってきたセネカを驚愕の眼差しで見つめ立ち尽くしていた。

セネカはアリオンのその驚き様に少し違和感を覚え、いぶかしんだ。

「セネカ！ 今……君……誰かとぶつからなかったかい！？」

目を見開きながら、アリオンはこみあげてくる昂^{たかぶ}りを抑えているようだった。

「はあ？ ぶつかる？ 誰かと？」

セネカは頓狂^{とんきやう}な声をあげた。

「なに寝ぼけたこと言ってるだよ」

アリオンの言葉を一蹴すると、セネカはてきぱきと麻袋にあれこれ詰め込み始めた。

火打ち石に石包丁。まな板代わりの小さな板きれに木の器と水飲

み用の皮袋、巾を数枚。その他、目についたなんだかんだ。

何も無いよりはマシだろうと、弓と矢を束ねて麻袋と共に縄で幾重にもくくりつけた。これで狩りの真似事ができるはずだ。

どうせ明日からミダイたちとの暮らしが始まるし、家にある道具類を全て譲ってしまったても惜しいことはない。ミダイはもう弓を教えなくてもいいから弓矢も不要だ。

セネカは縄をかたく結び、”しよいこ”のように肩に担げるよう器用にしつらえた。

「なぜ……ここに、戻って来たんだ？ セネカ……どうして？」

セネカが手際良くそれらを終えた時、アリオンが問い詰めるように言った。

その言い方にはセネカもさすがにかちんときた。

「なんだよ。ずいぶんとご挨拶じゃなか。せつかくセンベツを持ってきてやったつてのに。ほら！」

そう言ってセネカはまとめた荷物をアリオンに押しつけるように手渡した。

アリオンはその荷物を呆然とした表情のまま受け取ったが、途方に暮れたように荷物とセネカを交互に見つめるだけだった。アリオンは完全に言葉を失っていた。そして一心に何かを考えているようにも見えた。

別に何かを期待していたわけではなかったものの、セネカはいささか拍子抜けした気分になった。

「じゃあな」

アリオンから何かしらの言葉があればこんなにもあっさりした別れの挨拶をしないですんだのに。セネカはそう思いながら一言別れを告げると、家の外に出ようとした。

その時。

いきなりアリオンがセネカの腕を掴み、戸口と反対方向に思い切り引っ張った。

勢い余ってセネカはアリオンのぶつかり、その弾みでよろめいた。そして、その不安定になった体をアリオンの腕がしっかりと受け止める形となった。

突然の事に、一瞬何が起こったのか分からなかった。

しかし自分が今、アリオンの腕の中に抱かれているのだと分かった途端、体中の血が瞬時にたぎった。

「な……ッ！ 何するんだよ！！」

セネカは乱暴にアリオンの腕をふりほどくと、声を荒げた。

「今、出て行つてはダメだ！ セネカ」

「は？ なんだって？」

セネカはアリオンの真剣な瞳に吞まれた。

「オリンポス兵士たちが、この家を取り囲んでいる」

「え……？」

アリオンは背中を壁にぴたりと張り付かせ、窓からそつと外の様子を伺った。セネカもそれに倣い、外を窺い見た。

すると。

鎧兜を身に付けた兵士たちの群れが家を取り囲み、辺りはどこどこ人だかりができていた。手には鋭い槍を持っている。

たちまちセネカの心臓がどくと波打った。

「君がやって来る前から兵士たちは、家の近くまで来ていたんだ……きつと。君、気がつかなかったのかい？」

アリオンの問いにセネカは答えることができなかった。顔からすうっと血の気が引いていくのが分かった。

気がつかなかった まったく気がつかなかった。

でも、なぜ なぜ、気がつかなかったのだろう？ 自分が

よほどうつかりしていたということなのか？

「……でも……どうしてアイツらはここにやって来たんだ？」

セネカ自身がつけられたわけでもないのは分かっていた。

なのに、なぜお尋ね者がこの家に潜んでいる事が兵士たちに知れたのか訳が分からなかった。なぜ？

もしかして……。

一旦停止していたセネカの思考がぐるぐると動き出した。信じたくはなかったが、あれからミダイの気が変わり、兵士たちに密告したのかもしれない。

そうだ！ オリビアとターナが痺れを切らせて家に様子を見に来て、潜んでいるアリオンを見つけ、サロメに言いつけたのかも。

いや！もしかしたらカルラがこっそりやって来て。

実際、カルラは「お尋ね者狩りをしよう」と持ちかけてきたではないか！

しかし。

どちらにしても、今となっては確かめようのないことだった。

アリオンはセネカの呟きを受けて、低く声をひそめた。

「どうしてここにいる僕のことを知れたのかは……わからない。けど、奴らは、はじめから僕を殺す気だったんだ。捕まえるんじゃないか。僕は 処刑されるはずだったんだから……」

「じゃ け い？」

セネカは息を呑み、愕然とした。そしてそのままがくりと膝を折り、その場へたり込んだ。

処刑されるほどの重罪人をかくまっていたなんて……。

しかし、全く予想出来なかったことでもない。

オリンポスの屈強な兵士たちがあれ程までの多勢で繰り出して来るほどだ。

よほどの大事をしでかなければ、あれほどまでに。

このままぼんやりしていたら、あの兵士たちはやがて家の中になだれ込んで来る。

そして、お尋ね者はまんまと御用になり、槍で八つ裂きにされるに違いない。

セネカは、情に絆ほだされてのこのご貢ぎに来た自分の身はどうなるのかと考えた。

まさか、オリンポスの兵士が褒美をつけて無事に返してくれるとは到底思えなかった。

考えるまでもない。

殺される。もう、二度とミダイやレダたちと会うこともない。

セネカは目の前が真っ暗になった。

頭の中は今や後悔の念と絶望がぐるぐると渦巻いていた。

「逃げよう」アリオンが言った。

アリオンは先ほどセネカが手渡した荷物を背負っていた。

「この家には裏口があるはずだね？　そこから逃げるんだ」セネカは力なくかぶりを振った。

「裏口なんて、ない……」

村外れのこの家には裏口がなかった。

出入りする戸口と窓が一つつつあるきりなのだ。

しかし。

「あ！」

セネカが思いついたように面をあげた。

「婆ちゃんから聞いたことがある。壕の奥に空気を通す穴があるって。去年の秋からずっと塞ぎっぱなしだったから固くなってしまつて 誰かに抉じ開けてもらわないとダメだろうって」

最後まで言い終わらないうちにアリオンが壕の中に飛び込んだ。

セネカもころげるようにして後に続いた。

「これだね？ セネカ？」

アリオンが天井の一角を指差した。

そこには外側から厚い板の蓋でびたりと閉ざされ、隙間は布きれで目張りがしてある箇所があった。

セネカの頷きを見届けると、アリオンは剣の柄で天井の蓋の境目を抉じた。

「！？」

剣？

いったいどこから剣を出したんだ？

セネカは、アリオンが必死で天井を抉じ開けようとするのを、驚嘆しながら見つめていた。

やがて光が差し込み、外気が壕の中に流れ込んだ。蓋が取り払われたのだ。

天井にはぼつかりと穴が開いていた。

見ると、人ひとりがやつと通り抜けられるほどの大きさだ。

アリオンは、まず背負っていた荷物を下ろし、穴の外に放り投げるとあつという間に穴から這い出した。

「セネカ！」

アリオンが穴の外から手を伸ばした。

セネカも手を伸ばしてアリオンの手に掴まるうとした。

「あつ！」

セネカは大切なことを思い出した。

「忘れてた！」

そう叫ぶと慌てて家の中へ引き返した。
ルイザから譲り受けたあの更紗布。

大切な形見の品だ。置いて行く訳にはいかない。

セネカは寝台の際に置いてある籠から布を引っ張り出し、肩かけのように羽織って胸元で固く結びつけた。

「セネカ！ 早く！」

アリオンが叫んでいた。

セネカは再び壕の中に戻ろうとした。

その時。

ひゅうと空を唸らせて何かが窓の外から家の中に飛び込んできた。
先端に炎が点火された矢が放たれたのだ。

先ほどまでセネカが立っていた場所に、寝台に、機織り機に、矢が次々に突き刺さり、たちまち引火していった。

セネカは、棒立ちのまま燃え移った炎を見つめた。
体が硬直し、一步も動けなかった。

セネカはあの日の事を思い出していた。

二度と忘れえぬ、あの日。

業火に焼かれる家々からはもうもうと煙が立ち込めていた。
村を包み込む紅蓮の炎。

響き渡るけたたましい悲鳴と叫び声。

血の臭い。

ごろりと転がった父親の亡骸……。

「急ぐんだ！ セネカ！！」

壕の奥からアリオンの声が響いていた。

セネカは我に返った。

炎はめらめらと家の内部を焼き焦がしていった。

熱気に煽られながら、セネカは体を無理矢理動かそうとした。

しかし、一旦すくんだ足はそう簡単に言うことをきいてくれない。

くず折れそうになる足を半ば引きずるようにして、セネカは壕の中に転がり込んだ。

奥の穴からはアリオンが身を乗り出さんばかりに手を伸ばしていた。

「急げ！　早く！　早くつかまれ！！」

セネカは無我夢中でアリオンの腕にしがみついた。

「4」(前書き)

この回には残酷な描写が含まれています。
苦手な方はお気を付け下さい。

コウミ

「4」

「燻^{いぶ}り出す気だ。僕たちが家から出てこないと分かったら、裏手にやってくる。急いで」

アリオンに引つ張り上げられたセネカは地面に両手両膝をつく間もなく、急き立てられた。

家の屋根からはすでに幾筋もの煙が立ち上っていた。

アリオンはセネカの手を引き、駆け出そうとした。

しかし。

「いたぞ！ こつちだ！ 裏にまわれ！！」

怒号とともに兵士が現れた。

二人いる。

家の裏にも見張りがいたのだ。

表側にいる仲間の兵士を呼びこまれた。

アリオンは小さく舌打ちすると、すらりと剣を抜き放った。

「セネカ。これを 頼む」

後ろ手でセネカに何かが渡された。

剣の鞘^{こぼ}だ。

セネカは鞘を受け取ると、かたく握り締めた。

二人の兵士たちは槍を構えていた。

こちらに殺意を抱いているのは明白だった。

鋭い槍の切っ先がこちらに向けられた、その刹那。

アリオンが一気に間合いを詰めた。

このいきなりの行動に相手は怯んだ。

その隙をアリオンは見逃さなかった。

鋭い槍の切っ先をかわし、相手の懐に飛び込むと流れるように剣を振るった。

速い！

アリオンは、ぐらりと倒れこむ兵士の脇をすり抜け、身を翻すと

躊躇なくもう一人の兵士を薙ぎ払った。

相手に槍を繰り出す隙を与えず、アリオンはあつという間に二人の兵士を屠った。

セネカは、どうと倒れこみ血溜まりの中でひくひくと蠢く二人の男の姿を、釈然としない不思議な気持ちで見つめた。あまりの早業に理解が追いつかなかった。

血まみれの剣を携えたアリオンがセネカの腕を掴み取った。

「走れ！」

アリオンの気迫に圧され、セネカはもつれる足で伴走した。

「追え！ 逃がすな！」

兵士たちの声が耳朶を打った。

家の正面を見張っていた連中だ。

振り返ると甲冑姿の兵士たちがばらばらとこちらに迫って来ているのが見えた。

突然、セネカはアリオンに体ごとぐいと引き寄せられた。

足元の地面に槍が次々に突き刺さる。

すんでのところまで串刺しになるところだった。

二人は後方から仕掛けてくる槍の攻撃を避けて蛇行しながら走ったので、追っ手との距離がみるみる縮まった。

このままだと確実に追いつかれてしまう。

「先に行くんだ　　僕が引き付けておくから、林に入って奴らを撒こう」

素早くアリオンはそういうと、兵士の群れに向き直り、猛然と切り込んでいった。

セネカは言われた通り雑木林にわけ入り、藪草を漕ぎながら道なき道を進んだ。

怖かった。

恐怖がセネカを取り巻いていた。

頭では何も考えていない。

思考はとうに弾け飛び、頭の中がまるで空洞になったかのようにだった。

セネカは、ひたすら体を動かし、心が挫かれるのを防いだ。

追いかけられている　！？

セネカは背後からの気配を察知した。

藪草を威勢よくかきわけて迫って来る影がある。

人一倍いか敵つい体格の兵士　広場でオリンポスからの通達を告げていた兵士だ。

つけられた　！

全身の皮膚が音をたてて波立った。

追い付かれたら　殺される　！

セネカは無我夢中で藪漕ぎし、前進した。

しかし　。

相手とは肉体的にも体力的にも格差がありすぎた。

既に息の上があったセネカはたちまち追いつかれた。

肩掛けを掴み取られたかと思うと、あっという間に引き戻され、

棍棒のような腕が首元に絡みついてきた。

太い腕に羽交い締めされ、首を締めあげられた。

しかし、恐怖がかえってセネカを奮い起こさせた。

セネカは組みつかれた腕に思いきり噛みついた。

ぎゃっという叫び声があがり、相手の腕の締め付けがゆるんだ。

その隙をついて、セネカはするりと兵士の腕をすり抜けた。

そして再び地面を蹴って脱兎の如く駆け出す。

だが、相手もそう甘くはない。

肩口をむんずと掴まれた。

夢中でそれを振り払ったものの、体制が崩れた。

そこへぶんと唸りをあげて敵つい兵士の平手が飛んできた。

セネカは横面を思い切り叩かれ、勢い余って転倒した。

衝撃で頭がくらくらし、目の前で星が瞬いた。

兵士は倒れたセネカの胸ぐらを掴み取ると、そのまま体を持ち上げた。

宙吊りにされたセネカは苦痛と息苦しさに喘いだ、アリオンから預かった剣の鞘はしっかり握り締めていた。

「はなせ！」

セネカは空いた方の手で兵士の腕を振りほどこうと爪を立てて手首を引つ掻いたが、兵士のもう片方の腕が伸び、首根っこを鷲掴みにされた。

太い指がセネカの喉に食い込み、たちまち虫の息になった。

目の前が黒くなったり白くなったりした。

ばたつかせていたセネカの足が、力なくだらりとぶら下がった。

「チビめ！ 手こずらせやがって！ ふん。まあいい、安心しろ。

貴様は殺さん 今は、な」

敵つい兵士は息を荒げながら吐き捨てるように言った。

「あの若僧のエサになつてもらふ。来い！」

セネカには抵抗する体力も気力も残っていないかった。

「5」(前書き)

この回には残酷な描写が含まれています。
苦手な方はお気を付け下さい。

コウミ

兵士がアリオンと出くわすにはさほど時間はかからなかった。アリオンの姿を認め歩みを止めた兵士は息を飲み、うづむと低く長く唸り声をあげた。

手首を掴まれたまま引きずられるように連れてこられたセネカは、藪草の間からアリオンの姿を確認した。

セネカには兵士が唸る理由が分かる気がした。

血にまみれた剣を携え、全身返り血に染まったアリオンは、激しく肩で息をしながら齧ついで兵士を睨みつけていた。

それは鬼畜のごとく、恐ろしいほどの形相だった。

ティターン。

自らを神と称する者たち。

ルイザから聞かされただろうか。それとも、故郷くにで村の大人から聞いただろうか。

セネカの脳裏にまた、炎に焼かれる村の家々の様子が浮かんだ。

非道な輩だ。平民をまるで虫ケラのように思っている。

ミダイがそんなことを言っていたような気がした。

セネカは目の前にいるアリオンという少年がティターンだということは今、確信した。

ここまで追い付いたということは、あのたくさんいた兵士たちを全て斬り倒してきたのだろう。

一人であれだけの人数を相手に。

セネカは空恐ろしさをを感じ背筋がぞくりと冷たくなった。

アリオンが兵士を見据えたまま、剣を構えて歩み寄った。

「ま　待てい！」

明らかに兵士はうろたえた様子だった。

「仲間がどうなってもいいのか!?」

そう言うと、藪草に埋もれていたセネカの手首を掴んだまま、高々と持ち上げた。

セネカは小さく呻き声を上げた。

掴まれた手首がきりきり痛み、体の重みで腕が付け根からもぎ取れそうだった。

今度はアリオンが息を呑む番だった。

「このチビを助けたかったらおとなしくしろ！ お前が投降したら、コイツは自由にしてやる。まずは剣を捨てる！」
嘘だ。

セネカは虚ろな意識の中で思った。

自由にしてくれるはずがない。二人とも殺される。

セネカは首筋にひやりとするものを感じた。

兵士が腰に差した短剣を抜き、セネカに首筋に押し当てたのだ。

そらみる 順番が早いか遅いかだけだ。

セネカは力なく目を閉じた。

アイツと自分とは仲間でもなんでもない。お互いただのゆきずり

だ。アイツが自分を守ってくれる理由はどこにも ない。

「いいか！ もう一度言う！ 剣を捨てる。そうすれば仲間を解き放してやる。さもなければ」

兵士が言い終わらないうちに、がしやりという音が響いた。

アリオンが藪草の中に剣を放り投げたのだ。

セネカは再び驚きのあまり、それまで虚ろだった目を見開いた。

バカ ！！ わざわざ殺されるようなものを ！

セネカを掲げて上げていた兵士も同じことを考えていたらしい。

兵士はしばし言葉を失った。

「剣は捨てた。さあ、その子を放せ」

アリオンは静かに、凄みのある声を響かせた。

ようやく兵士は言葉を取り戻した。

「よ ようし。潔い奴だ ではこちらに來い。貴様と引き替え

にこのチビを放してやる」

ダメだ　！　剣から離れたらおしまいだ　！

セネカは頭を持ち上げ、訴えるようにアリオンを見た。

「その前に、その剣を鞘に戻せ。戻さない限り、僕は動かない」

アリオンはちらりとセネカを一瞥いちべつを投げると、かたくなにきっぱりと言い放った。

兵士に勝算のおごりが生まれた。

「さあ、これであいこだ」

兵士はかちりと剣を鞘に収めると、顔をにやつかせた。

好機が訪れた。

セネカが唯一自由になる右手にはアリオンの剣の鞘が握られている。
迷いはない。

セネカはアリオンに素早く目配せをしたあと、持っている剣の鞘に目を落とした。

アリオンの瞳が反応した。

「約束しろ。僕がそこまで行ったらその子を下ろすんだ。そして

「

うまいぞ　。」

アリオンが時間を稼いでいる間、セネカは鞘に結びつけてある皮紐を用心深く指に絡ませ、持ち方を変えた。

ここで鞘を落としたら一貫の終わりだ……。

セネカは逸る気持ちを抑えて指先に神経を集中した。

「ふん。いいとも。約束してやる。俺にも情ってもんがあるんだ。

さあ！　いいから、さっさとこっちに来るんだ！」

兵士は得意満面にそう言い放った。

セネカは鞘を剣の柄を握るように持ち変えると、強く握り締めていた。
アリオンがゆっくりと歩み始める。

今だ　！

セネカは体をしならせ、弾みをつけた。

兵士が異変に気付いたが、もう遅い。

セネカは腕に勢いをつけ、手にした鞘を兵士の顔めがけて思い切り打った。

ばちんという音と共に、鞘は兵士の見事に両目を直撃した。

獣のような咆哮が辺りに響き渡り、それと同時にセネカの体がふわりと浮いた。

兵士が掴んでいたセネカの手首を離したのだ。

セネカは腰から地面に落下したが、藪草が衝撃を和らげた。

「この　クソガキ　が　！！」

目をやられ、視界のきかないまま兵士が短剣を抜き、放ち喚き散らしながら無茶苦茶に振り回した。

セネカは手で頭を覆い、その場につつ伏した。

短剣が唸りをあげて頭上の空を切るのを感じた。

あんなのが突き刺さったら一溜まりもない　。

セネカは怖気と息をかみ殺し、更に藪草に這いつくばるように身を沈めた。

突然　。

ぐさりという鈍い音と共に兵士の喚き声が途絶えた。

恐る恐る目を開けると、そこには苦悶の表情を浮かべた兵士が立ち尽くしていた。

その腹部には　　剣が深々と突き刺さっている。

アリオンが拾い上げた自分の剣を投げたのだ。

口から大量の血を滴らせながら、兵士の体がぐらりと大きく傾いだ。

手にしていた短剣が手から離れ、ぼとりと地面に落ちた。

そしてその手は体に刺さった剣を抜き取るうとしていたが、虚しく空を掻くだけだった。

兵士の踏ん張っていた両足がわなわなと震え、更に前方に傾いだ。

こっちに倒れてくる　！
セネカに緊張が走った。

早くこの場から逃げないと　！

しかし、腕も足も麻痺したようにびくりとも動かない。

セネカが目を瞑りつむ小さな悲鳴を上げた時、目の前に風が通り過ぎ、温かな腕がセネカを包んだ。

アリオンが傍らかたわに駆け寄り、セネカを抱き上げてその場から数歩分後方に離れさせたのだ。

兵士は最期の抵抗を見せるかのように体を左右に揺り動かしたが、遂にゆつくりと弧を描き、吸い込まれるように後方へと倒れた。

間髪入れずアリオンは兵士の傍らに駆け寄り、腹から剣を引き抜いた。同時にどくどくと血潮が噴出する。

アリオンは剣の刃先を倒れている兵士の首筋に当てて一気に振り上げた。

とどめをさされ、兵士は絶命した。

セネカはへたり込んだ格好のまま呆けていた。

周りの風景がぼうつと霞み、それあとめまぐるしく回転を始めた。意識が遠のく寸前に、セネカはアリオンに引き起こされた。

「セネカ！　セネカ！」

体を揺すぶられ、一旦失いかけた意識がはつきりしてきた。

「ごめん！　ごめんよ　僕が間違ってた。君を一人で行かせるんじゃないかった。すまない　セネカ」

アリオンが心から詫びた。

先ほどの鬼畜のような顔つきは、どこかに消え失せている。怒りに燃えた紺青の瞳も元通りだ。

セネカはぼんやりとアリオンから倒れた兵士の骸むくろに目を移した。

もう少して、自分もあなっていた。

停止していたセネカの思考が急速に動き出した。

そして、まるで暖かな囲炉裏端からいきなり真冬の戸外に飛び出

したかのように、セネカは激しく震え出した。

「大丈夫だよ。もう」

アリオンが言いかけた時、セネカはまるで幼子が母親に抱きつく
それのようにアリオンの体にしがみついた。

震えはなかなかおさまらなかった。芯から怯えきっていた。

「おっかなかった……」

セネカは一言そう言つと、浅い呼吸に喘ぎながら尚も体を激しく
震わせた。

アリオンは黙ってセネカを抱きとめていた。

「5」（後書き）

アクセスありがとうございます。

ちよつとドキドキの展開を目指しました。

当初予定していたよりもバイオレンスに走ってしまったかな…。

今回は第七章『海を目指して』です。

いよいよ2人は旅に出ます。

コウミ

2011.3.23 本文改訂

アリオンとセネカは山道を下っていた。

斜面は急な下り坂だったので、二人は歩調を合わせ慎重に進んでいた。

やがて、眼下には小さな一軒家をのぞむことができた。

土壁造りのその家の周りには、川魚の干物を吊るした縄が張り巡らせてあるのが見える。

家の窓からは湯気が立ち上り、慎ましく温かな生活の香りが感じ取れた。

「あの家だ。間違いない」

アリオンがその小さな一軒家を指差した

「……。夢の　黒の獅子王ってヤツのお告げで言ってた家かい？」
うそぶくようなセネカの問いにアリオンはうなずきで答えた。

セネカはいかにも気に入らないといった様子で小さく鼻を鳴らした。

アリオンとセネカは海を目指して、南へと向かう旅の途中だった。
オリンポス兵の追跡から逃れて、もう二日目になる。

追っ手から逃れた二人は、一旦林の中に身を潜め新手の兵士が追尾して来ないのを見定めたのち、陽が落ちるまでの間ひたすら歩き続けた。

次の追っ手が必ず来ないとも限らない。馬を駆られでもしたら、それこそたちまち追いつかれる。そうならないためにも出来るだけ距離を稼いでおく必要がある、というのがアリオンの考えだった。

命からがらの目にあつたセネカはしばらくは放心状態で自力で動くことすら出来なかったが、アリオンに励まされ、支えられながら健気に歩みを進めた。

ようやく高台まで逃げのびた頃、セネカは遂に疲労困憊のため倒

れこんでしまった。

その場で一夜を明かした翌日の朝のこと。アリオンはセネカにこう言った。

「このまま南に下って海に向かう。ピレウスの浜辺に行くつもりだ。君も一緒に行こう」

聞けば、夢にまたあの獅子の顔をした男が現れ、そう告げたというのだ。

「なんで おいらがそんなワケの分かんないヤツの言う通りにしなくちゃいけないんだよ!?」

セネカはアリオンが話を締めくくるなり、憤りを露わにして大声を張りあげた。

「冗談じゃない! それに、なんでお前と 胸くそ悪いテイターなんかと一緒にどこぞに行かなくちゃならないんだよ! 人がへいおんぶじに暮らしてたところにいきなり現れがって いい加減にしろ! バカッ!」

セネカの剣幕は相当なものだった。

困り果てたアリオンはひたすら謝るしかない。

「ごめんよ。君を巻き込んでしまって……その……そんなつもりじゃ なかつたんだ」

セネカには分かっていた。

アリオンは自分の意思である村外れの家にやって来たわけではない。

傷を負い意識を失っているところを黒の獅子王によって運ばれたのだ。だから勿論、アリオンの言葉に他意はない。

それに本当ならアリオン一人で村を出ていく手筈になっていたところ、のこのこ飛び込んで行ったのは自分の方だ。

セネカは自分の愚行を呪い齒噛みした。
しかも。

ゴタゴタに巻き込まれたものの、アリオンは命を救ってくれた。

目の前にいる少年は、言わば命の恩人である。本来なら手厚くお

礼をすべきところだ……。

「おい！ その剣！ その剣はいつたいたいどうしたんだよ！」

セネカは矛先をアリオオンが手にしている剣に向けた。

「うちに転がり込んできた時にはそんな剣、持つちやいなかったはずだ。どっかに隠してたつてののか！？ それとも……あッ！！」

今やセネカの顔は怒りと興奮のあまり上気していた。

「さては最初っからおいらを出し抜こうとしたんだな！？ このペテン師！！」

「違う！」

アリオオンは血相を変えて叫んだ。

「落ち着いて聞いてくれ。僕は」

「これが落ち着いて聞いていられるかッ！ この極悪非道野郎！血も涙もないテイターの言うことなんて誰が信用できるかよ！！」

セネカは声がかれるほどの大声を響かせた。

これだけ言ってしまうとセネカは荒げた息を整えるため、しばらく押し黙らなければならなかった。

アリオオンは と、見ると落胆したように目を伏せうつむいている。

セネカの胸がずきんと痛んだ。

少し言いすぎた。

セネカは後悔したものの、詫びの文句が喉元に引っかかり口にすることが出来ない。

しばらくのあいだ、二人の周りに重く気まずい空気が流れた。

やがてアリオオンが口を開いた。

「あの時 君と、ミダイという人が出て行ってから」

アリオオンは訥々とした口調で話し始めた。

同じくうつむいていたセネカは面をおもてあげた。

「1」（後書き）

アクセスありがとうございます。
今回は分割の関係で少し短めです。
セネカ、そこまで言う…^^；

コウミ

「2」

あれから　アリオンはミダイに言われたことを忠実に守り、村外れの家から一步も外に出なかった。

出入口や窓際にも近寄ることなく、家の中でジツと身潜めていた。「でも、少し退屈になってしまったから壕の中に入ったり……してたんだ」

アリオンは、バツが悪そうに苦笑した。

そうやって家の中をうろろしながら時間の経つのを辛抱強く待っていたアリオンは寝台に腰かけ、これからの事について思いをめぐらせていたという。

背中を丸め、片肘で頬杖をつき俯いていたアリオンは、ふと面を上げた。

すると、そこに人が立っていた。

アリオンは仰天した。

人の気配など、全く感じなかった。

それなのに、目の前に人がいる！

その人物は　。

「はあ？　黒の獅子王！？　居眠りして夢でも見てたんじゃないのか！？」

セネカはあからさまに疑念の表情を露にした。

アリオンの目の前立っていたのは黒の獅子王だったというのだ。

「夢じゃなく、本当に本物の黒の獅子王だったんだ」アリオンの眼差しは真剣そのものだった。

黒の獅子王は、今すぐ村を出ていくようアリオンに告げたという。村を出たらそのまま西へ向かい、次の指示のあと南へ下るように

南のピレウスの浜辺へ向かうように　と。

「それから獅子王は僕に、この　剣と路金を託した」

アリオンは携えている剣と、腰紐に結わえてある小さな包みを指

示した。

「……」

セネカは固唾かたずを呑んで聞き入っていた。

アリオンは続けた。

「黒の獅子王は　この家の前にはオリンポスの兵たちがいるから、裏口から逃れるように　そう言って、家から出て行ったんだ」

アリオンはそう締めくくると、神妙な面持ちでセネカを見つめた。

セネカの頭の中は混乱のため、ぐるぐると渦を巻いていた。

しかし、どうしても引つ掛かることがある。

セネカは、入り乱れた思考の中からその疑問を引つ張り出した。

「ちょ　ちょっと待てよ！　家の真ん前に兵士たちがいるってのに、その獅子王ってヤツは堂々と表の出入口から行っちまったって
いうのか？」

「そうなんだ」

アリオンが間髪入れずに口を開いた。

「僕が止める間もなく、獅子王は出て行ってしまった。そして

それと入れ違いに　まったく入れ違いに君が家の中に入って来た」

「な……ッ！」

セネカは一瞬、言葉を失った。

「バ、バカ言っつてんじゃねえや！　おいらが家に戻った時、そんな獅子のツラした妙ちくりんなヤツなんて出会いもしなかったし、見もしなかったぞ！」

セネカは憤慨したように叫んだ。

しかしアリオンは動じることなく言葉を次いだ。

「出会うとか、そういうことじゃない。獅子王が出て行った次の瞬間に君が入って来たんだ。だから僕は　僕は、まるで君が獅子王の体をすり抜けてきたのかと　思ったほどだ」

だからあの時　。

セネカはようやく合点がいった。

あの時　セネカが家に入っていった時、アリオンは啞然とした表情をしていた。

そして、こう聞いたのだ。

『今　君、誰かとぶつからなかったかい？』

「……………」

セネカはしばらくの間黙りこくっていた。

なんて強引で滅茶苦茶なつじつま合わせだろう。こんな話、信じられるものか！

ふつつつと腸が煮えるようだった。

しかし、アリオスが平然と嘘の話をでっちあげる性質の持ち主とは思えないというのも確かだった。

それに。

だからといって目の前の現実が変わるものでもない。

セネカは沸き起こる気持ちの昂りを抑えられず、すっくと立ち上がると身を翻し、その場から駆け出した。

「あ　待って！　セネカ！」

たちまちアリオンに腕を掴まれた。

「はなせ！　はなせよ！　おいらに触るな！　おいらは村に帰るんだから！！」

セネカは振りほどこうとするが、アリオンは腕を離さなかった。

「一人で行動するのは危険だ。それに、ここがどこだか分かってるのかい？」

「……………」

そこで初めてセネカは辺りを見渡した。

二人は木立に囲まれた草むらの中にいた。

ここは　高台に位置しているのだろうか。

朝露を含んだ空気がひやりとしている。

「わかんねえよ。いつたいどこだよ」

セネカはジタバタするのを止め、憮然として言った。

アリオンはセネカがおとなしくなるのを見届けてから、やっと手を離れた。そして木立を外れ、山の裾を望む崖の淵までセネカを導いた。

眼下には荒野が広がっていた。

白く乾いた土地のところどころに小さな木立や草原が点在している。

遙かに向こうに見えるのは見知らぬ平原だ。

山あいの村はどこにも見えない。

「夕陽の落ちるの方向に向かって逃げてきたから。村へ帰るのなら反対方向に進めばいい……でも……」

アリオンは説明した。

聞いていたセネカは口を真一文字に結んでいた。

「村に 帰りたいかい？ セネカ」

「……そんなこと！ 決まってる。だろ」

答えるセネカの声には力が無かった。

アリオンはセネカを村へ送って行くことを申し出た。

「ただし、頃あいを見計らってだよ。追っ手と出くわすのは出来るだけ避けたいから」

「……」

セネカはため息をもらし、虚ろに考えた。

村に戻る途中に万が一、オリンポスの兵士に見つかったりしたら

おそらく命はないだろう。

それに。

あんな騒ぎを起こした村に、果たして戻れるのだろうか？

セネカは兵士に火を放たれた家の事が気になった。

あの火勢だと村はずれの家は焼け落ちているに違いない。銅鑼が打ち鳴らされて 当然、村中大騒ぎだ。

それに、家の周りに兵士がばたばたと倒れている様を見たら村人

たちは何と思うだろう。

お尋ね者の手引きをして村を逃げ出したという噂がたっていたとしたら。

村八分。

村で孤立することになったら生きていけない、とレダから聞かされていた。

事の次第を知っているミダイはどうなるのだろう？ 咎められはしないだろうか。

ふと、セネカは自分の首元に手をやった。

麻の組み紐はほどけることなく、しっかりと結び目を作っていた。セネカは小さく安堵の息をついた。

レダは、どう思っているだろうか？ 裏切られたと落胆しているだろうか。事実、自分はレダに嘘をついたのだし。

このまま村へ帰り、許しを乞うてレダとミダイが迎え入れてくれたとして、もしもレダたちが村八分にあたりしたら？

考えをめぐらせていたセネカは思わず身震いをした。

自分だけならまだしも、レダやミダイや、サミュエにまで迷惑がかかるなんて！ そんなこと、あってはならないことだ。絶対に

！

セネカの胃袋がどうにかなりそうなくらい、しくしくと痛み出した。

もう考えるのも嫌だった。泣きたい気持ちだった。

そして、もうあの村には自分の居場所は無い。そう確信するしかなかった。

さんざん考えた末、セネカは、結局アリオンの言う通り行動するしか道はないという結論を出した。

しかし、だからといって腹の虫がおさまったわけではなかった。

レダたちとは一緒に暮らし始めるはずだった。それがすべて潰えたのだ。

それどころか、目の前にいる縁もゆかりもない少年と共に、追っ手から逃れなければならぬお尋ね者の立場になってしまった。

「……分かったよ」

セネカが低く呟くように言った。

「ついて行きやいいんだろ　ついて行きやあ。でもな！　この落とし前はいつか必ずつけてもらうからな！」

アリオンの顔に安堵の表情が広がった。

「よかった」

「ふん」

セネカは鼻を鳴らすとそっぽを向いたが、取りあえずこの場がおさまって内心は少し安心したのも確かだった。

「でも　落とし前は　どうしよう。どうすればいい？」

アリオンが真顔でたずねた。

「知るかよ！　ンなもん自分の頭で考えな！」

アリオンとセネカの二人は、小さな一軒家を訪ねた。

黒の獅子王がアリオンの夢で宿を求めるようにと告げた家だ。

「すみません。旅の者ですが……。ひと晩、泊めてくれませんか？」
アリオンが家の外、槌で藁の束を叩いている白髪の老人にたずねた。

老人が振り返り、アリオンとセネカの姿を認めると怪訝けげんそうに眉をひそめた。

白髪で、たくわえた口髭も真っ白なその老人は、小柄な体格ではあったが、畑仕事で鍛えあげられたのであろう四肢からは、たくましさとしなやかさが感じられた。

顔には深く皺が刻まれ、年輪の深さと老熟さが見て取れたが、その眼光は射抜くように鋭かった。

老人はいぶかしげな眼差しで順々に二人を　舐めるように見比べた。

セネカは老人の視線に耐えきれず、思わずアリオンの後ろに身を

隠した。

「納屋の隅でいいんです。一晚だけ。お願いできませんか？」

アリオンがもう一度たずねた。

「ほおう　子どもらだけで旅とは。難儀なことだ」

老人は頑固そうな口調で言った。

「納屋は、ほれ　そっちにある。だが、客人をお泊めするには、ちいと不都合かもしれん。なんせ馬が一头おるからの。それでも良ければだが？」

老人は顎で納屋を指し示すと再び藁を叩きはじめた。

「馬が？」

アリオンとセネカはお互い顔を見合わせた。

「僕たちは構いません。じゃ、いいんですね？」

「……」

老人は無言で了承を示した。

アリオンは丁寧に礼を言うつと際に立つセネカを促した。

「馬と一緒にかあ」

納屋の入口までやって来ると、老人の方をちらりとかえりみながらセネカが小言でばやいた。

いかにも頑固そうな先ほどの老人は、どこかルイザと同類の匂いがした。

「文句言わない。屋根があるところで寝られるんだから　それだけでもありがたいと思わなきゃ」

アリオンも小言で返した。

「そりゃあ、そうだけどさ」

老人の言う通り、納屋には一頭の濃い栗毛の馬が繋がれていた。馬は忙しなく身をよじらせては、手綱をふりほどこうとしている。見るからに気性が荒そうな馬だ。

「野生馬……かな？」

アリオンが、背負った荷物をおろしながら言った。

「どうだっていいよ。もう」

セネカは納屋の隅に詰まれた藁の山に身を投げた。

一日歩きづめだったので、くたくたに疲れていた。とにかく足を伸ばして休みたかった。

しばらく馬を眺めていたアリオンが、近くにあった桶を手にして再び外に出ようと戸口に向かった。

「……？」

セネカが驚いて身を起こした。

「さっきのおじいさんに、この馬の手入れをしていいかどうか聞いてくる。せつかく泊めてもらえるんだから、何か出来ることをしないと」

「こんな荒くれ馬の世話なんて出来るのかよ」

セネカの言葉に、かすかに微笑んで応じるとアリオンは行ってしまった。

後に残されたセネカは、蹄で乱暴に地面を蹴りつける荒くれた馬をしばらく眺めていた。

が、すぐに思い返し寝転がって体をさっと起こした。

自分に何か出来ることがあるとしたら、これぐらいしかない。

セネカは山積みになってくる藁を選び分け、一束掴み取り上げた。

「おい。お前。ここで何してる」

セネカが縄を一巻こしらえた頃、一人の少年が納屋にやって来てあからさまな怪訝な顔で言った。

少年は先ほどの老人と同じくらい日に焼けた肌をしており、畑で作業をしていたらしく手足は土にまみれていた。

体つきはひよろりと細長く、年齢はセネカと同一年くらいだろうか。

ややエラの張った顎の形は老人とよく似ており、顔つきは普段は愛嬌たつぷりなのであるうが、少年は見たこともない来訪者を前にして目を三角にして憤然としていた。

「ああ……ええーと……ちょっと、藁を貸して貰ってるけど」

「さてはお前、コソ泥だな？ 馬を盗む気なんだろ！？」

セネカにものを言う機会を与えず、少年は苛立とした声でまくしたてた。

「コソ泥なんかじゃない！ ただ」

「コソ泥じゃなくてもよそ者だ！ さつさと出てけ！」

少年はセネカににじり寄って更に眉を吊り上げた。

よそ者には違いないが、泥棒と間違われたうえ、この言われようにはセネカも腹が立たった。

「なんだよ！ こっちはためえのじいちゃんから許しをもらってるんだ！ こんなとトコ誰が好き好んで無断で入り込むか！ 文句があんならためえのじいちゃんに言えよッ！」

セネカの剣幕に少年は少したじろいだようだったが、それ負けじと言い返してきた。

「お前みたいな浮浪者に誰が納屋に入っていないなんて言うもんか！ ハッターもいい加減にしろ！」

「なんだと！」

「僕たちは浮浪者じゃない」

いつの間にかアリオンが戸口まで来ていた。

少年はギョツとなって振り返った。

アリオンは手にたっぷり水を満たした桶を持ち、少年の隣まで来た。

不意を突かれた少年は言葉を失った。

アリオンは少年を説き伏せるような口調で続けた。

「それに、君のおじいさんからはちゃんと許しをもらっている。今は ほら、川から水も汲んできたところだ」

少年はアリオンの穏やかな物言いにすっかり面食らってしまったようだった。

アリオンは藁を束ねて手際よくまとめると、桶の中の水に浸した。少年は喉からようやく言葉を継いだ。

「な なにするつもりだよ」

「この馬の手入れをしようと思って。ああ、おじいさんにはちゃんと言ってあるよ」

アリオンのこの返答に少年は素早く反応した。

「はん！ 手入れたって？ やれるもんなら、やってみたらいいぜ！ こいつはこないだまで山の中駆け回ってた野生馬だ。おとなしく体に触らせるわけがねえや！」

少年は嘲るようにアリオンを見返した。

「あんちゃんだて散々てこずってたんだ。どうせ後ろ足で蹴られるのがオチ」

少年が言葉に詰まった。

アリオンは藁を束ねたたわしで平然と馬をの胴体を「ごしごし」擦りつけ始めた。

馬は というと、一たび嘶しななきを上げたものの、おとなしくされるがままでいる。

それどころか長い尾をぱたぱたとはためかせ、いかにも気分が良

さそつな様子だった。

少年は驚きなあまりあんぐりと口を開き、その目はたちまち真ん丸になった。

その一部始終を見ていたセネカもすっかり感心していた。

アリオンは慣れた手つきで馬の体を拭き上げると、なだめながら馬の額を撫でた。

「君はこの馬には、乗れるのかい？」

アリオンがたずねると少年は度肝を抜かれたような顔をした。

「ば　ばか言っつてんじゃねえや！　あんちゃんだつて振り落とされるくらいじゃじゃ馬なんだぜ！　そんなのに乗れるわけ……ないよ……」

セネカは少年が、一瞬恨めしそうに目を伏せたのを見逃さなかった。

アリオンも同じ事を覚つたようだった。

「教えてあげるよ」

アリオンは再び、驚きの表情を浮かべる少年に微笑みかけた。

「ええと君、名前は？」

「……レンヤ」

「じゃあ、レンヤ。この馬を外に出してもいいかな？　あと、馬を駆けさせる拓けた場所があればいいんだけど」

レンヤはすっかりアリオンに調子を合わせられていた。

夕刻、アリオンとセネカは納家の片隅にいた。

一軒家の住人からは温かな粥が振る舞われたので、お腹が満たされた二人は自然と饒舌じょうせつになっていた。

「獅子王は、僕たちがこの家の人たちの手助けになることが出来るから、だから夢でこの家に行くように導いたんだ。きつと」

アリオンは確信したような口調だった。

「ふうん。まあ　おいらは別段、役に立つことはなかったけどなあ」

「おじいさんはセネカの作った縄をすごく喜んでいたじゃないか」
セネカが混ぜっ返すようにばやくのをアリオンが笑みをたたえながらたしなめた。

事実、老人はセネカの縛なった縄をととても喜び、有難く受け取ってくれたのだ。

「そう　かな」

セネカはアリオンの言葉が妙に嬉しく心に響いたので、耳の後ろがむずかゆいフリをした。

「それよりかさあ。馬に乗れるなんてすごいじゃんか。馬を飼ってたのかい？」

セネカが急いで話題を変えた。

「……うん。ヒポグリモスっていう大きな馬を　。伯父の馬だけど……」

アリオンは、しばらくためらいをみせていたが、低く静かに言った。視線を落とし、物憂げにも見える。

「……乗馬は伯父に習ったんだ」

「へえ！　おじいさんに？」

セネカは驚きと羨望の入り混じった声を上げた。

「じゃあさ、もしかして　剣術もそのおじいさんに習ったのかい？」

問いが自然と口をついて出てきた。アリオンがどこであんな剣さばきを覚えたのか、セネカは興味津津だったのだ。

アリオンはまた更に気が沈んだ様子で小さく顎を引いた。

「へええ！　すごいんだな。そのおじいさんってサ」

「……」

アリオンの表情がまた更に硬くなった。

セネカはアリオンがなぜそんな顔をするのかよく分からなかった。

「あーあ。おいらにも剣術を習いたいなあ」

セネカがわざと陽気に言つと、途端にアリオンの表情が険しくなった。

「君は、何のために剣術を覚えたいの？」

アリオンの鋭い口調にセネカはどきりとした。

その目はセネカを見据えてはいなかったが、明らかに怒りと嫌悪の色が表れていた。

「そりゃあ……自分の身をまもるためさ。決まってるだろ。あーでも、まだいいや。おいらは剣も持ってないし」

セネカは思わず口ごもった。

なぜアリオンを怒らせてしまったのか、全く分からなかった。

しかし、セネカはアリオンが、その伯父のことについて触れたがっていないことははっきりと感じ取っていた。

夕闇が納家の隅に寝そべっている二人の姿を覆い隠そうとしていた。

やがてセネカの問いかけが沈黙を破った。

「あのさ」

「……？」

「海に行くって、言ったよな？」

セネカにアリオンのうなずきを感じ取れた。

「海に行つてさ　それからどうするんだよ？　どっかアテでもあるのかい？」

「うん……。父に、会つ……」

「へええ。おとつっあんに？　じゃ、旅に出る前は　おとつっあんとは別々に暮らして……。あ。おじさんと一緒だったんだっけ」

「……」

「じゃあさ、おとつっあんに会えたら一緒に　暮らすよつになるのかい？」

「……そうなるのかもしれない……。けど……」

「けど？」

「けど　僕はオリンポスに行く。いずれは行くことになる　だろつ」

夕闇に紛れる寸前でもアリオンの真っ直ぐな眼差しは確認できた。

セネカはピンときた。

オリンポスには、レスファイーナがいるにちがいない。

セネカはまた、胸がぎゅっと締め付けられるような、何ともいえない奇妙な感情が沸き上がった。

「オリンポスかあ……おいらも行きたいなあ……」

セネカは無意識に呟いていた。

「オリンポスのどつかに、ねえちゃんがいるかもしれないんだ」

セネカは想いに耽り、何かを思い起こすように言った。

「え！？ 君、お姉さんがいたの？」

アリオスが驚いたように振り向いた。

「なんだよ。いちや悪いのかよ」

「いや……そういうわけでは……。でも、オリンポスに？」

「生き別れになったのさ。でも……本当にそこにいるのかどうか分からない」

セネカはふつと寂しげな吐息を漏らして寝返りを打った。

アリオスは、またしばらく黙っていたが、身を起こしておもむろに切り出した。

「セネカ。聞いてくれ」

「？」

「僕は父と会った後、君を無事にオリンポスに送り届ける。そして君のお姉さんを捜す手伝いをする」

「な、何だよ？ 急に」

「約束する。だから、そうさせてくれないか？ お願いだ」

アリオスは熱心に訴えた。

「ふうん。それで落とし前つけるつもりなんだな？」

セネカは勘ぐるように言った。

それでも断る理由がどこにも見当たらないので、セネカはアリオスのこの申し出を受け入れることにした。

「ありがとう」

セネカがアリオスの旅に前向きに付き合うことを告げるとアリオ

ンは安心したようだった。

「今日はもう休もう。明日は、夜明けには出発するから」

翌朝、朝陽がまだ山際から顔を出さない頃合い、アリオンとセネ力は身支度を整えると老人とレンヤにいとまを告げた。

「そうだ。あにイたち、名前はなんていうんだい？ まだ聞いてなかったぜ？」

名残惜しげな様子だったレンヤは、思い出したように二人に名をたずねた。

「あーこつちはミダイ。で、おいらはサミュエ」

セネ力はアリオンに代わり、さらりと応じた。

自分たちの名を偽ることはあらかじめ申し合わせてあった。

嘘をつくのは気が引けたが、親切にしてもらった一軒家の住人に迷惑が掛らないようにしたかったのだ。

素性が知れる事を危ぶむよりも、そちらの方が大切だった。

「馬は、怖がらなければ大丈夫。乗り手が怖がると敏感に感じ取ってしまうからね。それから」

アリオンがレンヤに教示の言葉を残すと、レンヤは嬉しそうにニツと白い歯を見せて頷いた。

「お前さんがた、どちらへ向かわれるかな？」老人がたずねた。

今度はアリオンが、北を指す事を老人に伝えた。

「左様か。気を付けて行きなされ」

「ありがとうございます。おじいさん」

二人は老人とレンヤに見送られ、出発した。

南へ　ピレウスに向かって。

「あのじいさんたち、おいらたちのこと信用してくれたみたいだし

」

前途が拓けてきたことで気持ちに余裕ができたのか、セネ力は上機嫌な様子で歩みを進めていた。

「もしもオリンポスの奴らがあの家に何か言いに来てても大丈夫だよな。きつと」

「セネカ」

「……?」

峠を登りきったところで、アリオオンが立ち止った。セネカが振り返ると、アリオオンは片手を差し出していた。

「これからしばらくの間旅が続くことになるけど」

「な、なんだよ。急に……あらたまっちゃってさ」

アリオオンがあまりにも真面目に見つめるので、セネカは少しどきりとした。

「これから仲間同士、仲良くやっていこう」

「……。仲間、か……。ふうん」

正面切ってこのように言われ、セネカは内心とても照れくさかったが、そんな事はおくびにも出さなかった。

セネカはアリオオンにつられておずおずと片手を差し出した。アリオオンはセネカの手をしっかりと握りしめると、にっこりと微笑みながらこう言った。

「嬉しいよ。まるで、弟ができたみたいで。僕には旅の仲間が一人いたんだけど……。途中ではぐれてしまって」

「ちよつと待った。弟だつて?」

途端にセネカが眉根を寄せた。

「え? う、うん」

「……。弟だつて?」

「……? うん」

「……」

「なに? セネカ、どうかしたのかい?」

「あのさあ……」

「?????」

「あー」

セネカは苛々した様子で腕組みをし何かを言おうとしたが、ふと

思いとどまり口をつぐんだ。

「ま。いつか」

セネカは呆れたように一つ溜め息をついた後、あっけらかんとした様子で言った。

「カタいこと言いつこなしだ　それじゃ、しばらくはお前さんのこと、『あにイ』って呼んでやるよ。これからよろしくなっ！　あにイ」

遠出から戻った装いの若者が小さな一軒家の敷居を跨いだ。

若者は狩りで仕留めた獲物を売りに出ていたらしく、町で仕入れてきた乾物や衣類などの荷物をいくつか携えていた。

「あんちゃん！　お帰り！」

レンヤが荷をほどいて間もない若者に絡みついた。

「お爺、お尋ね者がうるついでるらしい」

若者ははしゃぐ弟をなだめひきはがすと、顔を曇らせながら声を落とした。

若者は町で見聞きしてきたことを告げた。

「輩はオリンポスで謀反を働いて、山村に潜んでいたそうだ。屈強な兵士を何人も斬り捨てるほどの凄腕と聞いた。それで、村の子どもを一人拐さらって逃げていると」

「すげエ！　そいつ、どんな奴なんだ？」

若者は弟を制すると続けた。

「それが、まだ子どもらしいんだ。十五、六歳くらいの少年で
若者の説明を聞くと、老人とレンヤは互いに顔を見合わせた。」

「それで、その者たちの名は？」

「たしか……アリオン、と。拐われた子どもは……セネカ、と言っていたと思っただが」

「なあんだ！　だつたら人違いだ」

レンヤは安心したように緊張の走った表情を和らげた。

「それより、あんちゃん！　こつちに来てくれよ！　早く早く！」

「待てよ。レンヤ。じきに役人が訪ねて来るかもしれないんだ
おい。何だよ？ 馬がどうしたっていうんだ？」

弟にぐいぐいと腕を引かれ、帰宅したての若者は一服する間もな
く早々に納家へと連れて行かれた。

「あの連中 謀反を犯した北方の宮へ、わざわざ取って返すとい
うのも妙なことよ」

老人は、笑みを含んだしたり顔でひとりごちた。

老人はアリオンとセネカが偽名を使ったことも、北へ向かうと告
げたのが嘘だということも見抜いていた。

テイターンを毛嫌いする老人は、たとえ宿の世話をした二人連れ
に何らかの疑いがかけたとしても、やがて訪ねて来るであろうオ
リンポスの兵士に協力するつもりは毛頭なかった。

「3」（後書き）

アクセスありがとうございます。

アリオンとセネカ、ちよつとだけ寄り道しました。

章のはじめでは、手がつけられないほど荒れまくったセネカですが、何とか鎮まってくれて一安心です。

これから二人の本格的な旅が始まるのですから、仲良くしてもらわないとね。

今回は第八章『もののけの棲家』です。

コウミ

2011・3・24 本文改訂

「1」（前書き）

この回には残酷な描写が含まれています。
苦手な方はお気を付け下さい。

コウミ

「1」

目の前には薄暗く荒涼とした平地が広がっていた。

そこに二つの影がぼんやりと浮かび上がり、対峙しているのが見える。

セネカは目を凝らした。

二つの影は　あの若い獅子の姿と、蛇だ。

しかし、普通の蛇ではない。

大蛇　。

恐ろしいほど大きな蛇だ。

若い獅子を丸呑みしそうなほどの巨大な蛇が、お互いを睨み合っている。

大蛇は大木のような胴体をうねらせ、とぐるを巻きながら鎌首をもたげていた。

今にも飛びかかりそうな勢いだ。

まさに一触即発　。

辺りの空気もぴりぴりと張りつめていた。

その時　。

跳ねるように大蛇が動いた。

若い獅子めがけて頭ごと突っ込んでいった。

この突然の荒々しい攻撃をひらりとかわした若い獅子は、即座に力を貯めこみ、身を踊らせた。

若い獅子が跳んだ。

驚くべき跳躍力だ。

若い獅子は大蛇の頭部に取り付くと、鋭い牙で反撃をはかった。

その牙が大蛇の脳天を貫こうとする　その瞬間。

大蛇は狂ったように猛然と頭を振り立て、若い獅子を振り落としかかった。

隙を突かれ、若い獅子が体勢を崩した。

身体ごと放り出され地面に叩きつけられたところへ大蛇の攻撃が降りかかった。

若い獅子は体制を立て直す間もない。

たちまち大蛇の獠猛な刃やいばに捕えられた。

真つ赤な血しぶきが勢いよく舞い上がった。

大蛇の両顎に体を挟まれた若い獅子は必死に抗ったが、大蛇の牙は容赦なくその肉体を噛み砕いた。

辺りは静まりかえっていた。

そこは物音ひとつしない静寂の世界だった。

大蛇が若い獅子の肉体を切り裂き、骨を噛み砕く生々しい音も耳に届かない。

しかし、それは今にも耳障りな音が耳朵を打つような身の気もよただつ光景だった。

力尽き、ぐったりした若い獅子の体が大蛇に呑み込まれていく。

「セネカ！」

いきなり肩を揺ぶられ、セネカはハツと目を覚ました。

「大丈夫？ ひどくうなされていたけど」

アリオンが心配そうに顔を覗きこんできた。

セネカは低い木の根本 枝と枝に結わえつけただけの簡単な天

幕の中で仰向けに寝転がっていた。

朝陽が山々の稜線をくつきりと照らし始める頃合いだ。

「夢……？ うなされてた……？」

セネカは視線をうつつかせ、うわ言のようにつぶやいた。

鼓動が激しく胸を打ち鳴らし、額にはびっしり汗をかいている。

「怖い夢でも見たのかい？」

アリオンの問いに、セネカはすぐには答えられなかった。

セネカは先ほどの生々しい惨劇を夢だと認識するまでに、しばらく時間を要した。

夢。夢だとしたら。

「蛇はッ!？」

セネカは怯えを振り払い、飛び起きると咳き込むように叫んだ。

「え?」

アリオンは不意を突かれ、きよとんとなった。

「あ ええと、蛇は、出なかつたかい!？」

言いながらセネカはアリオンの背後を窺い見た。

「?」

「蛇に……蛇に噛まれなかつたかい?」

「???」

アリオンはますます訳が分からないといった様子で首を傾げた。

「昨日、捕まえた蛇のこと?」

アリオンは昨日の獲物の蛇の事をたずねていた。

しかしその蛇は輪切りにされ火で焙られて、すでに二人の胃の中におさまっていた。

「違う。……何でもない」

セネカはぶいと横を向いたものの、心の中は激しくざわついたらまだだった。

セネカが獅子の出てくる夢を見たのはこれで三度目だった。

一度目は、親獅子が傷ついた若い獅子をくわえて、かつて住んでいた村の納家を訪れた夢。

二度目は、何者かから逃げるセネカに随行するように一緒に駆ける若い獅子の夢。

そして三度目は。

一度目の夢も二度目の夢もこれから起こる事を暗示していた。だとしたら三度目の夢は……。

セネカは背筋に冷水を浴びせかけられたように身震いした。

なぜ自分がこのような夢を見るようになったのかは分からなかった。

が、今まで見てきた獅子の夢がこれからの事をあらかじめ知らせる夢であった以上、今度もそうである可能性が濃い。

セネカは質問を変えた。

「あ……あのさ。大きな蛇……っているものなのかな。あにイは見たことあるかい？」

「　　？　大きな蛇？　このくらいの？」

アリオンは手近な中木の幹を指差した。

セネカはぶるぶると思い切りかぶりを振った。

「違う。もつと大きなヤツ　ええと……例えば、おいらたちの頭を丸ごと呑み込んでしまうくらいの……」

アリオンの顔が、さっと曇った。

「見たことは……ある」

「えっ!？」

セネカは驚きのあまり目を大きく見開いた。

「でも、そんな大きな蛇は特別な場所にしか……いない。この辺りにはいないはずだ。心配いらないよ」

アリオンはそう言うと、火を熾す支度を始めた。

セネカはアリオンのそっけない態度よりも、そんなにも大きな蛇が実在することの方に気を取られていた。

もしも夢で予見した通りの方が起こったら　。

セネカの顔から血の気がすうつと引いていった。

朝の簡単な食事を済ませる時も、旅支度を整えている間もセネカは気が気ではなく、始終辺りに目を配った。

「あ。あのさ。黒の　獅子王……とかいうヤツは？　ほら。夢のお告げかなんかで『あっちに行くな』とか『こっちに行け』とか、言ってこないのかい？」

支度を終え、アリオンが出発を促した時、セネカは藁にもすがる思いでたずねた。

「そうだ！　町で聞いた『もののけの棲家』のウワサ　あれ、ヤ

「はいよな？ あすこは絶対に通るな、とか。言ってこなかったかい？」

「黒の獅子王は……あの一軒家に行くよう言ったきりだ。それから、夢には出て来ない……」

アリオンはぼんやりと想いに耽^{ふけ}っているようだったが、やがて思い返したようにセネカに笑いかけた。

「すごい蛇が夢に出てきたみたいだね？ もしもそんなのに出くわしたら今夜のご馳走にしよう」

「ご馳走にされるのは誰だと思っただよ　！」

セネカは大声で怒鳴りたい気持ちだった。

そして、今まで自分が見た夢のことを全てアリオンに打ち明けようとさえ思った。

しかし、自分の寿命が切れる時を聞かされて愉快的気持ちになる者はいないだろう。

それに　。

アリオンがそんな危ない目に遇うくらいなのだから、行動を共にしている自分の身も危ういはずだ。

セネカはますます気持ちが悪くなった。

焦点が合わないまま荷物をたたみ、最後に弓矢をくりつけ、腰紐に小刀を差し込んだ。

「セネカ。腕の具合はどう？」

「腕？　んーまあまあ……かな」

アリオンの問いにセネカは気もそぞろで答えた。

「2」

二人は一軒家を出発した後、町に到着し、そこで旅に必要な品々を調達していた。

剣と共に黒の獅子王がアリオンの託した路金のおかげで、大抵の物は手に入れることが出来た。

小さくて簡単に設えることのできる天幕、衣服の替え、革袋。

当面の間お腹の足しになる焼きしめた麵麩をいくつかと干し肉。

そしてアリオンはセネカに小刀を買い与えてくれた。

「護身用だよ」

アリオンの念を押すとセネカはこの贈り物に、文字どおり目を輝かせて喜んだ。

しかし。

セネカは前方を歩くアリオンの背を恨めしげに見やった。

化け物から身を守るため、本当に小刀を振るうことになるかもしれない。まさかそんな突飛な事態がこんなに間近に迫っているとは思ってもみなかった。

かといって、大蛇に喰われてしまうであろう運命の者を置いて、さっさと逃げてしまうのも 今となつては出来そうにない。

アリオンとセネカは微妙で不確かな関係ではあったが、今や持ちつ持たれつの芯の通つた絆があつた。

どうしていいのか考えあぐねながら、暗く沈んだ気持ちのまま歩みを進めていたセネカはいきなりアリオンの背中にぶつかった。

うつ向いていたため、前方のアリオンが立ち止まったのに気付かなかつたのだ。

セネカはアリオンの背負つた荷物に嫌というほど鼻を打ちつけた。

「な、なんだよ！ 急に」

「シッ！ あれをござらんよ、セネカ」

アリオンは声を潜めて前方の茂みを指し示した。

「イボイノシシだ」

見事な体格のイボイノシシが、一心に茂みの根本の地面を掘り返していた。

食料になりそうな木の根を求めているのだろうか？

「セネカ！ 早く弓を！」

「へ？」

「こんな大物、滅多に出会えない。仕留めよう！」

「えええッ！」

セネカの弓の腕前は大したことはなかった。何しろ一度も的に当たったことがないのだから。

しかし、アリオンはそれを知らない。

セネカはアリオンに弓のことに触れられる度に、腕の具合が悪いから などと言って、矢を射ることを避けていた。だからアリオンは、セネカの弓の腕前はある程度のもものと思い込んでいた。

セネカは焦り慌てた。

「イ、イボイノシシはこっちに向かって突進して来るよ！ おいらの矢じゃ仕留めきれないって！」

「手傷を負わせるだけでいい。あとは僕がやるから」
そう言つと、アリオンは布にくるんである剣を紐解き始めた。

「早く！ 気付かれてしまうよ！」

今更、この弓矢はついでに持つて来ただけ と白状するには余りにも間抜けすぎる。それは意地っ張りなセネカの性格が許さなかった。しかし、この状況ではもう言い逃がれができない。

その時、ひゅんと風が唸り、獣のけたたましい鳴き声が辺りに響いた。

先ほどのイボイノシシが、狂つたように暴れ出している。その脇腹には深々と矢を突き立てられていた。

イボイノシシは、その刺さった矢から逃れるかのように滅茶苦茶に身をよじつてもがいた。しかし、矢は急所を射抜いているためか、

動きは次第に緩慢になっていった。

矢が更にイボイノシシの体に打ち込まれた。

放たれた方を見やると、そこには馬に跨った猛々しい体躯の男の姿があつた。

イボイノシシがまた一際甲高い鳴き声をあげ、遂に前足がぐくりと折れた。

男は続けざまにダメ押し of 矢を命中させると、ひらりと馬から飛び下りた。

「悪いな。コイツは俺の獲物にさせてもらう。ま、早い者勝ちつてやつだ」

男は仕留めたばかりの獲物の脇に来ると、アリオンとセネカにこれみよがしな態度で言い放ち、高々と笑い声をあげた。

屈強そうな男は脇に見事な柄の短剣を差していた。

無精ひげを生やしたその敵つい顔つきは自信に満ちていて、人を見下すように顎を突き出している。

男は啞然としているアリオンとセネカを尻目に、軽々と獲物を担ぎあげ馬の背中にくくりつけた。

「おい。その若いの！」

男は振り返り、アリオンを指差した。

「お前さんも参戦組か？ ポセイドン軍はじきにピレウスに寄せて来る。うかうかしていると、おいてきぼりを食うぞ！」

セネカはアリオンが驚きの表情を浮かべ、息を呑むのを見た。

「ん？ なんだ？ 志願ではないのか では、その剣はただの飾りか？」

男はすっと目を細めると、品定めをするような眼差しをアリオンに向けた。

「俺はてつきりポセイドン軍の加勢に行く者だと思っていたがふむ。よおく見るとまだ若いな。子どもか？」

言いながら男はずかずかと二人にじり寄って来た。

「まあ。要は腕っぷしの良さだがな！ なにせ因縁のアテナ軍との

戦だ。海王軍も戦力になる者を欲しておる。勝つために。な！」

男は遂に二人の目の前まで来た。

セネカは男が、今度は自分の方をなめるように見ているのに気がついた。

男があからさまなやけ顔をセネカに向けた。

そのいやらしい肩頬のうすら笑いを見て、セネカは嫌な気持ちが出た。

「ほおお。いいのを連れてるな。どうだ？ 俺に譲らんか？」

男がアリオンに向かって声を落とした。

「タダで、とは言わん。こいつでどうだ？」

男はそう言うのと腰に提げた包みを示した。

一瞬、何のことだか分からなかったが、すぐに意味を察した。セネカの頬が硬く引きつった。

一旦失った言葉を取り戻す寸前。アリオンがセネカをかばうように前に進み出た。

「この子は僕の大切な仲間です。それに」

アリオンは剣を包んでいた布を取り去り、男と真正面に向き合っていた。

セネカはアリオンを仰ぎ見た。男を真っ直ぐに見据えたアリオンのその顔つきには明らかに怒りがこもっていた。

「この子は『物』じゃない」

アリオンの口調は冷ややかではあったが、強く確固としていた。

セネカはどきりとした。

それまでの昂った^{たかぶ}気持ちだが、音をたてて溶けていくようだった。

自分をかばってくれて嬉しいという思いと同時に、アリオンに対して、また心が波立つような奇妙な感情が沸き上がった。

「これはこれは！ 剣士様の逆鱗に触れたようだ。なあに冗談！」

冗談！」

男はまた高々と笑い声をあげ、おどけながら何か言いたげに口元を歪めた。

「ダフネだ。 “もののけの棲家” の噂は知っているか？ 若いの！」

男は名を名乗ると、今度は陽気にたずねた。

アリオンはダフネから視線を外すさずに小さく顎を引いた。それは町で聞いた噂だった。

海へ向かうには『もののけ』が棲まうという森を通るのが一番近道だという。

「近道も近道。最短の道だ。森を抜ければ、海は目の前なのだからな！」

ダフネは息巻いた。

「山越えの道を行けば、最低でもたつぷり二日はかかる。ちんたら行つてられるかよ！」

そう言つてくるりと踵を返した。

「一旗挙げるために向いて来たのだ。戦に間に合わんのは面白くない。何せ戦果をあげればたんまり褒美を貰えるというしな」

ダフネが馬に跨り、手綱を引いた。

「俺は森に行く。なあに！ 噂のもののけが出たら、腕試しに丁度いいわい！」

傲慢で自信に満ちた顔で二人を見下ろした。

「じゃあな！ 若いの！ せいぜいその”仲間”を大事にすることだ！」

ダフネは馬を駆り、行つてしまった。

セネカは不作法な男の背中に思いつ切りしかめつつらをしてみせた。

「行こう」

アリオンがセネカを促した。

しばらくの間二人は無言で歩いた。

セネカは先ほどのアリオンの反応が気になっていた。
あのガッツな大男ダフネが言っていたポセイドン軍。
アテナ軍。

そして、戦。
その事を聞いたアリオンは明らかに動揺していた。

しかし、その前にセネカはアリオンに言わなければならないことがあった。

「さつきは……ありがとう」

セネカは小声で遠慮がちに言った。

「えっ！？ あ ああ。いいんだ」

アリオンは考え事をしていたらしく、セネカの言葉に驚き、弾かれたように面を上げた。

「あーあのさ。さつきのデカブツ。戦がどうとか……って言ったけど。戦が始まるのかな？ ポセイドン軍とか、アテナ軍とかが……」

セネカは慎重に言葉を選んだ。

もしかしたら 剣術を教えてほしいとせがんだ時のように気を悪くするかもしれない。なんとなくそんな予感がした。

しかし、アリオンはうなずきを返すと淡々と喋り始めた。

「ポセイドン軍”の王はポセイドン。海界をとりしきっている。

そして”アテナ軍”は オリンポスに城を構える天界の王ゼウスの娘、アテナが率いる軍だ」

「娘！？ 女の大将！？」

セネカは仰天した。

「そう。女だ」アリオンがまたうなずいた。

「すっげエな。勇ましい！ 女なのに！」

セネカが感嘆の声を上げたが、アリオンの険しい顔つきを見て口

をつぐんだ。

「ポセイドンとゼウスは兄弟でもともと仲が良くなかったんだ
それで戦に……」

アリオンがそのあと黙り込んでしまったので、セネ力はすっかり
焦じゅわったくなってしまうた。

「じゃあさ。要するに 兄弟ゲンカ？ そういうことかい？」

「……」

「そんなのに巻き込まれたんじゃ、たままないぜ」

セネ力が苦々しく言い放った。

アリオンが何かを言いたげにセネ力を振り向いたが、考え直した
ようにまた、前を向き黙々と歩みを進めた。

続きが聞きたくてたまらなかつたセネ力は半ばばやくように言っ
た。

「しっかし、娘を大将にしちまうなんてさ。よっぽどモウロクして
んだ、そのゼウスっておっさん。一番年寄りなんだろうな」

「違う」

アリオンが反応した。

「ゼウスは一番下の弟だ。ポセイドンは二番目」

「へえ！ じゃあまだ兄弟がいるんだ！」

セネ力が指を折りながら声をあげた。

アリオンはセネ力の言葉に明らかに心をかき乱されたようだった。
押し黙ったまま、みるみる歩調を速めたのでセネ力は小走りにつ
いて行かなければならなかつた。

また、やっちゃったかな。

セネ力は、何がそんなにアリオンを気を悪くさせたのかさっぱり
分からなかつたが、これ以上ものを言うのは利口ではないと思い、
口を閉ざした。

やがて二人は岐路に立った。

セネ力はアリオンをちらりと見やった。

山へと続く小路と、なだらかに森へと下る道との狭間で、アリオンは思いを巡らすようにジッと立ち尽くしていた。

山路を選ぶと、海へはたつぷり二日はかかるという。

一方、『もののけの棲家』との噂のある森へ進路を取れば、目的地である海は目の前。

セネカは改めて、前方に広がる鬱そうと木々が混みあう森を眺めた。

不気味な静けさの感じられるその森は、昏間であるにも関わらず内部は闇を湛え、暗い影を落としているように見えた。

「セネカ」

ややあつて、アリオンが口を開いた。

アリオンは最短の道を選ぶに違いないとセネカは思っていた。

勿論、セネカはこれには反対だった。

今朝の夢に現れた大蛇は生めかしく、今も尚セネカの脳裏に焼き付いていた。

セネカの答えは決まっていた。

なにも好き好んでそんな忌まわしいと噂の場所を通ることはない。

「僕は……」

そらきた！

セネカは大きく息を吸い込んだ。

理にかなった反論の言葉も用意してある。

セネカにはアリオンを言いくるめる自信があった。

「……今まで黙っていて、ごめん」

「は？」

アリオンの口から予想外の言葉が飛び出したので、セネカは出鼻をくじかれ目をぱちくりさせた。

「つい言いそびれてしまったけど、僕は」

アリオンは意を決したような真剣な眼差しでセネカに向き合った。

「僕は、ポセイドンの子なんだ」

「へ？」

「ポセイドンは、僕の父さんなんだ」

アリオンが言い直した。セネカは目をぱちぱちと何度も瞬かせた。ポセイドンが？

ポセイドンは、海界の王で。その海界の王ポセイドンは、オリンポスにいるのゼウスの娘アテナが率いる軍と戦を始めようとして。

セネカの頭の中に先ほどのアリオンの言葉がぐるぐる駆け巡った。……と、いうことは？

「え？ ええええッ！！」

セネカは驚きのあまりそれまでじっくり考えていた算段が一気に消し飛んでしまった。

「ポセイドンの倅！？ じゃ、おとっつあんに会いに行くっていうのは……」

「そう　ポセイドンに会いに行くんだ。海界の王である父さんにアリオンがセネカの言葉の続きを引き継いだ。

「戦が今にも始まるかもしれない。戦が始まってしまったら、すんなりと父さんに会えるかどうか分からない。だから僕は　出来るだけ早くピレウスの浜に　海に着きたい」

セネカはすっかり混乱していた。事があまりにも想定外すぎた。

しかし、それでもアリオンの言わんとすることはしっかりと理解できた。

「でも……でも、あんな見るからに不気味なトコ、本気で通るつもりかよ？　正気の沙汰じゃないよ！」

セネカはありったけの感情をこめて反論した。とにかく、あの森を通ることは何としても避けたかった。

「あーあのさ……」

声を落とし、ためらいながらセネカは呻くように言った。

「笑うなよな。おいら……怖いんだよ。だって、もののけなんて気味が悪いじゃないか」

アリオンは、じつとセネカを見返していた。

「大丈夫だよ。もののけなんて、きつと、ただの噂だよ」

しかし、アリオンの言葉をはね返すようにセネカは最後の意地を見せた。

「ゆ、夢を見たんだ！ おいらの見る夢は 結構……当たるんだ

本当に本当だ！ その夢で、あ、あにイが、デツかい蛇にむしやむしや食べられちまったんだよ！ だから」

セネカは一気に言ってしまったものの、穏やかなアリオンの瞳を見て、自分が余りにも舌足らずだったことを思い知らされた。

「ありがとう。心配してくれたんだね」

アリオンの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「行こう」

セネカの背中をポンと叩き、アリオンはさつさと歩き出した。

「……もお！ 何があっても、おいら知らないからなッ！」

悪態をつきながら、アリオンの後について行くしかなかった。セネカの完敗だった。

「4」

森の中は茨や藪草が生い茂り、二人の行く手を阻んだ。

アリオンは剣を取り出して、目の前に立ちはだかる草の波をなぎ払いながら進んだ。

セネカは、アリオンの後について歩調を合わせながら歩かなければならなかった。

「まったくもお！ この森には道ってモンはないのかよ！」

セネカは背の高いシバ草や絡みつく蔓草つるくさと悪戦苦闘あくせんくつうしていた。

最初のうちは手を貸し、励ましていたアリオンも、あまりの草の勢いに心身ともに余裕がなくなつたのか、やがて振り向くこともなく 声すらかけなくなつた。

「もう……おいら。ヤだ」

最初は威勢のよかつたセネカの悪態も、次第に弱々しくなり、しまいには半ベソになつた。

「あッ！」

一際太い蔓つるがセネカの足に巻き付き、セネカの歩みを鈍らせた。

蔓を無理矢理引き剥がし遅れを取り戻そうとすると、今度は地を這う草の茎に足をすくわれ転倒した。

しかし、アリオンはセネカの遅れに気がつかない。

二人の距離がみるみる開いていく。

「ま、待って ！」

腕は草の葉が擦れたおかげですり傷だらけ、膝小僧はひどくすりむけ、おまけに泥まみれという散々な有りさまだ。

その上おいてきぼりを食ったら セネカは草の茎を振りほどくと大慌てで立ち上がり駆け出した。

が、いきなり何かにぶつかった。

セネカは前方に立ち止まっているアリオンに気がつかなかつたのだ。

アリオンの背負った荷物に、再び顔面をいやというほど打ちつけたセネカは苛々と毒づいた。

「シッ！」

アリオンがセネカを制した。

「人がいる」

「!?」

セネカはアリオンの視線を辿り、前方を見た。

そこは草の波が途切れ、拓けた場所になっていた。

節くれた木の根本に小さな天幕が張っており、その脇に座り込んでいる人の姿が見えた。

その姿を認めたセネカは震撼のあまり、目を見開き身を硬くした。

「で 出た! ま、魔物……ば、ばばば 化けモノ!!」

天幕の脇に佇む人の姿は 一人の老女だった。

長くざんばらな髪の毛を束ねることなく淫らみたらになびかせ、だらりとしたみすばらしい衣服を身に纏まとっている。

顔色が異様に悪いその老女は、背中を丸めて座り込み、草の茎を縋すって何か籠かごのような物を編あんでいるように見えた。

老女がこちらを振り向いた。

その顔を見るなりセネカは息を飲んだ。

蛇 !

切長の目と顔に小さく切り込みを入れたような鼻腔。

老女の顔は爬虫類を思わせるような不気味な様相を呈しており、

暗緑色の醜い吹き出物が顔全体を覆っていた。

「失礼だよ。セネカ」

セネカの不躚ぶしつけな発言を小声でたしなめた。

「だって! あにイ」

「お子たちは」

二人のそんなやり取りに意を介することなく、老女は口を開いた。

「見たところ二人きりのようだが……他にお連れはおらんのかね?」
しわ枯れてはいたが、妙によく通る声だった。

「化けモノが喋った！」

セネカがさらに驚きと怯えを隠すことなく声を震わせた。

アリオンは、今度は肘でセネカを小突くと顎を深く引いて老女の問いに応えた。

老女は感心したように何度も頷いた。

「ほうほう　では、この森に棲むというもののけの噂は、知っておいでかね？」

アリオンはまた深くうなずいた。

「ほおお　それを知っておって……なんと剛毅なこと」

老女はひくひくと奇妙に顔を歪めた。どうやら笑っているらしい。アリオンは少しの間、何かを考えていたが、おもむろに老女の前に進み出た。

近づいたら喰われる　！

セネカは身構えたが　アリオンは何のためらいもなく老女の目の前まで進み出た。セネカが止める間もない。

「お婆さんは……どうしてこんな森に一人でいるんですか？　他に誰か……家族は　いないんですか？」

アリオンの問いに老女は一瞬、意表を突かれたような表情を見せたが、やがておどけたように肩をそびやかした。

「わしは一人じゃよ　倅は何人かおつたが、皆、とうの昔にこの老婆を捨てて行きおつた。二度と戻って来ん」

「……」

掃き捨てるような物言いに、アリオンはすぐには二の句がつけなかつた。

アリオンは手にした剣を静かに鞘におさめた。

「そうだったんですか。お婆さん　一人で寂しかったでしょう？　それに怖くありませんか？　この森は魔物が棲むと噂が　」

アリオンが言い終わらぬうちに、老女は体を痙攣させるように震わせながら、けたたましく笑いはじめた。

老女のこの反応にはアリオンも、一部始終を見ていたセネカも半

ば唾然となった。

「すまぬ。すまぬ。お子が、この、ひなびた婆にあまりにも優しい言葉をかけてくれるので。」

老女はこみあげる笑いを抑え、あえぎながら息を次いだ。

「お子たちはどちらへ行かれるのかね？」

笑いがようやくおさまると、老女はアリオンにたずねた。

「海へ」

「ほおおう……海へとな　それはたいがいな旅じゃの。気をつけて行きなれ」

老女は、今度は感心したような口ぶりで言った。

セネカはその言い方が妙に勘に障った。

「いいことをお教えしようぞ」

老女が顔を軋ませるような含み笑いをしながら続けた。

「このまま真つ直ぐ進むと森を抜けられるが、左に行くと少しばかり近道になる」

「左？」

「そう。左　こちらの方向じゃ」

老女は枯れ枝のような手を差し出し、森の奥を指差した。

「優しいお子たちにこの婆が特別にお教えるのじゃ。さあ、行くがよい」

「ありがとう。お婆さん」アリオン丁寧に礼を言ったが、セネカは、今や老女を疑いの眼で睨みつけていた。

老女の言動にはどこか引つかかるものがある。

セネカはふと、老女が編んでいる草の籠の脇に置いてある小さな包みに目を留めた。

どこか見覚えのあるその包みが何なのかを思い出すと、セネカはアリオンの腕を思い切り引っ張った。

「何　？　セネカ？」

セネカが指差す物を確認すると、アリオンがあつと声をあげた。それはダフネが腰紐に結わえていたあの包みだった。

結わえていた飾り紐には見覚えがある。間違いない。

「よお！ 婆さん。おいらたちが来るのより前に、馬に乗ったでっかい男が通ってったよな？」

セネカの横柄な態度に、老女は少し気分を害したようだった。

「確かに　大分前に馬に乗った若い衆が通ったが……ああ。これかね？」

老女が小さな包みを取り上げた。

「先を急いでおるようだったので、お前さまたちと同様に近道を教えてあげたのじゃ。そうしたら　ほれ。気前よくこれを、な」

老女は澀みなく答え、にたりと笑みを浮かべた。

「あの若い衆も、今頃は海辺へ着いておるに違いない」

この一言は先を急ぐアリオンを急ぎ立てるには十分だった。

アリオンは再び、老女短くお礼を言うと、セネカを促し、その場を離れて出発した。

歩きながらセネカは後方を振り返ると、背中を丸めた老女がいつまでもこちらを見ているのが目に入った。

老女の不気味に光を宿す眼差しを見た時、セネカは無性に、言いようのない嫌悪感に襲われていた。

「4」（後書き）

アクセスありがとうございます。

第八章は書いていくうちにどんどん長くなってしまい、一章分を分割して二つの章としました。
次章が、その分かれ分です。

次回は第九章『剣と刃』です。

コウミ

2011.3.28 本文改訂

「1」(前書き)

この回には残酷な描写が含まれています。
苦手な方はお気を付け下さい。

コウミ

「おいら、あの婆さんはゼツタイに怪しいと思うー!」

セネカは確信を込めてアリオンに訴えた。

「見るからにひとクセもふたクセもありそうじゃなか。あにイもそう思っただろ?」

アリオンは曖昧に首を傾げて応じたが、歩調をゆるめることはなかった。

「とにかく、先に進んでみよう。何かあつたら引き返せばいいどのみち、さっきの草の勢いではあれ以上前に進むのは難しい。あの男　ダフネもこの同じ道を行っているはずだ」

「ヘン!　分かるもんか。そんなあの婆さんのハツタリかもだ」

セネカは引き返したくてたまらなかつたが、アリオンにその気持ちがない以上、同行するしかない。

口では文句たらたらだったものの、セネカは周囲に目を配りながら用心深く歩を進めていた。

先ほどの道のりとは違い地面に生えている蔓草や藪草が目に見えて少なくなっていたので、二人の道のりはすこぶるはかどつた。

しかし、行く手を阻む草の群れが少ないかわりに、陰樹の灌木や小高木が根こそぎ倒れているのがやたらと目についた。

しかも朽ちた木ではない。

セネカはとても嫌な感じがした。

それに、道のりが進むにつれて、ねっとりとした湿気を含んだ空気が肌にまとわりつくのも気になっていた。

目の前の景色が拓けた。

不意に、前方に行くアリオンが無言でセネカを静止させた。

アリオンは用心深く目前に横たわる灌木を跨ぐと、驚いたようにセネカの方を振り向いた。

「沼だ……」

「え！沼？」

セネカは驚いた。

一見、目の前に広がるのは澱んだ土色をした地べたに見えたからだ。

アリオンは窺うように沼の淵に足を浸したが、すぐに取って返した。

「近づかないで。沼の底は腐食土だ。足を取られる」

セネカは怒り浸透に達していた。

「やっぱりだ！あのババア、おいらたちをまんまと担ぎやがった！わざわざ行き止まりに案内するなんて　　あんの野郎！ただじゃおかない！」

口汚く老女を罵るセネカをよそに、アリオンは目を凝らして沼の向こう側を一心に見つめていた。

「あにイ戻ろう　こんな不気味なとこ、一分だって　　」

「シッ！セネカ、黙って！」

アリオンは素早く言った。その目は沼の方向から外すことない。

セネカはぎくりとして、アリオンの視線を辿った。

沼の中央のあたり　　だろうか。

手前の岸边と、あちらの対岸とのちょうど真ん中あたりの水面が盛り上がったように見えた。

しかも、それは近づいてくる。

見間違いではない。

水面はみるみる距離を縮め、更に高々と小山のように盛り上がっていった。

セネカは迫り来るとす黒い水の塊の中に、鈍く光りを放つ二つの何かを見た。

光る二つのものが大きな双眸ネツツハツであると気づいた時、セネカは恐怖のあまり体が硬くなった。

「セネカ！」

アリオンが叫んだ。

しかし、セネカは立ち尽くしたままで一步も動けなかった。

アリオンはセネカを引きずるようにして手近な茂みへ飛び込んだ。盛り上がった水面が割れ、泥を含んだ水が滝のように沼に落ちていった。

飛沫しぶきと共に水煙が立ちあがり、その中から二つのまなこの持ち主の姿が現れた。

「！！！」

間一髪。セネカが驚愕の叫び声をあげる寸前にアリオンの手がその口を塞いだ。

セネカは完全にパニック状態に陥っていた。

沼から現れたのは とてつもない大きさの蛇だった。

大蛇というよりも、蛇の怪物と表現した方がふさわしい。それほどまでに巨大な蛇だった。

「驚いた。あんな大蛇……僕は、見たことがない」

アリオンは信じられないといった様子で、低く唸るように囁いた。「静かに、セネカ。あいつに見つかったら最後だ。逃げられない……きつと」

セネカは半ば体を硬直させながらも、首筋をがくがくいわせて何度もうなずいた。

「もしも見つかったら、倒す。でも、出来るだけ水辺から離れないといけない。沼に引きずりこまれる恐れがあるから」

アリオンは素早く辺りに視線を走らせた。

「合図をしたら僕のあとについて走るんだ。いいね？」

セネカはアリオンに口を塞がれたまま何度もうなずいた。

アリオンはそつとセネカの口から手を離した。

蛇の怪物はたゆとうように水面を移動すると、あっという間にこ

ちら岸にたどり着いた。

その動きは、思った以上に速い。

草陰に身を寄せ、息を殺している二人に気付いた様子はなかったが、その距離はかなり近かった。

大きい！

アリオンは怪物のその大きさに圧倒され、思わず目が釘づけになった。

怪物は 胴体が、まるで大木がとぐるを巻いているようだし、巨大な鎌首は高々と宙にそびえていた。

飛び出す機会を図りかね、アリオンは臍ほそを噛んだ。

怪物をここまで近づけてしまったら出し抜くのは至難の技だ。死角に飛び込んで一気に駆け抜けるしかない。

しかし。

形勢が変わった。

怪物がぬめる巨体をうねらせて、沼の岸の縁を向こう側へとゆるやかに蛇行していく。

好機到来。アリオンは怪物から視線を外さずにセネカの肩に触れて合図した。

が。

セネカに応じる様子がない。

アリオンはセネカを見た。

セネカは足元の地面を一心に見つめていた。

アリオンがセネカの視線を辿ると、地面に短剣が落ちているのが目に入った。

この柄には見覚えがある。

アリオンがそれを思い起こす前に、別の落し物も目に飛び込んできた。

血と泥にまみれた人の手。そして同じく血だらけの足だ。

しかも、どう考えてもあり得ない横たわり方で。

その手は肘から先が無かった。
まるで、鋭い何かで切り裂かれたように、胴体からもぎ取れていた。

身じろぎもせず、それを見入っていたセネカの脳裏に、大蛇の鋭い刃の餌食となり、胴体を噛み砕かれ飲み込まれていく男　ダフネの姿が断片的によぎった。

途端に頭の中が真っ白になった。

セネカは大きく喘いだあと、悲鳴を上げた。

(しまった　！)

アリオンは息を呑み、怪物の方を見やった。

怪物はぐるりと首を巡らせてこちらを向き、双眸を不気味に光らせながら二人を見据えていた。

かつと開かれた口からは鋭い牙が覗き、口蓋の毒々しい赤が生々しく光っている。

怪物はたらたらと唾液を滴らせながら、体を大きく捻らせて方向転換を図っていた。明らかにこちらの存在に気づいている。もう一刻の猶予もない。

アリオンはセネカの肩を掴み取った。

「セネカ、立つて！」

アリオンの声は緊張のあまり上擦っていた。

しかし、再び混乱状態に陥ったセネカは頭を抱えて体を丸め、何事かを口走りながら震えているばかりだ。

怪物は今や鎌首をもたげ攻撃体制に入ろうとしている。

アリオンは即座に立ち上がり、剣を抜いた。

そして唇に指を押し当て、けたたましく口笛を吹き鳴らすと派手に草むらをかきわけて飛び出した。

「セネカ！　目をさませ！！」アリオンは大声で叫んだ。

セネカがハツとなり、面を上げた時にはアリオンは沼と反対方向に駆け出していた。

怪物がズルズルと耳障りな音をたててアリオンの後を追った。地を這いながら怪物が猛然と鎌首をもたげ、いきなりその頭がア
リオンに襲いかかった。

危ない！

「あにいイー！ うしろイーっ！！」

セネカがあらん限りの声で叫んだ。

その声に反応したアリオンは振り向きざまに剣を構えた。しかし初動は怪物の方が圧倒的に勝っていた。

アリオンの焦りと逸る気持ちが、自らの行動を忽せにしたのだ。

怪物の頭がアリオン目がけて落ちて行った。もの凄い速度だ。体制を整える間も無い。

アリオンはとっさに飛び退いたが、半拍遅かった。

怪物の舌先がまともにアリオンの肩口にぶつかった。

衝撃でアリオンは横つとびに吹き飛び、そのまま地面に叩きつけられた。

セネカは、アリオンの手から剣が離れるのを見た。

「2」(前書き)

この回には残酷な描写が含まれています。
苦手な方はお気を付け下さい。

コウミ

「2」

本能的に体が動いた。

頭で計算したわけではなかった　ただ無我夢中で腰に差した小刀の鞘を抜き払っていた。

セネ力は大声で喚き散らしながら小刀を振りかざし、怪物の尾を目掛けて突き立てた。

尾がびくと大きく跳ねた。

セネ力は力を込めて小刀を引き抜くと、二太刀目をも深々と突き刺した。

生温かいものが迸り、顔にふりかかった。

怪物の尾が大きく波打ち、セネ力の体が持ち上げられた。

セネ力は振り落とされまいと、体液でぬめった体に必死でしがみついた。

怪物が体を捻り、振り向いた。

毒々しい色をした眼をぎらぎらと光らせている。

凶悪な口元が再びかっと大きく開かれた。

くる　！

明らかに自分が標的にされた　そう覚ったセネ力は即座に突き刺した小刀を抜き取った。

そして怪物の尾から飛び降りると、一目散に駆け出した。

追いつかれたら　喰われる　！

セネ力は、今朝見た夢　若い獅子が大蛇に呑み込まれていくさまを　。

地べたに無惨に転がっていたダフネの腕と足のことを、思い出していた。

セネ力は森の中を死に物狂いで疾駆した。

心臓が激しく胸を打ち鳴らし、きりきりと痛んだ。

恐怖のあまり吐き気がした。

全身が総毛立ち、がんと耳鳴りがした。

セネカは今にも気が遠くなりそうだった。

息を切らし疾走するセネカの足が柔らかく湿った土に沈み込んだ

と思う間もなく、次の一步で勢いよく泥水の中に突っ込んだ。

セネカはいつの間にか沼に向かって走って走っていたのだ。

沼の底は腐食土。足を取られる。

アリオンの言葉が頭の中をかすめた。

セネカは水底を蹴って身を翻した。

しかし。

三歩も進まないうちに後ろから何か脇腹を鋭くかすめ、その衝撃でセネカは前のめりに転倒した。

沼の岸にほど近い地面は柔らかだったが、それでもセネカは勢い余って胸と腹部をしたたかに打ち、苦痛にうめいた。

頭上からしゅーしゅーという耳障りな音が降ってきた。

恐る恐る見上げると、怪物の鎌首が迫っていた。

助からない。喰われる。喰われちまう！

セネカは頭を抱え込み、固く目を閉じて身を縮めた。怯えと恐怖に打ちのめされ、動くことができない。がたがたと震えるだけだった。

せめて。

せめて丸呑みにしてくれたら、噛み碎かれるよりはまだマシかもしれない。

そんな儚い願いも虚しく、怪物の鋭い牙はセネカの体を貫き、骨と肉は無残にも喰いちぎられる……はずだった。

しかし怪物は、攻撃を仕掛けてこなかった。

頭上からはシャーッシャーッと荒々しい息を吐きちらすのが聞こえていた。

セネカは恐れに堪えかねてうつすらと目を開き頭上を振り仰いだ。怪物は狂ったように鎌首を振り回し、太い胴体は激しくのたうち

まわっていた。

後方をみると 尻尾の部分が大きく切り裂かれている。ざっくりと割れた肉の裂け目から血潮が勢いよく吹き出していた。明らかに何者かに斬られたのだ。

怪物は傷ついた尾を地面に打ち付け、苦痛で身悶えしながら怒り猛るように更に体をうねらせていた。

手負いの獣けだものは手がつけられないほど獰猛じゆうまうになる。

セネカは以前、ミダイから聞かされたことを思い出した。

こんなに間近にいては危険だ！ そう思った時。

「セネカ！ さがれ！」

鋭く力強い声が響いた。

セネカは弾かれたように身を起こし、転がるようにして後方に退いた。

セネカは走り寄るアリオンの姿を確認した。

アリオンは剣を構え、蛇の怪物と対峙した。

怪物が目の前の敵に対して繰り出す攻撃は凄まじいものだった。

アリオンはその攻撃ををかわすのみだ。反撃の手がかりがない。

怪物は頭部が地面に激突しようと全くお構いなしだった。

このままでは鋭い刃の餌食になるのも時間の問題のように思えた。

セネカは草陰に滑り込むと急いで荷をほどいた。

ダメで元々だった。

セネカは弓を取り上げ、しっかりと矢を弦につがえた。

あんなに大きいんだ。どこかに当たればいい。

セネカはすつくと立ち上がり、ろくに狙いを定めずに弦を引き絞り、矢を放った。

矢は真つ直ぐ飛び、見事 怪物の片方の目に命中した。

「うそ！ 当たった！？」

目を射抜かれた怪物は、体を痙攣させるように身悶えした。

射抜かれた目からはどす黒い血が噴出し、ぼたぼたと流れ落ちて

いた。

怪物は動きが明らかに鈍重になった。

そして、硬直させたかのように体の動きが一瞬停止したのをアリオンは見切った。

アリオンが跳躍した。

手には逆手に持ちかえた剣を構えている。

アリオンは怪物の頭部に取り付くと同時に剣をぶすりと真下に突き刺した。

血飛沫を勢いよく吹き上げながら、怪物は怒ったようにシュウシユウという唸りを上げた。

怪物は頭部を激しく上下に振りたて、取り付いたアリオンを引き離そうと抗いを見せたたものの、鏢つばまで深々と差し込んだ剣の縛いましめからは逃れることができなかった。

アリオンが満身の力を込めて剣を手前に引いた。

上顎を切り裂かれた怪物は、血を大量に進ほとほしらせてのけぞり、後方へ大きくうねった。

アリオンは怪物から飛び退いた。

怪物はそのまま、地面にどうと倒れこみしばらく体全体をひくひくと痙攣けいれんさせていたが、やがて静かになり、息絶えた。

ぞっとするような静けさが辺り一面に広がっていた。

セネカはしばらくの間、放心状態で立ち尽くし、今や屍となった怪物に目を奪われていた。

しかしすぐにハツとなり、辺りを見渡した。

アリオンの姿はすぐに確認できた。

こちらに向かって歩いてきている　　が、何か様子がおかしい。突然アリオンの体が前のめりに傾ぎ、手にしていた剣を地面に突き立て、がっくりと膝をついた。

セネカの顔色が変わった。

持っていた弓を放り出し、急いで飛び出すとセネカはアリオンの

かたわらまで近寄って、その場に屈みこんだ。

アリオンは乱れた呼吸を繰り返し、肩を上下させていた。体中、怪物の返り血と体液にまみれている。

いや、体だけではない。

アリオンの額から何かが流れ、耳元と顎を伝ってぽたぽたと地面に落ちた。

「！」

「セネカ……無事かい？」アリオンが喘ぎ喘ぎたずねた。

「なんともない」

セネカは頷きながら、アリオンのふらつく体を支えた。

「血がこんなに出てる……も、もしかして、噛まれた？」

無意識に声が震えた。

もしもあの蛇のバケモノが毒蛇だったら。

「大丈夫。噛まれていない。ああ、待ってくれセネカ。いいんだ

それは、君の大切なものじゃないか」

セネカは首元に結びつけてある更紗布の端でアリオンの頭部から流れ出ている血を拭った。

「いいから。ケガ人は黙ってるよ」

安心した反動でセネカは不機嫌な口調になった。

アリオンの傷は浅かった。しかし、体がひどく不安定に揺れている。

セネカがたずねると、アリオンは倒れていた木の幹にぶつかったのだと答えた。怪物の最初の攻撃を受けた時だ。

「セネカ。無事でよかった。ありがとう。僕は。危うくあいつに食べられるところだった。君が引き付けてくれたお陰で助かった

それに、弓も。さすがだ」

「な、なに言ってるんだよ」

セネカはたちまち頬を赤らめた。

あの弓は狙ったわけではなく、偶然に当たったのだ。誉められることではない。

「お お互いさまさ。もお、そんな水くさいこと言っちなよな。それより……あッ！」セネカは驚きの声を上げた。

セネカの指差す方向に、先ほどのあの老女が立っていた。うち倒れている巨大な怪物をまのあたりにして驚愕しているのだろうか。

老女は仰臥きようがしている怪物と二人とを交互に見比べ、奇妙に歪んだ表情を浮かべて立ち尽くしていた。

アリオンがゆっくりと立ち上がった。

セネカはその体を支え、肩を貸した。

老女は喉の奥から奇妙な唸り声を発し、怪物に駆け寄った。

そしてその亡骸にすがりつくど、おいおいと泣き始めた。

まるで愛児を愛撫するようにその頬を怪物の体に擦り付け、激しく身悶えしながら怪物の死を悼んでいるように見えた。

老女のこの行動にアリオンとセネ力はすっかり度肝を抜かれ、呆然となった。

先に我に返ったのはセネ力だった。

老女は二人を欺き、怪物のいる沼に故意に誘った。何のためになのかも察しがつく。

「や やいやいやいッ！」

セネ力は憤怒のあまり声を荒げていた。

「よくもおいらたちをだましたな！ このケダモノのエジキにしてあとでやって来て金目の物をせしめるコンタンだったんだろ！ 分かってんだからな！」

悲しみの涙に暮れていた老女はこみあげる嗚咽をこらえ、二人に視線を移した。

その憎悪を露にした醜悪な顔つきにセネ力は怯んだ。

老女はセネ力には目もくれず、アリオンを鋭く睨みつけた。

アリオンは、屠った怪物の返り血を浴び、手にした剣も血にまみれ、醜悪な様相だったが半ば呆けたように老女を見つめ返していた。

「おぬし……ティターンか そうか」

ようやく老女が口を開いた。

「ならばこの婆が迂濶。子どもだと思って油断したのが間違いであった 魔物がかなわぬのも道理というものじゃ……」

「か 勝手なこと抜かすなッ！」

セネ力また激怒した。

老女の悪びれもしないこの言い草に腹が立つた。

セネカはアリオンに同意を求めようと振り向いたが、アリオンは動揺した様子で老女をじつと見つめるだけだった。

「行こう！ あにィ。こんなヤツと真面目に話をするなんてバカげてる」

セネカはアリオンの手を引っ張り、その場を離れようとした。

「待ちなされ」

老女の低く落ち着いた声が響いた。

セネカは立ち止まる気持ちはさらさら無かったが、アリオンが歩みを止めたため、危うくつんのめって転びかけた。

「おまえさま……恐ろしい相が出ていなさる。死相じゃ……己をも他人をも滅ぼす凶相じゃ」

老女は確信を込めた口調で滔々と続けた。

「往く先々には屍があるろぞ。人間の血と、ティターンの血にまみれ……やがて己の身も滅ぼさん……宿命。まさに宿命ぞ」

老女の予言めいた言葉にアリオンは愕然としていた。

「てやんでえ！ ヘンなごたく並べやがって！ もうそのテは食うもんか！」

セネカは老女が言っている言葉の意味がおぞましい内容であることとは分かった。

実際、顔が青ざめ、おのきの表情を浮かべるアリオンを見て、それ以上に良からぬことを言っているに違いないとも感じていた。

「行こ！ 行こ、あにィ。こんなとこ一秒だつていられるか！」

セネカは放り投げた弓矢と荷物を脇に抱えると、立ち尽くすアリオンを急ぎ立てた。

「……」

アリオンは老女に何か言いたげな様子を見せたが、セネカは構うことなく、その腕を取りぐいぐい引っ張り、沼地をあとにした。

アリオンとセネカは休む間も惜しんで歩き続け、やがて森を抜け

た。

日はとつぷりと暮れ、辺りも夕闇に覆われていたので、目の前に広がるという海を見ることが出来なかった。

しかし、潮の香りがこれっぽっちもしないので、セネカは海はまだ先なのだとすることは感じ取っていた。

海への一番の近道というのは吹聴された大袈裟な噂話だったようだが、ただし、もののけの棲家という噂は本当ではあったが……。

二人は小川のほとりで火を熾し、一夜を過ごした。

野獸を呼び寄せるといけないので、血に染まったアリオンの衣服は森の中に打ち棄て、町で調達したものに替えていた。

二人とも小川の清浄な水で血や泥を洗い流し、こざっぱりとした格好で火を囲み、麵麩をかじった。

アリオンは老女と別れてからこつち、ずっと黙りこんだままでひと言も喋ろうとしなかった。

セネカが何か話かけても、「うん」とか「ああ」以外はぴたりと口を閉ざしていた。

沈黙に耐えきれずセネカが口を開いた。

「まだあの婆さんの寝言を気にしてるのかい？」

セネカはふさぎこむアリオンが気になっていた。

「時間のムダだってば」

セネカがきつぱりと断言した。

「それに、あんなとんでもないバケモノ飼ってるなんてまともな人間のことじゃない。気が触れてるよ」

「あのお婆さんは」

アリオンはようやく口を開いた。

「寂しかったんだろうか。何人もいた息子が出ていったきり帰って来ないって、言っていた……」

「何言ってるんだよ！ 同情するんなら、あの大男の方じゃないかだって……食われちまったんだぜ？」

セネカは血まみれの腕を思い出し、ぎゅっと目を閉じ、思い切りかぶりを振って先ほどの惨状を頭から追い払った。

しばらくして、二人はお互い草の上に寝そべった。

「セネカの夢はすぐくあてになるんだね。次からは真面目に聞くよ

僕は、たかが夢だと思っていただけだ」

アリオンが仰向けで空を見ながら言った。

「まあ……ね」

セネカはアリオンに背中を向けたまま曖昧な返事を返した。

あてになるどころではない……。

セネカの見る夢はこれから起こることをほとんど予見していた。恐ろしい蛇の怪物が現れること。

アリオンと共に村から逃げ出すこと。

そして。

アリオンを納屋へ運び込んだ黒い獅子。

全部話すべきだろうか……打ち明けるべきだろうか……。

セネカは迷った。そして、疑問に思った。

でも、なんで獅子なんだろう……？

夢の中に出てくるアリオンは、なぜ人の姿ではなく獅子の姿をしているのか。セネカは不思議に思っていた。

そしてアリオンの命を救い、夢枕に立ったという黒の獅子王のことが頭に浮かんだ。

なぜ自分が見る夢にも黒い獅子が現れたのだろうか……？

思考がぐらりと揺らいだ。

セネカは疲れ果て、とても眠かった。意識は眠気に圧されて既に

混沌としていた。

そのあとアリオオンが、ダフネが連れていた馬を心配するようなことを言っていたような気がした。

しかし、セネカはあまりにも朦朧としていたため、おぼろ気に聞いたきり眠りこんでしまった。

意識が闇に閉ざされようとする間際、セネカはぼんやりと思った。

なんで処刑されかけたんだろう？　こんなに優しいヤツなのに……

翌朝早く、アリオオンとセネカは海を目指して出発した。

二人が峠道にさしかかった時、セネカは風に運ばれるほんのわずかな潮の香りを嗅ぎ取った。

セネカは後ろを振り返った。

アリオオンは　と見ると、セネカの遙か後方をのろのろと進んでいる。

「なにいつまでも腐ってんだよ！」

セネカが大声で喝を入れた。

「ほら！　あそこ！　あの高みまで行けば海が見えるはずだ！」

「海！　本当！？」

アリオオンは打たれたように面をあげ、速足でたちまちセネカに追いついた。

速足がやがて駆け足になった。

アリオオンはセネカの指し示す方に向かって駆け、セネカも駿足のアリオオンの後について走った。

セネカが立ち止まっているアリオオンに追いつくと　目の前にはまだ幾つもの峠が続いていたが、その向こうに広がる景色の中に青く輝く海を確認することができた。

アリオオンは遠くに見える海を不思議そうに、それでも感慨深気に見入っていた。

セネカは。

海を見つめるセネカの胸には、懐かしさと共に言いようのない哀しみが一斉に押し寄せていた。

セネカは遠い目で海を見つめ、そして遙かな想いを馳^はせていた。

「3」（後書き）

アクセスありがとうございます。

オリオンと大蛇との対決…。

『逃避行』終盤と同様に、ドキドキの展開を目指してみました。

さあ。オリオンとセネカ、第一の目的地である海に到着です。

今回は第十章『セナ』

このお話のタイトル『Sena』の理由が明らかになります。

コウミ

2011・3・28 本文改訂

セナ

「セナ！ セナ！！」

……誰かが呼んでる……だれ？

「もお、セナったらどこにいるの？ セナ！」

……なあんだ姉ちゃんか

「セナ！！ もうじき父さんが帰って来るんだよ！ 聞こえてるんなら」

……父ちゃん？ そうか！ やった！

波間から水しぶきとともに潮焼けした小さな顔が飛び出した。

セナはすぐさま息を継ぎ、再びざぶんと海に潜ると、まるで魚のような見事な泳ぎで浅瀬まで辿り着いた。

「また潜ってたの！？ もお 呆れた！」

全身びしょぬれで水面をかき分けながら陸にあがってくるセナの姿を見つけたシンシアは半ば安堵の表情を浮かべたあと、しかめっつらをしてみせた。

「いいじゃん！ ほら！ 大漁！」

そう言うと、セナはすっかり中身の詰まった牡蠣の殻を二つ、姉に押しつけるように手渡した。

セナは岩場の深みに潜っていたのだ。

「父ちゃんの船は？」

髪の毛から滴る雫を払い除けながらセナが息せき切ってたずねた。「まだまだよ。でも、もういつ着いてもおかしくない。あんたにも手

伝つてもらわなきゃならないんだから、急いで あ！」

セナはシンシアの言うことをみなまで聞かず、波打ち際を蹴った。
「セナ！」

「手伝いはするさ！ そんなこと、分かっている。それより早く父ちゃんを迎えに行かなきゃ！」

「セナ！ 風邪ひくといけないからちゃんと服を着替えてから分かったの！？ セナったら！」

姉の忠告など、どこ吹く風でセナは跳ねるように駆けて行った。

何日も時化しげが続いたあとの穏やかな海だった。

海辺の村の男たちは、待ってましたとばかりに早朝から漁船をくり出し、やがて陽が南の空に上がりきる頃には漁を終えた船がひしめきあうように浜辺に寄せていた。

「よお！ セネカ」

「やあ！ 今日はでつかいのが二つも採れたんだぜ！」

「すつげエ！ 場所教えるよ」

「さあねー。超穴場だらな。それよかさア」

浜辺で同じ年頃の子どもたちに囲まれたセナは、親しげに言葉を交しあった。

「セナ。おいで」

やがて追いついたシンシアがセナの襟首を掴み取り、引つ張った。
「じゃあなー！」

セナは友人たちに手を振ってその場を離れた。

「セナ。あの子たち今、あんたのことを『セネカ』って呼んでなかった？」

シンシアはややこわばった顔つきでセナの頭から布きれを被せると、ごしごしと頭と体を拭きつけた。

セナは「そらきた！」と言わんばかりに肩をすくめた。

「呼んでたさ。『セネカ』はおいらの愛称なんだ」

布きれを体に巻きつけながら、セナは当たり前のように、さらり

と言った。

「男名おとこなじゃないか それに、もう！ またそんな言葉遣い！ あんたは女の子なんだよ？ 男の子みたいな”ふるまい”はもうおやめって言ってるのに」

「だって性じやうに合あってるんだもん」

シンシアが嘆くのを物ともせず、セナは無邪気に受け流した。

「あ！ 父ちゃん！」

やがて二人姉妹の父親が、漁で捕えた獲物を大きな網ごと担ぎ揚げやって来た。

「今日の稼ぎだ。悪くない。トマスのところの若い衆がよくやってくれたからな」

父親のムラトスは網を広げると、これは干しものに、これは塩漬けにと、シンシアにあれこれ指示を与えた。

ムラトスは穏やかな鳶色の瞳をした青年のように若々しい父親だったが、やや影のある面持ちはどこか近寄りがたく、めつたにゆるむことのない引き結んだ口元は頑固そうな印象を与えた。

「ね。父ちゃん！ 次に漁に出る時には、絶対連れてつとくれよ？

約束だよ！」

せつせと獲物の選り分けをするシンシアの脇で、セナは魚籠いさごに小魚を押し込みながら、黙々と網に絡まる魚を外す父親に甘えるように話しかけた。

しかし、ムラトスはちらりと一瞥を投げただけでむっとり口を結び、言葉を返さなかった。

セナは先ほど見事な牡蠣を採ったことを嬉々として父親に語った。

「それでさ、もう少しでみつつ目がとれるとこだったんだ。いっちばん大きかった！ でもあんまり深かったから息が続かなくて

」

「一人でそんな深みに潜ったのか？」

おもむろにムラトスが面を上げた。

「え？ う……うん。ひとりで……」

「これからは一人では海に入るんじゃない」

ムラトスはいつになく厳しい口調だった。

セナは黙りこくった。

「貝を採るんだったら、これからは浜と岩場の水際だけにするんだ」

「……」

「波も潮の流れも気まぐれな時期になる。さらわれたらどうする。」

厄介事を起こすんじゃない」

「……うん。わかった。もう潜らない」

セナはうなだれ、しゅんとなって頷いた。

「父ちゃんはあんたが無茶をするから心配して言っただよ」

シンシアがそつとセナに耳打ちをした。

そうかもしれない。しかし……。

ムラトスは時折セナに、必要以上にきつく叱りつけることがあった。

その度重なる父親の態度にはセナも薄々気づいていた。

差別とまではいかないにしても、姉とは明らかに”あたり”が違う。これは物心つく頃からおぼろ気に抱いていた疑問だった。

セナは浜育ちの娘だった。

母親を早くに亡くし、父親と姉の三人家族で慎ましく暮らしていた。

根っからのおてんばであったが、更に輪をかけて男まさりでもあった。

女の子同士よりも、男の子に混じって遊ぶ方を好み、おとなしい磯遊びよりも素潜りや魚釣りを選んでは日の暮れるまで男の子たちと戯れていた。

姉のシンシアは、セナが男の子のように振る舞うのを快く思っていなかった。

しかし、セナはそれを承知で盛んに男言葉を使い、髪の毛を短く削ぎ、身なりも男の子を装った。

姉に対する当てつけではない。セナがこうすると何となく父の受けがよいことを心得ていたのだ。

これはセナが自ら学んだ“父親の気を引くコツ”だった。

男の子のように振る舞うこと。そして、亡き母のことを口にしないこと。

「あんたはね、セナ　母さんにとても似てるんだよ。だから父さんは、辛いんだ。母さんのことを思い出して」

セナは幾度となくシンシアに聞かされた。

姉のシンシアには母親の記憶があつたが、セナにはない。母親はセナが赤ん坊の時に亡くなっていったからだ。

セナは父親に一度だけ母が何故死んだのかをたずねたことがあつた。

ムラトスはぶっきらぼうにこう言った。

「サンゴノヒダチが悪かつたんだ」

セナは村の大人から　セナの母親ナタリはセナを産んですぐに亡くなった　ということを知ることがあつた。ナタリは体がたいそう弱く、病気が元で死んだとも聞かされたがそれ以上は誰も詳しく教えてくれなかった。

ムラトスは妻を失ってから後妻を迎えることなく男手で二人の娘を養つてきた。だから父親は母親のナタリを忘れられずとても愛していたのだということはセナにもわかる気がした。

実際ムラトスは娘たちを大切にし、慈しみをもって接していた。

が、セナに対しては、なぜか時々態度がきつくあたることがあつた。セナの歳が十を越える頃には、度々父親に相手にされなかつたり、あからさまに視線を逸られるのをセナはかなり気にしていた。

もしかしたら恨まれているのかもしれないと、思うことさえもあつたくらいだ。

しかし姉のシンシアは勘ぐり過ぎだと言って受けあおうとしなかつた。

そんなある日のこと。セナは村の子どもから耳を疑うような事を聞かされた。父親のムラトスが赤ん坊だった頃のセナを海に投げ捨てようとしたというのだ。

「カロロスんちの爺ちゃんが言ってたんだ」

常々仲の良い遊び友達のビルだ。

「大声でワケのわからないことをわあわあ叫んで、それで赤ん坊だったお前を引つつかんで岩場から海に投げようとしたんだってさ！村の大人たちが寄ってたかって止めに入ってようやくおとなしくなっただと！ お前オヤジはよっぽど酒癖が悪いか、お前が相当嫌われてるかのどつちかだよな？」

牡蠣の穴場をセナから聞き出せなかった腹いせもあったのだろう。ビルは一昔前の村の一大事を知り得たとばかりに得意げな様子でまくしたてた。

セナは嬉々として喋りまくるビルの横面を思い切り殴りつけた。

「嘘だ！！ ハツタリ抜かしやがって！ 承知しないぞ！！」

セナが声を震わせながら叫んだ。

「嘘なモンかよ！ それに、お前んちのオヤジ、お前のこと嫌ってるじゃないか！ なあ？」

いきなり殴られたものの、血の気の引いたセナの顔を見て言葉が過ぎたと思ったのか、張られた頬を押さえながらビルはやり返すのをやめた。

かたわらにいた数名の子どもたちはあっけにとられながらも目と目を合わせて、こくりと頷いた。村の子どもたちの間でもセナに対するムラトスの素っ気ない態度は密かな噂の的だった。セナはいたたまれなくなりその場から駆け出した。

赤ん坊を海に投げ入れたらどうなるか、小さな子どもでも分かる。父親が自分の子に対してそんなことするなんて。セナには信じられなかったし、信じたくもなかった。

どうしても誰かに問いただして事の真相を知りたかったセナはトマスの家を訪ねた。

家に帰ってシンシアに聞いたとしてもどうせ父親のことをかばうに決まってると思ったからだ。

赤ん坊の時に母を亡くしたセナはトマスの女房のニコラからもらい乳をして育てられた。なので、いわばニコラは育ての親と言ってもよかった。

子だくさんでてんでこ舞いしていたニコラだったが、セナの母親代わりに進んで買って出てくれた。

そんな彼女をセナはずっと自分の母親だとばかり思っていたので、ニコラから実の母親ではないと告げられた時のあの奇妙な感覚は今でも忘れることができない。

「セナ？ どうしたね？ そんなところに突っ立って」

ニコラは家の入口に黙って立ちつくすセナに声をかけた。

トマスと倅たちは漁に出ていたため家の中にいたのはニコラと、姑のドルカの二人きりだった。

セナの硬くこわばった顔つきに何かを察したニコラは裁縫の手を止め「おいで」と、セナをかたわらに呼び寄せた。

セナはしばらくニコラのふくよかな胸に顔をうずめたあと、先ほどビルから言われた事をぽつりぽつりと話し始めた。

ニコラが口を開く前にカヤで蓆むしろを編んでいたドル力が言った。

「天命を受け入れられなかったんじゃ」

「……？」

「ムラトスもあん時は突然嫁を失のうて、心が荒んだんじゃな。だが、過ちは過ちじゃ。きちんと詫びねばならんて」

「ドル力婆ちゃん、本当なの！？ それじゃ、父ちゃんは本当に」

「

セナ。お聞き」

ニコラが声をうんと低くして穏やかに言った。

「村のやんちゃ坊主が言ってたのは半分はあつてる　ああ、そんな顔をするもんじゃないよセナ。半分だけだよ。まさかナタリがあ

れきり体が持ち直さずに死んでしまうなんてムラトスも、村の誰もが思っちやいなかったんだ。でも……」

ニコラがふつと顔を曇らせ悲しげに目を伏せた。

「でも、ナタリは逝ってしまった。私も最初は信じられなかったさ。だって『また可愛い女の子が私の所に来てくれた』って、笑っていたんだからね」

ニコラの話聞きながら、セナは実際に会ったことのない母親の笑顔を思い描いていた。生まれたての赤ん坊の傍らで、やわらかで優しいな笑みを浮かべる母の姿を……。

「魔がさしたんだよ。あんたの父ちゃん取り乱して赤ん坊のあんたに手を挙げただけだ。たったそれだけなんだよ。ひと昔前の話っていうのはどうも大げさになってしまっついていけないね」

一旦は荒れ狂ったムラトスも、村の衆に諭され宥めすかされたのち心が元に戻ったかのように穏やかになった。それ以降は一触れした反動もあつてか、セナをまるで失ったナタリの分もと言わんばかりに　まるでナタリの生まれ変わりのように可愛がったという。

「シンシアがまだあんたくらいの歳の頃にはやきもちを焼いていたくらいさ」

ニコラが思い出したようにくくつと含み笑いをもらした。

「でも……」

セナは反論せずにはいられなかった。

今のムラトスはやはり自分のことを、どこか避けているように思えてならなかった。

「ああ　それは、きつとあんたがナタリに似ているからだね。顔かたちもそうだし。こうして……目を閉じて聞いていると声もそっくりだ。だから　」

だからムラトスはきつと過去の過ちを思い出して、辛くなって申し訳なくて、それでよそよそしい態度を取るのだとニコラは断言した。

「ようし！　ここの繕いが終わったらあんたんちに行つてムラトス

に言つてやるよ。可愛い娘にこんな思いをさせるなんてね」

ニコラにそつと背中を押されて、セナは育ての親の家をあとにした。来た時とは打つて変わり、心の曇りはすっかり拭い去られていた。

セナは家路を急いだ。シンシアはそろそろ漁から戻る父親を迎えるために支度を始めているはずだ。

今日の漁の出来はどうだったのだろうか？ あとでニコラが来てくれるというし、獲物を煮込んで何か振る舞えるといいな。

セナは心を弾ませながら砂地を駆け通した。

しかし。

この日、ニコラはセナの家を訪れることはなかった。

前方に黒煙が立ち昇るのが見えた。ちょうどセナの家のある辺りだ。

（まさか 火事？）

セナは足並みを速めた。

燃え盛っているのが自分の家をも含めた隣近所の集落だった。

突然 目の前に大勢の人影が現れた。

兜と甲冑で身を固めた見知らぬ男たちだった。

「ジタバタするな！ それ以上暴れる腕をへし折るぞ！！」

ただならぬ気配を感じ、とっさに身をひるがえしたセナだったが、すぐさま甲冑を着けた男に捕えられた。

力の限り抵抗したものの、殴られた揚句きつく二の腕をねじ上げられた。

セナは縛めから逃れようと必死に抗いのたうったが、男はその手を全くゆるめようとしない。セナはたまらず悲鳴を上げた。

その時、どこからかムラトスの怒声が聞こえてきた。

血相を変えてこちらに向かって来る父親の姿を視界の隅に認めたセナは、次の瞬間ひきつけを起こしたように体を硬直させた。

男たちの手にしていた槍がムラトスの胴体を貫いていた。

槍を引き抜かれ、よろよろと後ずさつたあと父親はその場に力なくくず折れた。

血まみれで仰臥し虚ろに見開かれたままの鳶色の瞳を見た時、セナは頭の中が痺れたようになつた。

遠くでシンシアの甲高い悲鳴を聞いたような気がしたが、それきり何も分からなくなった。

ただ、いつまでも耳に残っていたのは父親の怒り狂ったかのような叫び声だった。

「貴様ああ！！ 俺の娘からその手をはなせ　　！！」

気がつくとセナはシンシアの腕の中にいた。

シンシアは血の気のない顔で固く唇を噛み締め、父親の死を^ま目の当たりにして気を失った妹をずっと抱き寄せていた。

「姉ちゃん……。父ちゃんは？」

妹の問いに、姉はすぐには答えることができなかった。

「ねえ……。姉ちゃん。父ちゃんは？」

「父ちゃんは」

シンシアは低く声を落として言った。

「父ちゃんは……。殺された。ろくでなしのテイターンの奴らに殺されたんだ。村には火がつけられて……。みんな燃えちまった。何もかも滅茶苦茶だ　　」

セナは先ほどの惨状がまだ信じられなかった。

だからシンシアが「悪い夢でもみたんだろ？」と、笑って答えてくれたらいいのにと、心の底から思っていた。

後で分かったことは　村に住む未成年から働き盛りまでの男子が強制的に徴兵させられたことと、若い女たちが同じく無理矢理連れ出されて馬車の荷台に乗せられ、村をあとにしたことだ。

抵抗したものは容赦なく殺された。

老齢の者や年端のいかない子どもたちの行方は定かではない。

がたがたと揺れる馬車の荷台は女たちでひしめき合っていた。

「どこに行くの？ これからどうなるの？」

不安に駆られたセナは誰ともなくたずねたが、答えられる者はいなかった。

もしかしたら奴隷として売られるのかもしれないという不安が漣なみのように口伝えで荷台に詰め込まれた女たちの間に広まった。

やがて陽も落ちた頃。女たちは荷台から下ろされ、その中の何人かは寝ぐらとして設えた天幕に連れて行かれた。

そんな中、女の軀からだに満たないセナにも戯たむれで手が伸びた。

父親ほども歳の差のある輩だった。

「こいつはどうだ？ チンケだが、生娘に間違いない」

セナは抵抗する術すべを知らなかった。

周りの男たちのはやし立てるような笑い声がこだました。

セナは冷たい地べたに押し倒された。

村の女たちは、男たちからの仕置きを恐れて固く目を瞑るしかなかった。

しかし。

「この下衆げすな性悪野郎！！ その子から手をおはなし！！」

女たちの制止を振り払ってシンシアが猛りながら立ち上がった。

シンシアは平素では考えられない口汚い言葉を選び、セナの上に覆い被さっている輩に向かって激しく罵倒を浴びせかけた。

セナにはすぐ分かった。

シンシアは、あえてけしかけている。自分から目をそらせるために。

「ハン！ あんたなんか人間以下だ！ 畜生に膝まづいて教えを乞いなよ！ どうぞ獣並の生き方をお教え下さいってね！ もしかしたらお情けで爪の垢でも恵んでくれるさ！」

輩は遂にセナから離れた。

怒りで顔を真っ赤にした輩はシンシアに詰め寄り、激しく頬を打った。

倒れ込んだシンシアはそれからも容赦なく打たれた。

めちやめちやにされる姉の姿を見てセナは狂ったように男に組みついたが、たちまち振りほどかれ跳ね飛ばされた。

セナは輩が短剣の柄に手をかけるのを見た。

殺される！

セナはたちまち恐怖に駆られ、後ずさりした。

「お逃げ！」

その時、シンシアが金切り声をあげた。

「逃げるんだ！！ セナ！！ 早くお逃げ！！」

シンシアがもう一度、叫んだ。

セナは姉のその言葉に弾かれたように駆け出した。

夢だ。

悪夢だ。

こんなことあり得ない。

きっと きっと悪い夢に違いない！

暗い夜道を、月明かりだけをたよりにひた走りながらセナは自身に言い聞かせた。

父親が殺されたことも、姉が荒くれた男たちに酷い目にあわされたことも、さっきの虫唾^{むしず}が走るようなあの感触も、全て夢の中の出来事だ。

そうだ。これは夢だ。悪い夢なんだ。

今こうして走っているその先が夢の出口だ。

夢はいつかは覚める。

こんな嫌な夢は二度とごめんだ。

早く出口にたどり着いて目覚めたい。

お願い。はやく。はやく覚めますように。

セナはそう祈りながら、喉が枯れ、息の根が止まりそうになるまで走り詰めに走った。

幾度となく転び、膝小僧をいやというほどすりむいた。

草の葉が肌をなぶり、むき出しの皮膚には細かな切り傷が幾筋も刻まれた。

セナは精根が尽き果てるまで疾駆し、力尽き、とうとう地面に倒れ伏した。

そうして、夢ではない非情な現実を引き戻された。

セナは気がつくと一人ぼっちだった。

「なんだあ　？　お前。生きとるのか？　死んどるのか？」

木の洞で夜を明かしていたセナは、顔中毛むくじやらの大柄な男に揺り起こされた。

セナは最初、野生の獣のように警戒心を露わにしたが、その男の人懐っこく純朴な人柄を感じ取り、固く閉じていた心をほんの少し開いた。

男は自分の弁当をセナに分け与えてくれた。

焼きしめた**麵包**と皮袋に入った水をあてがわれ、セナはわき目もふらず貪るようにそれらに喰らい付いた。

逃げ延びてから何日もの間、川の水と木の実や木の根で飢えをしのいでいたセナにとって、このうえないご馳走だった。

男はセナに名をたずねた。

セナは**麵包**の最後のひとかけらを飲み込み、ひと心地ついたあと、ぼつりと呟くように言った。

「……セネカ」

セネカは砂浜に座り込み、膝を抱えながら目の前に広がる海の彼方を見つめていた。

遠浅の海は優しく、穏や波立っていた。

潮騒の音が心地よく耳に届き、甘い潮風がセネカの髪をふわりと巻き上げた。

「セネカ！　ほら見てごらん」

先ほどまで波打ち際に波と戯れていたアリオンが、両手一杯の貝を手にして戻ってきた。

覗き込もうとするアリオンの視線を避けるように、セネカは下を向いた。そして鼻の辺りをごしごし擦り、無性にむず痒くてしょうがないという振りをした。

「……………？　どうかしたの？」

「……………別に」

セネカは、今度はぶいと横を向くと短く答えた。今はアリオンとは目を合わせたくなかった。

アリオンはばらばらと貝を砂地に置くと、セネカの横に腰をおろした。

「きれいだねえ。海……………」

「……………そうかい」

セネカはくぐもった声を気取られないように、言葉少なに答えた。

「セネカは海へは来たことがあるの？」

「……………」

セネカはしばらく黙っていたが、うつ向き、砂地に生えている浜草をいじりながら「ある」とだけ答えた。

「そうか……………僕は生まれて初めてなんだ。海は」

アリオンはそれ以上何も喋らなかつたしセネカに何もたずねなかつたが、やがて思い付いたように前方に広がる海原を見据えて言った。

「泳げない、かな　？」

「……………？　え？」

セネカが面を上げた。

「この海で泳げないかな？　セネカ」

「……………」

「気持ちいいだろうね。きつと」

「あにイは……………泳ぎは？」

「うん、川で泳いだことがある」

「……分かってないなあ」

セネカは少しあきれ顔で小さなため息をついた。

「川と海は違うんだ。海はあつという間に深くなる。それに、波も来るし　潮のうねりもある。ぼんやりしていると波にさらわれて沖に流されることだって……」

「へええ。そうか……セネカはとても詳しいんだね」

「……」

二人の間にまた沈黙が流れた。

アリオンは、しばらくの泡立つ波打ち際を眺め、寄せては返す波の音に耳を傾けていた。

ふと隣を見ると　セネカが膝を抱えながらうずくまっていた。

その様子は苦しげに膝頭に何度も額を擦りつけているようにも見えた。

「セネカ？　どうしたの？」

「……なんでもない」

「だって　。お腹でも痛いんじゃない」

「なんでもないって言ってるんだろ。ほつといてくれよ」

セネカは平静を取り繕おうとしたが、声の震えはどうにもならなかった。

「あつちへ……行けよ。もう……おいらに構うな！」

やっとそれだけ言うと、セネカは押し黙り、喉に突き上げてくる熱いかたまりと格闘した。

そして今、自分が泣いていることは、きっとアリオンに知れてしまったのだらうと思った。

アリオンは「火を熾してくる」と言い残し、散らばった貝を拾い上げ行ってしまった。

ひとり残されたセネカは固く目を閉じ、唇を噛みしめ、懐かしくも哀しい郷里での思い出を頭の中から追い払おうと必死になっていた。

セナ（後書き）

アクセスありがとうございます。

『Sena』も、この章でようやく大きな区切りを迎えました。当初予定していたよりも長く、文字数もかなり多くなりましたが、イメージしていたことは心置きなく書き綴ることができたと思っています。

『アリオン』というお話のセネカという愛すべきキャラクターに色々なエピソードを加え、かなり膨らませました。振り返ってみると…キャラがそれぞれとてもよく動いてくれて、こちらもかなり楽しんでいきます。

アリオンは…かなり天然？な感じになってしまいました（汗）でも彼を崩すつもりは全くありませんので。念のため。

ここで少し反省…

タイトルである『Sena』について。

物語も中盤近くの第十章までその詳細が明らかになされないというのは、読んでくださる方に不親切ではないだろうか…ということに最近になって気が付きました。

『セナ』って何？ 誰？ と、疑問に思われた方もおありかと思えます。

判っているのは作者のみ。読者はおいてきぼりであったかな…と。『Sena』完結後には、分割した章をとりまとめたものをUpする予定です。

その際に、序盤で『Sena』のことに触れる内容の加筆を検討し

「1」（前書き）

久方ぶりの更新となりました。

今年もよろしくお願い致します。

コウミ

それは眩しく清々しく、そして懐かしい景色だった。

セネカはアリオンと共に浜辺から見晴らしのいい高台へと移動し、広大な海を臨んでいた。

海は美しく、包み込むような安心感を与えてくれたが、目の前に広がる海原が故郷くにに繋がっているのだと思うと、セネカはぎゅっと胸が締めつけられるような気がした。

セネカは口を引き結んだまま海を見つめていた。

紺碧の水面と空の青が遙か遠くにけむる水平線を境に美しく対比し、空の彼方には山の稜線を縁取ったような雲が白く淡く描かれている。

遠くからは潮騒が響き、海風が芳しい潮の香りを二人のいる高台にまで運んできた。

セネカはふと、隣にいるアリオンを様子をうかがった。

アリオンは 眩まよひい景色とは対照的に、その表情は翳かげっていた。

黒の獅子王は、ポセイダンの本船はピレウスの浜に寄せてくると、アリオンに告げたという。

単純に考えるならばポセイダンの乗った本船はこのあたりにいるはずだった。

しかし、浜辺付近の海域には一隻の船もない。浜辺に接岸している小舟の姿も見当たらない。

アリオンは水平線の向こう側に何かを見つけようと一心に目を凝らしていた。

その表情からは、青く煌きらめく海に心を奪われる様子はみじんも窺えなかった。

アリオンは途方に暮れた様子だったが、それでもあきらめ切れず、尚も海から視線を外さなかった。

「着くのが早すぎたんじゃないかなあ……」

見かねたセネカが控え目に口を開いた。

アリオンは曖昧な頷きを返した。

「ほら！ おいらたち近道をしたじゃないか。あのヤらしい森を通つて来たから、獅子王が言つてたよりも早くに着いちまったんだよ。そうに違いないって」

セネカは努めて陽気に振る舞い、アリオンを励ました。

「少し進んでみよう」

答える代わりにアリオンは、まるで自分自身に言い聞かせるかのように言った。

「でも、このまま進むと陸の方に戻っちゃうぜ。海沿いに行くんだつたら、また下の浜に下りなきや」

セネカがおずおずと意見した。

アリオンがこういう言い方をする時は、意志を曲げるつもりのないことをセネカは心得ていた。

しかし、ポセイドンと出会うためには今のところ、黒の獅子王のお告げとやらに従うほか路みちはない。

セネカは内陸に進み、海から離れてしまうことを危ぶんだ。万が一、ポセイドンとすれ違いになったら。

「あつちの方角からも海が見えるはずだ」

アリオンは歩き出した。

「それでも本船が見えなかつたら、引き返そう」

言いながら、アリオンは迷いを断ち切るように歩みを進めた。

セネカはおとなしくその後について行った。

「あッ！」

「あッ！」

二人は同時に声をあげた。

ごつごつとした岩場を抜けて木立の生える林にさしかかった時、内陸の方向 前方の平原に煙が幾筋も立ち上っているのが見えた

のだ。

そこには天幕らしき小山がいくつも隣接して設つづえてある。

「あれは？」

セネカが指差した。

「野営だ……」

アリオンが眉根を寄せた。

「それにしても、沢山だなア。団体さんかな」

セネカが、もっと先まで見渡せないものかと爪先立ちになってぴよんぴよんと跳ねた。

「……」

「もしかしてさ……ポセイドンの軍に入りたいて奴らが集まっているのかも。だって、ほら！あの蛇に喰われちまった大男の……ダフネってヤツも言ってたじゃなか。褒美が、とか。一旗あげたいとかなんとかさア」

「それも あるかもしれない。でも……」

アリオンはしばらく考え込んでいたが、やがて確信したように言葉を継いだ。

「でも、アテナ軍が先に軍隊を送り込んだということもある。この浜辺にやって来るといことは、ここが戦場いくさばになるんだ。きつと「いくさばに？」

セネカの表情にさつと緊張の色が差した。

「この辺りで戦いが始まるんだ」

「……」

「僕らもここで野営しよう」

アリオンが背負っていた荷物を下ろした。

それから二人は海側と内陸の両方の様子を伺いながら、野営の支度にとりかかった。

セネカは木立の合間から薪になりそうな乾いた芝や、細い枝の束を両手いっぱいかき集め、地面に置いた。

アリオンは天幕を設え終えて、海の方角を見つめていた。

「あそこにいる連中が煙を見て不審に思うと厄介だから」
内陸の天幕の群れを警戒し、火を焚くのは夕陽が沈む間際まで待つことになった。

二人はて地べたに座り、揃って膝を抱えた。海と陸の方にちらちらと視線を移すほか、何もすることがない。

奇妙な沈黙が流れた。

「セネカの故郷は」

アリオンが静かに口を開いた。

「きみの生まれ故郷は　もしかして、この近くなのかい？」

「やっぱり、そうくると思った　。セネカは苦々しげに顔をしかめた。」

セネカはアリオンの前でまた泣いてしまったことを悔いていた。

アリオンは先ほどの自分の様子を不思議に思っているに違いない。あれこれ聞きたがるのも当然だろう。

「どうだっていいだろ。そんなこと」

無然として言葉を返し、セネカは頑かたくなに心を閉じた。

アリオンは少し戸惑ったような顔を見せたが、やがて言った。

「僕は　海は初めてなんだ」

「さっき聞いた。それ」

セネカは突き放すように言った。

「……僕の生まれ故郷はトラキアというところなんだ」

「……。ふうん」

「セネカは羊を見たことがあるかい？」

「え？」

アリオンの唐突な問いに、今度はセネカの方が戸惑った。

「……ない」

「じゃあ、山羊おんやは？」

「ヤギ？　ヤギなら……ある」

セネカはかつて住んでいた浜辺の村に行商人が訪れた時の事を思

い出した。その行商人は一頭の山羊を連れていた。

「僕の家ではね　羊と山羊を飼っていたんだ。羊を山の牧場に連れて行くのが、僕の日課だった」

それからアリオンは羊や山羊のことや、薬草摘みなど山での暮らしについてを、時おり懐かしむように噛み締めるようにセネカに話して聞かせた。

「セネカは乾酪チーズを食べたことはある？」

「そんな高価なモンめったに食べられないよ。村の祭りの時に、ほんのちよっぴりおこぼれをちよっくだいするくらいさ」

「そうか　僕のうちでは山羊を飼っていたから、だいたい毎日食べられた。山羊の乳で作るんだ。母さんはたいていの物を手作りできる人だったから……」

セネカはアリオンが乾酪チーズを毎日食べていたということよりも、彼の口から母親について語られたことの方に驚いた。

アリオンもセネカのその驚きを察したようだった。

「僕は　母さんと二人で暮らしていたんだ　」

セネカはアリオンの方を見た。

アリオンは、まるで白昼夢でも見ているかのような遠い目で水平線を見つめていた。

母親と二人暮らし　。

セネカの頭の中には、ある疑問が沸き起こっていた。

以前、アリオンから「伯父と暮らしていた」と、聞かされていたからだ。剣術と乗馬を教えてくれたという伯父と　。

だから、セネカはてっきりアリオンには母親がいないのだと思っていた。

伯父と暮らす前に母親と一緒に住んでいた、ということだろうか？
だとしたらどういっきさつで母親のもとを離れて伯父と暮らすことになったのだろうか？

それに　。

今から会いに行くという父親についても疑問だらけだった。
なぜ父親だけ離れて暮らしていたのだろうか？ 考えてみたらおか
しな話だ。

それに、伯父についても、だ。

セネカが伯父のことに触れた途端、アリオンは不機嫌になった。
伯父のことが好きというわけではなさそうだ。

ならばなぜ一緒に暮らしていたんだらう？

何か 深い事情があつてのことなのだろうか。

アリオンについて、あまりにも分からないことが多すぎた。
しかし、セネカはこのことをアリオンにたずねるのは後延ばしに
した。

憂いた瞳で前方の海を見つめるアリオンの横顔が、哀しみで溢れ
ているようにも見えたからだ。

二人の間にまた沈黙が訪れていた。

やがてセネカはあきらめたように口火を切った。

「あー。おいらは……」

セネカは、アリオンが気を使って、あえて自らのことを色々と話
してくれたのだと分かっていた。

となると 今度は自分の番だ。

「この肌の色を見りゃ分かるだろ。浜育ちさ」

セネカの言葉にアリオンは現実に引き戻されたようだった。

セネカは生まれ育った海辺の村での暮らしぶりをアリオンに話し
た。

大人の男達が船で漁に出る様子のこと。そして、浜育ちの子
どもたちは決まって磯で海藻を採ったり、海に潜って貝を採ったり
すること。

「さっきの砂浜にも貝はあったね」

「ああ でも、海の深いところにある貝は種類が違つんだ。中身
もぎっしり詰まってる、甘くて、とろっとしてて、すっごく旨い」

アリオンはセネカの説明を、うんうんと頷きながら聞き入り、時おり感嘆のため息を漏らしたりした。

「すごいな。そんなに深い所まで潜れるなんて。川で泳いだことはあるけど、トラキアには潜るほど深い川はなかったから、きつと僕には無理だなあ」

アリオンの相づちにセネカはますます得意気に話し込んでいた。

「今まで潜った中でいっちなばん深かった所は水が碧色みどりだった。すっごくキレイだったな。今、思い出してもわくわくする。それで、ここで見つけた牡蠣がこれまで採った牡蠣の中で一番大きいヤツだった。しかも二つも」

そこでセネカはぴたりと口を閉ざした。

セネカの脳裏に、あの忌まわしい記憶がよみがえったからだ。

「僕は、木登りは得意だよ。よく木によじ登って山葡萄ヤマブドウを採った」

「……」
セネカは山あいの村でのことを思い出していた。そこでは木登りの得意な子どもたちが競って木によじ登り、山葡萄や木の実を採っていた。

「いつか食べさせてあげるよ」

セネカが木登りは滅多にしたことがなく、山葡萄も口にしないことがないことを告げると、アリオンはそう約束した。

「じゃ、おいらは今夜中にあいにいのおとつつあんの船がやって来なかつたら、明日、潜って貝を採ってやるよ。あっちの方に採れそうな岩場があるから」

セネカもアリオンに約束した。

「なんかさア。おいらたち食べ物の話ばかりしてないかい？」

「そう言えば お腹空いたね。麵麩パフは、もう……ほんの少しあるだけだ。ああ 干し肉もあまりない」

アリオンが荷の中を探りながら言った。

「さつき、林の中に罾を仕掛けといたけど、なにか引つかかっている

「かなア」

「よし。見てこよう」

そう言つてアリオンが立ち上がるつと腰を浮かせた時。

「セネカ」

アリオンが小声で鋭く言つた。

明らかに緊張した声色だつた。

セネカは即座にアリオンの視線の先を追つた。

そこには。

海の彼方には、何隻もの船の姿があつた。セネカはごくりと唾を飲み込んだ。

セネカは今までこんなにも大きな船の群れを見たことはなかつた。

「2」

二人は一旦ほどいた荷を再び大急ぎでまとめた。

「荷物は、最小限の物だけにしよう」

アリオンの声は上擦っていた。

「大きな船は浜までは乗り上げて来れない。近くまで寄せて、小舟かなにかで上陸するはずだ。きつと」

まとめた荷に弓をくくりつけながら、セネカも緊張のあまり早口になっていた。

大型船の群れは、確実に陸に向かって航行している。

「夜襲、だるうか」

アリオンの時々船の方を見やりながら、自分に問いかけるように呟いた。

「やしゆう……って？」

「夜の闇に紛れて攻撃を仕掛ける戦法だ。相手に不意打ちを食わせるつもりなら、でも……」

時は夕闇迫る頃合いであったが、船の様子は、まだはつきりと確認できた。

「闇……ってほどでもないよな。今は」

セネカがアリオンの言葉を引き継いだ。アリオンが顎を引いてそれに応えた。

「様子見なんじゃないかなア。陸にあがる前のさ」

「……とにかく、行ってみよう」

アリオンは荷を背負うと、剣を腰紐にしっかり結わえつけた。二人はそれぞれ気持ち^{はや}が逸っていた。

沸き起こる興奮を抑え切れず、足並みは自然と速くなった。

「暗くなる前に、あの岬まで行こう。もうすぐ陽が落ちる」

アリオンは目の前の海岸線の先、海に一段とせり出した岩場を差し示した。

なるほど岬の先端まで行けば、来航する船の様子ははっきりと見渡せるに違いない。

しかし、突如として現れた幾隻もの船の群れを間近で確認したいのは、アリオンとセネカだけではなかった。

「すごいや！ よく見える！」

セネカが思わず感嘆の声を上げた。

二人は岬に差し掛かる手前の拓けた高台まで来た。そこからは海上をゆく船の姿がよく見えた。

セネカは初めて目にする大型の船に興味津々だった。

「！？」

突然、先行するアリオンが立ち止まった。

アリオンは後に続いていったセネカを静止させると、鋭く辺りの様子を窺い、かがみこんで地べたに耳を押し付けた。

「？ なんだい？ 急に……」

セネカもきよるきよると注意深く周囲に視線を走らせた。

「こつちだ！」

じつと耳をそばだてていたアリオンは起き上がるや否や駆け出した。

「何頭かの馬が来る！ きつとあの天幕の者たちだ。ここには隠れる場所がない。急いで！ セネカ！」

アリオンに言われるがまま、セネカは足をもつれさせながら後に続いた。

やがてセネカの耳にも内陸の方角からやって来る何頭もの馬の蹄の音が届いた。

「まずいよ！ このままだと追いつかれる」セネカの声は怯えていた。

岬の先端は目と鼻の先だった。

アリオンは脇路へ反れると、土と岩の斜面を滑り下りた。

斜面の途中、うまい具合に浅い窪みがある。

息を弾ませながらセネカがアリオンに追いついた。
アリオンはその窪みにセネカを押しこみ、自らも潜り込んだ。
そして一つの塊のように身を寄せ、息を殺した。
辺りには他に身を隠すほどの丈のある草むらがない。
夕闇が迫っていなければすぐに見つかったもおかしくない状況だ
った。

岩と土の狭い隙間に潜み、セネカは石のように身をこわばらせて
いた。

アリオンはまるで蓋のようにセネカに覆い被さり、強く体を押し
付けていた。

馬を駆って来た兵士に見つかるかも知れないという緊張感と、ア
リオンの肌の温もりを必要以上に感じ、セネカの心臓は今にも飛び
出しそうだった。

「じつとして 静かにしているんだ。セネカ」アリオンが低く呟
いた。

悪意のないこの縛めから少しでも逃れようと、もぞもぞと蠢うごいて
いたセネカは観念したように動きを止めた。
今はおとなしく言う通りにするしかない。

駆けて来る蹄の音がすぐ間近まで来たと思うと、足並みを弛め、
やがてそれもおさまった。

代わりに何人かの男達の話し声が聞こえた。どうやらすぐ近くで
馬を止めたらしい。

「軍船だ。来たか。いよいよ ポセイドンめ」
唸るような男の声がした。

「しかし、大将旗がない 先発隊か？」
別の男の声だ。

「うむ。もしくは偵察の為の上陸か」
セネカが窮屈そうに首を廻らし、アリオンを見た。アリオンは顔

をこわばらせながら小さく頷いた。

「伝令を走らせい！ 本陣のアテナ様に報告せよ！」

アテナ　！？

もののけの棲み家の森に差し掛かる前にアリオンから聞かされたオリンポスの女の大將のことだ。セネカは小さく息を呑んだ。

命令を受けた者の馬が走り去ると、最初の男が力を込めて言い放った。

「陣営の者に伝えよ！ 尖兵隊の攻撃もあり得る。ただちに警戒態勢を取らせよ！ 急げ！」

更に二頭の馬が走り去った。

あとに残ったのは、一人だ。

セネカを圧迫していた力がすつと軽くなった。

アリオンがセネカから離れたのだ。

斜面の上を振り仰ぎ、様子をうかがったあと、アリオンはセネカについて来るように目配せした。

セネカは窪みから抜け出すと、アリオンに続き、注意深く斜面を下った。

二人はアテナ軍の兵士をやりすごした。

気づかれた様子はない。

斜面をくだり切った先はごつごつした岩肌に波が打ち寄せる浜辺だった。

アリオンとセネカは足を滑らせないよう身を屈めながら岩づたいに歩き続けた。

辺りは薄闇に覆われ始めていたので、頼りになるのは月明かりに照らされた海面と泡立つ波飛沫だ。なみしぶき

二人は用心深く歩みを進め、ようやく不安定な岩場から砂地へとたどり着いた。

後に残った兵士に気取られないほどの距離を置いたはずだった。見つかる心配はほとんどないだろう。

セネカは緊張から解き放たれた安堵感から、ホツと胸をなで下ろした。

アリオンは、目を凝らし前方の海上を見つめたいた。セネカもアリオンにならない、船の群れに視線を向けた。

船の群れは前進を止め、沖に停泊しているようだった。

船上では松明が焚かれ、点々と光を放ちながら沖に佇んでいる。

「小舟？ 筏かな？」

じっと目を凝らしていたセネカが呟いた。

船の腹の部分に小さな明かりが灯され、ゆらゆらと揺れ動いている。

「ほら！ 見てみなよ。あいつら筏で上陸する気だ。何か合図をしよう。あにイが王の倅だつて知ったら、きつと大歓迎だぜ」

セネカは無邪気に言った。

しかしアリオンは眉をひそめ、難しい顔をしていた。

「さっきの連中 大将旗が無いと言っていた。だとしたら、あの船には父さんは乗っていないのかもしれない」

「そんなこと分かんないじゃんか！」

セネカは焦れたように足を踏み鳴らした。

「こんなトコでいつまでもとぐるを巻いてたつてラチがあかない。

当たつて砕けるだ。こっちはやましいところなんて何も無いんだ。そうだろ？」

自信满满的なセネカの言葉にアリオンは頷きを返し、再び海へと視線を戻した。

セネカも海の方を見た。

そして二人は揃って、水面に何かか浮かんでいるのを見た。

人？

それは人の頭のようにだった。

「人が？ まさか……」

「……泳いでくる？」

アリオンもセネカも仰天した。

五、六人の人の群れが浜辺に向かって泳いでくるのだ。月明かりがその者たちの姿を照らし出した。

その様子をじっと見つめていたセネカは目を疑った。

人なのに ヒレがある!?

頭为天頂部分に、何やらぴんと立っている帯状のもの まさし

く魚のヒレだ。

それに、目が異様に大きくて、目と目の間が極端に離れている。顔の側面に目があると書いてもいいくらいだ。

それは、まるで。

セネカは背筋がぞくりと冷たくなった。

「……魚!？」信じられないといった口調でかすれた声を漏らした。

「人じゃない」アリオンも迫り来る集団に警戒心を露にした。「魚

人 人の形をした魔物だ」

アリオンの手が剣の柄にかかった。

その時。

突然、何かがセネカの体に絡みついた。

腕だ。

何者かの腕が、後ろからセネカの脇と首根っこをがっちりとはさみこみ、物凄い力でセネカの体を押し倒した。

ぬめぬめとした気色の悪い感触。

冷たい皮膚。

それは、海を悠然と泳ぎわたって来た魔物、そのものだった。

二人は魔物が後方の岩場から近づいてきたことに全く気がつかなかった。

魔物の腕や胴体からは体温が感じられなかった。

まるで水揚げされたばかりの魚のようだ。

「セネカ!!!」

セネカは、アリオンが名を叫ぶのを聞いたが、応えることが出来

ない。

驚きと恐怖のあまり、悲鳴さえも喉元に引つかかった。仰向けに引き倒されたセネ力は、首を捻じ曲げて羽交い締めしてくる輩の顔を仰ぎ見た。

途端に背筋が凍った。

ウロコに被われた皮膚。

頭部にそそり立つヒレ。

顔の側面に位置した両眼。

魚の化け物だ！！

セネ力はたまらず叫び声を上げた。

魚人の腕にさらに力が加わった。セネ力は恐怖に怯えながらも激しく抗った。

絡みついた腕をふりほどこうと爪を立てたが、ぬめった皮膚は滑るばかりで手掛りがない。セネ力は滅茶苦茶に体をよじらせたが、ぬめった腕はますますきつく締め付けてくる。

いきなり目の前に蹠みずかきのついた手が現れ、目と鼻が塞がれた。

別の魔物の手だ。

まるで濡れ雑巾を押し付けられたようだった。

たちまち息が詰まった。

セネ力は首を思いきり振りたて、必死で抵抗した。

足をばたつかせ、さらに体をよじってみせたが、魔物の腕は枷かせのようにビクともしない。

「やめ」

息苦しさのあまり、喰い縛っていた歯が弛んだ。

その隙について、魔物の蹠みずかきの指がセネ力の口を無理矢理こじ開けた。

何かが口の中に滑り込んだ。

「!?!」

それは冷たくどろりとした得体の知れない塊だった。

毒を飲まされた　！

セネ力は反狂乱になった。

どろどろした塊が喉の奥に押し込まれたあと、今度は無理矢理口を塞がれた。

声にならない叫び声をあげながら、セネ力は必死に吐き出そうともがいた。

更に息が詰まった。

苦しさに耐えかね、たまらずセネ力はその冷たい塊を飲み込んだ。飲み下した塊は、ぬるぬると嫌な感触を帯びながら胃袋に落ちていった。

と、全身の力ががくんと一気に抜けた。

体が痺れていることをきかない。思うように動かせない　動かすことすらできない。

しばらくの後、セネ力は力なく魚人に身を預けていた。

ようやく魔物たちの縛めがふり解かれた。

セネ力の腰紐から小刀が抜かれ、背負っていた荷も、解かれていった。

殺されるのだろうか　それとも　？

セネ力の心の中にじわじわと恐れと不安の気持ち湧き起こった。しかし、魔物はセネ力の体を大事そうに抱え上げると、そのまま海に向かって歩き始めた。

ざぶざぶと波をかき分け、海中へと進んでいく。

ひやりとした水の冷たさが全身を包み込んだが、セネ力は水の中に沈められることはなかった。

泳ぎ出す魔物に抱え込まれたまま、セネ力は海の中をふわふわと浮遊するように進んでいた。

思考が淀み、混沌としていく。

漆黒の夜空にまたたく満天の星たちがぼうつと霞み、にじしみながら黒に溶けていく。

やがて、セネ力の意識は崖から滑り落ちるように徐々に暗く深い

闇の底に沈んでいった。

「2」（後書き）

アクセスありがとうございます。

『囚虜』は、どうやって原作の流れに沿わせようか…と、かなり頭をひねった章でした。

二人が捕らえられるところは映画のパターンに少しアレンジ加えてという感じです。

セネカ、色んな意味で受難…。

今回は 第十二章『軍船の中』です。

2011.3.26 本文改訂

「1」

意識が闇の淵からゆっくりと浮かび上がってきた。
ひどく寒い。凍えるほどだ。

それに、無性に気分が悪かった。

全身にまとわりつく悪寒に耐えきれず、うめき声をもらした。
セネカは床の上につつむせに寝転がっていた。

セネカ 。 セネカ ？

声が聞こえた。

目を開けようとしたが、目蓋まぶたが鉛のように重い。

セネカ 。 大丈夫 ？ セネカ ？

(うるさいなあ。聞こえてるよ)

口を開こうとした途端、猛烈な吐き気に襲われた。

セネカは低く唸りながら必死で堪えた。

体を丸め、うずくまりたかったが体が動かない。

寒気が全身を覆い、セネカはたまらず身を震わせた。

「寒いのかい？ セネカ？」

声の主はアリオンだった。

セネカはアリオンの問いかけに目を閉じたまま、小さなうなずきを
を何度も繰り返して応えた。

「体を擦こすりあわせよう。少しは温まる」

アリオンの気配が近づいてきた。

セネカはやっとのことで目蓋を押し上げた。

辺りは薄暗かった。

床が揺れている。

天井があるということは。

「あの大きな船の中だ」

アリオンがセネカの疑問に答えるかのように言った。

「僕たちは、あの魔物たちに運ばれたんだ　ああ、心配しないで。もうアイツらはここにはいない」

セネカは、身体中びっしり鱗に被われた魚人の姿を思い起こし、怯えたように身をこわばらせた。

あのぬめぬめとした嫌な感触は、思い出しただけでも身の毛がよだつ。

アリオンが不自然な恰好で床を這ってきた。

よく見ると　後ろ手で縛られている。

アリオンは、いも虫のように這いつくばり、床に体を擦りつけながらセネカの脇まで来た。

足にも縄が掛けられている。

そこで初めてセネカは、自分もアリオンとまったく同じように縛いまじめられていることに気が付いた。

「な　な　なんなんだよ！！　これ！？」

セネカは愕然とし、うろたえた。

こんな風に体に縄をかけられたのは生まれ初めてだった。

気だるさや寒気が一気に吹き飛んだ。

セネカは締め付ける縄から逃れようと、懸命にもがいた。

「セネカ　落ち着いて」

（これが落ち着いていられるか！）

セネカは心の中で反論しながら、尚も激しく体をよじらせた。

しかし、いくら必死で縄を振りほどこうとしても、きつく括くられた結び目はゆるむことはなかった。

しばらく暴れたあと、セネカは遂に諦めて力なく倒れ伏した。

「何でだよ　セネカが唸った。」

「なんで、おいらたちがこんな目に合わなくちゃならないんだ！？」

あんまりだよ！ あっ！」

セネカは海老のように体をしならせ、アリオンの方向に向き直った。

「処刑　？　もしかして、おいらたち処刑されるんじゃない？」

セネカの顔からすうつと表情が消えていった。

「違う」

すぐさまアリオンの答えた。

「僕たちは今はただの捕虜だ。そして多分、尋問される」

「ほりよ？　じん……もん？」

「そうだ　きつと、僕たちは疑われているんだ。アテナ軍の偵察

か何かだと思われる」

「な　なんだって！？」

セネカが猛然といきり立った。

「こつちは味方だ！　あにイはなんで説明しなかったんだよ！　自

分がここの王の倅だつてことを！」

「あの魔物にヘンな物を食べさせられて、動けなくなったんだ

話すこともできなかった」

アリオンはセネカと同じく、あのどろどろとした塊を食わされた

という。

そのあと、魔物に担ぎ込まれて海を渡り、筏に引き上げられ、そ

してこの船に乗せられたのだ。

「荷物と　剣を奪われた」

アリオンは悔しそうだった。

「でも、剣は魔物からこの船にいた兵士の手に渡ったはずだ。直接

は見てないけど、話し声があったから　それからの事は覚えていな

い」

アリオンは深くため息をついた。

セネカもつられてため息をもらした。

船室の小さな窓からは、薄日が差し込んでいた。朝陽が昇った頃

合いなのだろうか。

「あああ　喉が乾いた……腹も、へったなあア……」

セネカが哀れな声を出した。

考えると、昨日アリオオンが波打ち際で採ってきた貝を食べたきり、
なにも口にしていない。

もちろん、魔物に食わされたあのぬるぬるとしたゲテモノは論外
だ。

その時、アリオオンがハツと息を呑み、頭をもたげた。

「誰か来る！」

鋭くそう言っていると、アリオオンは不格好に床に倒れた体を引き起こそ
うと、身をくねらせた。

セネカは耳をそばだてた。

何人かの足音がこちらに向かって来るようだった。

「君は何も喋らなくていい」

ようやくアリオオンは床に座り込むと、素早くセネカに言った。

足音が狭い船室の間近でぴたりと止まった。

「1」（後書き）

アクセスありがとうございます。

セネカの受難はまだ続いています。

目覚めたらお縄にかかっていた…なんて、驚愕ですよ^^；

ここで少しお知らせです。

第三章『来訪者』を改訂しました。

以前から迷っていた箇所です。

やはりこれをこのまま公開したままでは気持ちがおさまらなくなりましたので。

これにより、第四章『夢幻』と第五章『疑念の心』の一部の内容にも変更が生じたので改訂しました。

サミュエルの扱いの箇所です。

「2」

「痺れ昆布の効き目は切れたようだな？ ああ ？」

船室にやって来たのは甲冑姿の二人の男だった。

オリンポスの兵士とは違う恰好だ と、セネカは思った。身につけている鎧と兜がそれとは様子が違う。

後方に立つやや小柄な兵士は角飾りが施してある兜を被っていた。しかし二人ともどちらも厳つい体格、隆々とした筋肉の持ち主でたいそう日に焼けており、いかにも海の男という感じがした。

（これが海王軍の兵士）

セネカは体を床に横たえた不自由な体制のまま、まじまじと二人の男を見つめた。

（あのどろどろは、シビれ昆布っていうんだ……）

セネカはまた吐き気が襲ってきそうになった。

「ふむ。もう口はきけるようだ。さて 貴様」

大柄な兵士が座り込んでいるアリオンに向かって棒のような物を突き付けた。その棒は、先端が総ぶさのように幾筋にも割れていた。

「あの剣は貴様の物か？」

「……」

アリオンは口を引き結び、黙り込んだまま兵士を見返していた。

「貴様の物かと聞いておる！！」

苛立つ兵士をじつと見据えたままアリオンは小さく顎を引いた。

セネカは、兵士のこの横暴な態度にかちんとなった。

「どこで盗んだ？ ああ？」

アリオンが心外だと言わんばかりに目を見開いたが、セネカの口がいち早く反応した。

「盗んでなんかない！ あの剣はあにイのだ！！」

「小僧、お前には聞いておらん」

大柄な兵士が睨みをきかせてセネカを威圧した。

アリオンは制するようにセネカの方を見やったあと、静かに答えた。

「盗んだものではありません。あの剣は……僕のもです」

「ならば、誰から譲り受けた？」

今度は後方に立つ兵士がアリオンに向かってたずねた。

アリオンはしばし言葉を詰まらせた。

大柄な兵士がやりとほくそ笑みを浮かべた。

「やはりな。貴様がオリンポスの手の者だということは判っておるわ」

「……！？ 違う！」

「ならばあの剣をどこで手に入れた！」

「……」

アリオンはかたくなな面持ちのまま答えようとしなかった。

業を煮やした大柄な兵士が、また声を荒げた。

「あの剣はそこいらの雑兵が手挟たはみむことが出来る代物ではない！

貴様、オリンポスとどの様な繋がりがある！」

「待て」

角飾りのある兜を被った兵士が、凄みをきかせる兵士とアリオンとの間に割って入った。

大柄な兵士が素直に下がった。

きつと大柄な兵士よりも位が上なのだろう、とセネカにも察しがついた

「お前たちは何の目的であの近辺をうろついていたのだ？」

アリオンは一瞬躊躇したが、それでも押し黙ったままだいた。

「聞こえんのか！ 答えよ！！」

下がっていた大柄な兵士がずかずかと進み出ると、屈みこんでアリオンの髪の毛を鷲掴みにし無理矢理顔を引き上げた。

「やめろ！！ 乱暴するなッ！ おいらたちは」

「セネカ！ よせ！」

早まるセネカをアリオンが引き止めた。

アリオンは強情な眼差しで大柄な兵士に一瞥を投げたあと、上官らしき兵士をも睨みかえした。

「……。ラザレ、離してやれ」

アリオンは乱暴に突き放され、勢い余ってそのままごろりと床に倒れ込んだ。

「貴様、何者だ？ 名は何という」

「名を名乗れと言っておるんだ！」

間髪いれずにラザレがだみ声を張り上げた。

アリオンは一呼吸置いたあと、二人の兵士に向かってたずねた。

「この船は海王ポセイドンの船に間違いありませんか」

「なに？」

「そうであるならば、王に会わせてください。全ては王の前で話します」

「ふん。読めたぞ。アテナの狗め。貴様、さては刺客だな」

「……！？」

「そんな疑わしい輩を王に会わせられるか！」

「……」

アリオスが倒れ込んだままの姿勢で兵士たちを見上げていた。焦れたように奥歯を噛みしめているのがセネカにも分かった。

セネカも負けじと、頑固な二人の兵士を睨みつけた。

「王の前でなければ名を明かさぬというのか」

上官が静かにたずねると、アリオンは無言で肯定の意思を示した。

「ちいと揉んでやりやしよう。痛い目に遭えば少しは口のきき方も思い出す」

ラザレが、手にした棒きれの総の部分の部分を掌で揉みしだきながら嘲るように言った。

セネカが、とうとう我慢できず大声を上げた。

「なんだよ！ さつきから黙って聞いてりゃ言いたいことばっか言いやがって！ このヤクザ野郎！」

「な なにいい！？」

二人の兵士が揃って目を丸くした。

「聞いて驚くなよ！ このあにイはな、お前んとこの王様の倅なんだぞ！」

セネカは矢継ぎ早にまくしたてた。アリオンが止める間もない。

「王の、倅だとお！？」

「それは 本当か？」

上官が息を呑んだあと、まじまじとアリオンの顔を凝視した。

「まさか……王とデメテル様の御子……。デメテル様はゼウスの追手を逃れ、辺境の地へ移り住んだと聞いていたが……」

「ならば、証拠は！ 証拠はどこにある！」

「え？ ……つて。しよ、証拠……？」

セネカがぐつと言葉を詰まらせた。

「そうだ！ 王の御子であるという証^{あかし}を見せてみよ！」

「王に会えば分かる」アリオン素早く答えた。「僕は間違いなく

ポセイドンの 父さんの子だ」

二人の屈強な兵士たちが戸惑いながら目と目を見合わせた。

「王に会わせてください。貴方の息子アリオンが遙々^{はるか}トラキアから訪ねて来たと、王に伝えてください」

再びアリオンが 堂々と、言葉を継いだ。

「そうだそうだ！ ぐずぐずしてないでさっさと王様に会わせやがれってんだ！ このウスノロめ！ 図体がデカけりゃいいってモンじゃないぞ！ こんな待遇かましやがって！ お前なんて真っ先にクビだ！」

すかさずセネカも舌で参戦した。アリオンが渋面を作っているのには目もくれない。

しかし、これはさすがに言い過ぎた。

ラザレの顔つきがみるみるうちに険しくなった。憤慨するあまりこめかみには青筋が立ち、片頬をびくびく痙攣させている。

「この 口の減らないガキめが」

「まあ待て」上官は取り成すようにラザレの肩に手をかけた。心な

しか、こみ上げる苦笑をかみ殺しているようにも見えた。

「まずは王へ報告する。王の決裁を仰がねばなるまい」

船室をあとにする上官に促されたものの、腹の虫がおさまら切らないラザレは床の上の転がっているセネカを睨みつけた。

不機嫌なラザレの顔つきが、うすら笑いに変わった時、セネカはただならぬものを感じぎくりとした。

ラザレがセネカの襟首を後ろから掴み取った。そして、そのままぐいと持ち上げた。

「な　何するんだよツ！　はなせ！　おろせ！」

「この口の減らないチビめ！　どちらにしろお前などに用はない。

このまま海に放り込んで鮫の餌にしてくれる！」

ラザレは勝ち誇ったようなにんまりと顔を歪めた。

セネカが青くなった。体を必死によじらせて抗ったが、ラザレは構うことなくセネカを脇から抱え込んだ。屈強な兵士の腕はビクともしない。

ラザレは天井付近　船室から甲板への出入り口に向かって怒鳴った。

「おおい！　魚人族を呼べ！　痺れ昆布を一掴み持ってこさせろ！

ふん。喜べ、チビ。たらふく食わせてやる」

セネカの顔色がさらに青くなった。

「い　いやだ！　あんな気色悪いの、二度とごめんだ！　やめろ　つたらー！」

ジタバタと暴れるセネカのわき腹をがっちりとはさみ込み、ラザレが得意げに一步踏み出した　その時。

突然、ラザレの足元に人影が転がり出た。

アリオンがままならない恰好のまま、ラザレの目の前に跳び出したのだ。

いきなり目の前に現れたアリオンを避けることも出来ず、ラザレは派手につまづいた。

しかし、そこは狭い船室のこと。　足をもつれさせたラザレは

前のめりに倒れ込み、激しく壁にぶつかった。

抱え込まれていたセネカは放り出され、まっすぐ床に落ちた。

「貴様ああ!!」

壁に打ち付けられた衝撃と怒り心頭のみならず、ラザレの顔が赤黒く変色していた。

見境いのなくなったラザレが、力任せにアリオンの蹴り上げようとした。

しかし、アリオンは咄嗟に横つ跳びに転がり、それを避けた。

足を大きくカラ振りさせ、勢い余ったラザレは、今度はもんどりうって仰向けにひっくりかえった

「よけたなあ! 貴様っ! よけたなあ!!」

起き上がるや否や、ラザレが怒りの形相で、手にした棒を大きく振り上げた。

仰向けの格好で横たわっているア里昂目がけて総のついた棒が振り下ろされる。

息を詰めて一部始終を見ていたセネカは、恐ろしさのあまり固く目をつむった。

「やめんか! 若君であるかもしれんのだぞ!」

上官が激昂するラザレの腕をつかみ取り、静止させた。

「それに そのチビも放っておけ。まったく 大人げない。行くぞ」

「今に見ておれ! 化けの皮をひん剥いてやる!」

上官のあとに続き、荒々しく足音を立てながらラザレが船室をあとにした。

二人の姿が見えなくなるのを確認するや、すかさず、ア里昂が仰向けのまま首をめぐらせた。

「セネカ! 怪我は?」

セネカは恐る恐る面を上げると、小さく首を振った。ア里昂は安心したように息をついた。

「何もしゃべらなくていいって言われてたのに……。おいら、余計

なこと……ややこしことになっちゃったかな……。ごめん」

セネ力がしゅんとなって力なくうな垂れた。

「いや。あの兵は最初から疑っていた。だから、僕も慎重になってしまったんだ。でも、これで父さんに取り次いでもらえる。もう少しの辛抱だ」

のろのろと時が流れた。はたして、どれくらい時間が経っただろうか。

小窓から差し込む陽の加減から、昼ひなかの時間帯と思われた頃、狭い船室に別の来客が訪れた。

疲労と空腹と、更には喉の乾きのため、アリオンもセネ力もぐったりしていたが、それでもハツとなって顔を上げた。

やって来たのは、柔和な面持ちで白髪混じりの初老の男と青年の二人だった。

初老の男は腰帯に短剣を携えていたが、甲冑も兜も身に付けていない。温かそうな上掛けを手に行っている。

一方、青年の方は水差しと杯、果物などを盛った器をのせた盆を持っていた。

男は脇の短剣に手をかけた。

「安心なさい。この縛めを解いて差し上げます」

顔に緊張の走ったアリオンをなだめるようにそう言うと、男は短剣を引き抜き、アリオンを縛っていた縄を断ち切った。

「お上がりなさい」

セネ力を縄から解き放つと、男が優しそうな笑みを浮かべながら言った。

小間使いらしき青年が、水差しから何やらなみなみと杯に注ぐのをじつと見つめていたセネ力は、疑わしげに男を見た。

「毒は入っていませんよ」

男はにっこりとほえんだ。

セネ力は、男と目の前の差し入れと無愛想な青年を順々に見たあ

と、最後にアリオンの様子を窺った。

アリオンの表情から緊張が解けた。

二人はお互い同時にうなずき、同時に杯を手を取った。

「あなたは？」

杯の水を一気に飲み干し、ひと心地ついたあと、アロンがたずねた。

セネカはおかわりの杯を受け取っている。

「サイラスと申します」

サイラスは幼子を慈しむような眼差しでセネカを見ながら答えた。

セネカは、今度は果物に手を伸ばしていた。

「……僕たちはどうなるんですか？ 王に、会わせてもらえるんですか？」

アロンが縄目の跡が残る手首を擦りながらたずねた。

「王はこの船にはおりません。正確には、まだこの海域に到着しておりません」サイラスは澁みなく答えた。

セネカは果物を頬張りながらアロンの方を振り返った。アロンは無言だった。

「先ほど、飛び立った有翼族の伝令が戻りました。王の直々の命令により、王が到着されるまでの間、あなた方の扱いは私に託されます」

「じゃあ、おいらたちをどうするつもりなんだい？」

お腹の満たされたセネカがようやく口を開いた。

サイラスはアロンの方に向き直った。

「あなたが本当に我が王ポセイドンの御子アロン様ならば、無礼があつてはなりません。お世話役をさせていただきます」

「無礼ならとつくにされてる。でも、決まりだ。あにイは本物だから」

セネカが自信ありげに言った。

「しかし、我々を欺く偽者でしたら先ほどの監督兵に引き渡し、然

るべき制裁を受けてもらいます」

「本物なんだから、そんな心配なんてしないさ」

「王はいつ来るのですか？」

アリオンが二人のやり取りに割って入った。

「船が順調に進んだ場合、早くて 明日には到着されるはずですよ。」

王の到着をもって陸に攻め入る最終準備に取り掛かります」

「戦が始まるのですね。アテナ率いる軍との」

「左様」

サイラスはうなずいた。

アリオンとセネカは客人としてのもてなしをある程度受けたものの、堂々と船室から出ることを許されなかった。

サイラスは、ポセイドンが来るまでは辛抱するように、と言った。「まだ王があなたをお認めになった訳ではありませんし、疑いも晴れたわけでもありません。むやみに船内をうろつかれるのはご遠慮いただきますよ」

サイラスは二人に食事や衣類などを調達したり、あれこれと世話を焼いてくれたが、きつぱりと言った。

「それに あなたも」

サイラスはセネカに視線を移した。

「先ほどの兵に目をつけられています。もしも船室から出て、彼に見つかるものなら、たちまち海に投げ捨てられてしまいますよ」「セネカはぎよっとなってサイラスを見返した。

「これからは言葉遣いにお気をつけなさい。あなたはどうも口が過ぎるようです。ご自分では気づいていないようですが」

「サイラスは、ここでは何を取り仕切っているんだい？ 位は上のようだが 見たところ戦に出向くような兵士では ないね？」

アリオンはセネカのびくびくした様子に苦笑いをかみ殺しながらサイラスにたずねた。

「その通り。私は、戦場いくさばに赴く兵士たちを、陰ながら支える役目です」

サイラスは控え目な中にも誇らしげな顔つきだった。

「兵士たちが万全に戦えるように準備します。武具防具などの支度は勿論、それらの段取り」

サイラスは滔々うたつと続けた。

「そして食の賄いや、衣服の繕つくろいのような細かなこと。従者や小間使いの指揮も取ります」

「では、サイラス。頼みがある」

アリオンはサイラスの話が途切れるのを待つて口を開いた。

「このセネカを、僕づきの従者にしてもらえないだろうか？」

「えッ？」

このアリオンの申し出にセネカは少なからず驚いた。

「もちろん、王には僕からも伝える。ぜひそうさせて欲しい」

アリオンはまっすぐサイラスを見つめ、熱心に言った。

「……。承知いたしました。そのように取り計らいますよう」

サイラスは軽く会釈をして応え、船室から出ていった。

「従者つてさ 家来のことかい？ それとも子分？」

セネカはサイラスがいなくなると、待つてましたとばかりにアリオンにたずねた。

「ううん……そうだな。身の回りのことを手伝う小間使いだと思っ
ていい。でも、僕は自分のことは自分でするから 君は、この
兵士に何か言われるようなことがあったら、僕の従者だと答えれば
いいよ」

「 わかった」

従者と聞いて妙な気持ちになったが、セネカに異存は無かった。

よそ者は異端な目で見られるのは承知していたし、風当たりも強
い。

見知らぬ環境に身を置かれた今、セネカにとって頼りになるのは
アリオンしかいなかった。

二度目の食事が出されるまでの間、退屈で気だるい時間が流れた。
狭い船室から出ることを許されていない二人は、暇を持て余して
いた。

「あー！ もお、こんな狭つくるとこにずっとカンキンだな
んで、おいら耐えられないよ！」

苛々のつにつたセネカは遂にふてくされた様子で座り込んだ。

アリオンが「縛られているよりはマシだから」と言って、なだめ

たが、それでも窮屈で息が詰まりそうな居心地の悪さが変わるわけもない。

少しでも外の空気にあたれないだろうかと、セネカは背伸びをして小窓にかじりついた。

窓の外を何かが横切るのが見えた。

「鳥？」

目を凝らした途端　セネカは「あッ！」と叫んで小窓から跳びのいた。

「ま、魔物だ！　鳥の　！！」

船の周りを、大きな鳥ともコウモリともつかぬ様相の生き物が飛び交っていた。

今度はアリオンが小窓を覗き込み息を呑んだ。

口元がくちばしのようにとがり、翼があり、一見鳥そのものだが身体と脚は人の形をしている。

図体は小柄な人並みの大きさだ。

「……確か、さっきサイラスが有翼族　とか言っていたね。伝令を飛ばした　と。あの魔物のことだったんだ……」

「魔物を雇ってるんだ！　魚の化けモノといい、鳥の化けモノといい、ここの王様はゲテモノ好きなんだなあ」

セネカが妙に感心した面持ちでつぶやいた。

狭い船室の天井からはひっきりなしに行き交う兵士の足音が鳴り響いていた。

時々監督兵の檄が飛ぶのも聞こえてくる。戦いを前に、準備などで慌ただしいのだろう。

「戦っていつけどさ　」

有翼族が飛び交う様子を小窓から外を眺めていたセネカが振り向いた。もの珍しい生き物の観察にも飽き飽きしてきたのだ。

「アテナとかいうネエちゃんの軍と、こっちの海の王様の軍はどっちが強いのかな？」

「……どちらも自分が強いと思っっているから戦いになるんだ。そう
でなかったら戦いくなんて起こらない。守るための戦いというのもある
けど、父さんとアテナ軍の　ゼウスとの争いは、そうじゃない」
セネカの問いに、アリオンはまるで自分自身に言い聞かせるよう
に答えた。その言葉にはしっかりとした確信が込もっていた。

「ふうん。難しいんだなあ……」

セネカはそれ以上は何もたずねることはしなかった。

ふと、先ほどの上官の言葉が思い起こされた。

『王とデメテル様の御子　』

『デメテル様はゼウスの追っ手を逃れ、辺境の地へ移り住んだと…
…』

これを聞いただけでも、アリオンの境遇は生まれた時から、いや生
まれる以前からあまり平穩ではないことが分かった。

一緒に暮らしていた母親とは離ればなれ　。そして嫌いな伯父
との生活。仲間との旅を経て、処刑されそこなつた　。

さらに、黒の獅子王という謎の人物との出会い。

アリオンについてはまだまだ知らないことが多かつたし、想像も
つかないことだらけだった。

セネカはアリオンにあれこれたずねることは、なんとなく避けて
いた。

アリオンの過去は、なんだか踏み込んではいけない領域のような
気がしていた。

時が西に陽が傾きかけてくる頃合いになると、夕刻にはアリオ
ンとセネカに粥と魚貝などの食事が振る舞われた。

温かな夕ゆづ餉を済ませ、お腹が満たされると、途端に眠気がきた。

上掛けを羽織り、船室のすみに座り込んで壁に身をもたせかけて

いたセネカは、すぐにうたた寝を始めた。

横になつたら　？　セネカ　？

すぐ近くでアリオンの声がした。

耳は聞こえていた。

おぼろ気ながら意識もあつたが、強固な眠気にはセネカは打ち勝てなかった。

目蓋はのり付けされたようにぴたりと閉じられ、四肢はだらりと弛緩していた。

うなずくのも言葉も発するのも億劫だった。

ふと、誰かの手が肩に触れるのを感じた。温かな手だ。

その手が肩を抱き、両腕がセネカの体を包み込んだ。

セネカは　自分が今、アリオンの胸に頭をもたれかけたまま、しっかりと腕いだに抱かれ、無防備にその身を預けていることを知った。

途端に　背筋が音をたてて波打った。

セネカはアリオンの力任せに腕を振りほどくと、転がるように後ずさりした。

アリオンはセネカの過剰な反応に相当面食らったようだった。

「驚かせたかい？　ごめん　僕は……」

「さ　さわるな！！」

セネカはわめき散らし、さらに退いた。

「一体……どうしたんだい？　セネカ」

アリオンは、セネカが何故こんなにも取り乱しているのか見当がつかない様子だった。

「大丈夫？　また悪い夢でも見て……」

アリオンは心配そうにセネカににじり寄った。

セネカは立ち上がり、船室から飛び出そうと床を蹴った。

しかし眠りから醒めたばかりの体には、すぐには力が入らない。

たちまちふらつき、がくと膝が折れ転倒した。

「危ない！」

アリオンの手がまた伸びる。

「さわるな！！！」

セネカが叫んだ。

「こつちに来るな！ 近寄るな！！！」

助け起こそうとするアリオンの動きが止まった。

セネカは更に畳みかけるように言葉を継いだ。絶対にアリオンを近付けたくなかった。そのことしか頭になかった。

「テイターンはみんなケダモノだ！ ろくでなしの乱暴者で 残酷で おいらの姉ちゃんはテイターンの奴らに食いものにされた

！ 父ちゃんは……何も悪い子としていないのに、テイターンの奴らに殺されたんだ！！！」

セネカは舌をもつれさせながら、喉を嚔らして叫んだ。

まるで見えない巾で拭い取られたように、アリオンの顔から表情が消えた。

その瞬間、セネカは我に返った。そして、いたたまれなくなり、上掛けを掴み取ると船室の片隅に取って返した。

セネカはその場に身を硬くしてうずくまり、ぎゅっと目を閉じた。アリオンは座り込んだまま眠っているセネカを床に寝かそうとしていただけだった。

おそろしく長く、そして息詰まるような重い時間が流れた。

セネカは、振り返ることはおろか、身動きすることすら出来なかった。自責の念で押し潰されそうだった。

ケダモノ呼ばわりした上に、テイターンを忌み嫌う言葉を、あてつけのように口走ってしまった。

セネカは姉や父親を戒めたテイターンを憎んでいた。

しかし、それはアリオンの無関係な輩だ。

あなたは口が過ぎるようですね。

ふと頭の中で、先ほどのサイラスの言葉がこだました。

セネカの耳に、微かな息遣いと衣ずれの音が届いた。きつとアリオンも反対側の部屋の隅にいるのだろう。

セネカは意識も目もはつきりと冴えたままだった。まんじりとしないうまま夜が更けていった。

どれくらい時間が経っただろうか。

後悔と自戒の気持ちに苛まれながらも、セネカはうつらうつらしかけていた。

やがて、セネカは誰かが声をひそめて話すのを聞いた。

「起きなさい……王が到着されました……」

聞いたことのある穏やかな声だ。

しかし、もう一人は？

「貴様か　アリオンと名乗る者は」

まったく聞き覚えのない低く重厚な声色だ。

「あ……あなたが？」

アリオンがどもりながらも応えるのが耳に入った。

「話を聴こう……こちらへ来るがいい」

声の主の足音が遠のいていった。

これは夢　なのだろうか？　それとも？

睡魔にまとりつかれセネカの意識がぼやけていく。

と。

床を軋ませ、足音が近づいてきた。

(誰　?)

足音の主はぴたりとセネカの際で立ち止まった。

そして、うずくまったセネカの体に人肌に温まった上掛けを被せた。

「お急ぎを」

遠くからサイラスの声が聞こえた。

ということは。今ここにいるのは？

セネカの胸がじんと熱くなった。

踵を返し、足音を忍ばせながらアリオンの足音が遠のいていく。

セネカは再び眠りに落ちるまでの間、ぎゅっと胸を掴まれるような言いようのない痛みを感じていた。

(何だろう。これ？)

得たいの知れないうずくような痛みを感じながら、セネカの意識が徐々に遠のいていった。

セネカはやがて深い眠りに落ちた。

「3」（後書き）

アクセスありがとうございます。

ポセイドン軍の船の中の二人の様子に終始した章でした。
セネカは一旦アリオンとお別れです。

今回は第十三章『開戦』です。

2011・3・10 本文改訂

「1」

また、あの夢だ。

セネカにはすぐに分かった。

辺りは漆黒の闇だった。

しかし、闇の中には仄かに浮かび上がる自分の姿があった。

音も声も存在しない静寂の世界。

まさしくこれは予見する夢だ。

これで何回目だろう。

セネカはぼんやりと反芻した。

でも、いない。

そこにはいつもの若い獅子の姿が見えなかった。

セネカは歩み始めた。

一歩踏み出すと、見知らぬ人の群れの只中にいた。

大勢がひしめき合う人の中に若い獅子の姿を見つけようと、セネカは素早く視線を走らせた。

しかし、人垣の間にも若い獅子の姿はなかった。

セネカはひとりぼっちだった。

周りにはこんなにも沢山の人がいるのに、セネカは強く孤独を感じていた。

いや 周りに人が多ければ多いほど自分が孤立しているように思えたのかもしれない。

寂しくわびしい気持ちだが、次第に急ぎ立てられるような焦りの気持ちに変化した。

いてもたってもいられずセネカは駆け出した。

一刻も早くあの若い獅子を見つけなければならぬ。

焦燥感がセネカを取り巻き、足が次第に速まった。

いない　どこにもいない。

セネカは必死に走った。

不思議なことに足が自然に方向を定めてくれた。

セネカはただひたすらに、ひた走るのみだった。

やがて人だかりが割れ、目の前が拓けた。そして　。

いた　！

前方に若い獅子の姿を見つけた。

だが　。

その姿はひどく小さく、疲れきっているように見えた。

セネカの心から慈しみの思いがどっと溢れ出した。

急いで若い獅子のかたわらまで駆け寄ると、視線を合わせるかのようにセネカはひざまずいた。

二人の目と目が合った。

紺青の瞳がこちらをじっと見据えた。

セネカの胸に一気に切なさがかみあげてきた。

愛しい。

素直にそう思った。

セネカは腕を若い獅子の首に巻き付け、包み込むように抱きしめた。

いきなり騒がしい歓声が上がリ、セネカは飛び起きた。
頭上からだ。

頭の上から歓声や雄叫びが、はっきりなしに降ってくる。
一瞬の間、セネカは自分がどこにいるのかを忘れた。

セネカは目を瞬かせ、辺りを見渡した。

狭い船室と小さな窓枠。低い天井。そして。
体に巻き付いた二枚の上掛け。

船室の入口付近には飲み物と食べ物のをせた盆と、衣服が置いてあつたが、アリオンの姿はない。

セネカは上掛けを引きはがし、立ち上がった。

小窓からは、既に高く昇った陽の光が差し込んでいる。

セネカは思い出した。

ここはポセイドン軍の船の中だ。

歓声がまた一段と大きくなった。

窓に飛び付き、外を覗き見たセネカはたちまち驚愕した。

辺りは海上を埋め尽くさんばかりの大型船の群れがあつた。

どの船の甲板にも鉄でできたの筒のような不思議な形の物が設えてあつたし、甲冑に身を固めた兵士たちの群れがひしめきあつているのが見えた。

昨日とは全く様子が違う。

窓から窺える海域全体には、ものものしい雰囲気か漂っていた。

そんな沢山の船の中でもひとときわ立派な装飾を施された船が目を引きいた。

セネカはすぐにピンときた。

きつと王の乗った船に違いない。

威勢のよい凱歌が、どこからか聞こえてきた。

王を讃える歌だ。

ポセイドンが到着したに違いない。

そういえば。

先ほど、まどろみの中で聞いた低く凄みのある声の持ち主。あれは……。

「やっと起きたのか。まったく寝坊だな。君は」

突然声をかけられ、セネ力はびっくりして振り返った。

声の主は、昨日サイラスと共にやって来た青年だった。

かっちりとした肩幅で長身の青年は、波打つ黄金色の短髪と整った顔立ちの持ち主だったが、その切長の目が何となく人を見下しているようにも見えた。

「まだそんな”なり”をしているのか。早くその小汚い恰好からこちらの服に着替えたまえ」

青年はあきれたようにそう言うと、床に置いてある衣服を指差した。

あからさまに小汚いと決めつけられ、セネ力はかちんときた。

「もうすぐ戦が始まる。ぼんやりしている隙ひまはないんだ。『働かざる者食うべかざる』ここに以上は君にもしっかり働いてもらう」

青年は言い聞かせるように矢継ぎ早に続けた。

「僕の名はイレム。君にとっては先輩であり、上司でもあるから、そのつもりでいるように。まずは上陸の準備だ。すぐに支度に取り掛かるから急いで」

「ちょ　ちよつと待ってくれよ！」

セネ力はちよつと口を挟んだ。

「おいらはあにイづきの従者だ。あのサイラスっていうおっちゃんも知ってる。それなのに何であんたの下で働かないといけないんだ」昨日アリオンから言われた通り、自分はアリオンの専従であることを主張しなければどんな目に遭うか分からないと思って、セネ力は大急ぎで反論した。

イレムの片方の眉が跳ねあがった。『あんた』呼ばわりされて、

今度はイレムの方がかちんときていた。

「聞いている。だからって遊んでいて良いということにはならないだろう。主人が不在の時にもそれなりの働きをしてもらわないと」
セネカがまだ腑に落ちないといった様子だったので、イレムは小さく咳払いをしたあと再び切り出した。

「我が軍は若君アリオン殿が参戦されるとあつて士気も高まっている。だから我々も心して」

「サンセン？ 何？ どういうことだい？」

「戦に出られるということだ ああ。アリオン殿は出陣される。初陣だ。支度はとづくに済まされ、先ほど大将船に移られた」

「えっ！ 戦に？ あにイが！？」

セネカは戸惑い、驚きのあまり目を見開いた。

「何を言ってるんだ？ ポセイドン王の若君なのだから、戦に出ることくらい そんなに驚くこともなかるう」

「でも。そんな……急に……」

セネカは突然のことにすっかり心をかき乱されていた。

眠りのさ中、アリオンがサイラスと共に船室から出ていったことはおぼろ気に覚えていた。

しかし。

まさかそれが、そのまま別れとなるなんて思ってもみなかった。

イレムが、やれやれといった様子で首を振った。

「アリオン殿は王に会われたあと、一旦ここに戻って君にその事を伝えようとした」

「！？」

「だのに君ときたらぐうたら眠りこけて、これっぽっちも起きる気配がなかったんだから！」

イレムはあきれ顔だった。

一方、セネカは愕然としていた。

アリオンが自分を起こしに来ていたことに全く気がついていなかった。

意識していなかったとはいえ セネカは自分のだらしなさを呪った。

「サイラスさんが君を揺り起こそうとするのをアリオン殿は止められた。『寝かせておいてくれ』と言われていたよ。まあ 僕に言わせれば、甘やかし過ぎだな。従者たるべき者、当然主人よりも早く起きるのが当たり前だ。これからは僕が君をみっちり教育するから、そのつもりでいたまえ。まずは お、おい！ どこに行くんだ！？」

セネカは、イレムの長い演説を聴き終えるのを待たずに狭い船室を飛び出していた。

「2」

急なはしご段を一段飛ばしで駆け上がり、船上に出た。

甲板には甲冑を身に付けた兵士の姿と下働きの者たちが忙しく行き交っている。

「邪魔だ邪魔！」

セネカが船の縁へりに寄ろうとしたところに、たちまち大柄な兵士の一喝が飛んだ。

このままともに歩いて行ったら、いかつい海の兵士たちに押し流されるか突き飛ばされるか、はたまた踏みつぶされるかだ。

しかし、セネカは居てもたってもいられなかった。

先ほどの青年 イレムは、アリオンは戦の支度を済ませ、大将船に移ったと言っていた。

もしかしたら、このまま二度と会えないかもしれない。
急に、そんな不安めいた予感がセネカの頭をよぎった。

セネカは慎重に行き交う兵士たちの合間をすり抜け、船の縁に取り付くと海原に浮かぶ軍船を見渡した。

だが、大将船は見当たらない。

きつと反対側だ。

セネカは縁づたい進んだ。

大回りだが、これなら兵士とぶつからずに反対側まで行けるはずだ。

セネカは、アリオンがまさか戦に駆り出されるなどとは思ってこみなかった。

せつかく親父さんと会えたっていうのに、それに、親同士の喧嘩じゃないか！
こんなの信じられない！

出陣とか参戦とかカッコいいこと言っても要するに殺し合いだ。
やられるかもしれない、死ぬかもしれないのに……。

『ポセイドン王の若君なのだから、戦に出るのは当たり前だ』

先ほどのイレムの言葉が甦った。

そしてセネカの脳裏には、大勢の兵士と共に突き進むアリオンの姿が浮かんだ。

その身には海王軍の鎧と甲冑をまとい、手にはいかにも勇ましく剣を掲げている……。

「あつ！」

セネカは前方に見覚えのある人物を見つけた。

サイラスだ。

両手いっぱい何やら荷物を抱え、幾人かの部下を従えている。

サイラスもまた、すぐにセネカの姿を認めたとようだった。

「何をしているんですか！？　ここで。ひとりで？」

サイラスはセネカのかたわらまで近寄るや否や強い口調で問い正した。

「サイラスのおっちゃん！　あ　あにイが戦に出るって本当？」

セネカはサイラスの質問には答えず、息せき切ったげな。

「イレムから聞きましたか。そうです。アリオンは出陣のために王と共に大将船に移られました」

「どこ！？　どこだい？　その大将船ってヤツは！　おいら、あにイに会って伝えたいことがあるんだ！」

セネカは、アリオンの戦に出る前にどうしても会わなければならない理由があった。

仲たがいをしたまま別れることなど考えられなかった。

もしも出陣する前に少しでも言葉を交わせたなら　昨夜、乱暴で心無いことを言ってしまったことを謝って　。それから。それから……。

「それは無理です」

サイラスがきっぱりとした口調で言った。

「アリオンの乗った船には非戦闘員は乗り込む事はできません。それに、すでに浜辺側に向かって移動中です」

「え……。そんな」

張りつめていたセネカの気力が急激に萎んでいった。

「よくお聞きなさい」

サイラスは落胆するセネカを諭すように言った。

「出陣されることはアリオンの今後にとって、とても重要なことです。アロン様もお覚悟はできていたご様子。お父君であられる王と会われて間もなく、急なことも知れませんが、これもテイタンのご子息として生を受けた性さがといつてもよいでしょう」

サイラスは持つていた荷物を際に置くと、セネカをじっと見据え、声を落とした。

「それと。 。 どのような経緯いきさつかは知りませんが。しばらくはおとなしく、そして、そのまま男の子の振りをしないでください。ここにはご覧の通り荒くれた輩ばかりです。あなたがいたいけな少女だと知れたら、どうなるか。保証はできませんよ」

「え……。ツ！？」

セネカは目をむいた。

サイラスは見抜いていたのだ。セネカが女の子だということを。

「な。 なんて？ どうして？」

セネカはうろたえ、その手が無意識に胸元を庇かばった。

「いいですね？ 幸いこの船の兵士たちはあなたのことには気づいていないようです」

「サイラスさん！」

その時、イレムがこちらにやって来るのが見えた。セネカを追いかけてきたのだ。

しかし、心なしか足を引きずっているように見える。

「ああ。 もちろんイレムもあなたを男の子だと思っっていますよ。そう言つとサイラスはいたずらっぽく目配せをした。

「まずは先輩である彼にぴったり張り付いていなさい。決して単独

で行動しないように。分かりましたね？　ああ。イレム。”彼”を頼みますよ。少々混乱しているようです。うろつろして迷子になったり、兵士に踏みつぶされてぺしゃんこにでもなってしまうたら大変ですから　さあ。アリオン様が戻られるまで、しっかり働きなさい”

サイラスはそう言い残すと、再び荷物を抱えこみ、忙しそうに行ってしまった。

「まったく！　勝手なマネをされては困る！」

イレムの剣幕にセネカはたじろいだ。

そして、ここでこれ以上言いつけを守らないのは利口でないと覺った。

サイラスの言う通り、ここは素直に言うことを聞くしかないだろう。

「悪かったよ。もう逃げたりしない」

セネカは申し訳程度に頭を下げた。

「今から何をすればいいんだい？」

「ほお。なかなかいい心がけじゃないか」

下手に出たセネカをイレムは意外そうに見返した。

「しかし、何をすればいいかは、君が僕の側を離れず何をするべきか見極めて、自ら学んでいくんだ。手取り足取り教えてもらおうだなんて思わないように。分かったな？」

イレムは威厳たつぷりに言い放った。

そんなのただの不親切だ。

セネカは反論したい気持ちだったが、おとなしく黙って頷いた。

「返事は？」

「……。わかった」

「”はい”と言いたまえ。”はい”と！」

「……。はい」

「よろしい。では、すぐに先ほどの船室に行つて、服を着替えてこ

ここに戻ってくるんだ。急げよ。ああ　あと、その布」

イレムはセネカが首元に結び付けている朱色の更紗布を指した。

「それ。もしかして女物じゃないのか？　みつともないから、やめたまえ。着替えが済んだら、さっさと捨ててしまふことだな」

「これは婆ちゃんの大切な形見だ！　捨てられるわけないだろ！」
憤慨したセネカは声を荒げた。

セネカは船室に戻り、手早く着替えを済ませた。

従者用の衣服だったが、さらさらとした生地で、平民が手に出来ない上等の布だ。

小柄なセネカにはつくりがやや大きかったが、肩口で留める金具と腰帯で調節できた。

更紗布は細く畳み、腰に巻き付け、しっかりと結んだ。

ルイザから譲り受けた大切な形見の品を絶対に捨てることなどできない。いくら叱られようとも、このことだけは譲れなかった。

それからセネカは大急ぎで、甲板に戻った。

イレムはセネカの体裁を軽蔑したようにちらりと見ただけで特に意見することはなかった。

それからセネカは、サイラスの言いつけを忠実に守り、イレムの側を離れることなく、何をすることもついてまわった。

上陸の準備が万全整った頃、下働きの者や若い従者らが甲板の一面に集められ、詳しい通達と指示が与えられた。

「今日から加わった新入りです。よろしく頼みますよ」

手早く一通りの説明をし終えたあと、長であるサイラスは集まった働き手たちにセネカを紹介した。

「若君アリオンの専従として働いてもらいますが、仕事に慣れるまではイレムが面倒をみます。イレム。頼みますね」

サイラスがそう言い終わるや否や、一斉に皆の視線がセネカに注がれた。

従者の少年や青年らは、興味津々の眼差しでセネカを見たし、下働きの男衆はそれ以上に、穴があくほどセネカを見つめていた。

大勢の、しかも刺すような視線に晒さらされたセネカはとうとう耐えきれず大声をあげた。

「お　おいらを、チビだとかナヨツとした女みたいだとか言ったら承知しないぞ！　おいらは　れっきとした　れっきとした：

…」

言いかけたところで、たちまちイレムのゲンコツの洗礼を受けた。「イタツ！　なにすんだ！」

「口を慎め！　君はまともな言葉づかいというものを知らないのか！」

イレムが青筋を立ててセネカを叱りつけた時、甲冑姿の伝令の兵士が走りこんで来た。

「作戦の変更を告げる！　我が軍は一旦兵を引き揚げ、集結。再結成したのち、明日の夜明けとともに上陸。総力をあげて打って出る！」

船上に集まっていた者たちから驚嘆のどよめきが上がった。

「明日の夜明けとともに？　ということは、一旦武装を解き、明日に備えるということに相違ないか？」

サイラスが念を押すようにたずねた。

「然り。ただし、準戦闘配置のままである。迅速に対処されたし。以上！」

伝令はきびきびとした態度で伝達し終わると、すぐさまその場から去っていった。

「アテナ軍には少なからず水軍もあるという。ここで一旦退いては、わざわざ敵を陣中に引き付けることにならないか　？」

「相手に付け入る隙を与え、陸上の構えも固くなるやもしれんぞ」

下働きから不安にも似た囁きが漏れ出していた。

「案ずるでない！　全ては王のお考えだ」

サイラスは険しい顔つきで一喝すると、再びてきぱきと新たな通達をした。

戦について何の思惑も知識も持ち合わせていないセネカは、右往左往しながらもイレムの際にびたりと張り付いていた。

それでも、戦が明日に引き延ばされることに少し安堵していた。

もしかしたら 出陣前にアリオンと会えるかもしれないと考えていたからだ。

案の定セネカの予想は的中した。

イレムを含めた従者数名が世話係として大将船に乗り込むのを許されたのだ。

セネカは内心小踊りして喜んだ。

なので イレムから、にべも無い命令を受けた時には、さすがに落胆の色を隠せなかった。

セネカは今いる船に残り、兵士たちに出す食事の支度の手伝いと、衣服や天幕などの繕い係に回ることをを言いつけられた。

「な　なんでだよ！」

セネカは猛烈に抗議したが、イレムは聞く耳を持たなかった。

「君みたいな下っ端にうるうるされたんじゃ、出陣前の厳粛な場を乱しかねない。仕事にも不慣れだし　従者の沽券こけんにも関わることだ」

「だからって置いていくことはないだろ！　サイラスのおつちゃんからは、先輩のあんたに”ぴったり”張り付くように言われているんだぜ！」　ぴったり”って！　それによく見て仕事を覚えろといったのはあんたのほうじゃないか！　下っ端をちゃんと教育できないと、恥をかくのはあんたの方なんだぜ！」

イレムはこめかみの辺りをぴくぴくさせながら、深呼吸を一つしたあと深く息を吸い込み、これ以上ない厳めしい顔つきを試してみせた。

「本当に口の減らない奴だな、君は。だが　時と場合を考える！　二度と同じことを言わせるな！」

堪忍袋の尾が切れる寸前とは、このことだろう。

セネカは、イレムの考えが揺るぎないことを覚り、諦めざるを得なかった。

「ここは先輩の言う通り、熟練した者に任せたらどうですか。それに、修繕のあまたの手が足りず困っています」

見かねたサイラスが二人の間に入った。

セネカの手先の器用さは短い間に周りにも知れ渡っていた。

細かな仕事の出来る者は重宝がられ、引く手数多あまただったのだ。

「そうですね　イレムには言伝ことづてを頼んでみてはどうですか？」

しょんぼりとうなだれるセネカに向かってサイラスが提案した。

「ことづつて……」

「アリオン殿に伝えて貰うのですよ。あなたの言いたい事をあなたが直にお話する代わりに」

「いいだろう。引き受けた」

イレムが厳めしい顔つきのままうなずいた。

セネカはしばらくの間考えた。

言いたいことはあつたが、人を介して伝えるには憚はばかられることばかりだ。

イレムに急かされ、ようやくセネカは面おもてをあげた。

「無事で　ちゃんと生きて帰つて来いよ……」

人づつてで伝えられる事といつたらこれしか思いつかなかつた。

「『貴殿の無事帰還を願う』だな。了解した」

「あ！　ちよつと待つた！」

セネカは再び思案した。

「なんだ？　手短にしてくれ。急ぐんだから」

イレムはあからさまに苛々した様子を見せた。

「約束　そうだ。約束を守ってもらわないと。だから　生きて

帰つて来いよ……」

「約束？　約束つて一体なんだ？」

「……どうだつていいだろ。手短に言つたじゃんか！」

「『かの約束を果たされたし。貴殿の無事帰還を願う』了解だ」

「忘ないでくれよ」

「……」

イレムの目がきつと釣りあがつた。

セネカは急いで言い直した。

「あ。ゼツタイ……忘れてほしくないの……お願いします」

セネカがオリンポスに姉がいるかもしれないことを告げた時、探す手伝いをする_{と申し出した}のはアリオンの方だった。

村で安泰に暮らすセネカを巻き込んでしまった詫びの意味もあつ

たのдарろう。

しかし、その約束は今やアリオンとセネカを結ぶ太い絆となっていた。

セネカが約束の事を持ち出したのは、何がなんでも約束を果たしてもらおうと思つてのことではない。

親同士のせめぎ合いにつきあわされ、その上、命を落とすなんて馬鹿らしいと思つたからだ。

言つた以上、落とし前つけてもらわないと困るんだから。絶対生きて帰つて来い。でないと承知しないぞ！　そんな意味合いもこもつていた。

交した約束の事を持ち出せば、アリオンには必ず想いが伝わるはずだとセネカは確信していた。

もつとも、あれほどの剣の達人が、そこいらの兵にやられるわけがない　という確信もありはしたが。

それからというもの、出陣する兵士たちに持たせる弁当や賄いの支度などで、働き手たちは大忙しだった。

戦のための武具や防具には触らせてもらえなかつたが、上陸したのち必要になる物資の確認と衣服や夜着などの繕い物が山のようにあつた。

セネカはたいそう精を出して働いたので、夕刻になる頃には手先が痺れ、まぶたも痙攣を起こしそうになるほどだった。

へとへとになつてるところへ、監督兵の声が飛んできた。

「手の空いているものは甲板に集合せよ！　王の船が通られる！」
作業の手が一斉に止まり、そこにいた者たち全員が弾かれたように動いた。

セネカも即座にそれに倣^{なら}つた。

やっと仕事から解放され、セネカはやれやれと胸を撫で下ろしていた。

甲板は、手の空いている者も空いていない者も一緒くたになり、

更には船の漕ぎ手らも加わっているようで、今までにない混雑ぶりだった。

辺りには肩幅が広く、ごつい体格の連中が壁のように立ちはだかり、前方がさっぱり見えない。

それどころか下手に人の中に紛れこむと、たちまち押し潰されされそうだ。

セネカは船縁に近づくのは諦めて、舟の中央に位置する一番太い檣ほしつゝに張り付くように身を寄せた。

「おお あれがアリオン殿か？」

「王の隣に立っている方だな。うむ たいそう立派な若者ではないか」

話しているのは、すぐ隣に立っている漕ぎ手の男たちだ。

セネカは慌てて立ち話をしている二人の男たちを振り仰いだ。

「トラキアからはるばる王を訪ねて来られたそうだ」

セネカは男の視線の先を辿った。

しかし、鉄壁のような背中ばかりで前方は全く窺い知ることができない。

セネカは恨めしげに男たちを見上げた。

まさか、肩車をしてくれなんてことも言えるわけがないし……。

「聞いたことがあるか？ 王にはもう一人、御子がいらっしやるということを デメテル様との間に」

「ああ。噂では 確か、双子と」

「公にされておらんことだ わけありとの あまり」

男たちの話し声は、周りの歓声にかき消された。

セネカは驚いた。

兄弟だつて?! 聞いてない! しかも 双子?

すべて初耳だ。

セネカはいてもたってもいられず、再び人垣に向き直ると身を屈めた低い体制のまま、柱のように乱立する脚と脚の間を縫うように

進み出した。

潜り込むように、すり抜けるようにして注意深く前進していくと、船縁の壁が目と鼻の先にまで近づいていた。

あと少し！

しかし、最前列に位置する兵士たちは、まるで鉄壁の護りのようにセネカの行く手を阻んでいた。

そこを無理やりに通り返けようとしたセネカは、そそり立つ棍棒のような脚と脚の間に挟みこまれてしまった。

セネカが必死にもがいていると、頭上から野太い声が降ってきた。

「おい！ 邪魔だぞチビ！ 踏み潰されたいか！」

「お おいら、あに……じゃない。王を ポセイドン王を拝みたいんだよ！ まだ一度も見たことがないんだ。だから お願いだ！ なんとか ならないかい！」

セネカは喘ぎながらも、声の主に向かい咄嗟に叫んだ。

アリオンはポセイドンの隣に立っているはずなのだ。

男は、にやり口元をゆるめると大声でまくし立てた。

「さあ！ どいたどいた！ この新入りのチビに王の御姿を見せてやれ」

人波がわずかに割れ、セネカはようやく自由の身となった。

そこを飛びきり素早くすり抜けるや、セネカはとうとう船縁に取り付いた。

が 難関はまだあった。

船縁が、まるで断崖絶壁のようにセネカの前に立ちはだかっていたので、セネカはその壁にかじりつき、よじ登らなければならなかったのだ。

「ほらよ！ チビすけ！」

見かねた一人の兵士がセネカの襟首をつかみ取りひよいと持ち上げると、そのまま縁の上にもで上半身をのし上げさせた。

セネカはお礼を言うのもそこそこに海面へと目を向けた。

目の前には ひと際目を引く旗をはためかせた大型船があった。

最前列にいた別の男がいかにも誇らしげに前方を指差した。

「王は ほれ！ あのお方よ！」
いた !

セネカは遂にアリオンの姿を見つけた。

まず目に飛び込んできたのは並外れた体格と豊かな髭をたくわえた男の姿だった。

あれがポセイドンに違いない。

そして、その隣に立つ黒髪の少年。彼こそ。

アリオンは軽装の甲冑を身に付け、緋色のマントをまとっていた。そして、腰には 兵士に返してもらったのだらう。自らの剣を携えている。

アリオンの立ち姿は凜としていて、たいそう立派に見えた。

男は得意気に続けた。

「お隣に居るのが、ポセイドン王の若君、アليون殿下。ワシも初めて拝見するが……」

アリオンはポセイドンと何やら話しているようだったが、やがて促されて歓声に応えるかのように片方の手を掲げた。

必死に船縁にしがみついているセネカに気が付いた様子はなかったが、セネカはその雄姿があまりにも誇らしかったので、思わず顔を目一杯ほころばせた。

と同時に突然、セネカの心臓が激しく高鳴り始めた。

まるで耳元で、脈打つ鼓動が聞こえるようだった。

セネカは、明け方見た夢の事を思い出していた。

頬がみるみる まるで熱にうかされたよう紅潮していった。

胸がきゅつと痛み、胃のあたりもうずくような感覚におそわれた。なぜこんなに苦しくなるのか、セネカには訳が分からなかった。そうだ。あの夢のせいだ。夢に惑わされているだけだ。

たかが夢 夢の中での出来事にすぎない。

目をつむり、ぶるぶると首を振って、セネカはそう自分に言い聞かせた。

堂々とした馬の頭を形どつた舳が大きく旋回し、大将船が悠々と過ぎていった。

無数の櫂を規則正しく海面に突き刺し、波立つ飛沫を上げながら……。
やがて申し合わせたように、甲板に集まった人垣がばらばらと解け、それぞれが持ち場に戻っていった。

セネカはひとり、船縁にかじりついたままだった。

明日の夜明け早々には戦が始まる。

縁につかまる両手は緊張のあまり冷たくなっていた。

セネカはしばらくの間、海風になぶられ、硬い面持ちのまま凝然と海を見つめていた。

「3」（後書き）

アクセスありがとうございます。

大将船の見送りに集まった人で船が傾くんじゃないか？

（∴^^^；自分自身に突っ込み）

まだまだ甘い部分ありますが、ご容赦ください。

今回は第十四章『ポセイドン陣営』です。

コウミ

2011・3・27 タイトル及び本文改訂

陽が落ちる頃になると船上のそこかしこに松明が焚かれ、その灯火は静かに海上に揺らめいていた。波は不気味なほど静かだった。水面みなもに浮かぶ海王の軍船は、これから起こるべき戦の騒乱を予兆するかのよう、穏やかに佇んでいた。

それぞれの船内では、明け方には始まる戦についての最終準備に余念がなかった。

セネカが乗り込んでいる船でも、従者たちが明日の指示を受けていた。

やがて、彼らは就寝のために各々上掛けを受け取り、寝ぐらとして与えられた船室へと引き上げて行った。

世話係として大将船に入った数名の者たちは夕刻には帰船していた。

「皆、気を引き締めて明日に備えるんだ！ 戦に出ずとも我々は常に海王軍の一員であるということを忘れぬように！！」

ぞろぞろと移動する間も青年たちに向かって檄げきを飛ばすのは、イレムだった。

彼は船室に着くと、まるで戦に赴く兵士らの意気込みをそのまま引き継いだかのように皆を周りに集め、声高々に熱弁を振るった。

「我が軍は最強であり、我が王ポセイドンは世を治めるに最も相応しい王であるということをお忘れな！ 打倒すべきはオリンポス。

アテナ軍だ！！ そのためにも我々を心一つにして」

イレムは時折、拳を振り上げながら熱く訴えた。

セネカは辛抱強くイレムの演説が終わるのを待っていた。

彼に託した言伝ことづてが、ちゃんとアリオンの伝わったかどうか確かめなかったからだ。

イレムが就寝を言い渡すと、皆が船室の思い思いの場所へと散っ

ていった。

セネカは待つてましたとばかりにイレムを捕まえた。

「え？ 何だつて？」

「だから、ことづてだよ。あにイにちゃんと伝えたん……。つ、伝えて、もらえたのかなあ……。つて」

「ああ。あの言伝の事か」

イレムがセネカからふつと視線をそらせた。

「アリオン殿にはお伝えした」

イレムはあさつての方を向いたまま答えた。

「で？」

「で？ つて、今度は何だ？」

セネカの問いかけにイレムは妙に苛々した様子だった。

「返事だよ。何かこつちにことづかつてないかい？」

「ああ……。何も。特に何も……。言われてなかったな。『分かった』とだけ仰つていた」

「そんな……。そんなことないだろ？ なんかさア、他に言つてなかったかい？ 思い出してくれよ」

セネカは困惑と疑念の表情を隠すことができなかった。

「なんだ？ その態度は。気にいらぬな。僕がまるで嘘をついてるとでも言いたげじゃないか！」

イレムは噛みつくように厳しい眼差しを向けた。

「そんなつもりじゃ……。でも、もう、いいや。伝えてくれてありがとう」

セネカはふらりとイレムの側から離れた。

落胆のあまり視線がうろろうろとして、定まらなかつた。

セネカは、昨夜の出来事がアリオンの機嫌を損ねたのは間違いないと確信した。

「そこ！ 自重しろ！」

突然、イレムが鋭く言った。

気持ち沈み、うつ向いていたセネカは一瞬、自分が叱られたの

かと思い、反射的に肩をすくめた。

しかし、イレムが厳しい視線を投げ掛けていたのはセネカの背後にいた二人の青年だった。

「明日は早い！ 全員夜明け前には起きなければならぬぞ！
皆、早く休むように！」

船室に詰め込まれた従者たちは、雑魚寝状態だった。

壁掘りの場所は既に年長の従者に占領されており、空きがない。
下っ端の連中は船室の中央に窮屈そうに固まっている。

セネカはその中に混ざるのをためらった。

まさか立って眠るわけにもいかないし ipp そのこと甲板に上
がって、夜風に当たりながら眠ろうかとも考えた。

しかし、上には下働きのガサツな男たちがたむろしているはずだ。
セネカは半ば途方に暮れ、困惑顔でうろろするしかなかった。

「ここが空いてるぜ。おチビさん」

奥にいる一人の青年が手招きしているのが見えた。

入口付近に小さな灯りしかない船室は暗かったので、どこが空
いているのだろうとセネカがじっと目を凝らしていると、不意にイレ
ムがセネカを隣に呼び寄せた。

「君はこっちに来たまえ」

船室のどこかから、ぴゅつと口笛が鳴った。

「そこ！ 騒がしいぞ！」またイレムが一喝した。

セネカは上掛けを体にきつく巻き付けると、イレムの際に腰を下
ろした。

「君は」

隣にいたイレムがおもむろに口を開いた。

「アليون殿とは昔からの知り合いなのか？」

イレムは勘ぐるような口調だった。

「えつと そんなに昔……というわけじゃないけど……さ」

いきなりこう切り出されて、セネカは口ごもった。

答えるのを拒むわけにもいかないし、どこまで話していいものな

のか。

セネカは迷いながらも咄嗟に考えを巡らせ 住んでいた村に居られなくなり、成り行きで出会ったアリオンと意気投合して旅に出た ということにしておいた。

「ふうむ。要するに、村を追い出されて行くあてもない君を、アリオン殿は擁護してくださいましたわけなんだな？」

「うーん……。まあ、そんなとこ、かな……」

「なんて慈悲深い方なんだ」

イレムは感銘を受けたような面持ちでうなずいた。

「君もこの恩に報いて、これからは心を入れかえ、まっとうに生きる道を進みたまえ」

イレムは、セネカが何か悪事を働いたために村を追い出されたのだと、思い込んでいたようだった。

これにはセネカの自尊心がいたく傷つけられたが、反論するのは抑えておとなしく黙っていた。

今はまるく納めるのがテだ。

「君は、弓の腕は相当なものなのか？」

イレムが、今度はやや問い詰めるような口調でたずねた。

「アリオン殿が、君が弓の名手だと仰っていたが ? どこで習ったんだ？」

セネカは冷汗が出る思いで、昔住んでいた村で弓の師匠に教わったことと「名手」ほどの腕前ではないということを告げた。

アリオンは、セネカを素晴らしい弓の使い手と信じ、疑っていないのだ。

「ふうん」イレムの目は明らかに疑いの眼差しだったが、それ以上追及することはなかった。

イレムがようやく口を閉ざしたのでセネカはホッと胸をなでおろした。

夜が深々と更けていった。

セネカは昼間の労働でこんを詰めたので疲れていた。

しばらく起きていようと頑張ったが、すぐに強い睡魔が押し寄せてきた。

セネカは上掛けを巻き付けた体を団子虫のように丸めて横になった。

しかし、隣に居るイレムは横になる気配がない。

壁にもたれ、周囲に見まわし 文字どおり目を光らせている。

「……。もしかして寝ずの番かい？」

セネカが、鉛のように重い瞼を押し上げ、半分まどろみながらたずねた。

「監督役を仰せつかっているからな。皆が眠ってから見回りをして、それからだ だから君も早く休みたまえ」

イレムは静かにきっぱりと言った。

ふとセネカは、それまでイレムに対しておぼろ気に抱いていた疑問を投げ掛けた。

「あのさ……どうしてイレムは兵士にならなかったんだい？」

イレムの肩が異様に反応したように見えた。

「……。なぜ、そんなことを聞くんだ」

「いや だって。なんとなくさ。威勢もいいし、まるで兵士みたいじゃないか」

イレムからは若いながらもみなぎるような猛々しさが感じとれた。サイラスや他の従者たちのような優しく物腰の柔らかいところがあまり感じられない。

そんなイレムがなぜ従者の身に甘んじているのか、セネカは不思議だった。

「最初は兵士に志願した」

しばらく沈黙が続いたあと、イレムが重々しく口を開いた。

「でも、稽古中に怪我をしたんだ。腱を痛めて 。今では杖も、使わなくなったがな 」

イレムは平静を装っていたが、悔しさがにじみ出るのを抑え切れ

ない様子だった。

「おかげで船内をうろちよろ走り回るネズミを走って追いかけることができないのさ」

自虐的にそう言い放つと、顔をぱいと横に向けた。

「……そうだったのか」

セネカは今朝のことを思い出していた。

あの時　セネカが狭い船室を飛び出した時、イレムは足を引きずりながら甲板にやって来た。
もしかして　。

セネカはぼんやりと考えた。サイラスは手助けをさせるために、自分をイレムの側に付けたのかも　？

「そこ。静かにしないか。迷惑だぞ」

イレムが部屋奥に向かって注意した。

数名のひそひそ声がぴたりと止んだ。

「あーあのさ……」

セネカがおずおずと言った。

「なんだ？」

「おいら、足は丈夫だ。だから、あんたの足代わりになれるかもしれない。言いつけてくれれば　少しは役に立つと思う」

「……」

イレムは無言のまま曖昧なうなずきを返した後、「ああ」とだけ呟いた。

寝返りを打つ衣ずれの音や床の軋む音がようやく止み、船室内は静寂に包まれた。

そこかしこからは微かな寝息かすが聞こえるだけで、そこにいる者はほとんど眠りについたようだった。

「あ　。　そうだ。思い出した」

突然イレムが息を潜めて言った。

セネカはうとうととした心地よい眠りの入口から無理矢理、現うつに引き戻された。

「そう言えばアリオン殿から言伝を預かっていたんだっ」

「……え？」

セネカは寝ぼけ眼を瞬かせた。

「約束のことは忘れていないから安心するように。それから 必ず戻って来るから、待っていてほしい。そう言われていた」

「え。え？」

「以上だ。明日は暗いうちから起きなければならない。早く眠るんだ。いいな」

イレムは、そう言い残すところそくを灯した燭台を手にして、立ち上がった。

船室内の見回りのためだろう。

その姿を目で追いながら、セネカの胸中は静かに沸き立っていた。

「約束のことは忘れていないから」

「待っていてほしい」

セネカはアリオンのからの言伝を反芻していた。

嫌われたわけではなかった。よかった。

セネカはの心は穏やかな安堵の気持ちに包まれていた。

「起床！ 起床ーっ！！」

イレムのよく通る声が響き渡った。

「ねぼすけ！ いつまで眠ってるんだ！」

セネカはイレムに文字通り叩き起こされた。

「んだよお……さつき寝たばっかじゃんか……」

「もう朝だ！ 皆とっくに起きてるぞ！」

遠くでほら貝の高らかな音色が聞こえていた。

まだ辺りも暗く、夜が明けきらない頃合いだったが、従者たちは起き出し、ときばきと身支度をしている。

「『役に立つと思う』だって？ まったく！ さっさと起きて上掛けを畳むんだ！」

オニ！

眠気を必死で振り払いながら、セネカは心の中で悪態をついた。

セネカはほとんど手探りで上掛けを畳み、ごしごしと目を擦りながら起き上がった。

「2」

昨日に比べると、船は大きく波に揺られていた。
時化しげが来るんだ。

セネカは、そう思いながら上掛けの束を抱え込んだ。

案の定、船外は強い風にさらされており、その船体は波に揉まれて不安定に傾いでいた。

上を見上げると、光陽が差し込む隙間もない程、どんよりとした分厚い雲が空を覆っていた。

鉛色の上空からは今にも大粒の雨が落ちてきそうだ。

「第一団！ 急げ！ 天候が崩れる前に水場の確保！ 天幕の設営！」

「荷は乗せ過ぎるな！ 転覆のおそれがある！」

命令とも怒号ともつかぬ大声が飛び交う中、イレムは従者たちを呼び集めた。

セネカはイレムに仕えるかのようにびたりと張り付いていた。

「全員いるな？ 上陸については昨日の説明通りだ」

イレムはこれまでにない険しい顔つきで皆を見渡していた。

「上陸したのはちは、然るべき部所に速やかに移動。ただし炊事班は、支度が整うまでは救護班の補佐にまわるように。行動は迅速に！ それから荷の運び出しについて」

ここでイレムはセネカの方をちらりと垣間見た。

「運び出しは慎重に。特に陶器類は貴重だ。うっかりぶついたり落としたりして壊すことのないように」

セネカは緊迫した空気にすっかり気圧されてしまい、イレムが送った皮肉めいた眼差しの意味が汲みとれなかった。

しかし、緊張していたのはセネカだけでなかった。

集まった従者たちは全員、顔をこわばらせ、口元を固く結んでいた。

「今日はヤケにしおらしいじゃないか。拍子抜けするな」
殿しんがりを務めるイレムは、随行していたセネカに向かって意地悪く言
った。

当たり前だ。戦なんてそうしょっちゅう経験するモンじゃないんだ
から。

言い返す代わりにセネカはイレムにたずねた。

「戦は……いつ始まるんだい？　もしかして、もう」

「ああ。始まっている。明け方のほら貝の音が合図の筈だ」

「……」

大丈夫だろうか。

セネカの顔つきがみるみる硬くなった。

「なあに、心配は無用だ。我が軍の攻撃力は最強。守りも強固だ。

オリンポスの軍勢など恐るるに足らん！　一日でケリがつくさ！」

イレムは鼻息荒く言い放った。

ポセイドンに対する揺るぎない信頼と勝利への確信がありありと
見て取れたし、気持ちもこの上なく高揚しているようだった。

きつと寝不足が祟っているに違いない。セネカはやや冷めた

目つきでイレムの横顔を眺めた。

戦の勝ち負けよりも、セネカにはアリオンの安否の方が気がかり
だった。

各々が乗船した小舟は、搬送を繰り返すため人と荷を陸に揚げる
と、再び軍船へと折り返し漕ぎ出していった。

上陸した者は順々に内陸に向かって歩みを進めていた。

浜には荷物を抱えた者たちの長い列ができた。

「兵の誘導に従って進みなさい！　急いで　　！　雨の降り出す前
にすべて備えないといけません！」

サイラスも、普段の柔和な顔つきを何処かに置き忘れたかのよう
に厳しい面持ちで声を張り上げていた。

遠くから不気味に雷鳴が轟き、海からは生暖かい風が流れてくる。もはや雨が降るのは時間の問題だった。

セネカは下働きたちが恐るべき速さで設えた天幕の入口をくぐり、中へと入った。

太い柱と梁で組まれた天幕は、かつてルイザと住んでいた村外れの小さな家ほどの広さがある。

セネカはもの珍しげに天幕の中を見回していた。

ちよつとした建物並の造りだ。

セネカ初めて見る立派な天幕にしばし時を忘れて見いつていた。

この天幕はアリオン専用のものだという。

「何をしている！ ぼやつとしている隙はないんだぞ！」

たちまちイレムから一喝された。

「わかってるよ！ 雨漏りしそうなすき間がないかどうか点検していただけさ」

「ふん。どうだか」

天幕へは寝台や箆笥などの家具類、敷物など、粗方のものは運び込まれていた。

イレムとセネカは両手いっぱい抱え込んでいた上掛けや着替えの衣服、寝間着などの束をどさりと置いた。

「今のうちに灯りを用意しよう。天幕の布に燃え移らないよう、火の扱いには注意して あと置き炉を炊いて。暖を取るためにな」

おぼつかないながらも、セネカはイレムの指示を器用にこなした。二人が天幕の主を迎え入れるための支度に奔走している頃。

上空に稲光が走り、空を地を震わせるような雷鳴が鳴り響いた。重く垂れこむ雲の塊からはぼつりぼつりと雨粒が滴り落ち、乾いた地面に降り注いだ。

雨脚は次第に強く、ぱたぱたと天幕の屋根を叩きつけ やがて、陣営周辺は水煙に包まれた。

天幕の集落の中ほどに位置する広場には櫓やぐらが建てられ、そこからは銅鑼の音と共に前線から戻った伝令が戦の報を伝えていた。

「我が軍主翼は敵の中央を押し込みつつ前進！」

「右翼、左翼に展開する敵の騎兵も我が軍の魔人族の強襲による切り崩しで優勢！ 敵は既に壊走を始めている！」

伝令が声をからして伝える度に辺りからはどよめきと歓喜の音が湧き起こった。

そんな中。

一際けたたましく銅鑼が打ち鳴らされた。

「本営にてアテナ軍の副大将アレーヌを討ち取ったぞー！」

「なんと！」

「副大将を？ 本当か！？」

そこに居合わせた者、全員が色めきたった。

「で 誰が！？」

「若君、アリオン殿だ！」

「えッ！？」

セネカは頭から箕みのをすっぽりと被り、炊き出し用の薪の運び出しの最中だった。

少しでも雨に当たるまいと速めていた足並みがぴたりと止まった。櫓からは伝令の報が続く。

「敵の副大将戦死により、本営は混乱している！ しかしながら、アリオン殿の消息は不明」

セネカの腕から薪の束が滑り落ちそうになった。

伝令はその後も何かを伝えていたようだったが、セネカの耳には入ってこなかった。

イレムが立ち尽くすセネカを背後からどやしつけた。

「ぼんやりするな！ 戦果の報に耳を傾けて自分の仕事をおろそかになるようでは」

「今、あにイが消息不明だって。それって無事かどうか分からないってことじゃ？」

イレムの忠告には応えず、セネカは不安げな様子を露にした。

「ああ、そうだ　しかし、アリオン殿には護衛がついている。おそらく大丈夫だろう……。だが……」

「だが？」

「いいから　心配する暇があつたら体を動かさせ。戦でいちいち人の生死に気を揉んでいたら、身がもたないぞ」

「そんな　心配するだろ！　ふつう！」

セネカは憤りのため声を荒げたが、それでもイレムの「大丈夫」という言葉に救われた思いだった。

「副大将をやつつけたって　あれ、すごいことなんだろう？」

薪が雨に濡れないよう、箕の中にしっかりと抱えこみながら、セネカは興奮を押さえ切れない様子で言った。

「ああ。第一等の戦果だ」

イレムは、なぜかにこりとしめない。

「しかし、突出し過ぎではないだろうか……もしかすると、独断先行かもしれない」

歩みを進めながらイレムが思案顔で呟いた。

「　？　何が？　どういうこと？」

セネカはイレムに追い付こうと早足になった。イレムの言っていることがどうも腑に落ちない。

「いいか？　アリオン殿は主翼のポセイドン王の陣と共に動かれているはずだ。なのに、先ほどの報から推し量るに　中央突破の前に本営に取り付いたということになる」

茅で葺いた吹き晒しの資材置き場に薪を並べていたイレムは、手元がおろそかになっているセネカに注意の目配せをし、更に続けた。

「いくら若君といえど　まさか初陣の者を敵の真っ只中に討ち入りさせる命令など、王は　するわけがない」

「じゃ、あにイが自分勝手に飛び出した、ってことなのかい？」

セネカの問いにイレムは無言で応えた。

「敵の副大将が本営から離れて指揮を執っていて、そこを狙ったと

いうことも考えられるが……確実に言えることは、敵の只中において護衛のない状態は危険過ぎるということだ。いや。それよりも……」

「それよりも？」

「問題なのは単身での無断行動だ」

イレムは今やセネカと面と向き合っていた。

「大きな手柄を立てたい者は、兵士たちの中にはごまんといるんだ。その者たちからしたら、アリオンの行動は”抜け駆け”以外のなものでもない」

「なんで？ どうしてだよ？ 一番乗りがいけないっていつのかい？」

「和を乱してはいけないということだ。戦の最中に皆が皆、勝手に飛び出して行ったらどうなる？ 主導者の指揮の元に進行してこそ、然るべきなんだ」

「……。そんなモンかなあ」

「そういうものなんだ！ 天幕に戻るぞ」

夕暮れ前。

立ち並ぶ天幕の群れを縫って、下働きや従者、小間使いたちが忙しく行き交っていた。

天幕の入口にはそれぞれ支柱が立ち、夜に備えて焚かれた松明が赤々と燃えていた。

雨はいつしか小雨から細かな霧雨に変わっていた。

櫓からは幾度も戦況が伝えられていたが、あれからアリオンに関する報は伝えられていない。

「大将の首を取ったらこの戦はおしまいだ」

イレムがポセイドン軍優勢の報を受け、内に秘めていた闘志に火がついたようだ。セネカ相手に戦談義を繰り広げている。

「もしくは敵側が降伏してきたら、だな。そうしたら大将であるアテナを捕虜にして、オリンポスに攻め入る。そして我が王は三

界の王に君臨する」

「……そんな時は、大将のアテナはどうなるんだい？」

「勿論、処刑だ」

「……。じゃさ、もし、こっちが負けた場合は、その逆……？」

「うむ。そうだな　しかし、縁起でもない事を口にするんだな君は。我が軍が負けることなどあり得ない」

イレムはきつぱりと言いつつ切った。

セネカはうんざりしていた。

もうこれ以上イレムと話をしたくなかった。

何で好き好んで殺し合いの話をしなくちゃならないのだろう……。

「敵の大將はぬくぬくと本営にとどまり、戦闘の指示を下すのみの腰抜けだ。自ら率先して兵士と共に戦いを敢行されるポセイドン王は、最も勇猛な王だ！」

「でもさ、危ないじゃんか。大将がそんな戦の真ん前に出たら、討たれる場合もあるんだろ？　槍で突かれたりとか……」

「……。君はポセイドン王の事をよく知らないからそんなことが言えるんだ」

イレムは得意気に鼻の穴を膨らませ、セネカを見返した。

「煙るような雨が上がり、雲間から光が差し込み始めた。」

「陽は既に大きく西に傾き、一日の終わりを告げようとしている。」

「戦線に進み出た陣も順々に帰還の途に就き、それを迎える側は、まさに戦乱のような忙しさだった。」

「これはこれは！　養育係、ご苦労なことで」

「軍船にいた監督兵のラザレがイレムに声をかけた。」

「イレムのかたわらにいたセネカはぎくりとして、身を隠すように先輩の背後に回った。」

「我が軍は圧勝！　間違いなしだ！　祝杯の準備を早急に進めよとのことだが　畜殺場に手が足りず困っておると聞く。帰還した王や武將たちに新鮮な肉を振る舞わにゃならんしな。で」

ラザレはわざとらしくイレムの背後に目をやり 「そいつを少しばかり貸してもらえんかな？」と、意地悪な笑みを浮かべた。

「いえ。ラザレさん。この者は、家畜を捌さばくにはあまりにも非力でしょう。それに鶏の血で汚れたまま若君の給仕させるわけにはいいませんので……」

「おお！ それはごもつともで」

ラザレは大げさに肩をそびやかした。

「しかしながら、困ったことに我が軍の若君殿は戦の作法もご存知ないと見える。どうやら田舎暮らしが長かったせいでしょうな。そちらの 有望な従者殿の教育も大事ですが、若君殿の教育も多分に必要かもしれまして」

ラザレは皮肉たっぷりに、こう言い放つと大股にかっばし、行ってしまった。

自分もアリオンも酷くバカにされたような気がしてならなかったが、セネカはラザレの氣勢に圧され、何も言い返すことが出来なかった。

セネカはイレムに感謝の眼差しを送ったが、イレムは妙によそよそしく淡々と仕事の指示をするのみだった。

陣営の広場に大きな焚火が熾された。

しかし、夜気が陣営全体を包む宵の頃になってもアリオンは戻らなかつた。

ポセイドン王の帰還の報が伝えられたのは、それから間もなくのことだつた。

陣営に戻つた武将や兵士たちは皆、意気揚々とした様子で、既に祝杯の美酒に酔いしれていた。

セネカもイレムと共に給仕手伝いを仰せつかり、慣れない手つきで杯を並べた盆を運んでいた。

「倅はまだ戻らんか？」

特別に設えた肘掛け椅子にどつかと腰掛けている堂々たる恰幅のつわものが、脇に支えるつか武将にたずねた。

あれが、ポセイドン。

セネカは立ち止まり、ちらりとポセイドンの姿を盗み見た。

波打つ栗毛色の長髪と、同じく豊かに蓄えた口髭。

松明に照らし出された眼光は鋭く猛々しさが感じられたが、どこか親しみ深く、温かそうな光を宿していたる。

「はっ！ 未だこの陣営に戻りませぬ故、現在搜索の二団を取りまとめ方々ほうほうに向かわせております！ しかし、伝令の有翼族の者は既に引き揚げ……」

「鳥目どもめ。肝心な時に まあ、仕方ない。それにしても、しようのない奴だ。アテナの居所を知るや、脇目も振らず飛び出して行きおつた」

「しかしながら、王よ。アリオン殿は大戦果をあげられました。お陰で敵の軍勢はみるみる浮足立ち」

「分かつておる。もう、よい」

「はっ」

ポセイドンは武将の言葉をを遮り、やや不機嫌な様子で杯を傾けた。

「さすが、冥界で鍛えられただけのことはある。あやつならば単独でいても敵の雑兵の手に掛かることも、まず無いだろうが」

セネカの立ち聞きもここまでだった。

眉が斜めにつり上がったイレムに促されて、セネカはさすがとその場から退散した。

アリオン用にと設営された天幕の中は温かく、清潔に整えられ、主の帰りを待つばかりだった。

セネカはアリオンの帰りを待ち侘びるあまり、天幕の中と外とをうろつろと行ったり来たりしていた。

しかし、依然としてアリオンが戻ったという報は入らない。

「なかなかお帰りになりませんなあ。もぬけの空ではせつかくの立派な天幕ももつたない。負傷した兵の安息所として提供してはどうかな？」

追いうちをかけるように、ラザレの辛辣な皮肉が飛んだ。

セネカは言い返すことが出来ないほど戸惑い、頭の中が混迷していた。

「ラザレさん。口を慎んだ方がよろしいかと思えます。若君が討たれたとの報は 入っていませんし」

イレムまでが暗く、声を落としていた。

縁起が悪い事を言うのはそっちじゃないか！

セネカは内心いらだった。

夜の帳は次第に辺りを漆黒に染めていった。

時が刻々と過ぎていく度にセネカの腸はきりきりと痛み、気を揉むあまり胸が締めつけられたように苦しかった。

一体どこで道草食ってたんだか。帰って来たらとっちめてやる！人がこんな心配してるっていうのに！

心の中で散々悪態をついたものの、セネカの頭の中では不安でいっぱいだった。

「もしも、このまま帰ってこなかったら……？」

敵の軍にやられたのだろうか？ つかまって捕虜にでもなったのか？ 怪我でもして動けないのかもしれない。もしかしたら…槍で一突きにされて……。

セネカはぶるぶると大きく頭を振り立てて、頭の中を巢食う重く黒々とした想いを吹き飛ばした。

大きく息をついた後、セネカはようやく天幕の中をうろつくのをやめた。そして、少しでも気持ちを落ちつけようと寝台の端に腰を下ろした。

あれこれ心配しても仕方がない。待つしかない。そう心に決めた時、いきなり天幕の外布が撥ね上がった。

セネカは驚きのあまり、座ったまま捲れ上がった天幕と同じくらい飛びあがった。

天幕の中に飛び込んだのはイレムだった。

「今 戻られた そうだ」

イレムは弾む息を整え平静を装おうとしていたが、無駄だった。

「えッ？」

セネカは一瞬、戸惑い、言葉を失った。

「今、アリオン殿が陣営に戻られた。無事に帰還されたとのことだ。急いで お、おい！ 待てー！」

イレムは、脇をすり抜けて飛び出そうとするセネカの襟首を、振り向きざまに掴み取った。

「な。なにすんだよッ！」

セネカは首を絞められた格好で引き止められた。

「それはこっちの台詞だ！ いったいどこに行くつもりなんだ！？」

「なに言ってるんだよ！ あにイを出迎えに行くに決まってるじゃないか！！ やつと 生きて帰って来たんだぜ！？」

「そう言うと思った 全く……。君ほど単純な人間には、お目に

かかったことがない」

イレムは半ば呆れ顔だった。

「君は従者じゃないのか？ ならばそれらしく行動すべきだ」

イレムはてきぱきとセネカに指示を与えた。

「急いで着替えと上掛けを持ってきたまえ。まず湯殿に行く。ついて来たまえ」

イレムはセネカを従え、急ぎ足で湯殿へと向かった。そして、浴槽に熱い湯をたっぷりはるようにと下働きに命じた。

次は炊き場に向かい、そこで賄いの小間使いに食事を手配を命じた。

「盆はアリオン殿の天幕にお届けするように。温かいお食事をご用意するんだ」

そう念を押すと、イレムは上掛けを抱えるセネカを従えて焚き火が燃え盛る広場へと向かった。

「考えなしに行動したら、ただの野次馬じゃないか！ 従者たるべき者、主の行く一歩先を考え、半歩下がって進むものだ。分かったか？」

セネカは敬服の面持ちで、跛を引きながらも勇んで歩みを進めるイレムに歩調を合わせていた。

「とにかく、無事でご帰還されたのは何よりだ。アリオン殿はさぞお疲れのはずだ。我々は心を尽くしてお迎えする。いいな？」

イレムはしっかりと口調だったが、その声色は安堵に満ちていた。セネカは深くうなずいて応えた。

「まだ おみえになっっていないようだな」
隣にいるイレムが小さく呟いた。

セネカはイレムと共に陣営中央の広場に焚かれた火の際きわ、ポセイドンが座している肘掛け椅子の後方に控えていた。

ポセイドンは武將たち脇を固められ、泰然と座していた。

しばらくすると、松明を掲げた数名の武將の一団がこちらに向か

つて来るのが目に入った。

セネカの心臓がはねあがった。

思わず身を乗り出そうとするセネカを、イレムは押しとどめた。

「お辞儀をするんだ」

イレムは低く唸り、セネカを睨んだ。

「なんでお辞儀しないといけないんだよ」

「……。いつまでも馴れ合いのままにいるんじゃない！ あちらは海王の若君なんだぞ！」

イレムにたしなめられ、セネカはしぶしぶ、ぺこりと頭を下げた。

「ようやく戻ったな。ふん　まんまと手柄をもぎ取りおつて

怪我はないか？」

ポセイドンは低く静かにたずねた。

やや皮肉めいてはいたが、その声色はどこか誇らしげな様子だった。

「はい」

アリオンはもう目の前にいる。

セネカの鼓動が一気に高まった。

セネカはとうとう我慢出来ず、少しだけ顔を上げて、そっと二人の様子を盗み見た。そして、思わずあつと声をあげそうになった。

一瞬、目を疑った。

目の前にいる少年は本当にアリオンなのだろうか？

セネカの目に映るアリオンは　全身、泥と血にまみれ、酷い有り様だった。

雨にあたったせいだろう。濡れた頭髪はべったりと額と頬に張り付き、着衣もマントも泥に汚れ、重たそうに肌にとわりついていった。

しかし、セネカ別のことに目を奪われていた。

炎の灯りに照らし出されたアリオンの顔色は蒼白かった。

その目は鈍い光を放ってはいいたが、まるで何かに憑かれたように落ち窪み、視点ははっきりと定まっていないうちに見えた。出陣前

の精悍で凜とした様子はみじんも感じられない。まるで、一気に歳を重ねたかのような。

セネカは思わず身震いした。

戦がこれほどまでに人を疲弊させるものだということ、まざまざと思い知らされたようだった。

「初陣でさぞかし疲れただろう」

ポセイドンが肘掛け椅子からゆらりと立ち上がった。

「はい。あ……いいえ」

アリオンは静かに応じた。

「うむ。だがな 儂は、お前にまずは戦を見識みしるようにと言った筈だ。なぜ、飛び出したのだ。功をあせったか？」

「……いいえ」

アリオンが視線を落とし、小さくかぶりを振った。

「ふん まあ、よい」

ポセイドンの巨体がアリオンに向き直った。

「貴様がアテナの兵の手にかかっていたら、守り切れなかった護衛の者の責任となるのだ。己の振る舞いには今後気をつけよ」

「……はい」

二人はそれから二言三言、言葉を交したが、ポセイドンから手柄を誉め称えている様子は、とうとう見られなかった。

むしろ叱られ、諭されているように感じられる。

何もこんなに皆が見ている前で叱らなくてもいいのに !

セネカは齒噛みしたい思いだった。

それに。

セネカは先ほどから妙な違和感を感じていた。

この二人、親子なのに あまり似ていない。

「杯をもて」

「はっ！」

突然のポセイドンの命令にイレムは間髪入れず背筋を伸ばした。

「君が行きたまえ」

「は？」

イレムは酒樽から手早く酒を杯に注ぎ入れると、脇にいたセネカに盆を手渡し、小声で言った。

「王を間近で拝見できる機会は滅多にない。名誉なことだ。さあ早く。行きたまえ」

「ええええ！」

イレムに急かされ、セネカは二つの杯をのせた盆を手に、まるで絞首台に赴く気分で見守る前に進み出た。

こんなありがた迷惑は他にない。

「中身を溢すんじゃないぞ！ しっかり運べ」

背後からの声に心える余裕はなど全くなかった。

セネカはがちがちに凝り固まったまま、ポセイドンに盆を差し出した。勿論、海王の顔を仰ぎ見る勇氣はない。

ポセイドンは緊張のあまり顔色の悪くなった小さな従者から杯を二つとも受け取った。

「飲め」

ポセイドンはアリオンに杯をぐいとつきつけた。

「儂からの杯だ。今度は受け取れよ」

アリオンは一瞬ためらったものの、意を決したように腕を伸ばし、父親から杯を受け取った。間近で固唾を飲んで見守っているセネカに気付いた様子はなかった。

アリオンは手にした杯を傾け、酒を一気にあおった。

「いい飲みっぷりだ」

アリオンが飲み干すのを見届けてると、ポセイドンは満悦の面持ちで自らの杯も空にした。

「皆の者！ 聞くがいい！ 明日はこのまま前進する！ 敵は既に背を向け潰走し始めておる！ 一気に攻め込むぞ！」

ポセイドンの勇ましい檄に、そこに集まった者達全員がかしこま
って頭を下げた。

「お前はもう休め。明日も今朝と同じように早いからな」

ポセイドンは杯をセネカの掲げていた盆に戻すと、武将らを引き
連れて天幕の立ち並ぶ陣営の奥に消えていった。

セネカはアリオンの方を振り向いた。

アリオンは、ひどく疲れた様子で立ち尽くしていた。

一気に飲んだ強い酒のせいで頬に赤みは刺したものの、うつ向き、
どこか一点を見つめる眼差しは虚ろなままだ。

セネカはまた、乱暴に胸ぐらを掴まれたような痛みを感じた。

こみあげてくる得体の知れない感情を押し殺し、セネカはアリオ
ンに近寄った。

「あにイ あにイったら」

途端、弾かれたようにアリオンが面をあげた。

険しく訝しげな表情が一気に拭い去られ、アリオンの顔には満面
の笑みが浮かんでいた。

「セネカ！ 君だったのか」

アリオンは今や溢れるような笑顔だったが、どこか儚げで弱々し
く見えた。

セネカはアリオンが自分に気づいてくれたことと、笑顔で応えて
くれたことが嬉しかった。

しかし、何と言葉をかけていいのかが全く分からなかった。

セネカはやや顔をこわばらせながら、ようやくニツと白い歯を見
せた。

「3」（後書き）

アクセスありがとうございます。

【更新のお知らせです】

今回第一章『孤独から共存へ』の前半部分を訂正しました。

このお話のタイトルが『Sena』である理由が第十章まで明らかにされないのは、読者様にも不親切と気が付き、いつかは訂正したいと思っていました。

完結後に全体を見直して改訂版という形で…と、考えていましたが思い切つて今の段階で訂正させていただきます（完結がいつになるかわかりません…；）

連載中に（誤字脱字以外）ちょこちょく直しを入れるのって見苦しいし、読者様を混乱させてしまうため避けたいことはありませんが… 申し訳ありません（<|>）

これからも試行錯誤&こつこつ精進しながら頑張つて書いていきますので、よろしくお願いいたします。

コウミ

「失礼致します。この者に一から教えねばなりません故」
自らマントの留め具に手をかけようとするとアリオンを制するよう
に、イレムが頭を下げた。

初陣から無事に帰還したアリオンは、湯殿に案内され手厚いもて
なしを受けていた。

泥水と血糊がこびりついたマントがアリオンの胸元から引き剥が
された。甲冑を繋ぎとめている固い結び目もほどかれ、やがて取り
払われた。

アリオンの体から、解体されるように武装が解かれていく。
纏っていた帷子の留め具も外され、遂に着衣から素肌が露になっ
た。

そしてセネカがハタと気が付いた時には、アリオンは一糸纏わぬ
姿となっていた。

若い男子の裸を間近で見ること慣れていないセネカはおたおた
と慌てふためいたていた。

「何をしている。早くこちらに来てアリオン殿の背中をお流ししろ」
あらぬ方向に顔を背け、身をこわばらせていたセネカは、たちま
ちイレムに叱咤された。

「せ、背中を　お、お、お、お　な　が　しい　？」

思わず声がひっくり返った。

「賄いの小間使いの様子を見に来る。すぐに戻る」

「い、行っちゃうの？」

セネカの心情など全く介さないイレムは、一礼をするとさっさと
湯殿を出て行ってしまった。

後に残ったのは何のためらいもなく裸体をさらしているアリオン
と、のぼせ上がったように顔を熱ほてらせているセネカだけだった。

「ああ　自分ですから、いいんだよ」

椅子に腰かけていたアリオンが後方のセネカ振り向いた。同時に、セネカも首が捻切れそうになるほど思い切りそつばを向いた。「？」

アリオンが不思議そうに首を傾げた。

「えええい！ もお！ サボってたら、また叱られるんだからな！」
観念したセネカは、半分やけっぱちになり、海綿にたつぷりと湯を含ませるとアリオンの背中をごしごしと力を込めて擦りつけた。

「どこほつつき歩いてたんだよ！ まったく！ 心配してたんだからなっ！」

セネカはアリオンの背中を見つけたまま顔を真っ赤にしながら声を張り上げた。

「ごめん。少し、寄り道を していたんだ」

アリオンは相変わらず気持ちが虚ろなままのようだった。

「寄り道？ 戦場いくさばで寄り道なんて、そんな話あるのかい？ ヘンなの」

「……ああ。そうかも、しれないね」

「……。何かあったのかい？ もしかして、怪我でも？」

セネカは、アリオンがあまりにも暗く重々しい口振りなので、急に心配になつてたずねた。

「いや。大丈夫だ。ありがとうセネカ」

アリオンは、少し疲れたただけだからと明るく答えたが、セネカには無理矢理に笑顔をつくっているようにも思えた。

イレムが戻つて来たので、二人の会話はそこでおしまいとなった。たつぷりの湯を浴びたアリオンに暖かな夜着があてがわれ、天幕では温かで豪勢な夕げが振る舞われた。しかし、アリオンは食べ物にほとんど手をつけることなかった。

誰も、一言も喋ることがなかった。天幕内はことのほか静かだった。

ろうそくに灯された仄かな明かりがちらちらと揺れ、芯が燃える微かな音のみが耳に届くきりだった。

「それでは、私どもはこれにて失礼致します。どうぞお休みください。明日の朝は早うございますので」

イレムがセネカを促し、二人揃ってお辞儀をした。天幕を引き揚げ、
ける時が来たのだ。

従者たちで込み合う天幕でまた一夜を明かさなければならぬ。
。セネカは気分がずしりと落ち込んだ。

イレムのあとに続き、セネカはうなだれ、体を引きずるようにしてその場を離れようとした。

「君たちは、どこに行くの？」

アリオオンが少し驚いたようにたずねた。

「はい。従者用の、天幕ですが？」

「この天幕は僕一人では広すぎる。君たちも一緒に寝泊まりするといいよ」

「それはなりません！」

今度はイレムが驚いたように声をあげた。

「そうかな。僕は構わないけど？ セネカはどう？」

「え？ お、おいら？」

いきなり矛先を向けられ、セネカはどぎまぎした。

「おいらは……」

セネカは、睨みをきかせるイレムとアリオオンとを交互に見た。

従者用にあてがわれた天幕は少年たちがひしめきあって雑魚寝しているに違いない。

セネカはあんな所に寝泊まりするのは二度とご免だと思っていたので、
答えは決まっていた。

後輩従者の遠慮がちの返答を聞いたイレムは顔つきはみるみる険しくなった。

相対するアリオオンはにっこりと微笑んでいた。

「じゃあ決まりだ」

「左様でございますか」

イレムが愛想と敬意を他所へ放り投げ、とげとげしさを露にした。

「それでは、この者をこれからも傍らに置き、始終あなた様に仕えさせるということですね？」

「ああ。そうだ。そのつもりだが　？　何かまずいことでもあるかい？」

「いえ。ございません。承知いたしました」

イレムが一礼をし、踵を返した。

セネカはなぜイレムがこんなにも不機嫌なのが判らなかったが、何だか申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「アリオン殿のご要望とあらば、こちらは何も言うことがない。くれぐれも粗相のないように！」

それからイレムはありったけの、覚え切れないほどの伝達を残し、大股で天幕を後にした。

セネカはイレムを後ろ姿を見送りながら、疲れ果てたようにぐりと肩を落とした。

何もかも初めてのことばかりの連続で、くたくただった。

それに、今まで経験すらしなかった戦というものを間近に感じ、神経もかなりすり減らしていた。

なんてめまぐるしく長い一日だったことか　。　。　。セネカはふと、かつての山あいの村のことを思い起こしていた。

あの平穏な日常は夢の中の出来事だったのだろうか。

もう決して戻りようのない、村での懐かしい暮らしが無性に恋しくなった。

セネカの胸はわびしさと切なさで押し潰されそうだった。

「疲れただろう？　セネカ」

アリオンが心配そうに声をかけた。ぼんやりと回想をしていたセネカは現まわに引き戻された。今は、目の前の現実を受け入れるしかないのだ　。

「あ　。　。　。　うん　でも、あにイほどでもないさ。きつと……」

戦でたくさんの人を斬ったに違いない　と、セネカは思った。
アリオンの表情にはまだ疲労が色濃く残っていたし、人の心配を
している場合ではないのを見て取った。

「こっちはよろしくやってるよ。まあ、郷に入れば郷に従えって言
うしさ」

セネカは少し元気を装って見せた。

「イレムは、よくしてくれたかい？」

アリオンがたずねた。

「彼が大将船に来た時に頼んでおいたんだ。君の面倒をみてくれっ
て。君からのことづてもちゃんと伝えてくれたよ。彼はすごく誠実
だ」

「そうだったんだ……」

セネカは、アリオンの気遣いを痛いほど強く感じた。と、同時に
イレムにも感謝の念を抱いていた。

それからしばらくの間、セネカはアリオンの気分がほぐれるだろ
うからと、陣営でのことを細かに話し始めた。

ポセイドンに杯を渡した時、震えるほど緊張こと。

野营地での仕事についてや、船から上陸した時のこと。

しかし話が、監督兵のラザレが何かと嫌味を言ったり絡んでくる
ことに及ぶとアリオンは心配そうに眉根を寄せた。

「でも、アイツとは多分、のっけがいけなかつたんだと思うんだ。

まあ、おとなしくしてればいいと思う」

話が船の中での繕いの仕事のところまで来ると、セネカは何か肝
心な事を忘れていたような気になり黙りこくった。

とても大切な事を忘れていたような、そんな気がした。

そして　思い出した。

「……！　あ、あッ！」

「何？　どうしたの？」

アリオンもつられて驚き、声を上げた。

「そうだ！　忘れるとこだった！　ごめん！　おいらあにイに謝ら

ないといけないことがあった」

「え 何を？」

「だから……あーええと……」

妙に遠い昔のような気がしてならなかったが、ほんの一日前のことだ。

セネカは昨夜、乱暴な言葉で罵倒したことを素直に詫びた。そして 急なことだったので、驚いたから だと付け加えた。

アリオンは目を伏せ、しばらく思いに耽るように考えこんでいたが、やがて面を上げた。アリオンもまるで遠い昔のことを思い出したような顔つきだった。

「ああ……あの時の……。いや。僕こそ君を驚かせてしまつて悪かつたんだ。でも……」

アリオンの顔がみるみる暗くかげつていった。

「でも、僕は……ケダモノかも……しれない、な」

ぼつりと、自問するようにそう呟くアリオンは、とても辛そうに見えた。

戦で自分勝手な行動をとつたのには訳があったのだろう と、

セネカは思った。

そして、アリオンには一分でも多くの休息が必要なのは明白だった。

「おやみよ、君も」

アリオンは寝台に体を横たえながら、そう呟いた。そして、すぐに眠りに落ちていった。

翌日の朝、セネカは夜明けとともに起きた。

セネカは昨晚イレムから聞いていた事柄を一つ一つ指を折りながら思い出していった。

まず水場へ向かうために瓶を提げた。寝台ではアリオンがまだ寝息をたてている。

水場で水を汲んだら、次はあさげを運んで それから 。

水場と炊き場を行き来する途中、イレムと出会った。

セネカは、イレムの方から何かしらの忠告があるものと思っていた。

しかし。

イレムはセネカの脇を何事も無かったかのようにさっさとすり抜けていった。まるでそこにセネカが居ないかのように。

呆然と立ち尽くすセネカの肩を誰かが叩いた。

「おはようございます。調子はどうですか？」

「サイラスのおっちゃん！」

サイラスの優しい笑顔にセネカは心からホッとした。

サイラスの話によると、陣営はこの場所から移動するという。

「皆が出陣したらただちに野営を畳みます」

サイラスはセネカにも分かりやすいように、噛み砕いて説明してくれた。

優勢なボセイドン軍は後退するアテナ軍を攻めつつも退路を断ち、ぐるりと取り囲む作戦らしい。

「朝餉を運び終えたら急いでオリオン殿の支度に取り掛かりなさい。イレムが指揮を執ってくれるはずですよ」

「あ！ 待って。サイラスのおっちゃん！」

セネカは行きかけるサイラスを引き止めた。

「あのさ……おいら、ちょっとお節介だったかな。イレムが足が悪いつて聞いたから、何か手助け出来るかと思っただけ……。それと……」

セネカは昨夜の出来事と、先ほどイレムに、あからさまに無視された事を告げた。

セネカは、なにがイレムを気持ち悪くしているかが判らなかつた。サイラスは何やら曖昧な笑みを浮かべたあと、憂い顔のセネカを励ますように言った。

「私が言ったことはイレムには内緒ですよ？」

サイラスは微笑みながら念を押した。

「イレムは最初、アリオンの殿づき従者となることになっていたのです。彼が強く希望したのでね。あなた方が捕えられてポセイドン王の若君だと告げられたと聞いた時から、イレムは私にそうして欲しいと、従者として推薦して欲しいと私に熱心に訴えていました」

「あ。でも」

「そう。でも、アリオンの殿はあなたを専従にすることを希望された」
「……」

「もちろんイレムは抗議しました。彼は 既に知っているかもしれませんが、元兵士です。戦には出られません。アリオンの殿の重臣として働くことが出来る。しかし、アリオンの殿が王へ直直まじまじに強く進言されました。あなたを従者にしたいと 心強い仲間だから、とね」

セネカは妙に耳の後ろがむずかしくなった。

「そこでポセイドン王はイレムにあなたの教育係を命じたのです。一人前の従者となるまでね。まあ 彼にしてみたら若干不本意だったかもしれませんが」
「だからなんだ。」

イレムはセネカを見下したり、何かとつつかかったり、わざと皮肉っぽいことを言ったりしていた。

「ただのやきもちですよ。彼も子どもではないのですから、機嫌もじきに直るでしょう。さあ、もう急ぎなさい！ 出陣の支度に取り掛からないと」

サイラスに促されて、セネカは大急ぎで天幕に戻った。

野営地はやがて出陣と移動の準備のため、にわかに活気づき始めた。

「4」（後書き）

アクセスありがとうございます。

第十四章、長かったです。

書いても書いても終わらず、どうなる事かと思いました。

長すぎ感は否めませんが、このままupします。

どこを切っていいのか分からなくて…。

どうもすっきりとまとめる事が出来ません；

今回の更新では、かなりの章に訂正を入れました。

後書きとつじつまが合わない？章も出てきたかもしれません^^；

直し出すときりがないので…今回はどうしても筆入れしておき

たいと思い、完結を待たずに。

思い立ったが吉日ということで。ご了承くださいませm(____)m

実は、訂正したい箇所はまだあります（汗）

タイトルの漢数字。

横書きなんだから最初から英数字にするんだっただ…orz

あと第四章の『夢幻』というタイトル。

レダという名前のキャラクターを作った時点で回避しないといけませんでした（いえ。単に忘れていただけですが…）

タイトルに手を加えるのはさすがにまずいと思いますので、このま

ま残します。

次回は第十五章『一番のつわもの』です。

投稿は4月10日の予定しております。

一週お休みをいただきます。

気長にお付き合いただけたら幸いです。

コウミ

2011・3・27 本文改訂

目の前の大きな塊が動いた。

それは最初、岩かと思われたが　　違つ。

暗緑色の歪な塊は、確かにもぞもぞとうごめいていた。それは、紛れもなく、生き物だ　　。

セネ力は、この得たいの知れない生き物に恐れおののいていた。しかし最後まで見定めたい気持ち捨てきれず、その場から動かずにいた。

塊が大きく前のめりに揺れ動いた。

かと思つと、それはゆつくりと膨張を始めた。

いや　　膨らんでいるのではない。立ち上がっているのだ。

その塊には、驚いたことに太い棍棒のような四肢が生えていた。

塊が遂に両足を踏みしめ、小山ほどの丈に達した時、セネ力は初めてそれが人の形をしていることに気がついた。

頭部から無造作に肩まで垂れた頭髪、とてつもなく広い肩幅。胴体に纏つた獣の毛皮から突き出す隆々とした二の腕。そして　　櫂の幹ほどの太股と極端に盛り上がったふくらはぎ。

着衣を身につけていたものの、それは人間ではなかった。

それは　　およそ人間では考えられない様相を呈していた。

三つ目だ　　！

それは三つの目を持つ怪物だった。

眉間の上、ちょうど額の真ん中辺りに鈍く光を放つ瞳がある。

怪物が一步踏み出した。

ずしんと地響きをたてそうな程の巨体だったが、辺りに音が響くことはなかった。

こつちに来る　　！

セネカは我に返った。

これ以上、悠長に眺めている場合ではなかった。一刻も早くこの場から逃げ出さなければ。目の前の獐猛な怪物は襲いかかって来るに違いない！

セネカは、その場から逃げ去ろうと身を振った。

と　その時、セネカの脇をかすめるようにして走り抜ける姿があった。

あの若い獅子だ。

セネカは獅子の向かう先を目で追った。引き止める間はなかった。若い獅子は明らかに怪物に立ち向かおうとしている。

獅子が怯むことなく、しなやかに跳躍した。そして、目の前の怪物の胸ぐらに取りついた。

一方の怪物は　というと、身構えることもなく、防御の姿勢を取ることもなく、無防備に懐を露にしたままだ。

セネカは　怪物に飛び付いた獅子が、その喉笛に噛みつくものだとばかり思っていた。しかし、獅子は一向に牙を立てる気配すら見せない。

怪物の方も飛び込んできた獅子を払い落とすでもなく、引き剥がすでもなく　むしろ、獅子を抱きとめるかのように、その体を包みこんでいた。

セネカは震撼のあまり、両手で口元を覆った。

アイツ　！　食う気だ！

セネカは怪物の方向に向き直ると、力の限り叫んだ。

(ダメだ！　離れる！)

しかし　。

声が、出ない　！？

セネカはぎよつとして、今度は喉を手で押さえた。

声は喉元を確かに通り抜けているはずだった。なのに、出ない。

セネカは再び声を張り上げて叫んだ。

結果は同じだった。

喉が痛むほどの大声を出しているはずなのに、自分の声が全く出てこない。

恐れにも似た辛さがセネカを覆った。

言いようのない悲しみが押し寄せ、セネカは泣きたくなった。

声が無くなった。思いが。意思が伝えられない。

見上げると、怪物はかがみこみ獅子を押し潰さんばかりに抱き抱えている。

獅子のぐったりとした後ろ足が、暗緑色の腕の間から見えた……。

やめろ！ 食うな！ 食うな——！！！！

その時、不意に何か熱いものがセネカの肩に触れた。

セネカ？ 朝だよ。

「わッ！」

セネカは上掛けを撥ねあげ、飛び起きた。

そこは居心地のよいアリオンの天幕の中だった。

寝間着姿のアリオンが心配そうにセネカの顔を覗き込んでいた。

「夢かい？ セネカ。また？」

「あ。あ？ え、えーと……夢？」

夢。そう、夢だ。またあの、予見する夢だ！

セネカの呼吸は浅く切々に乱れていたし、額にはうっすらと冷や汗がにじんでいた。動揺のためか視点がせわしない。

「怖い夢だったの？」

アリオンが訊ねると、セネカは反射的に小さく何度も頷いた。

「三つ目の……怪物が……」

「三つ目の？ 怪物？」

アリオンの眉間にさっと皺が寄り、みるみる顔つきが険しくなった。

セネカはハツとなり今度は大きくかぶりを振った。

言えなかった。とても怪物に食われる獅子の夢を見たなどと
「違う。間違えた……おいら、へまをやつてさ。叱られる夢さ。イ
レムが目を三角にしてすごい顔して怒つてた。だから あッ！
しまった！！」

セネカの背筋が瞬時に伸び上がった。

「寝坊した！」

セネカは大急ぎで寢床から抜け出した。

従者は主人よりも早く起きなければならぬ。

主人であるアリオンに起こされた、なんてことがイレムの耳に入
ったら、また大目玉なのだ。

「僕はもう一眠りするから、お行きよ」

そう言うときアリオンはまた、ゆっくりとした動作で自分の寢床に
潜り込んだ。

「ありがと！ しばらく寝てて」

礼を告げるのもそこそこに、セネカは瓶を抱えて天幕を飛び出し
た。

水を満たした瓶を抱え水場から戻る途中、セネカは先ほどの夢で
見た出来事を反芻していた。

得たいの知れない生き物が現れて、若い獅子が立ち向かっていく
。

三つ目の怪物の夢は、いつか見た大蛇の夢とよく似ていた。

しかし、大蛇はともかく、三つ目の生き物というものにセネカは
これまでお目にかかったことが無かった。

もしも、そんな生き物が実在するならば、もしかしたら近々アテ
ナ軍との戦いで対決することになるのかもしれないのだろうか？

「おい！ 寝坊しなかつただろうな？」

不意に背後から声をかけられた。イレムだ。

先輩からの朝一番の声かけは辛辣で、その口調はあからさまだっ
たが、セネカはなに食わぬ顔でアリオンがまだ寝てるい事を告げた。

「ふうん」

イレムが、わざとらしく顎を突き出してセネカを見返した。明らかに疑っている様子だ。

「ほ、本当だつてば！」

「まあ、いい。急げよ。僕も後でアリオン殿の天幕へお伺いする」
イレムは端的に指示すると、小さく跛ちひを引きながら行ってしまうた。

結局、あれからイレムは半人前の後輩従者を放っておくことが出来ず、あれこれと気をかけ段取りなどを指南していた。

「あ！ そうだ 待って。イレム！」

セネカは急に思いつき、イレムに走り寄った。

「聞きたいことがあるんだ」

「？ なんだ？」

セネカはイレムに三つ目の生き物がいるのかどうかについてたずねた。

イレムが訝し気にじろりとセネカを睨んだので、セネカは武将たちがそんなことを話しているのを聞いたから、と付け加えた。

イレムの反応から、怪物は実在するものと見て取れた。

「特徴から言つて、魔人族の生き物だと思うが……噂でしか聞いたことがない」

「じゃあ、本当にいるってことかい？」

セネカがどきりとして聞き返した。

「ああ。だが、絶滅したとも聞いている。どちらにしても定かではない」

「じゃあさ。アテナ軍にその三つ目がいる、って考えられるのかな。手下として雇っているとか……」

「いや。それはなかるう。オリンポスの連中は、そういった魔人族の輩は駆逐こそするだろうが、手下として働かせることは、まずしない。そういう連中だ」

言いながら、イレムはふんと鼻を鳴らした。

少なくとも、敵の中に三つ目の怪物はいないらしいと判ったセネ力は、ほっと安堵の息をもらした。

「ところで今日は、アリオン殿の出陣がないということは承知しているな？」

「え？」

イレムの問いにセネ力は思わずきよとんとなった。

イレムはやれやれといった様子で、顔をしかめた。

「今日は闘技大会が開催される。このあと陣営の外れの闘技会場に向かうことになっているんだぞ？」

「あ。そっか。チャンバラ大会だったっけ」

「兵士たちの士気を高めるための闘技大会だ！ 遊びではない！」

セネ力の物言いにイレムが気分を害られたように声を荒げた。

「アリオン殿はこの大会の勝者に優勝杯を渡すお役目だが？」

イレムは畳み掛けるように言葉を継いだ。

「これも昨日伝えたはずだが、まさか忘れていたなんてことは、ないだろうな？」

「しょうがないじゃんか。覚えることが多すぎるんだから……」

「まったく！ 早く戻って支度をしたまえ！ 急げ！」

イレムが遂にかんしゃく玉を破裂させた。

セネ力は慌てて一歩踏み出したが、それと同時にとはたと思い起して立ち止まった。

「あ、あのさ……ポセイドン軍には、その三つ目の魔人っていうの、雇って……いないのかな」

「さつきも言っただはずだ。そんな魔人族は、噂でしか聞いたことがないと」

イレムは苛々と呻いた。

「何が言いたいんだ？」

「あーもしかしてさ。そのチャンバラ大会にそういう魔人族が出てきて、兵士と闘ったりするもののかなあ……って思ってたさ……」

「もしも我が軍にそんな魔人族がいたとしても今回の闘技大会では

魔人族の出場は認められていない。これも昨日

「そうだった！ じゃ、おいらあにィを起こしてくるよ」

敵つい顔つきのイレムにくるりと背を向け、セネカはそそくさとその場を後にした。

「2」

精強に攻め込むポセイドン軍は、アテナ軍を圧倒した。

海王軍の勢いに圧おされ、じりじりと後退したアテナ軍は、追い詰められた末に小高い岩場にたてこもった。

ピレウスの浜から十余キロほどの所に位置するその岩場を、ポセイDONは全軍を率いて取り囲むように陣を構えた。

「相手は八方塞がりだ。我が軍はオリンポスからの援軍の合流を断ち、仕掛けてくる攻撃はことごとく潰す！ 完璧だな！」

イレムの説明は相変わらず嬉々としていた。

「もつとも、援軍を要請しようにも我々が周りを取り囲んでいるんだからな。助けを呼ぶことも出来まい。消耗し、戦意を失うのももはや時間の問題だ」

「……。寄つてたかつて弱いモンいじめか……」

セネカがぼつりと呟くのをイレムは聞き逃さなかった。

「これは戦なんだ！ 情けは無用！ でないとこちらがやられるんだぞ！ もつとも我が軍が負けることは十に一つもないがな」

上向きなイレムの機嫌を損ねてはいけないと思い、セネカは口を閉ざした。

実際にポセイDON軍勢は、連日連夜、祝宴などを催し早くも勝利を確信しているかのようにだった。

闘技大会は、拓けた平地に俄にわかに設えられた闘技場で行われることになっていった。

セネカは、イレムと共に前を行くアリオンの後を随行していた。

アリオンは、先ほどから黙々と先頭を歩いていた。

アリオンに何か話かけようものなら「馴れ馴れしい」と、イレムから叱咤されるのは分かっていたので、セネカはおとなしく口をつぐんでいた。

「……すごいや」

闘技場に着くとセネカは感嘆のため息をもらした。

一対一で対戦するというその場所は円形状になっており、観戦席との仕切りとして周りをぐるりと縄が張られていた。

観戦席には既に兵士らが闘技場を取り囲むように幾重にも並び、分厚い層を成している。

更に納まり切らない観戦者たちは、手近な木によじ登ったりして一番のつわものを決める熱い闘いを待ちあぐねていた。

闘技会場全体が、既に熱気に包まれていた。

下働きの者や見張りの兵士らを除いたほぼ全員が一同に介しているかのような賑わいだった。

セネカは軍勢のあまりの迫力にごくりと息を飲み込んだ。

ゆるやかに傾斜した一角を利用した見晴らしのいい場所にいつらえてある観戦席に、ポセイドンが堂々とした様子で現れた。

競技場を取り囲んでいた兵士たちの群集が一齐に、歓喜の声をあげた。

沸き起こるその声援を、ポセイドンは片手を掲げて制した。

王の後には、数名の従者が控え、脇には給仕の女性たちが傳かすいでいる。

海王が肘掛け椅子に腰掛けるのを見届けると、その隣の席にアリオンが腰を据えた。

イレムも後ろに控える形で膝をついたので、セネカもそれに倣った。

「第一試合、イオニアのゴルバノス！ 対するはスミルナのエポドス！」

審判が対戦相手の名前を、大きな張りのある声で告げた。

闘技場の両端から名前を呼ばれた二人の兵士が揃ってすくと立ち上がった。

ゴルバノスは 全身が躍動するような筋肉で鎧われた、巨躯の男だった。

広い肩幅、盛り上がった上腕そしてがっちりとした厚い胸板が更に猛々しさを見せつけていた。

やや愛嬌のある瞳は爛々と輝いており、大きくせり出した顎を威圧的に振りたてている。

手には 細長い鉄の棒を何本も繋ぎ合わせたような不思議な武器を持っていた。

一方のエポドスは、ゴルバノスを一回り小さくしたような体格ではあったが、良く締まった強靱な体躯の持ち主だった。

その、鍛えぬかれたのであるろう上半身、特に肩幅が異様に広く、二の腕の筋肉は人並み以上に盛り上がっている。

対戦相手を鋭く見据えるその目は、獰猛な獣を思わせた。

武器は身長ほどの尺のがちりした棍棒である。

二人は互い睨み合い、既に威嚇しあっていた。

観戦席のポセイドンが片手を上げた。

審判はそれを見届けると、脇に立つ男に合図を送った。

闘いの始まりのしるしであるほら貝の音が高らかに鳴り響いた。

「なんだい？ あのヘンテコな棒は？」

セネカが、ゴルバノスの手にしている武器を指差した。

ゴルバノスは、連結された長い鉄の棒の端を振りまわしている。

棒は空を切り、ひゅうひゅうと唸りを上げていた。

「あれは 六節棍だ」

イレムが闘技場から視線を外さずに答えた。

「ろくせつこん？」

「棒が六本繋がっているだろう？ ゴルバノスは六節棍の使い手だ。

あのような特殊な武器を巧みに扱えるのは、軍の中では彼しかないな
い
い

「イレム」

前にいたアリオンが首をめぐらして後方の二人の方を振り向いた。
「君は詳しいのかい？ 彼と、あの武器のことに」

イレムの顔に一瞬、戸惑いの色が浮かんだ。

「いえ……詳しいというほどのことは……」

「教えてくれないか？ 判っているだけでいい。僕はあの武器を見るのは初めてなんだ」

「……かしこまりました」

イレムは一礼をすると、アリオンの傍に寄った。

「連節棍は棍棒に比べると、その打ち込みの速さは数倍……いえ。十倍とも言われています。それが、六本ともなると 攻撃もさることながら、防御に至っては、ほとんど壁と言ってもいいでしょう」
アリオンもイレムと同様に競技場から目を離すことなく、イレムの説明に熱心に耳を傾けていた。

ゴルバノスとエポドスとの対決は既に睨み合い均衡が破られて、今や激しい打ち合いとなっていた。

最初互角と思われた闘いがったが、見る間にゴルバノスが優勢になった。

エポドスが次第に圧されているというのがセネカにも判った。

エポドスは今や防御のみだったし、果敢に反撃に出ようとすも、六節棍の攻撃は彼の猛進を許さなかった。

ゴルバノスは次第にエポドスはじりじりと後退りを始めていた。

「速いな。……それに力押しだけじゃない。読みも鋭い」

「はい。彼は戦略にも長けています。そして反撃しようにも」

「ほとんど隙がない」

「はい」

「でもさ。結局ただの棒だろ？ 剣を一振りして斬ってしまえば、

おしまいじゃんか」

セネカは二人の会話の中に無理やり割り込んだ。

「いや。あの速さで繰り出す棍をまともに受けたら、剣は弾き飛ばされるか、悪ければまっ二つに折られてしまうだろう」

アリオンは確信したようにきつぱりと答えた。

「はい。その通りです」

「ふうん」

イレムが頷くのを横目で見ながらセネカが不満気に呟いた。

「しかしながら弱点もあります」

イレムの言葉には力がこもっていた。

「……。そう、だな」

アリオンが小さく顎を引き同意した途端　　周りからどよめきが沸き起こった。

ゴルバノスが繰り出した棍を避けきれず、エポドスがもろに脇腹で受け止めたのだ。

エポドスは堪らず手にしていた棍棒を取り落とし、呻きながら地面に倒れ伏した。

丸腰になったエポドスを、ゴルバノスは更に容赦なく打とうと棍を振りかざした。

「一本!!!　そこまで!!!」

寸でのところで審判の声が響いた。

観戦席からは割れんばかりの歓声が沸き起こった。

第一試合の勝者は、ゴルバノスに決まった。

「判定その三、です」

ため息交じりにイレムが言った。

「出場者が一通り対戦し終わったのちは、勝ち上がった者同士の闘いとなります」

「3」

「強いなあ……アイツ。また勝った……」

セネカが半ば呆れたように呟いた。

ゴルバノスは、その後の試合も順当に勝ち進んでいた。

試合の相手はゴルバノスの六節棍の餌食となり、白眼を剥き、口から泡を吹いて地面にのびていた。

救護班が数名駆け寄り、敗北した対戦相手を担ぎ上げ、闘技場から退場した。

出場者の中でゴルバノスが最強なのは、誰の目から見ても明らかであった。

「あれが『判定その一』だろ？」

「そうだ」

セネカの問いにイレムが頷いた。

イレムはセネカの隣で熱心に闘技の様子を見入っていた。

「気絶などで戦闘不能に陥った場合が、判定その一」

イレムが淡々と続けた。

「判定その二、は対戦相手が降参した時に下される。要するに『まいった』といったら負けなんだ。だが、我が軍の精鋭たちは口が裂けてもそんなことはしない。判定その二、は最も恥ずべき負け方だからな」

「ふうん」

「判定その三は、相手が戦意喪失 要するに審判が、もうこれ以上相手が闘う事が出来ないと判断した時に下される。武器を手放した時にも下される場合があるな 試合放棄とみなされるんだ。また、武器を手放していないにしても、逃げてばかりで反撃に出ず、闘う意志が見られない時もだ。とにかく、要の部分は審判の判断に任せられることが多い。しかし……」

イレムの説明が途切れたので、セネカは次の試合の準備に取りか

かる闘技場から視線を外し、イレムを見た。

「審判が判断に迷う時など、微妙な場合もある。その時は」
「今度はイレムが、ちらりとポセイドンの方を見た。」

「その時は、王の決裁に任せられる」

「一番のつわものはアイツに決まりだよな。あんなのに勝てるわけがない」

セネカが出場者の控えの場に引き上げて行くゴルバノスを指差し、確信したような口ぶりで言った。

「そうだ……な」

イレムは思案顔で低く呟いた。

「だが、彼に勝つのは不可能ではないと思う」

「へえ？」

セネカは、イレムのやや熱のこもった口調に驚き、目をぱちくりさせた。

「でも、その一とその二はあり得ないだろう？ アイツをノしたり、『まいった』なんて言わせるなんてさ。だってアイツ、片腕を斬り落とされても『まいった』なんて言いそうにないぜ？」

セネカの大真面目な様子に、イレムは可笑しそうに鼻で笑った。

「そうだな。もちろん狙うとしたら判定その三だ。そのためには、あの六節棍を武器としての機能を無くさせることだ」

「???？」

「あの武器は複雑な構造ゆえに、不利な点もある。それを逆手に取れば勝てないこともない」

「……ふうん。よくわかんないけど……あ！ そういえば、さっきアイツに弱点があるって言ってなかったかい？」

「やはり、手元だろうか」

突然アリオンが自分に問いかけるように二人の会話に割って入った。

「え　！　は、はいー！」

イレムが、大急ぎでまた、アリオンの際に寄った。

「仰せの通りです。手元を狂わせるのが、固いかと」

「へえ。手元ねえ……」

セネカは納得し難い様子で首を傾げた。

「そのためにも、六節棍の攻撃をかわして懐に飛び込むか……もしくは……」

「隙はどこにあると思う？ イレム？」

イレムがアリオンの問いかけに答える前に、セネカがぱつと立ち上がってアリオンの際に寄った。

「おいら分かる！ あのヘンテコな棒の片方を投げ出したあと、引き寄せるまでが隙だらけだ！」

「でも、さっきの相手は引き寄せる六節棍に頭を打たれて負けたよ？」

「動きがあんなにのろかったらダメさ。でもあにイの足だったら大丈夫だ。思い切り近づいてさ。えいッ！ やっ！ って」

セネカが身振り手振りで剣を振るう真似をしてみせたあと、はたと動きを止めた。

「……なんか、さ。アイツと闘う相談してるみたいなんだけど？」

「……あ」

イレムもはつとして面を上げた。

セネカとイレムは、申し合わせたようにお互いの顔を見、次に揃ってアリオンの方へ顔を向けた。

「まさか……」

「もしや……」

二人の声が重なった。

アリオンは驚いたように二、三度、目を瞬かせたあと、こみあげた笑いを抑えながら首を横に振った。

「いや 父さんから、つわもの同士の闘いをしっかり見極めておくようにと言われたんだ。ただそれだけだよ」

「なあんだ！　びっくりしたなあ！　おどかさなよ」

セネカは肩を撫で下ろした。もしかしたらアリオンが飛び入りで一戦を交えるのではないかと思ったのだ。

しかし、イレムは口を引き結び、困惑顔のままだった。

「もうすぐ次の試合だ。この試合の勝者が、彼と闘うことになる。よく見ておこう。僕の出番は、その後だ」

言いながらアリオンは、ポセイドンの観戦席近くに飾られている優勝杯に目をやった。

アリオンは、間近で観戦できるようにと、イレムとセネカを側に呼び寄せた。

やがて、準決勝の始まりを知らせるほら貝の音が鳴り響いた。

「なんか、あっけなく終わっちゃったなあ」

セネカがため息をもらした。

決勝戦を闘う相手同士がようやく決まり、闘技会の盛り上がりも最高潮に達したが、最後の闘いはものの数分で決着した。

ゴルバノスは連戦の疲れを見せることなく、鮮やかな棍捌きで、見る間に相手を打ち倒した。

勝利した興奮と高揚感からか、ゴルバノスは折り畳んだ六節棍を高々と掲げて雄叫びを上げた。

闘技会場に集まった者たちは誰もが勝者を讃え、歓声や口笛がひっきりなしにあがっていた。

「でかッ」

セネカは　アリオン、イレムと共に闘技場内にいた。

間近で見るとゴルバノスは、まるで小山のような巨体だった。

「こんな金ぴか滅多にさわられるモンじゃないから」と、セネカは自ら申し出て黄金色に照り輝く優勝杯を持ち運んでいた。

自分の顔が映るほどぴかぴかに磨きあげられた優勝杯を眺めていると、イレムに肘で小突かれた。

見上げると、海王軍の屈強の兵士を次々に打ち負かしたいかつい大男がにんまりと満足そうな笑みを浮かべていた。

「早く。杯をアリオン殿にお渡しするんだ。」

イレムが、啞然と見上げるセネカを素早く促した。

名誉の優勝杯がセネカからアリオンの手に渡った。そしてアリオンからゴルバノスに手渡しされる。筈だった。

ゴルバノスは杯を差し出すアリオンを、敵つい体に似つかわしくない愛嬌を含んだ眼差しで見下ろしていた。

しかし、優勝杯を受け取る素振りすら見せない。

「？」

相手の意外な行為にアリオンは戸惑い、困惑の表情を浮かべた。

後方のセネカも不思議に思い、イレムの方を見た。イレムは何故か、いぶかしげな顔つきで口を結び、ゴルバノスを見つめていた。

「遠慮なく頂戴しろ！」

「今さら光栄過ぎて、物怖じしたのか！」

どこからか、冷やかしの野次が飛んだ。

しかし、ゴルバノスは杯を受け取らない。

野次が次第に小さくなり、やがてひそひそ声になって観戦席がざわつき始めた。

「どうした。早く受けとらんか」

業を煮やした審判がゴルバノスに鋭く言った。

ゴルバノスはいきなり踵を返すと、ポセイドンが座している観戦席の真正面に立った。

「王よ！！」

ゴルバノスが、がなり声を響かせた。

「杯を受け取る前に、某の無作法な発言をお許しいただきたい」

「言つてみよ」

酒の器を片手に肘掛け椅子に身を沈め寛いでいたポセイドンは、興味深気に顎をしゃくった。

「はー！」

ゴルバノスは恭しく頭を垂れた。

「この闘技場の中に今一人、手合わせたいつわ者がおります」

面を上げ、再びポセイドンの方向向き直ったゴルバノスの言葉に、観戦席の人の群からはどよめきにも似た驚きの声が上がった。

「由緒正しき闘技大会において、ポセイドン王の陣屋での腕一番の誉れ。せつかくなれば、その者と雌雄決してのち授かって遅くはありません」

ゴルバノスは滔々と続けた。

「王がこの願いを聞き届けていただけるといふならば、某は直に、その者に手合わせ願いたい旨お伝えする所存であります。どうかお許しいただきたい」

「闘技大会では名だたるつわものは全て出揃っていると思っておつたが。その者らの他に、貴様のような最強の剛の者が挑みたい相手がいると言つのか？」

「は！ 左様でございます」

ゴルバノスがまた深々と頭を下げた。

しばらくして、ポセイドンは悪戯っぽく口元を歪めながら答えた。

「よかるう。そなたの功績に免じて許す」

「ありがたき幸せ」

言つと、ゴルバノスの姿勢が堂々と元に戻った。

肩をいからせ、胸を張った巨体がゆらりとこちらに向き直った。

その顔つきに先ほどの愛嬌さは微塵もない。

ゴルバノスは真つ直ぐアリオンを見つめていた。

アリオンの後ろに控えていたセネカは、ゴルバノスの不敵な笑みを見た途端、背筋に得たいの知れない震えが起こるのを感じた。

そして、ゴルバノスが次に何を言つのか分かった。

隣にいたイレムがはつと息を飲んだ。イレムもきつと同じ事を思つたのだらう。

ゴルバノスが言った。

「アリオン殿。一度、手合わせ願いたい」

「4」

観戦席全体が水を打ったように静まり返った。

セネカの側からアリオンの様子は窺い知ることが出来なかったが、その肩が跳ね上がったところを見ると、きつと相当驚いたに違いない。

「御曹司アليون殿。此度の戦では单身、敵の本陣に討ち入り、手柄の第一等と聞き及んでおります」

ゴルバノスは丁寧な物言いと裏腹に、顔には勝ち誇ったようなずる賢い笑みを浮かべていた。

「手合わせ願えれば誠に本望。何とぞ言い終わると、ゴルバノスはその場に跪いた。」

アリオンはしばらくの間、途方に暮れたように目の前のゴルバノスを見つめていたが、ややあつて 助言を求めるかのようにポセイドンの居る観戦席の方を窺い見た。

啞然とする兵士らの向こう側、肘掛け椅子にゆったりと座しているポセイドンは、一旦引き結んだ口元を穏やかに緩めたのち、ゆくりと頷いた。

アリオンはしばらくの間、父親から視線を外さずにいたが、やがてゆっくりとこちらに向き直った。

「セネカ。これを」
アリオンの手からセネカの手で黄金色の優勝杯が戻された。

それまで押し黙っているしかなかったセネカは驚きのあまり目を見開いた。

アリオンの表情には躊躇いながらも決意した様子が読み取れた。辺りが騒然とし始めた。

観戦席のそこかしこからはアليونに向けられた威勢のいい喚起のかけ声が上がリ、それはさざ波のように広がって周囲は瞬く間に大騒ぎとなった。

ゴルバノスは満足気な面持ちで立ち上がると、大股で闘技場の中央へと進んでいった。

「ダメだ！ ムチャだよ！ なんとか理由つけて断つちゃえよ！」
セネカは一旦差し出しかけた両手をさっと引つ込めた。

アリオンは困ったように眉根を寄せ、苦笑いをしてみせた。そして行き場を失った杯を持て余したように眺めてから、セネカとイレムを交互に見据えてた。

「二人とも、席に戻っているんだ」

杯を受け取ろうとしないセネカに代わって、イレムが受け取った。

「アリオン殿……どうか、お気をつけて」

イレムの言葉にアリオンは小さく顎を引いて応えた。

「あッ！ そうだ 武器！」

セネカが思いついたように叫んだ。

「あにイ！ 剣がない。昨日、手入れに出してまだ戻ってきてないよ」

「剣なら、ここにございます」

間髪を入れず、兵士から恭しく一本の剣が差し出された。

どこからともなく現れたその兵士は ラザレだ。

セネカの顔にあからさまな疑いの色が浮かんだ。

「ヘフアイトス翁の剣にはやや劣るかもしれませぬが、こちらもしっかりな鍛冶士の鍛えた業物わざもの。お役に立てることと存じます。しかしながら もしも不信に思われるようでしたら、お確かめを」

「ゼツタイあの剣あやしいぜ！ あのラザレって奴、ゴルバノスって奴とグルだ！」

イレムは、セネカの口が開く前にその腕を掴み、その場から引き下がった。

「口を謹め。剣に細工など 我が軍にはそんなマネをする者などいない。第一、こんな大勢の中だ、不正はすぐに見抜かれる」

「でも！」セネカは尚も食い下がった。「あの二人最初から仕組ん

でいたんだろ？ そうでなきゃ……」

セネカは訴えかけるような眼差しでイレムを仰ぎ見た。イレムは気持ちの昂りを抑えるように押し殺した声で答えた。

「そうだな。きつと……そうに違いない」

イレムとセネカが観戦席に戻った頃 闘技場の円の真ん中には、ゴルバノス、少し離れてアリオンと審判が立っていた。

アリオンは審判から何かしらの説明を受けているのだろう。時折小さく頷いている。

やがて審判はその場から退いた。

二人は試合開始の合図を待つばかりの体制だった。

「王よ！！」

ゴルバノスがいきなり大声を張り上げた。

「王よ。戦士同士の闘いに何よりの礼といえば、命の得失もいとわぬ覚悟。若君アリオン殿、大切な御子とは承知なれど、手加減は

」

「もとより無用だ。存分にやれ」

「なによりのお言葉」

「なんてヤツだ！！ 野蛮人！」

セネカはゴルバノスとポセイドンとのやり取りを聞き終えるなり、憤慨して声を荒げた。

「こんなムチャクチャな試合あるもんか！ ポセイドンのおっちゃん、なんで止めさせないんだよ！ 自分の息子がやられるかもしれないっていうのに！！」

「……」

イレムは黙りこくったまま、じつと何かを考えている様子だった。

「あ！もしかして……」セネカが息を呑んだ。「もしかして、ポセイドンのおっちゃんは知ってたのかい？ この事を知ってて

」

「いや。それはない」イレムがきつぱりと言った。「予め王の耳に

入っていたとしたら、潰されているだろう　　こんな無謀で強引なやり方」

イレムの声は、今や観戦席のざわめきにかき消えそうだった。

「後々ゴルバノスはきつく咎められるだろう。しかし、この場合は今となつては、もう　　どうすることもできまい」

その時、試合開始を知らせるほら貝の音が高らかに響き渡った。

ゴルバノスが六節棍を振り回し、アリオンが腰を落とす姿勢で身構えた。

「大丈夫。アリオン殿に十分勝算はある！」イレムは力強く拳を握り、誰に言つともなしに呟いた。

一方のセネ力はこわばった表情で、血の気が無くなるほど強く両の手を握り締めていた。

試合は開始と同時に動いた。

ゴルバノスの振り上げた六節棍が唸りをあげた。

棍は、これまでの試合とは比べ物にならないほど速く、豪快に空を斬り、アリオンを襲った。

迫る棍を、アリオンは素早い身のこなしで避けた。

ゴルバノスの攻撃を見切る段階なのだろう。アリオンが反撃に出る様子はない。

六節棍が、今度は真上から振り下ろされた。

アリオンは横っ飛びにかわした。

棍は勢い余つて地面に叩きつけられた。

アリオンは　　すかさず、滑り込むようにゴルバノスの脇をすり抜ける。

間髪入れず、反対側の棍の端が真横から切り込んできた。

アリオンはとっさに地面に平伏してそれを避けた。

次は、相手をなぎはらわんばかりにゴルバノスは地面すれすれを狙つて棍を操った。

しかし、アリオンは鞭のようにしなやかに跳躍し、難なくそれを

かわした。

観戦席からは、ゴルバノスの猛烈な攻撃を鋭く読み、ひらりひらりと、鮮やかに逃れるアリオンに対する感嘆のため息が漏れた。と、同時にゴルバノスの、そのあまりの剛腕ぶりに観戦している皆が口を閉ざした。

ゴルバノスは、自身の言葉通り、全く遠慮というものが無かった。「な　なんなんだよ！　あれ！！」セネ力が憤りを露にした。「今までの戦法とまるで違うじゃんか！　あんなかくし球、今まで見せなかつたなんて、なんてひどすぎる！」

イレムも、苦虫を噛み潰したような顔つきで唸った。

「ああ。それに……体力も温存していたようだ」

「ずるい！　やり方が汚いよ！！　アイツ、あにィに何か恨みでもあんのかよ！！」

「直接の恨みはない　だろう。だが……いや……。とにかく、アリオン殿はゴルバノスを疲れさせてから、一気にカタをつけるはずだ。あんなに激しく動いていたら、じきにスタミナ切れを起こす。

見る　既に息が上がってきている」

試合は膠着状態に入っていた。

イレムの言葉通り、ゴルバノスは手応えどころかかすりもしない対戦相手にすっかり翻弄され、予想外に体力を消耗させているようだった。

ゴルバノスはぜいぜいと喉を鳴らし、厚い胸板を盛んに膨らませていたが、気力は萎えるどころか、益々闘争心をかきたてられているように思えた。

アリオンを睨みつけるその目は血走り、さながら獲物を我が物にせんと躍起になる野獣のようだ。

一方アリオンも、見上げるほどの巨漢に臆する様子は見られず、冷静に攻め入る機会を伺っていた。

アリオンの果敢な判断力と身のこなしは、これまで厳しく鍛えら

上げれてきたのだということ物語っていた。

決め手のない状態のままではあったが、アリオンの方が優位に立っているようにも見える。

観戦席からは応援の掛け声はもちろん、冷やかしなどの野次さえも聞こえない。

兵士たちは皆が皆、固唾を呑み、この先行きどうなるか分からない対戦を見守っていた。

闘技場内に一陣の風が流れた。それが合図となった。

ゴルバノスが吠えた。と、同時に六節棍がアリオンめがけて勢いよく落ちてきた。

アリオンは一歩後退してそれを避けた。そして。跳躍した。

アリオンは、ゴルバノスの身長を優に超えるほどの跳躍力を見せた。

度肝を抜かれたゴルバノスの動きが一瞬緩慢になった。

アリオンはゴルバノスの肩に飛び乗り、直ぐさま肩口を蹴ってその反対側に跳んだ。

踏み台にされたゴルバノスは怒りのあまり顔を歪めた。

そして、怒号と共に振り向き様に棍を真横に払った。

しかし。

「ああっ！」

「遅い！」

それまで息をつめて試合を見守っていたセネカとイレムが当時に声をあげた。

ゴルバノスの後方に着地したアリオンの動きが一瞬止まった。かと思うと、ぐらりと前方に傾き、地面に膝と手をついたのだ。

アリオンは即座に立ち上がった。しかし、そのほんの一拍の間は致命的だった。

アリオンが振り向いた時、六節棍が唸りをあげてその目前まで迫

っていた。

避ける間も、飛び退く間も、ない。

危ない　　！！

セネカは反射的に、固く目を瞑った。

鋼と鋼のぶつかり合う、耳障りな音が辺りに響いた。

観戦席全体が息を呑んだ。

隣にいたイレムの口から悲観的なため息がもれた。

セネカは恐る恐る目を開けた。

闘技場のほぼ中央に対峙する二人の姿　大柄なゴルバノスの向こう側には、二まわりほど小さなアリオンの姿があった。

無事だ。手にはしつかりと剣を握りっっている。

しかし、その剣には　剣身が半分しかない。

アリオンは咄嗟に剣をかざし、ゴルバノスの棍の攻撃をまともに受け止めたのだろう。

結果　。

「剣が……お、おれ……た？」

セネカは喉の奥から絶望的なかすれ声を絞り出した。

半分になった剣を構え、アリオンがじりじりと後ずさった。

ゴルバノスの片方の口角が斜めに醜くつり上がり、勝利を確信したようなひきつった笑みが顔中に広がった。

「この勝負　もらったああ！！」

ゴルバノスは一気に勢いづいた。

六節棍が唸りを上げた。

アリオンはそれを辛うじて避けたものの、足がもつれた。

容赦ないゴルバノスの打ち込みから逃れるため、アリオンはごろごろと地面を転がった。

立ち上がりかけたところを狙われ、足元を掬われた。

紙一重のところのアリオンはゴルバノスの激しく執拗な棍の攻撃をかわしていたが、先ほどとは打って変わって余裕が全く見られない。

形勢逆転　アリオンの体制は崩れ、誰の目から見ても明らかに

劣勢となった。

ゴルバノスは今やアリオンをいたぶり、弄んでいるかのように六節棍を操ってる。

もうおしまいだ！ 早くやめさせないと　！

セネカは組み合わせた両手をさらにきつく握りしめたまま、急いで審判の方を見た。

試合の動向を見極めている審判からは今にも勝敗の判定が下るはずだ。

しかし、審判はなかなか勝敗を告げようとしなない。

「なんでだよ？ 勝負はもうついてるじゃないか！」セネカは信じられないといった様子で思わず声に出した。

アリオンの剣は真つ二つに折れていたものの、手放してはいない。それに反撃の機会を窺っているようではあったが。

審判がちらりともつれあう二人の対戦から視線を外した。

視線のその先は、ポセイドンだ。

『審判が判断に迷う時など、微妙な場合もある。その時は、王の決裁に任せられる』

セネカは先ほどのイレムの言葉を思い出していた。

判定は王であるポセイドンに委ねられているに違いなかった。

闘技場の所々から短い感嘆の声が沸き起こった。

アリオンがゴルバノスの足元　股の下を転がるようにすり抜けたのだ。

しかし、形勢は依然として不利のままだった。

辛うじて棍の攻撃をかわしているものの、アリオンの回避行動は危なっかしい。いつ六節棍の餌食になってもおかしくない状況だ。

セネカは再びポセイドンの方に目をやった。傍らに立つ側近の兵士がポセイドンに何やら耳打ちしているのが目に入ったが、ポセイドンは酒の器を口に運び、泰然としたまま座していた。

側近がポセイドンの唇の動きの意味を読み取り、審判に向かって何やら合図を送った。

審判は念を押すように小さく頷き、試合に向き直り再び王の方を見ることはなかった。

セネカはその合図が『試合続行』を意味するものだといいことを覚ったその時 おもむろに、隣にいたイレムが立ち上がった。

イレムは踵を巡らせ、肩を大きく揺すりながらどこかに向かつて歩き始めた。

「あ　！　イレム！？　どこへ　？」セネカは慌てて訊ねた。しかし、イレムはその問いに答えることなく、足を引きずりながら観戦席脇の狭い通路を進んで行く。

跛こつこを引いて歩くイレムに、セネカはすぐに追いついた。

イレムは海王のための特設の観戦席まで来たかと思うと、肘掛け椅子に収まっているポセイドンの前にぎくしゃくと跪ひざまずいた。

「王よ。恐れながら申し上げます」

イレムの口調は興奮を抑えきれない様子で早口になっていた。

「この対戦は既に勝負がついております。一刻も早く試合を打ち切り、審判に勝敗を告げさせるべきです」

「ほお？　勝負がついておると？」

「はい」

「この勝負は……アリオン殿の負けにございます。早急に決裁されるべきです」

イレムの懸命な様子を見ていたセネカも、倣って跪いた。イレムはこの試合をすぐに止めさせるよう、ポセイドンに提言に来たのだ。

「王よ！　何とぞ　」

「勝負は、まだついとらん」

二人の従者は同時に息を呑んだ。

「あやつは、まだ闘う意思が残っております。棄ててはおらん」

「いいえ！　残念ながらアリオン殿には勝ち目はありません。早くお取り止めを！　彼は……ゴルバノスは、本当に手加減をしない男です。取り返しのつかないことにならないうちに　」

「おっちゃん!!」

ポセイドンとイレムのやり取りの一部始終をおとなしく見ていたセネカが、すつくと立ち上がると堪らずポセイドンの前ににじり寄り、大声で叫んだ。

ポセイドンを含め、そこにいた側近の兵士や給仕の女性たちは揃って仰天し、目を瞠った。

「な　なに？　おっちゃん、だと？」

「そんな涼しい顔で眺めていないで今すぐ試合を止めさせるんだ！あんたの倅がどうなつてもいいのかよッ!!」

「なんだ？　貴様は？」

ポセイドンは不躰な態度をとるセネカを見つめ、訝しげに眉をひそめた。

「申し訳ございません！」

セネカの存在に気が付いたイレムは、はつとなつて頭を下げた。

「この者は、アリオン殿づきの従者　従者見習いの、セネカにございます」

「なに？　セネカ、だと？」

ポセイドンは肩をいからせて目の前に立つセネカを、まじまじと眺めた。

給仕の女性たちがお互い顔を見合わせ、くすくすと可笑しそうなふくみ笑いをした。

セネカを舐めるように見ていたポセイドンは、不意に表情を和らげた。

「おまえが、か。そうか　倅が頼りにしている従者とはお前のことか。やれやれ、とんだ弓の名手だな」

「そ、そんなこと、どうだっていいだろ！　早く審判に合図して、試合を止めないと　このままだとあにイが打ちのめされて粉々に砕けちまうよ!!」

セネカは気恥ずかしさで真っ赤になりながら地団駄を踏み鳴らした。

「王よ！ 私からもお願いいたします！ どうか！」

イレムが再び深々と頭を下げた。

ポセイドンは肩をそびやかすと、呆れたように首を振った。

「従者にこれほど心配をかけるとは、倅も主人として失格だな」

その時、闘技場からまた大きなどよめきが起こった。セネ力はもう気が気ではなかった。

「それとこれとは話が別だろ！ 早く！ 早くその手を上げろつたら！」

「貴様！ 王に向かってなんという口のきき方を！！」

側近の一人が乱暴にセネ力の二の腕を掴み取ったが、ポセイドンはそれを制した。

「はねつかえりめ まあ、よい。お前たち、落ち着いて、よお見ろ！」

ポセイドンが闘技場を指差した。

弾かれたように、イレムとセネ力が揃って後方の闘技場へと視線を移した。

アリオンは闘技場の端に追い詰められていた。

背後は闘技場と観戦席の境の仕切り縄だ。

そこに居座っていた見物の兵士たちは、潮が引くように一斉にその場から立ち退いた。

一歩でも場外に出たら、対戦放棄と見なされるため、これ以上は後に退けない。しかし、不気味に円を描く六節棍の壁は両側へ抜けるのを完全に阻止しようと、重く低く唸っていた。

左右どちらかを無理矢理かいくぐるか、もしくは先ほどのように足元をくぐり抜けるか、頭上を跳び越えるか……。

「どうされた大王の御子！ これはまた存外！ 最後の悪あがきもはやこれまでといったところか！」

考えあぐねるアリオンを嘲笑うかのようにゴルバノスが息巻いた。そして、一歩また一歩と前進した。

アリオンは既に後退も出来ず、身を屈めて目の前の巨漢を見上げるだけだった。

「第一等の戦果をあげたくらいでいい気になっているようでは、まだまだですなあ！ それに その程度のウデでは、まったく行く末が思いやられますぞ！」

ゴルバノスの声は今や怒声のように、辺りに響き渡っていた。

「あいにくと某は不粹にして手加減というものを知らん！ 王殿のカツと思ってお受けなされい！ さあ、どこがお望みか！？ 腕か、足か！？」

もう ダメだ！

いたたまれなくなつたセネカは両手で顔を覆った。

アリオンが滅多打ちにされるところなど見たくなかつた。耳も塞ぎたいくらいだった。

「だ あ あ ああ ！ ！」

ゴルバノスが雄叫びを上げながら大きく振りかぶり、打ち込まんとする棍を一瞬引いた、その時 。
ぶつり。

何かが断ち切れるような鈍い音がした。

何が切れたのかはすぐに判つた。ゴルバノスが纏っている皮衣の肩帯の部分がぱつさりとは切断されたのだ。

片方の肩帯ばかりではない、もう一方の肩帯も同じように切り離れられ、見事に前身ごろと後ろ身ごろに分かれた。

重量のある皮製の衣はずると胴体を滑り落ちた。しかも 。

「あ ああ ああ？」

威勢の良い雄たけびが頓狂な声に変わったので、セネカは覆っていた手をの隙間からうつすらと目を開き、場内を垣間見た。

セネカの目にゴルバノスの皮衣の脇腹辺りがぱつくりと開き、みだらに捲れていくさまが映つた。たちまち、その素肌がむき出しになる。まるで栗の皮を剥ぐように。

更には 衣の下に着けていた下布も同じように切り込まれ……

腰からはらりと解け落ちた。

これらは矢継ぎ早に起こった。アリオンがゴルバノスの脇をする抜ける際に行った離れ業の結果であることは、後々に判った……。

女性たちの間から半ば困ったような、半ばはしゃぐような悲鳴が上がった。セネカはまた別の意味で、両手で顔を覆った。

「おわ あ あ ああ ! !」

ばらばらと落ちていく皮衣と下布に慌てふためいた屈強なつわものが、露あらわになりそうな根幹をかばおうと六節棍から右の手を離した。

途端。

勢いづいた棍はいびつな弧を描きゴルバノスの身体に巻きつき、胴体を締めあげた。そして、その端は 勢いをほとんど殺さないまま、右のふくらはぎを直撃し、挟みこむようにして向う脛をも打ちつけた。

「ぐ あ あ ツ ! !」

苦痛のあまり、ゴルバノスの眼球が飛び出した。

ゴルバノスは目を剥き、顎が外れそうなほどあんぐりと口を開けたまま、石化したように体を強張らせた。

アリオンが動いた。

身を屈めた姿勢から、地面を蹴った。そして、ゴルバノスの後方に大きく回り込んだ。

ゴルバノスは今、自らの得物に強打された片足を庇い、もう片方の足に重心が寄っていた。

アリオンはそこを狙った。

がんじがらめになったゴルバノスは体を捻じらせて六節棍を振りほどこうとしていたが、その時既にアリオンは後方から足元目がけて、前傾姿勢で突っ込んでいた。

アリオンは肩口から満身の力を込めてゴルバノスの隆々としたふくらはぎにぶつかった。

痛みを堪え、ようやく体を支えていたところに不意に後ろから足を掬われたのではたまらない。

巨漢が一瞬持ち上がったかと思うと、長く尾をひく叫び声と共に背中からずしんと地響きを立てて倒れた。

六節根の端がゴルバノスのもう片方の手から離れた。

繋がっている残りの棍は仰臥した体の下敷きになっている。

ゴルバノスが我に返るよりも早く、アリオンは地面に落ちた棍の端を蹴り飛ばした。

そして、風のような速さで今や無防備に横たわる巨体に馬乗りになった。

アリオンがゴルバノスの喉元を狙って、折れた剣を振りかざす。

観戦席にいた兵士たちはあつと息を呑んだ。

闘技場内が緊張に包まれた。

ゆるやかに流れる風さえも静止したかのように冷たく張りつめ、辺りはしんと静まり返った。

恐ろしい静寂に耐えきれず、セネカは顔を覆っていた両手をそろそろと払い除けた。

闘技場の片隅には。

無様に仰向けに寝転がったゴルバノスの姿があり、その身体を跨ぐような格好でアリオンの姿があった。

アリオンは、剣を真下に突き立て、ぴたりと動きを止めていた。

突き立てた剣　折れた剣先はゴルバノスの喉元の丁度真上にあつた。

剣先と喉元との隙間は、藁一筋ほどもない。

ゴルバノスは、弾き飛ばされた獲物のあり場所に手を伸ばすことは勿論、大きく息を継ぐこともままならなかった。

最後の悪あがきを見せようと、アリオンの首根っこを掴もうと手を伸ばしたものの、今にも喉笛をかき斬られそうな状況では文字通

り手も足も出なかった。

やがて。

「ま……まい……った……」

ゴルバノスは、ようやくしわ枯れた声を絞り出した。

「どうした!! 審判!! 判定を告げんかあ!!」

ポセイドンがいつの間にか肘掛椅子から立ち上がり、凝然としている審判に向かって大声をあげたので、セネカは驚きのあまり飛び上がった。

審判員がはつと我に返った。そして。

「い、一本!! そこまで! この勝負、アリオンの勝利!!」

その瞬間、観戦席にいた兵士らの間から割れんばかりの歓声が沸き起こった。

「5」（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

目指せ臨場感！とばかりに、拙いながらも力を込めました。いかがでしたでしょうか。

あと、判定その三に『場外』が必要…ということが「5」を書いていて判明しましたので；加筆します。すみません。

先月から今月にかけて、諸事情により更新が不定期になり、楽しみにしていた方には大変申し訳なく思っています。

途中で投げ出さないため・モチベーション維持のためにと週一で続けてきましたが、少々無理が出てきたという事もあり、今後もずっと不定期upになる見込みです。ご了承ください。

章をたくさん分割してしまい、新しいものが読みづらくなってきた…など、後々のことを考慮に入れて、別枠で『Sena セナ』を立ち上げました。

章を取りまとめただけで内容は同じですが、『改訂版』としています（まだ連載中なんですけどね；）

ところどころに誤字が残っていることと、繋がりがおかしかったり、直しを入れたかったり、足りない部分を加筆したり…etc.

何より書きながら登場人物のキャラ（人物像）を作っているところもある；ので、このあたりに筆を入れつつ。こちらもマイペースの不定期でupしていきます。

トップページ右下の『同一作者の小説』からお入りください。

今回は第十六章『悪夢』です。

コウミ

アリオンは形勢不利な状況をひっくり返し、英雄の座を獲得した。闘技大会の若き勝者は周り押し掛けた兵士から肩やら背中やらを叩かれ、もみくちやにされた揚句、肩車までされて海王軍流の荒っぽい祝福を受けていた。

どこからか優勝杯が兵士の手から手へと渡り、アリオンの元へと届いた。

手渡された優勝杯を抱え込みながら困ったようにはにかんでいたアリオンだったが、担ぎあげた兵士に促されると、やがて片手を挙げて皆の歓声に応えた。

辺りの群衆からは更なる歓声が沸き起こった。

セネ力はポセイドンの脇に立ち、その様子を安堵と感嘆の満ちた目で見つめていた。

「どうだ？ 小娘」

セネ力はホツとするあまり、へなへなとその場にへたり込みそうになっていたが、ポセイドンの声を聞いた途端、たわんでいた背筋と膝が一気に元に戻った。

「小娘……ですって？」

かたわらのイレムが戸惑ったように眉を寄せた。

セネ力が振り仰ぐと、笑みを浮かべるポセイドンの悪戯っぽい瞳に捕らえられた。

王の付添いの女性らは何やら耳打ちをしながら、なめるような視線を投げかけている。

周りを固めていた側近の兵士たちさえも、お互いに顔を見合せて苦笑をもらしてした。

セネ力はさつと顔を上気させたあと、同じくらいの速さで色を失った。

「倅をうまく騙したな？ ああ？」

ポセイドンがあしらうようにふんと鼻で笑った。

「あれを欺けても、儂の目は誤魔化せんぞ？」

セネカはぎくりとしてポセイドンを見上げた。

騙す？ 欺く？

セネカは急いで反論しようとしたものの、喉が塞がれたように言葉が出てこなかった。

「まあいい 今日はいれも本調子ではないようだ」ポセイドンはやや声を落とすと、闘技会場へと視線を戻した。

「今夜は十分に休ませるがいい。祝杯の席にも出んでよい。しかし、明日は一斉に討って出る。それまでに直しておけ」

セネカは、ハツとなって闘技会場内の人波へ目を向けた。そして今も尚兵士の取り囲まれているアリオンの姿を認めると、弾かれたように身を翻した。

途中、かたわらに立つイレムと目が合った。

セネカはイレムの険しい眼差しをやっとのことで見過ごし、駆け出した。

本調子ではないようだ。

先ほどのポセイドンの言葉が頭の中にこだましていた。

セネカは嫌な胸騒ぎがして、いてもたってもいられなかった。

あの時。

ゴルバノスの肩から跳び退いた時、一瞬アリオンの動きが緩慢になった。

その時は気がつかなかった。だが、今にして思うと……。

なぜもつと早く気がつかなかったのだろう。

セネカは走りながら歯噛みした。

一刻も早くセネカはアリオンの元にたどり着きたかったが、闘技会場には今や大勢の兵士の群れでひしめきあっており、体の小さなセネカがその中を進むのは容易ではなかった。

「静まれえい！！ 王がお話になる！！」

高台の観戦席からはポセイドンの側近の兵士が声を張り上げていた。

やがて海王の言葉に聴き入るため、辺りのがやがや声は次第に鎮まっていた。

「勇敢なる者どもよ！ 聞くがいい！ 機は熟した！」

ポセイドンの太く力強い声が闘技会場に響き渡り始めても、セネカはまだ雑踏の中を右往左往していた。

兵士たちは真剣な眼差しで一言も聞きもらすまいと息を詰めたように口元を引き結び、大木のように立ち尽くしていたので、先に進みたいセネカにとって困難極まりない道のりだった。

「おい。通してやれ。若君の端女はしためだ」

見かねた兵士の一人が前方の兵士に向かって低く呟いた。

人垣が割れたその向こうで、なにかがきらりと光った。

黄金色の優勝杯だ。それに。

セネカはアリオンの冠っているかん鍔を確認した。

見つけた！

「どいて どいてくれたら！ 通しとくれよ！！」

セネカはアリオンを肩車していた兵士の脇をようやくすり抜けると、たたらを踏んで立ち止まった。

目の前には脇に優勝杯を抱え込み、屈託のない笑みを湛えたアリオンの立っていた。

しかし、その顔には明らかに疲労の色が濃く浮かんでいる。

うまく騙したな。

またポセイドンの言葉が頭の中に鳴り響いた。

「違う！ 違うんだ。騙していたわけじゃない」

「？」

アリオンの不思議そうに見つめ返した。

「いや。あ　あのさ。あー。ええーと……」

セネカがどきまぎしながら適当な言葉を探していた時、誰かが面白半分にセネカの背中をどんと押した。

不意を突かれセネカは前のめりにつんのめり、勢い余って、そのままアリオンの体にしがみつくと恰好になった。

「！？」

アリオンに受けとめられたセネカはハツとなった。衣服の上から感じる体温が異様に熱い。

セネカはアリオンの体から身をひきはがすと、腕を伸ばし手の平をアリオンの額に押しつけた。

「やだ！」

セネカは、今度はぎよっとなって声を上げた。

「すごい熱！」

「ああ　。大丈夫だよ。風邪　かな？」

言いながら前髪をかきあげたアリオンの表情に一瞬、虚ろな色が浮かんだ。

どこかで冷やかすような口笛が小さく鳴った。

セネカはこれ見よがしに歯軋りをして無作法な輩をきつと睨みつけるとアリオンの手をぐいと引つ張った。

「セネカ。大丈夫？　どうしたんだい　？」

「それはこっちの台詞だ！　まったくもう、ヒヤヒヤさせやがって！　いいから　早く！」

セネカはアリオンの手を引き、急ぎ立てた。

ポセイドンの演説も終わり、辺りはまたがやがやとざわめき始めていた。

闘技会場を後にする道すがら、アリオンは幾人かの兵士から栄誉を称える酒の杯が振る舞われた。しかし、その度にセネカは、思いつくありつたけの謙譲の言葉で丁重に断った。

一刻も早くアリオンを休ませなければならぬ。セネカは、アリオンの腕を引き、天幕へと急いでいた。

ようやく陣営の天幕が見え始めた頃、ずんぐりした兵士がにこやかに二人に近づいてきた。

セネカはとうとう癩癩玉を破裂させた。

「いいかげんにしろ！ あにイは疲れてんだから、酒は要らないって言っただろ！！ 早く道をどけるよッ！！」

「い いえ。剣の手入れが終わりだったので……お届けに……」
セネカの剣幕にすっかり圧された兵士は、訳が分からないといった様子で小さく苦笑いを浮かべるアリオンに剣を手渡した。

天幕に戻るや否や、アリオンは力尽きたように寝台倒れ込み、そのまま身を屈めてうずくまった。

「だいたい野蛮なんだよな！ この奴らってさ」

セネカはたまっていた苛々を吐き出すように悪態をついた。

寝台に横たわったアリオンは目を閉じ、浅く苦しげな呼吸を繰り返している。

剣を寝台の脇に立て掛けたあと、セネカはアリオンの体の上掛けを羽織らせた。

そして、再びその額に手の平を押し当てたセネカはぞっとした。

尋常な熱ではない。

セネカは、慌てふためきながら水瓶から優勝杯に水を注ぎこんだ。優勝杯は布巾を浸すのにうってつけの大きさだった。

「朝から具合が悪かったのかい？」

浸した巾を絞りながら、セネカは声を落としてたずねた。

アリオンは目を閉じたまま何も答えなかった。

セネカはアリオンの額に冷えた濡れ布巾をそっとのせた。アリオンは小さく「ありがとう」と呟くと、安堵の表情を浮かべた。

「1」（後書き）

久々の更新となりました。

お待たせして申し訳ありません

闘技大会も無事^^?に終わり、いよいよ次の段階の入ります。

第十六章執筆は、私にとってある意味『壁』のように感じています。
引き続きマイペース更新となります。

気長にお楽しみいただけましたら幸いです。

コウミ

「2」

やがて、天幕の外からざわざわとした人の気配や話し声が響いてきた。

闘技会場から兵士たちがどつと引き上げてきたのだろう。周辺は次第に騒がしさを増してきた。

炊き出しの支度のため、従者も小間使いも忙しく走り回る時間帯だったが、セネカはアリオンのかたわらを離れる事が出来なかった。アリオンは先ほどからぐったりと横たわったまま、苦しげに不規則な呼吸を繰り返していた。

食事の頃合いになったら、イレムが様子を伺いに天幕を訪れるはずだ。

セネカはアリオンの額の巾を幾度となく取り替えながら、辛抱強く先輩従者を待っていた。

しかし、いくら待ってもイレムはやって来なかった。

セネカは、観戦席でのイレムの険しい顔つきを思い出した。

女だつてこと、なんで黙っていたんだつて、こつてり絞られるかもしれない。

セネカは少し陰鬱な気持ちになった。

しかし、今はそんなことよりもアリオンの体の方が心配だった。

熱は下がるところかますます高くなっていつている。

首をめぐらせた拍子に落ちたのだろう。アリオンの額から巾が滑り落ちた。セネカは巾を拾いあげて再びその額にのせた。

アリオンの目がうつすら見開かれた。

「大丈夫かい？ おいら、誰かを……そうだ。ポセイドンのおつちやんを呼んでくるから」

「ダメだ」

ゆらゆらと焦点のぶれていた瞳がたちまち定まったかと思うと、アリオンはしっかりと口調で素早く言った。

「そんなことしたら、父さんに笑われる。やわな奴だ。情けないって だから言わないでくれ。父さんには 」

「……でも」

「いいんだ。少し疲れが出ただけだから。少し休めば 　じきよくなるよ」

「……」

それからしばらく二人の間で押し問答が続いた。

「カッコつけてる場合じゃないよ。だったら 　サイラスのおっちゃんはやんは？　なにか煎じ薬をこしらえてくれるかもしれない。ポセイドンのおっちゃんには黙つといてくれて頼んどけばいいんだからさ」

しかし、アリオンは頑として首を縦に振ろうとはしなかった。

これにはセネカもすっかり困り果ててしまった。

それにしても 　。

イレムは何をしているのだろう。

セネカはじりじりとしながら、幾度となく天幕の入口に視線を走らせた。

炊き場に現れない従者を、あのイレムが黙認するなど考え難いことだった。

それとも、従者として出来が悪すぎて呆れてしまったとか 　。
アリオンはうつらうつらと浅い眠りに入った様子だった。

セネカは意を決して水差しを取り上げた。

冷たい水を汲みに行くだけだから 　。
心の中でそう言い訳をすると、音を立てないように入口の垂れ幕のすき間からそつと外に滑り出た。

水場で冷たい水をたっぷりと瓶に満たしたあと、セネカはイレムを探した。

しかし、あちこち探し回ってもイレムの姿は見あたらぬ。

広場では武将や兵士たちがお決まりの祝宴で盛り上がっていた。そこは人波でごったがえし、熱気と酒の臭いでむせかえりそうだった。

給仕に入っていないとなると。

セネカは踵を返し、炊き場へと向かった。

そしてそこにもイレムがいない事を確かめると、今度は従者用の天幕へと急いだ。

もしかすると と、思ったのだ。

セネカは、イレムがまさかこの忙しい時間帯にサボり組に混じって天幕にいるわけがないと思っていた。

しかし。

イレムはいた。

天幕内は数名の従者がたむろしていた。

その中にイレムの姿を見つけたセネカは、我が目を疑った。

「何の用だ？」

イレムが無愛想に言った。

セネカが二の句が告げられないでいると、イレムが畳みかけるように言葉をついだ。

「ああ ちようどよかった。僕も君と話がしたいと思っていたところだ。来たまえ」

言いながらイレムがセネカの前を通り過ぎた。少年従者たちの忍び笑いをあとに聞きながら、セネカは慌ててイレムの後を追った。

「で？」

天幕の裏手まで来ると、イレムが振り返った。

セネカは言葉を詰まらせながら、闘技大会が終わってからのアリのオンの様子を伝えた。

「それで、具合が悪いみたいで、熱も少し……だから、来てほしいと思って」

「ごめんだな」

セネカが皆まで言い終わらないうちにイレムが冷たく言い放った。
「え？」

「ごめんだと言ったんだ。アリオン殿がお疲れな様子ならば、従者である君が何とかしたまえ。そうさ　せいぜい君がしっかり介抱して差し上げるがいい。僕の出る幕ではない」

イレムは更に突き放すように言った。

「なんで……」

余りにも心ないと思ったセネカは思わず聞き返した。

「なんでだつて？　それはこっちの台詞だ」

イレムは気分を害したように早口でまくしたてた。

「自分の胸に手をあてて考えてみるがいい　いや　それにしても、君には恐れいつたよ。まったく！」

イレムは冷ややかな眼差しをでセネカを見据えた。

「まったく君は、策士、なんだな」

「な……なに言ってるんだよ……」

セネカはイレムのただならぬ態度に、すっかり臆していた。

「だつてそうじゃないか。君は、女なんだろう？」

やっと理解できた。

イレムが不機嫌なのはこのためだったのだ。

セネカはイレムの視線を避け、しばらく考えこんだあと、無言でこくりと頷いた。

「アリオン殿に近づきたいばかりに性別を誤魔化し、たぶらかすなんて。まったく何を考えているんだか」

「た、たぶらかすなんて！」セネカは血相を変えて叫んだ。

「たぶらかしてなんかいるもんか！」

「だつたらなんだ？」

イレムも負けじと語気を荒げた。

「現にアリオン殿は君を男だと思って疑っていない。違うか？」

「……それは、そうだけ……」

「君はアリオン殿を欺いている」

「あ 欺いてなんか！」

瓶を抱えるセネカの手に力がこもった。

「欺いてなんかいない！ あっちが勝手に間違えたんだ！」

「ああ。そうだな。君は一見、男にも見えるからな。だが、君はその間違いを正していないじゃないか。相手が勘違いをしているのを黙認しているのは、欺いているのと同じだ」

「……」

セネカはイレムの刺すような視線に耐えきれなかった。

「魂胆はみえみえだ」

「……こんたん？」

「玉の輿を狙っていたんだろう。なんととっても海王の御曹司だからな」

「な なんだって！？ 馬鹿ばかしい！ だれがそんな」

「だったらなんだ？ 言ってみろ」

「……」

セネカは唇をぎゅっと噛み締めた。

今や心がすっかりかき乱され、瓶を持つ手が震えていた。

セネカは押し黙ったまま立ち尽くした。

イレムは完全に疑っている。何を言っても聞く耳を持たないの分かり切っていた。それよりも、根も葉もない言い掛かりにセネカは打ちのめされ、何も言えなくなっていた。

「従者として少しは見込みがあると思っただけに、それ以前の問題だ」

ゆっくりとイレムが口を開いた。

「もうこれっきりだ。僕はおろさせてもらっ」

イレムがゆらりと肩をいからせて歩き始めたが、すぐに歩みを止めた。

「君も愚かだな。こんなみえすいた嘘 いつかはばれるというのに。アロン殿が本当の事を知ったら、君を軽蔑するだろう」

「けいべつ する？」

「ああそうさ。少なくともがっかりされるだろうな。あんなに君を信頼しておられるのだから。これ以上の裏切りはない」

嘘。

軽蔑。

裏切り。

イレムの言葉が頭の中を渦巻いていた。

セネカは動揺のあまり、息が詰まりそうだった。

そんなに酷いことだったのだろうか。

セネカは、アリオンが自分を男だと勘違いしているのは知っていた。しかし、本当の事をすぐに言わなかったのは、もちろんそんな下心があつてのことではない。

「まあ、せいぜいよろしくやっていたまえ」

イレムは、わざと耳につくような言い方をした。

「ただし、玉の輿は諦めた方がいい。アリオン殿と君とは、この上なく不釣り合いだからな」

まるで何か堅いもので頭を殴られたようだった。

セネカは走り出して、一刻も早くこの場を離れたかった。

しかし両足が、まるで地面に貼りついたように全く動かず、セネカは去つていくイレムの後ろ姿を呆然と見送るしかなかった。

しばらくしてから、セネカはようやく従者用の天幕を後にした。

急いで戻らなければいけないことは分かっていた。

しかし、体が思うように動かなかつたので足取りは更に鈍っていた。

セネカはのろのろと先を急いだ。

君を軽蔑する。

先ほどのイレムの言葉が浮かんだ。

まるで楔くわくが突き刺ったようにセネカの胸がずきずきと痛んだ。
本当に、軽蔑するのだろうか。そんなにいけない事だったんだらうか？

セネカは天幕に戻りたくなかった。しかし、高熱に侵されているアリオンを放つてはおけない。

鉛のように重い足を無理矢理運び、セネカはやっとのことでアリオンの天幕に辿り着いた。

入口の垂れ幕の前に立ったセネカは中へ入るのをためらった。

どんな顔をしてアリオンと向き合ったらいいのか、さっぱり分からなくなっていた。

セネカ恐る恐る垂れ幕に手をかけた。

薄暗い天幕の奥から何か聞こえてくる。

「……？」

セネカのぼんやりとした視野に、寝台の上で身を振じらせてもがき苦しむアリオンの姿が映った。

「2」（後書き）

アクセスありがとうございます。

セネカ、イレムにぼろくそ言われてしまいました。

ここまで書いてみて…しまった！と、思ったことが^^；

サイラスのセネカに対するあの発言はあまりにも無責任ではなからうか^^；；；；

このあたり、直したい気持ちもありますが、このままにしておきます。

訂正加筆するとしたら取りまとめ改訂版である『Sena セナ』にて。

『Sena セナ』へは、トップページ右下の『同一作者の小説』からどうぞ

月一upしています。現在は第二章『いのち』まであがっています

素人ゆえ、ストーリー展開など、なかなか先のことまで考えが及びませんが、長い目でお付き合いくださいませ。

次回、来週upを目指します。

コウミ

聞こえてきたのはアリオンの呻き声だった。

アリオンは上掛けを体に巻き付かせ、悶えるように喉の奥から声にならない荒い息を吐いていた。

セネカは慌てて幕を撥ね上げると寝台へと駆け寄った。

アリオンの目はしつかりと閉じられていた。

夢に？ うなされている　！？

しかし、それは明らかに何かに怯え、逃れようとしている様子だった。

セネカは大急ぎで水の入った瓶を脇に置いた。あんまり急いだので中の水を威勢よく飛び散らしてしまった。

「あにイ！　あにイ！」

セネカはアリオンのすがりつき体を揺さぶった。

「どうしたんだよ！？　起きて！　起きてったらー！！」

アリオンが大きく息を呑み込み、目を見開いた。その瞳は恐れを含み、緊張していた。

「あ　。　セネ……力？」

「どうしたんだよ。大丈夫かよ」

セネカはアリオンがすぐに目を覚ましたので、ホッと胸をなでおろした。

「悪い夢でも見たのかい？」

「あ……ああ。夢……？」

硬くこわばっていたアリオンの表情からふつと力が抜けた。

「夢……か。そうか……」

アリオンは詰めていた息を大きく吐き戻した。

「毒草に……からまれて　」

「え？　毒草？」

「ああ　いや。何でもない」

言いながらアリオンはそっぽを向いた。

「あにイは陣営の兵隊ン中でも一番強くて怖いもの知らずなのに。よっぽどだったんだな。その夢に出てきた毒草ってさ」

実際セネカはアリオンを脅かすほどの草というのが　夢の中とはいえ、どれほどのものなのか見当もつかなかった。

セネカはアリオンを気遣うように覗き込んだが、アリオンはあえてその視線を避けるように顔を背け、何も答えようとしなかった。

「……。あ　そうだ。水！　飲むかい？」

セネカは、アリオンが気だるそうに体を引き起こすのに手を貸した。

そして、汲んできた瓶の水を器に注ぐと、アリオンに手渡した。

「にしてもさア。ここの連中は、よっぽどドンチャン騒ぎが好きだよな？　今日もあっちこっちで呑みまくってるんだから。あ　この水は、さ。あにイが寝ている間にちよいとひとつ走りして汲んできたんだ。もちろん誰にも会わなかったぜ。サイラスのおっちゃんにだって。イレムにだって　」

セネカは、アリオンがゆっくりと器を傾けて水を飲んでいる間ずっと、あれやこれや賑やかに喋り続けた。聞かれもしないのに必要以上に喋るのは自分でも不自然極まりないとは思ったが、口が止まらなかった。

セネカは無意識にアリオンから何か言われるのを　何かを聞かれるのを避けていた。

「セネカ？」

水を飲み終えた器を返しながら、アリオンがぼんやりとした表情で首を傾げた。

「君は　」

セネカはたちまち、ぎくりとなった。

「君は　何か食べる物を持って来なかったのかい？」

アリオンの問いかけに、セネカは心から安堵の息をもらした。

「あ　。なんだ……そんなことか。ええーと　そっか！　お腹

が空いたんだ！　じゃあおいら、もう一走りして何か持って来るよ」
「いや。僕はいいんだ」

立ち上がり行きかけたセネカをアリオンは制した。

「僕は何もいらぬ。お腹が空いただろ？　セネカ？　何か食べておいでよ」

セネカはアリオンの優しい言葉かけが心にずきんと響いた。

騙している

欺いている

軽蔑する

セネカの脳裏に、先ほどのイレムの辛辣な言葉が浮かんで、消えた。

「……。おいらは……。いいよ。その辺に朝の残りがあるから。それよかさあ　人のこと心配するより、自分のことしたらどうだよ。まったく」

ようやくセネカは言葉を返したが、気持ちとは裏腹に口調がとげとげしくなってしまった。

「そうするよ」アリオンは再び、寢床に横になった。

「明日は討つて出るから、十分に休ませないと」

「む　無茶だよ！　そんな体で！　ポセイドンのおっちゃんに言つて休ませてもらえよ！」

セネカは思わず声を上げたがアリオンの眼差しには迷いが無い事を見て取った。

きつと明日は這つても出陣するつもりなのだろう。

「ありがとう。でも君こそ　人のことばかり心配してるよ？」
「……」

心配するに決まってるじゃないか！　バカ　！

セネカは心の中で毒づいた。

やがて傾きかけていた陽もとつぷりと暮れ、宵闇がゆるやかに陣営の天幕を包み込んでいった。

いつもなら夜通し呑み明かす勢いの兵士たちも、明日の出陣のた

めにと早めに切り上げ、各々の天幕へと戻って行った。
まもなく陣営は静かな夜を迎えた。

セネカはアリオンの介抱を続けていたが、熱は一向に下がる気配がなかった。

アリオンは眠りから覚める度に、まるでうわ言のようにセネカに
労いの言葉をかけた。

「もう大丈夫だから　君も　おやすみよ」

切々にそう言うと、また眠気に負けたように意識が混濁し、眠る。
そんな事を幾度となく繰り返していた。

寝台脇の棚に置かれた灯火がゆらゆらと揺れていた。

明かりはその小さな火だけだったので、セネカが優勝杯に張った
水に巾を浸すためには、ほとんど手探りで行わなければならなかつ
た。

セネカの頭の中は不安と心細さで一杯だった。

アリオンの不意に息を荒げる度に、セネカの心臓はどきりと跳ね
た。

少し離れた隙に、またさっきのような酷い状態になったら。

そう考えるて、アリオンのそばを離れることなど、とても出来な
かった。

しかし、かと言ってこのまま一晩中アリオンを看病し続ける自信
はセネカにはなかった。

セネカは先ほどから激しい睡魔と闘っていた。

気を抜くとたちまち瞼が塞がり、がくりと首を落としそうになる。
眠気を振り払おうと思いい切り両目を瞬かせたり、体のあちこちを
つねっていたが、それももう限界だった。

せめて、誰か来てくれたら。セネカは天にも祈る気持ちだつ
た。

イレムは　あの剣幕では、とても様子を見に来てくれるとは考

えられない。

せめてサイラスがひよっこり現れてくれないだろうか。こうなったらラザレでも構わない。

セネカは、アリオンの言いつけを破ってポセイドンに知らせに行こうかとも考えた。

しかし、アリオンはきつと咎めるだろう。

セネカはアリオンの嫌われるかもしれないと思うと、とてもそんなこと出来なかった。

セネカはかつてルイザの看病をしていた時の事を思い出した。

村でセネカを養ってくれたルイザは発熱のために体が弱り、やがて……。

セネカはすうつと血の気が引いていくのを感じた。が、思い浮かんだ忌まわしい考えをすぐに打ち消した。

ルイザが死んだのは、それは高齢のためだ。それにルイザは寿命とも、迎えが来たとも言っていた。

アリオンのような若者が急な熱のために命を落とすなど、あり得ないことだ。

セネカは新しく冷やした巾をアリオンの額にのせた。

アリオンは眠りながら、心なしか安堵の溜め息をもらしたような気がした。

ほの暗い灯火がゆらめくだけの中、微かに喘鳴を帯びたアリオンの息遣いが、静かな天幕内に響いていた。

「セネカ」

いつの間にかアリオンの目の前に立っていた。

セネカは驚いた。

アリオンはなぜか悲しげな様子だった。

あ　！　あにィ？　体は？　もう平気なのかい？　楽になったのかい　？

しかし、アリオンはセネ力の問いかけには答えなかった。

「君は女の子だったんだね」

アリオンは一段と声を落として言った。

え　！？　なんで、それを　？

「イレムから聞いたよ」

イレムから　？　そっか、イレム、喋ったんだ　。

「女の子は戦場にはついて来れない。君は村に帰るんだ」

村に……って　？　今さら　。　帰れるわけないじゃんか　。

それに、どうやって帰ればいいんだよ　？

「ゴルバノスが護衛についてくれる。彼は、今は僕の家来だ。何でも言うことを聞く」

アリオンは当たり前のようにきっぱりと言った。

ち、ちよつと待ってくれよ　！

セネ力はあまりのことに狼狽した。

「ゴルバノスでは不満なのかい？」

そういう問題じゃない　！

「じゃあ、何が問題なんだい？」

ああ……もう　。　あ！　じゃ、約束は？　約束はどうなるんだよ　？

「約束？　ああ　。　あの約束か。それもゴルバノスに任せた。彼が面倒をみてくれる。もちろんオリンポスで君のお姉さんを見つけたら、一緒に村へ送り届けさせる」

い、いらぬよ　！　あんなヤツに面倒みてもらうなんて真つ平ごめんだ　！！

セネ力は血相を変えて叫んだ。アリオンの言葉が信じられなかった。

「とにかく、これで僕は君に落とし前をつけたことになる。僕は君の命を助けたんだし。これでおあいこだ」

アリオンがゆっくりと踵を返し、その場を立ち去ろうと行きかけた。

あ！ 待って！ 待ってつたら　！！　どこに　。

「君は僕を騙していた。君のような嘘つきとは、これ以上一緒にいられない。さよなら」

アリオンがまた、ゆっくりと振り向いた。

先ほどの表情とはうってかわって、眉をつり上げ、怒りを露にしている。

いや。怒っているどころではない。みるみる顔つきが歪み、体格もいかつく変貌していく。

広い肩幅。りゅうりゅうとした二の腕。せりだした顎に不精髭。

やがてアリオンはゴルバノスに変貌した。

ゴルバノスは片頬を醜くつり上げ、にたりとうすら笑いを浮かべてセネカを見下ろした。

セネカは閉じていた瞳を無理矢理こじ開けた。

いつの間にか寝台につつ伏して眠りこんでいたのだ。

なんてイヤな夢……。悪夢だ……。

セネカは身を起こすと眠気をぬぐい取るようにごしごしと目を擦った。

夢の中とはいえ、アリオンに「嘘つき」と言われたのにはかなり堪えた。

少しためらわれたが、セネカはそつとアリオンの方を窺い見た。

小さな灯りに照らし出されたアリオンは穏やかな顔つきで寝息をたてていた。

セネカは静かにその首筋に手の平を押し当てた。

熱が少し下がったようだ。この様子ならもう心配はいらないだろう。

安心感から再び眠気が襲ってきた。

セネカは半分呆けた意識の中で上掛けを体に巻きつけると、席の上にごろりと横になった。

少し休んで、それから　。

セネカの意識はすぐに遠のいた。
やがて心地よいまどろみの中にとけこんでいった。

どのくらい時間が経っただろうか。
天幕の内部を覆っていた静寂な空気が、いきなり破られた。
それは人の叫び声だった。まるで恐ろしい拷問を受けているかの
ような。

眠りの淵から現に引き戻されたセネカは一瞬、もしや夢の続きな
のでは？ と思った。

しかし次の瞬間、寝台の上で激しく身をよじらせ、狂ったように
のたうっているアリオンの姿が目飛び込んだ。
夢じゃない！

セネカは転がるようにして寝台に駆け寄った。
顔面の皮膚を硬くひきつらせ、全身をがくがくと痙攣させながら
アリオンは何事かを叫んでいた。

セネカ即座にアリオンの腕にしがみついた。
その手の爪が、今にも引き裂かんばかりに胸元を搔きむしってい
たからだ。

「ど どうしたんだよ！ あにイ！！」
じつとりと汗ばんだ腕を捉えながらセネカがありつたけの大声で
叫んだ。

だが、アリオンの耳に届いている気配はない。
アリオンは更に身をこわばらせ、抗うように暴れた。
いきなりアリオンの手がセネカの手首を捕らえた。途端に、物凄
い力で締め上げられた。

セネカは堪らず悲鳴を上げた。
振りほどこうとしても、アリオンの手はぎりぎりときつく強く握
り返してくる。

「は、はなして！ はなしてよ！ あにイ！ い 痛い！！」
セネカは半狂乱になった。

しかし、手の指を引き剥がそうとすればするほど、一層強く握り締められた。

アリオンの手の爪は深く食い込み、肉が今にも千切られそうになる。

セネカは恐怖と苦痛のあまり、泣き叫んだが、アリオンの力は少しも弛むことはなかった。

腕が折られる。

セネカがそう思った時。

天幕の入口の幕が撥ね上がった。

「アليون殿！」

「どうされましたか!？」

サイラスとイレムだ。

二人は共に事情を察するや否や、揃ってアليونに取り付いた。

サイラスがアليونに覆い被さり、じたばたする身体を押さえ付けた。

イレムは、セネカの手首を握って離さないアリオンの腕を掴み取り、用心深く指を一本一本引き剥がした。

セネカはようやく自由の身になった。

「舌を噛むと厄介です。イレム、その布を」

アリオンの顔が押さえ付けられ、口に無理矢理布きれが押し込まれた。

アリオンは声にならない叫び声をあげ、逃れるようにのけぞった。寸でのところで握り潰されるところだった手首を擦りながらセネカよろよるとあとずさった。

セネカは目の前の状況に芯から怯え、肩を震わせていた。

「ああ ダメです 正気に戻るまでは、仕方ありません。イレム! 縄を取って! 寝台に縛りつけないと」

遂にサイラスが根を上げた。アリオンは相変わらず物凄い力で抵抗し続けていた。

「アليون殿! お気を確かに!！」

我を忘れたイレムが声をからして叫んだ。

二人がかりで押さえ付けられ、その腕に荒縄が巻き付けられる様子を見ていたセネカは我に返った。

このまま狂い死んでもおかしくない。一刹那、そんな考えが頭をよぎった。

気がつくとセネカは駆け出していた。

天幕の入口の垂れ布を撥ねると、一心不乱に走った。

夜の闇に包まれた陣営を、篝火の明かりを頼りに、セネカはひた走った。

「4」

「ならん！ 王は既にお休みになられた！」

髭面で長躯の兵士が、声を押し殺しながら眉を吊り上げた。

「大事な 用事なんだ。い、急いで 急いでポセイドンのおっちゃんに 伝えたいんだよ！」

乱れる息を抑えながら、セネカは必死の思い叫んだ。

「貴様、声大きいぞ。静かせんか！ 来い！」

「は、はなせツ！ なにすんだよ！」

いかにも頭の固そうな兵士は、じたばたするセネカの二の腕をむんずと掴み取り、海王の天幕入口から引き離そうした。

しかし、セネカも負けてはいなかった。

アリオンの天幕から飛び出し、必死に駆け抜けて、ようやくポセイドンの居場所に辿り着いたのだ。このまま、すごすこと引き下がれるわけがない。

「ここを何方の天幕だと思っておるか！」

兵士は鬼のような形相でセネカを一喝した。

「一大事なんだよ！ おっちゃんに早くその事を伝えたいんだ！ だから――」

「ならば言うてみよ。内容によつては取り次いでやる」

「そんなのん気なこと言ってる場合じゃないんだよツ！ もお！ はなしてくれったら！」

「シツ！ 貴様、声大きいと言っておる！ もう少し――」

「何事だ？」
双方一歩も退かぬやり取りの最中に、天幕の奥から人影が現れた。それは、ゆつたりとした夜着を纏ったポセイドンだった。

「今度は誰だ？」

ポセイドンは不機嫌な顔つきではあったが、ただならぬ真夜中の来訪者に少なからず気をかけている様子だった。

「は！ も、申し訳ありません！ この者が あっ！ こら！」
兵士の隙を見て、セネカは掴まれた腕を振りほどこうともがいたが、うまくいかず、返って更に強く腕を締め上げられる結果となった。

「なんだよ、もお！ はなせつてば！ あ……ッ！！」
突然、セネカが小さな悲鳴を上げたかと思うと、苦痛に顔を歪めた。

業を煮やした見張り兵が、抗うセネカのもう片方の手首を掴んだのだ。

「放してやれ」

「は！ いや……しかし……」

「構わん」

ポセイドンに促され、兵士が硬く身をこわばらせているセネカを解き放した。

「あにイが……大変なんだ。ひどい熱で、うなされてて、それで……それで……」

自由の身になったセネカは哀願するようにポセイドンの顔を見上げた。

アリオンに強く握られた手首には、まだ爪痕が生々しく残っており、ずきずきとひどく痛んだ。

「このままだと……もしかしたら……死んじゃうかもしれない。だから」

「あやつは、熱なんぞで死ぬほどヤワではない」

ポセイドンが半ば呆れたように小さく鼻を鳴らした。

「それに、悴の事はイレムからも聞いておる」

「え……！？」

セネカは驚きのあまり、目を見開いた。

「イレム、が？」

「儂を叩き起こしに来おったわ。今の貴様と同じように、だ」

「……同じように？」

セネカには信じられないものを見るように、ポセイドンを見つめた。

「イレムからは、倅はよく眠っていると聞いておる。薬師にはつい先刻、熱さましを煎じるように命じておいた。サイラスにも様子を見に行くようにと伝えたが、二人はそつちに行かなかったのか？」
セネカはポセイドンの問いに答えることが出来なかった。代わりに、ぺたんとその場にへたりこんだ。

頭の中をかき回されたようにセネカは混乱していた。
イレムが？ あんなに怒っていたのに？

が、しかし、考えられないことではない。イレムは気にかけてくれたのだ。

それだけではなく、様子まで見に来てくれたのだろう。きっと睡眠魔に負けて眠りこけていた、あの時に違いない。

セネカの胸に、安堵にも似た嬉しさがこみ上げてきた。

「イレムと、サイラスのおっちゃんは……来た。来たけど、違う……違う」

押し殺していた感情が今にも弾けそうだった。

目の前の何もかもが涙で滲んだ。喉が熱いもので塞がれ、思うように喋れない。

「ああ？ 何が違うのだ？」

ポセイドンが焦れたような口調でたずねた。

セネカは痛む手首を押さえながら、急いで目をつむったが、こぼれ落ちる涙をせき止めることは出来なかった。

「違う。ただの熱なんかじゃない。うなされて……何かに怯えてる……ひどく怖がつてるみたいなんだ。ただ事じゃない。このままだと……あにイは本当に……死ん……じまうよオ」

これ以上何も言うことが出来なかった。

閉じた瞼のすき間から涙の粒が、あとからあとからあふれ出した。
セネカは今や泣きじゃくり、小さく肩を震わせていた。

「……。やれやれ」

ポセイドンは途方に暮れたように首を振ってから、脇に控えている兵士に向かって短く命じた。

「灯りを持って」

「は！ ですが……」

「すぐに戻る。供もいらん」

きっぱりそう言つと、海王は怪訝顔の兵士から蠟燭の灯火の皿を受け取つた。

「おなごに、このように泣かれては無下むげにはできまい。貴様　セネカ、と言つたな。案内せい」

「5」(前書き)

この回には残酷な描写が含まれています。
苦手な方はお気を付け下さい。

コウミ

陣営全体を濃い夜気が包む中、セネカは火の灯る一檣蠟　みつろ
う　をのせた受け皿を掲げ、足早に進んでいた。

後に続くポセイドンはゆるやかに歩みを進めてはいたが、並外れた体格の持ち主は普通に歩いても小さな従者をたちまち追い抜いてしまうので、セネカは急ぎ小走りになって必死に進まければならなかった。

黙々と歩み進めをながらセネカは先ほどからずっと、喉の痛みを我慢していた。

涙はとうに止まっていた。

しかし、こみ上げてくるしゃくりあげだけはどうしても治まらず、喉がひくひくと微かに痙攣を起こしていた。

「たかが悴の熱ごときで。これほど大騒ぎするとはな。まったく」
ポセイドンは最初、ぶつぶつとぼやき声を漏らしていたものの、それ以外はむっつりと押し黙っていた。

やがて二人はアリオンの天幕に到着した。

天幕は、思いのほか静かに佇んでいた。先ほどの騒ぎが信じられないくらいに　。

セネカのひくついていて喉が、びたりと止まった。その代わりに、背筋がぞくりと粟立った。

静かすぎる　。

セネカは緊張のあまり身を硬くした。

実際、天幕は恐ろしいほどの静寂に包まれていた。

「どうした。早く中へ入らんか」

ポセイドンが焦れたように急ぎ立てた。

しかし、なぜだかセネカの足は地面に貼り付いたように一歩も踏み出せなかった。

入口の垂れ幕を払おうと伸ばした手も、やはり石のように固まったままだ。

とうとう痺れを切らしたポセイドンがセネカを押し退けるようにして垂れ幕を払いのけ、入口をかくぐった。

ひと呼吸おいたのち、セネカも慌ててポセイドンの後に続き、中へと入った。途端　異臭が鼻をついた。

その臭いに思わずむせかえりそうになり、セネカは顔をしかめた。不意に、前にいるポセイドンが立ち止まった。

セネカは、壁のようなポセイドンの体躯に隠れて何も窺い知ることができなかつたので海王の脇からそつと前に抜け出した。

そして、ようやく天幕の中の様子を見ることができた。

天幕内の明かりは棚の上に置かれた小さな灯火だけのはずなのに、必要以上に強い光が目を刺した。

燭台が何かの拍子で棚から下に落ちたのだろう。

溢れた脂に引火した炎がめらめらと立ち上り、激しく揺れていた。

このまま放っておくとますます火が広がり、天幕の垂れ布に燃え移ってしまう。

既に棚の端が炎に晒され、ぶすぶすと焦げ始めていた。

早く火を消さないと　。頭ではそう思っていたが、セネカは別の事に意識を奪われていたため、身じろぎすら出来なかつた。

燃え盛る炎の脇に人が倒れていた。

サイラスだ。

サイラスが仰向けに倒れていた。

炎に照らし出されたその顔には、驚きと恐れ表情が浮かび、目は見開かれたままだった。

その胸元から腹にかけての衣服がざっくりと引き裂かれ、全身がどす黒く染まっている。

セネカは、それが血の染みだということにすぐに気が付き、大きく喘いだ。

改めて辺りに目をやると 飛び込んでくるのは、天幕の垂れ布にまで飛び散った飛沫^{しぶき}。棚にべったりとはり付いた黒い跡。辺り一面おびただしい量の血痕だらけだった。サイラスは血の海の中に仰臥^{きようが}していたのだ。無惨にも、何者かに胴体を斬り裂かれて。

既に絶命しているのは誰の目から見ても明らかだった。

「なんで……」

セネカの口からかすれ声もれ出した。

受け皿を持つ手がかくかくと揺れた。

その時、頭上から低い唸り声が降ってきた。

セネカが振り仰ぐと、隣に立つポセイドンが前方をじっと見据えているのが目に映った。

反射的にセネカはその視線を追った。

天幕の奥 明かりがほとんど届かないほの暗いの中に、人影があつた。二人だ。

一人は剣を携えている。

暗がりにあつても、それは鈍く光を放っていたので目を凝らさなくとも認めることが出来た。

あとの一人は、剣を持つ者の足元に倒れ伏していた。

俯^{うつむ}けに横たわったその体がびくんと大きく跳ねた。何度も何度も。

まるで活き締められた魚が最後の悪あがきをするかのように。

その者がもがき苦しみながら喉の奥からうめき声を絞り出した時、セネカは持っていた灯りの受け皿を、半ば放り投げるかのように取り落とした。

イレム ！？

声の主は 倒れていたのは、イレムに間違いなかった。

かたわらに立つ剣者に斬られたのだ。

セネカの手から滑り落ちた灯火の皿は、驚愕のあまり立ち尽くすセネカとポセイドンの足元を転がり、芯に点いていた火は、やがて

消えた。

ゆっくりと、剣者がこちらを振り向いた。

その双眼は不気味な光をたたえている。

すらりとした長身の剣者の頭部に光るものがあつた。

それは　。見覚えのある鑲は、まぎれもない　。

「な……な、ぜです……ア……」

イレムが、か細く悲しげな声を漏らした。

セネカは半狂乱になり、両耳を手で覆つた。

訳が分からなかつた。

アリオンは高熱に侵されながら寝台に横になっていた。

それに剣は寝台の横に立掛けてあつたはずだ。

それを……。

アリオンはその剣の柄を握り、鞘を抜き払い、いきなり斬りつけた。

熱にうなされ、錯乱したアリオンは、サイラスを手にかけてのだ。

サイラスは、抵抗する間もなく……。

かたわらにいて全てを目の当たりにしたイレムは、混乱のあまり逃げ出すことを忘れて……いや、もしかしたら、不自由な足がもつれて、すぐには動けなかつたのかもしれないし、誤つて天幕の奥へ逃げ込んだのかもしれない。

アリオンはその後を追いかけて……。

足を引きずり、恐れおののきながら逃げ惑うイレムの背中を……。

セネカの頭の中で何もかもがちりと当てはまつた。

「あ、あ　あにいイーー！！　なんてことをしたんだよ！！」

喉の奥を震わせながら、悲鳴ともつかない叫び声を上げた。

しかし、アリオンはセネカの悲痛な叫びに耳を貸す様子はなかつた。醜悪に目をぎらつかせながら、手にした剣を静かに構えた。

その手首には　サイラスが縛り付けようとしたのだろう。縄が

幾重にも巻き付いていた。

「ハデス……め……」

ぜいぜいと低く喉を唸らせながらアリオンが一步、また一步と前進した。

その声には、すさまじいほどの憎悪が籠っていた。

「まだ……くる、か……ハデス……」

「なに？ ハデスだと!？」

ポセイドンが鋭く反応した。

「ハデスが。アイツが まさか」

ハデス？

セネカにとつて初めて耳にする名前だった。

じりじりと近寄って来るアリオンの後方で、イレムが弱々しく蠢いた。

セネカはハツとした。

まだ助かるかもしれない。

「待て」

咄嗟に前に出ようとしたセネカは、ポセイドンの大きな手にぐいと肩を掴まれた。

「下がっておれ」

その、刹那。

アリオンの身が沈んだ。

そして次の瞬間、恐ろしい速さで突っ込んで来た。

剣先は、真つ直ぐこちらを向いている。

ポセイドンに力まかせに肩を押され、セネカは大きくよろめいた。アリオンが吸い込まれるようにポセイドンの懐に飛び込んだ。

お互いの体が激しくぶつかり合うのとほぼ同時に、鈍い音が耳朶を打った。

剣が、肉体を貫く音だ。

セネカが恐る恐る顔をあげると、ポセイドンが苦悶の表情を浮かべ、アリオンを真正面で受け止めていた。

両足をしっかりと踏ん張ってはいたが、ポセイダンの腹に深々と剣が突き刺さっているのは疑う余地がなかった。

身に纏った夜着が、瞬間に赤黒く染まっていく。肉の裂目から血がどくどくと湧き出していたのだろう。

夜着の布端から溢れ出した血の雫が滴り落ち、辺りはたちまち池のようになつた。

セネカは、血だまりの中に立ち尽くす父子を目の前にして、がたがと全身を震わせていた。

くず折れそうになる体を支えるように、天幕の垂れ布につかまるセネカの耳に、ポセイダンの声が響いた。

くぐもってはいたが、しっかりとした口調だった。

「ハデス、か。ふ……。倅め。他愛のない。夢なんぞに……。操られおつて」

夢に？ 操られて ！？

「……ハデス兄らしい、やり方だ。人の夢の……。中に、入り込み……」

兄 ！？ ハデスとは、ポセイダンの兄！？

「倅よ……。いや、アリオン。アリオン……」

ポセイダンは息子の名を呼んだ。

アリオンはポセイダンの胸に顔を埋め大きく肩を上下させていたが、やがて父の呼びかけに応えるかのように、ゆっくりと面を上げ、呆けたようにじつとポセイダンの顔を見据えた。

「……。父さん？」

「アリオン……。聞くがいい。儂はもうすぐ果てる。ふふ……。これも、因果だろう。だが……。お前の手にかかるのなら、本望かもしれない」

アリオンの肩が大きく跳ね上がった。

セネカは、この時アリオンが正気に返った事を覚った。

「……そんな……。嘘だ……」

しわ枯れ、かすれた呟きを発したあと、アリオンは絶句した。

「分かっておる。姑息なハデス兄の……仕業だ。人の夢に無理矢理入り込み、人を夢遊状態のまま……操る。アイツの得意とする技だ。だが……よいか……聞け。アリオン」

ポセイドンは苦しげに息を荒げ、咳き込んだ。食いしばった歯の隙間から血が飛び散り、唇から幾筋もこぼれ落ちた。

「儂が死んだら……この兵士たちは、お前を決して生かしては……おくまい。たとえ血を分けた、実の息子だったとしても。だ。テイターン最大の禁忌……父殺しの罪は、重い。それを犯したとなると……たとえどんな言い訳をしようとも、決して兵たちはお前を許しはしないだろう……。もつとも　そんな、夢に操られたなどという言い分に、耳を傾けるような悠長な輩ではないが……な。分かるであろう」

「なぜ……なぜ……こんなこと……」

アリオンは、ただうろたえているばかりだった。ポセイドンの言葉も耳に入っているかどうかさえも疑問だった。

セネカは我を忘れ、気迫のこもった海王の言葉に耳を傾けていた。既に自分の死期を見切っているのか、ポセイドンは滔々とうとうと喋り続けた。

その顔色が徐々に蒼白になっていったが、剣に貫かれた体は微動だにすることがなかった。

「アリオン……。お前に頼みが、ある。聞き届けてくれまいか？」
「……。頼み？」

「そうだ。父からの、最初で……最後のな。どうか承知してくれ。そのためにも……逃げよ。この剣を引き抜いたら即座に、逃げるのだ。兵士たちは儂の所在を確かめに……この天幕へやって来るだろう。兵たちに見つかったら最後だ。儂が生きているうちは……奴らを引きとめることが出来るが、残念だが……儂はそう永くはない」

「……。ああ……。そんな……」

アリオンが辛そうに顔を歪めた。

「だから……兵たちの手にかかる前に、逃げるのだ。逃げて……そ

して、生き延びよ。そこに居る……」

ここでポセイドンはセネカの方へちらりと一瞥を投げかけた。セネカはポセイドンの視線をとらえた。

「小さな仲間と共に。な」

託されている。セネカは素早くそう感じ取った。

ポセイドンの瞳が乞うように瞬いた。

セネカはポセイドンの目をしっかりと見つめ返し、こくりと小さく、そして力強く頷いた。

「5」（後書き）

お読みくださってありがとうございます。

今回、非常に残酷な描写を発表するにあたり、大変心苦しく思っています。

苦手な方、本当にごめんなさい。

でも、ここの部分は避けては通れない流れなのでご了承いただきます。

今回でようやく第十六章に終止符を打つことができました。

長い道のりであるとともに、おつきあいしてくださる方々には、長い期間お待ちせしてしまいました。

今後も不定期投稿になる予定です。

引き続き気長にお待ちいただけましたら幸いです。

次回は、第十七章『逃亡の果てに』です。

コウミ

「1」(前書き)

この回には残酷な描写が含まれています。
苦手な方はお気を付け下さい。

コウミ

「1」

「何事だ　！？」

「天幕から火が出たぞ！！」

「消せ！　早く消せ！！」

「王の天幕の方向ではないか！？　王は？　ご無事か！？」

「いや、燃えているのは、アリオンの天幕だ！」

「急げええ！！」

夜の静寂を破り、怒号や猛り声があちこちから上がった。陣営はものものしい雰囲気まじまじに包まれていた。

各々の褥むしろから起き出したポセイドン軍の兵士たちは、火の手が上がる天幕を目指し、我先にと押し寄せて行った。

そんな混乱の中、人の波に逆らい逃れるように進む小さな二つの影に誰も気づく者はいなかった。

二つの影　アリオんとセネカは、我を忘れた兵士の群れの間を縫うようにして足早に駆け抜けていた。

点在する篝火の灯りを頼りに、セネカはアリオンの半歩前を先導した。

時折り兵士とすれ違いざまに肩や腕がぶつかり、その度に大きくよろめいたが、ぐずぐずしている隙はなかった。

アリオンは頭からすっぽりと上掛けを被っていたので、その体裁は人目に触れることはなかったが、衣服にはべったりと血の跡が染みついていていた。

セネカは今にも倒れそうなアリオンの腕を取り、脇には鞘に収まったアリオンの剣をしっかりと携えていた。

アリオンは、自ら手にかけてしまったポセイドンの傍らから離れようとしなかった。

セネカは、まるで抜け殻のようになったアリオンを父親の亡骸からようやく引き離し、半ば引きずるようにして天幕を後にしたのだ。つた。

「逃げよ」

セネカの脳裏にポセイドンの最期の言葉が蘇った。

海王が発した忌の際の言葉を、セネカは頭の中に叩きこんでいた。とにかく一刻も早くここから逃れなければならない。

セネカはまた、歩調を速めた。

脇に抱え込めた剣は重く、半ば意識の遠のいたアリオンを支えながら行くのは容易ではなかった。

緊張と混乱のため息があがり、心臓が今にも飛び出しそうなほどに胸の中を跳ね回った。

セネカ以上に息も絶えだえのアリオンは幾度か膝が折れ、地面に倒れこんだ。セネカはその度に辛抱強く励まし、支えながら前へと進んだ。

やがて二人は人波を抜けた。

今度は松明の灯りの届かない月明かりと星明かりだけの中を進まねばならなかった。

どれだけの道のりを駆け抜けた頃だろうか。聞こえるのは二人がひた走る足音と息遣いのみだった。

それまで必死に歩みを進めていたセネカは乱れた呼吸を整えるため、速度をゆるめた。

かたわらのアリオスが首をよじり、呆然とした様子で陣営の方角を見つめていた。

セネカは胸が痛んだ。

アリオスは父を刺し殺したとはいえ、正気ではなかった。ハデスとかいうヤツの夢に操られていたのだ。

父親との最後の別れもそこに、無理矢理アリオンを連れ出した事をセネカは後悔していた。事情を話せば海王軍の兵士たちも分かってくれたかもしれないのに……。

今からでも遅くない。すぐにでも引き返して、せめて手厚く葬ってあげられないだろうか？

しかし、アリオンの天幕に駆けつけた兵士たちが王や従者が斬殺されているのを見つけたら 仮にアリオンがその場に居合わせ、訳を話したとしても。

ポセイドンの言う通り、心穏やかにこちらの言うことに耳を傾ける者たちばかりでない。これはセネカにも判り切っていた。

「逃げるのだ……アリオン。逃げて……そして、生き延びよ」
セネカは必死の形相で訴える海王の姿を回顧した。その目はまさに哀願するかのようだった。

「行け……アリオン」

ポセイドンの喉から絞り出すようなしわ枯れた声が響いた。普段の勇猛な海王のほとばしるような生氣は、すっかり失われていた。

「お前と二人きりで……酒を組み交わし……腹を割って話す間もなかったのが……残念……だ」

それまで微動すらしなかった巨躯が、初めてがくがくと揺らぎ始めた。

小刻みに痙攣する口元からは幾筋もの血が流れ、その顔はもはや土気色に変わっていた。

「さあ……この剣を、抜き……行け。逃げよ……もう、時間が、ない。僕の命はもうすぐ尽きる……。もう……もう、目が見えん」

「……………」

苦悶の表情がアリオンの顔中に拡がった。

ポセイドンは大きく喘ぐと、更に声を振り絞った。

「剣を……！ わすれるな……。決して。それは……おまえの……父の……か……」

言葉が途切れた。

ポセイドンは目を見開いたまま空を仰いだ。その瞳には、もう何も映ることはなかった。

（早く剣を抜かないと　　！）

セネ力は喉まで出かかった言葉をぐつと飲み込んだ。

ポセイドンは、今まさに生を終えようとしている。それならば、一刻も早く苦痛から解放してあげなければとセネ力は思ったのだ。しかしそれは、アリオンも十分過ぎるほど承知しているはずだった。

セネ力は固唾を呑んで見守った。見守るしかなかった。

大きな血の塊を吐き戻し、ポセイドンの体が大きく傾いだ。

アリオンは固く目を閉じると、満身の力をこめてポセイドンから剣を引き抜き、そのまま無造作に投げ捨てた。

前のめりに崩折れるポセイドンを、アリオンはしっかりと抱きとめた。

全身がみるみる血の色に染まっていったが、アリオンに介した様子はなかった。

アリオンは父親の骸をゆつくりと、静かに横たえさせた。そしてその脇に座り込み、力なく肩を落しうな垂れた。その顔に表情はなく、目は虚ろだった

セネ力は大きく息を継いだ。

先ほどから喉が唸るほどひっきりなしに喘いでいるのに、なぜこんなにも息苦しいのか訳が分からなかった。口の中はカラカラに渴いていたし、ひどい耳鳴りがした。頭の中はぐちゃぐちゃに掻き回されたようだった。

セネ力は目蓋まぶたをぎゅつと閉じ、頭を思い切り振りたてて正気を取り戻した。今は混乱している場合ではない。

ふと脳裏にポセイドンの哀しく乞うような眼差しが浮かんだ。

そつだ！ 早く逃げないと　！

それまですくんでいたセネカの体が動いた。

「ダメだ！　ここにいちや！」

セネカはアリオンの肩口を掴み取るなり、早口でまくしたてた。

「あにイ！　早くここから逃げよう！」

しかし、アリオンは俯いたままで全く応じる気配がない。

「剣をわすれるな」

そつだ　！　剣を　！

セネカは血溜まりの中に落ちてしているアリオンの剣を見た。

鞘は　？

セネカは首をめぐらせた。視線が素早く鞘の在りかを探しあてた。

鞘はアリオンの寝台の足元に横たわるサイラスの脇に落ちている。

セネカは踵を返して寝台に近付いた。そしてなるべくサイラスの顔を見ないようにして鞘を拾い上げた。

その時　サイラスの腰に提げてある短剣が目に入った。

セネカはどきりとしたあと、一瞬迷った。

自分の身を守るためには武器が必要になる。この短剣を頂戴すれば　。サイラスはもう死んだのだから、短剣は必要ないはずだ…

しかし、セネカはまた頭を激しくぶるぶると振った。

セネカはサイラスの傍らに跪くと詫びるように両手を組み合わせ、

小さく短く祈った。

そつつと薄眼をあげると　亡骸は驚愕し、目は見開いたままだった。

セネカはその両眼に手をかざした。

がたがたとあまりにも大きく震えるの手を、もう片方の手で押さえつけ、サイラスの両眼をそつと閉じさせた。

セネカは再び短く黙とうした。

今度は天幕の奥に倒れているイレムの方を見た。

イレムは 既に事切れているのだろう。その体はぴくりとも動かなかつた。

セネカはイレムに向かって静かに瞑目した。

「逃げよ」

ポセイドンの切実な声音が耳元で聞こえたような気がした。

セネカは立ち上がるや辺りを覆う生暖かい血溜まりをびしゃびしゃと撥ね上げ、その中に落ちているアリオンの剣を拾い上げた。

血まみれの剣を傾け、どろりとした血と膿が剣身の血溝を伝って滴り落ちるのを見届けてから、セネカは慎重に鞘に収めた。

怖じけはとうに消し飛んでいた。今はただ、ポセイドンの遺した言葉のみを抛り所とし、遂行することしか頭になかった。

もしもそうしなかつたら、精神が弾け、気がおかしくなっていたに違いない。

セネカは寝台から上掛けを剥ぎ取り、アリオンの頭から被せ掛けた。体にこびり付いた血の跡は、あまりにも目立ち過ぎる。

「いいかい？ これを羽織って……ここをしつかり握っているんだ」
セネカは年下の子どもに対してするように言い含め、上掛けの布端をアリオンの握らせた。

「さ、早く。急いで逃げないと 立って」

アリオンの能面のような顔をセネカに向けた。

「だめだ……。僕は……父さんを一人にしておけない」

アリオンは今にも消えいりそうな呟きをもらした。

その口調は抑揚がなく、ぼんやりとしていた。

「……君だけで逃げてくれ。セネカ」

「そ、そんなこと できるわけないだろ！」セネカは思わず大声を張り上げた。

「早くしないと、ここの奴らに見つかって、殺されちゃうんだよ！」
しかし、アリオンは再び首を横に振った。

「……いいんだ。僕はもうなつた。もう」

アリオンの呟きは力がなかった。

「だから。君だけ」

「だから、そんなことできないって言うてんだろ!!」

セネカは両手でアリオンの両肩を掴み、激しく揺さぶった。

「しっかりしろよ！ ポセイドンのおっちゃん、『逃げる』って、

言つてたじゃんかよ！ それに、おっちゃんと約束したんだろ!?

忘れたのかよ!?!」

「約束……」

「そうだよ！ おっちゃん、最初で最後の頼みって言うてたじゃんか!?! 聞いてただろ!」

「父さんの……頼み……。レスフィーナ……。母さん」

アリオンの体がゆらりと立ち上がった。

「早く あにィ！ 行くんだ！ 急いで！ 急いで!!!」

「1」（後書き）

アクセスありがとうございます。

久々の更新となりました。

お待ちせしてしまい申し訳ありませんでしたm（——）m

今後はゆっくりペースでも定期的に更新できるようにがんばりますので、よろしくお願いします。

タイトル通り二人は逃亡します。

そして再会と、新たな出会いも…？

次回もお付き合いいただけましたら幸いです。

コウミ

「2」

二人の足はいつの間にか止まっていた。

遠くには野営地を照らす篝火のゆらめきが見えた。

そこからは松明の灯りが次々に列を成し、四方に伸びている。

セネカは促すようにアリオンを振り仰いだ。

暗がりの中ではあったがアリオンはひどく辛そうな様子なのが見てとれた。きつと天幕での悪夢のような出来事を思い起こしているのだろう。

「行く。あにイ」

セネカは再び剣をしっかりと脇に抱え直すと、アリオンの腕を引っ張った。

王の死と、天幕がもぬけのカラなのは既に気付かれている。遺体の刀傷を確かめた兵士たちは、剣の持ち主を血まなこになって探しているはずだ。のんびりしてはいられない。

どこかに隠れなければ。

セネカは頬をなぶる風からほのかに木々の匂いを嗅いでいた。

林の中に逃げ込めば追手の目をくらませる。身を隠せる場所を求め、闇の中に視線を廻らせ神経を研ぎすませた。

風上にある高台には樹木が大きく生い茂る影があった。セネカはそこを目指した。

行く手はなだらかな斜面のさしかかっていた。

熱が下がりきっていないアリオンの足取りは鈍く、何度も何度も前にのめりくず折れ、膝をついた。

セネカも息の根が今にも尽きそうなほどに困憊していた。

二人は進んでは止まり、止まっては進みを繰り返しようやく高台に差し掛かる急斜面まで来た。

上り坂とごつごつした足下は更に困難をきわめたが、ここをを登りきると林はもう目前だった。

雲間から覗かせるおぼろ気な月の明かりを頼りに、セネカはアリオンを支えて黙々と歩みを繰り返した。

突然。

アリオンがハッと面を上げた。

脇にいたセネカはアリオンが全身をかたく緊張させているのを感じ取り、ぎくりとした。

「セネカ！ 剣を！」

アリオンが鋭く言った。

「え？ え……っ!？」

「剣を！ セネカ！ 早く!!！」

アリオンはセネカが抱え込んでいた剣を鞘ごと抜き取った。そして間髪を入れず後方に向き直り、思い切りそれを振り下ろした。

ゴツンとかたい骨に当たったような鈍い音と、苦痛を訴える鳴き声が闇の中に響いた。

犬だ！

アリオンは、今度は素早く逆方向に向き直り、鞘つきのまま剣を振り上げた。

犬の鳴き声かけたたましく響き、夜気を震わせた。

脳天と脇腹を叩きつけられたのは陣営の犬だった。二頭の四つ足が負け惜しみの遠吠えを上げながら一目散に逃げて去って行った。

犬を放ったんだ！

セネカの背筋が一気に冷たくなった。

「こつちだ！」

今度はアリオンがセネカを引っ張る番だった。

力任せにぐいと体を持ち上げられた次の瞬間、地面にはぐさぐさと長いものが何本も突き刺さっていた。

それが何なのか見定める間もなく、風が唸った。

セネカにはそれが雨が雹ひょうのように思えた。

「伏せる！」

アリオンに背中を押され、セネカは頭を抱えてその場に身をすくめた。

剣が鞘から抜かれ、落ちてくる束を斜はすに裂いた。

アリオンがなぎ払った槍が残骸となり、ばらばらと辺り一面に落下した。

槍の雨が止むと、また静けさが戻った。

しかしすぐに鋼の擦れ合う金属音と、ぞっとするほどの殺気めいた人の気配が近づいてきた。

じりじりと迫る得たいの知れない存在が、雲からはっきりと顔を露にした月光によって、明らかにになった。

まぎれもない。

それはいかつい海のつわもの共の姿だった。

やっぱり、追いつかれたんだ。

セネカは絶望のあまり目がくらんだ。恐怖が悪寒のように体中を駆け巡ったが、それでもようやく立ち上がり、四方八方に目を走らせ退路を探した。

右からも左からも人影が湧いてくるように姿を現した。

完全に囲まれていた。

逃げ場はない。

唯一あるのは後方 壁のように反り立つ岩場だ。

だが、もしも背中を向けて岩場によじ登ったが最後、槍が飛んできてたちまち串刺しになってしまっただろう。

アリオンは剣を構え、セネカをかばうかたちで前に立っていた。

セネカはアリオンの視線を捉えた。

アリオンはちらりと一瞥を投げたあと、素早く後方に立ち塞がる岩場に目をやった。

セネカはすぐにその意味を汲みとった。そして小さく顎を引いて促

すアリオンに対し首を横に振り、こわもてで応えた。

「……！？ ダメだ、セネカ。行くんだ！」

しかしセネカは動かなかった。口を真一文字に結び、アリオンの後方にびたりと体を寄せた。一人で逃げるなんて、できるわけがない！

「もおお逃げられんぞお！！」

凄みのある猛り声が響き渡った。

声の主は ラザレだ。

「端っから怪しいと思っておったわあ！！」

ラザレががなり声を張り上げた。暗がりの中でもこめかみに青筋をたてているのが分かった。

海王の忠実な兵士は怒り心頭のみか、醜悪な顔つきで髪を逆立て肩をいかせていた。手には槍を構えている。

ラザレは群がる兵士たちの先頭に立ち、ずいとなりにじり寄った。

「父王を欺き、手にかけるとは 見下げ果てた奴！ まんまと逃

げのびてアテナと落ち合う算段だろうが、そうはいくか！！ 貴様

！ オリンポスからいくら貰いやがったあ！！」

「 違う！ 僕は 僕がそんなことするもんか！！」

アリオンが声をからして叫んだ。

「ほざけ！ では、なぜ逃げた！ それに その血の痕はなんと
する！！」

ラザレの言葉に打たれたようにアリオンの表情がかたくこわばった。

纏っていた上掛けはとうにはだけ、血にまみれた着衣が露になっ
ていたのだ。

「父君を刺し殺すなど、畜生でもやらぬ事だ！！」

「父殺しめ！ 恥を知れ！！」

群れの中の違う兵士が怒鳴った。

兵士たちの暴言を聞きながらセネカは奥歯を強く噛み締めた。言いようのない悔しさがこみあげたが、反論の予知がない。

悪夢に侵されていたなどと説明しても、今この連中の前では笑い飛ばされてしまうのがオチだ。

アリオンの肩が力なく落ち込み、構えていたアリオンの剣がだらりと萎えた。

「違う……違うんだ。僕は……」

アリオンはあえぎながら、うわ言のような呟きを繰り返した。動揺のためか体がぐらついている。

「待て」

一際大きな 並外れた背丈の兵士が大股で近づいてきた。

冷やかな口調からすぐに察することは出来なかったが、その鋭い肩幅、波打つように盛り上がった腕の筋肉と巨漢の持ち主は

海王軍の二番目のつわもの、ゴルバノスだった。

ゴルバノスは目を血走らせながら兵士たちをかき分け、ラザレをも押しつけた。

闘技会ではらばらに切り刻まれた皮衣は新しくしつらえられ、がっちりとした留め金で鎧われていた。

「貴様とオリンポスの間にどんなとりかわしがあったのかは知らん

だが、相手を丸腰のまま斬るとは許せん！！」

不気味な重低音が耳朶を打った。

六節棍だ !

ゴルバノスは携えていた六節棍を振り上げ、虚空に向かって円を描いた。

棍が、ぶんと唸りを上げた。まるで空を両断くするかのようだった。間近で感じる六節棍の凄まじさにセネカは怯え、両目をかたくつむった。

「さあ！ 貴様が真のつわものならばかかってこい！ 言うておくが逃げ道はないぞ！ 逃げようものなら周りの兵士たちが貴様を八

つ裂きにするまでだ!!」

アリオンがじりじりとあとずさったのでセネカもそれにならった。踵が岩場の角に当たった。

もう、あとがない……。

「ふん 他愛のない。恩知らずの姑息な若僧め! このゴルバノスが制裁をくれてやるわ! ポセイドン王の仇! 思い知るがいい! 今こそ王の無念を……晴ら……し……て……」

ゴルバノスの口上がここでぴたりと停止した。

セネカもアリオンもすぐに異変に気がついた。

恐る恐る目を開くと ゴルバノスが振り回している六節棍が徐々に速度をゆるめていくのが映った。目にも止まらぬ速さで円を描いていた鉄の棒が見る間に姿を現した。

棍を操っている本人はというと 顎を突き出し上空を見つめたまま、凍りついたように凝然と立ち尽くしていた。

周りを取り囲む兵士たちも然りだった。あんどりと口を開き、驚きの表情を上空に向けていた。

セネカは反射的に首をねじまげ、後方の岩肌の切れ目の方角を振り仰いだ。

そこには

まるで岩の塊に毛が生えたような奇怪な生き物がうごめいていた。

生き物

。 。
そう。?それ?は動いていたため生き物だということが即座に判った。

しかし、セネカはこんな生き物を今までに見たことがなかった。

いや! ある! 見たことがある !

セネカの頭の中がかたかたと回転を始めた。

夢に見たアイツだ !!

二人のいる場所からでは？それ？を仰ぐことしが出来なかったの
で、獣の皮を纏った胴体と、そこから突き出した毛むくじやらの腕
は、あたかも天に向かってそそり立つ大木のようにしか見えなかつ
た。

だがしかし、？それ？は確かに人の形をしていた。

分厚い胸板と広い肩幅の先にある頂き　頭部を覆うばさばさの
髪の毛のすき間から垣間見れるのは鈍く光を放つ両眼。そして、
額のちょうど真ん中にあるのは、間違いなく目だ。

三つ目　！　三つ目の魔物！？　バケモノ　！！
セネカは大きく息を呑んだ。

それは恐ろしい様相をした三つ目の怪物だった。

三つ目の怪物はむき出しの二の腕を頭上高く差し上げていた。
両の手に大きな塊を抱え上げている。手首からは太い紐のようなも
のが垂れていた。

怪物が歯を剥いた。と、同時に地鳴りのような唸り声が響き渡つ
た。

闇夜に浮かび上がった乳白色の牙の並びがカツと上下に開かれた
かと思うと怪物が吠えた。

それは血を凍りつかせ、身の毛もよだつような恐ろしい雄叫びだ
った。

しかし、恐れおののいていたのセネカだけではなかった。

辺りを埋めつくしていたポセイドン軍の兵士たちは、突如として
現れたおぞましい怪物を目の当たりにして、半ば腰を抜かし大きく
後退を始めていた。

怪物の肩が大きく傾ぎ、腕も大きくたわんだ。

高々と掲げていた塊が空を舞った。と、同時に手首に絡みついた
紐がじゃらじゃらと音をたてた。

投げ出された塊は弧を描き、吸い込まれるように地面に落下した。

人垣が崩れた。

兵士たちが、まるで蜘蛛の子を散らすように逃げ惑った。

巨大な塊　　苔むした大きな岩の塊が落ちたあと、ごろごろと斜面を転がり落ちていった。

ここはアイツの寝ぐらだ　　。棲み家だったんだ　　！

セネカはきつぱりと確信した。

寝ているところを叩き起こされた怪物は不機嫌至極だったに違いない。うるさい輩を追い払おうと手近にあった岩をひょいと持ち上げ、軽く一喝したのち投げつけたのだ。

逃げ遅れたゴルバノスとラザレ、前面にいた兵士たちに向かって怪物が威嚇の唸り声を上げた。

海王軍の屈強な男たちは青くなって震えあがった。

追い撃ちをかけるように怪物が再び咆哮した。

兵士たちは皆、散り散りになって慌てふためきながら逃走した。

その隙を突いてセネカは素早く周囲に目を走らせた。

兵士たちのほとんどは後退していたので、既に囲みは破られている。言わば隙間だらけだ。おそらくこの場所は怪物の目からは死角になっ
ていている。きつと二人の存在には気が付いていない。

逃げるなら今しかない。この好機を逃すテはない！

セネカはアリオンを見た。

アリオンも同様に驚きのあまりか怪物の方を見上げて唾然としていた。

「あにイ！　今だ！　早く逃げ　　」

「ギド！！」

「よ………って！？　えっ？」

セネカは、アリオン信じられない行動を目の当たりにした。

アリオンは羽織っていた上掛けをはぎ取ると、手にしていた剣と

鞘を放り投げ、後方の岩場をよじ登り出したのだ。

投げ出された獲物はがしやりと虚しい音を立てて地面に落ちた。

「ギド……。生きていたのか……」

アリオンはなぜか感極まった様子で怪物に呼びかけていた。

怪物がアリオンの姿を認めた。

一呼吸おいたのち、怪物の三つの目の目尻が思い切り垂れ下がり、口元がにんまりとだらしなくゆるんでいった。

恐ろしい三つ目の怪物は明らかに嬉しがっていた。

アリオンはあつという間に岩場を登り切った。

セネカはまたアリオンの信じられない行動を目にすることになった。

なんとアリオンは怪物目がけて大きく跳んだのだ。

一方の　ギドと呼ばれた三つ目の怪物は大きく胸を開いていた。アリオンはその懐に飛び込んだ。怪物がアリオンの体を包み込むように抱きとめた。まるで、母親が無垢な幼子を擁護するかのよう……。に……。

ここで初めてセネカはショック状態から立ち直った。

色んな事が立て続けに起こったせいだろう。とうとう気がふれてしまったんだ。

あのバケモノのヤツ、あんなに大喜びして……。飛んで火にいる夏の虫とばかりに、むしゃむしゃと喰っちまうに違いない！

セネカはそばに落ちていた石ころを拾い上げると怪物に向かって投げつけた。

怪物がぐるぐると喉を鳴らし、低く唸った。石が脇腹に当たったのだ。

獰猛な三つの目がぎろりとセネカを睨みつけた。セネカは一瞬たじろいだ。このままむざむざと引き下がるわけにはいかない。

「や、やいやいやいッ！　このバケモノ！　てめえ！　その手をどける！　あにイを離しやがれッてんだッ！　」

セネカは怯むことなく石を拾い上げては怪物めがけて投げつけた。怪物の胸に顔を埋めていたアリオンがハツとなつて面をあげた。

「違うんだ！ セネカ！」

アリオンが抱え込まれたまま叫んだ。

（正氣に戻った！）

ホツとする間ももどかしい。セネカはあらん限りの大声で叫び返した。

「早く！ あにいイ！ 今だ！ すぐにそこから逃げ」

「ギドは味方だ！」

「ろ……つて。……？ えええッ！？」

「ギドは、僕の仲間だ！」

セネカは胃袋がひっくり返るほど驚いた。

「み、味方あ！？ な、な、な 仲間だつてえ！？」

瞬間、以前アリオンが旅の途中ではぐれてしまったという仲間の事を思い出した。

しかし、仲間がいたことは聞かされていたが、その仲間がこんなとてつもない三つ目のバケモノだということは、全く聞いていない。

「仲間だと！？」

「あの怪物は奴の仲間だ！」

「槍を持てえ！！」

アリオンの言葉を聞いていたのはセネカだけではなかった。

一旦退いた兵士たちは体勢を立て直しつつあった。

ギドが鋭くその気配を感じ取った。

そして低く唸り声を響かせながら、岩場に足をかけた。

まるで胴体から岩石が隆起したかのようながっしりとした脚部が現れたかと思うと、アリオンを両の手で抱えたまま巨体が虚空に身を躍らせた。

ずしんと地響きを立てて着地するや否や、ギドは片手を振り上げた。手には手首からじゃじゃらとぶら下がっているひも状の物を握った。

ていた。それは　　太く長い鎖だった。

ギドがその袂たもとを掴み、振り回した。

鎖がびゅうびゅうと唸りを上げ、空くうを切り裂いた。

砂塵が巻き上がった。

それはまさに、つむじ風さながらの勢いだ。

セネカはたまらず地面にひれ伏し、両手で頭を抱えた。

振り回される鎖のその凄まじさといったら、六節棍の比ではない！

ギドと相對する兵士たちはまた怖じけづき、どよめきながら尻込みを始めた。

「やめろ！　ギド！　あの兵たちに攻撃するな！！」

アリオンがギドの掌の中から身を乗り出していた。

ギドがびたりと振り回すのを止めた。

行き場を失った鎖は、ほとんど勢いを殺さぬまま、後方の岩場にもろに激突した。

粉碎された岩の壁が塊となってばらばらと落ちてきたので、地べたに張り付いていたセネカは、今度は転がるようにしてその場から飛び退いた。

「逃げるんだ、ギド。早く、ここから……。セネカも一緒に……。セネカ！」

「……………！？」

「ギドに掴まれ！　急いでギドの肩に乗るんだ！！」

「な……………　ッ！！」

セネカの息が一瞬止まった。

「い、いやだーッ！！　おいら、こんなバケモノになんか触りたくない！　だれがこんなヤツの肩になんか乗るもんか！！」

「セネカ、急いで」

アリオンの頭がぐらぐらと不安定に傾いでいた。

「ギドは大丈夫だから……。セネカ、言う事を聞いてくれ……………」

言葉が途切れたかと思うとアリオンの体が、がくりと前のめりに

折れた。

毛むくじゃらの腕が、こぼれ落ちそうになるアリオンを寸でのところで受けとめた。

アリオンはギドの胸にもたれかかっていた。腕も脚も力なくだらりと垂れている。

ギドはいかにも心配そうな様子で、意識を失ったアリオンを労るように壊れ物でも扱おうように両腕で抱えていた。

「反撃が止んだぞ！ 今だ！ 包囲しろ！！」

「槍を持った者は前面に出い！！ 急げええ！！」

兵士たちがまた体制を立て直しつつあった。

マズい　！！

セネカはすくみあがった。藁にもすがる思いで見上げると、ギドがまっすぐにセネカを見下ろしていた。

まるで射抜くような三つの眼差しが、一瞬、穏やかな光を宿したような気がした。

ギドの身が沈んだ。

力尽き、ぐったりしたアリオンを抱えたまま地面に片膝をつき、体を丸く屈め動きを止めた。

そしてギドは、『乗れ』と合図を送るかのように首を傾げた。

ためらっている間はもう無かった。

こうなったら先ほどのアリオンの言葉を全面的に信用するしかない。

セネカは大急ぎで落ちているアリオンの剣を拾い上げ、鞘に納めた。

そして同じくうち捨てられた上掛けを拾いあげ、脇にしっかりと抱え込むと意を決してギドの背中に飛び付いた。

「喰うなよ！ ゼツタイに喰うなよ！！ おいらを喰っても、全っ然うまくないんだからなッ！！」

ごつごつした背中を遮り無二登り切ったセネカはギド首根っこに跨またが

り、ぼさぼさの髪の毛が毛羽立つ頭にしがみついた。ちょうど肩車する格好だ。

待ちかねたとばかりにギドが立ち上がった。

巨体があまりにも敏速に立ち上がったので、セネカは軽いめまいを覚えた。

そして後方にのけぞり振り落とされそうになるのを、ギドの巨大な頭にかじりつきながら必死で堪えた。

足元からは兵士たちのどよめきが起きていた。

それに対しギドが再び一喝するような雄叫びで応えた。

ギドは身を翻すと、地響きを立て巨体を揺らしながらその場から逃走した。

セネカは 振り落とされまいと、鬣たてがみのようなギドの頭髪を両腕に巻き付け、死に物狂いでその頭にしがみついているしかなかった。

おそろしく長い夜だった。

セネカは、夜がこれほどまでに長く果てしないものだとは思ってもみなかった。

寢床もぐり込んで目を閉じれば夜の闇は自然と白み、次に目を開けるのは辺りの景色が朝靄に浮かぶ頃合い　それが常であった頃が懐かしくさえ思った。

決死の逃亡劇を経て、ようやく危機を脱したと感じたのはギドが足並みをゆるめた時だった。

それまでの間セネカはギドの首根っこに跨り、その頭部を覆う剛毛に必死でしがみついていた。

ギドの肩の上は決して乗り心地の良いものではなく、むしろ最悪だった。

仲間であるアリオンは両腕に抱え大切に擁護していたようだが、ゆきずりのようなセネカに対しては二の次三の次だったに違い　ない。おそらく、セネカが力尽きて肩から振り落とされたとしても気にも留めなかっただろう。

どすどすと地響きをあげ、突進するかののような勢いに縦に横に揺さぶられ、まるで生きた心地がしなかった。

セネカはこれまで色んな夜を過ごしてきたが、これほど酷い夜はなかった。

もっともそのおかげで睡魔に襲われる猶予などなく、白々と夜が明ける頃までギドの頭にしがみつき続けることができたのだが……。

辺りの景色が次第にくつきりと浮かび上がってきた。

セネカは肩に揺られながら、ギドが山の斜面を登っていたことは

察していたので、右手に崖下を望む光景を見た時也大して驚くことはなかった。

ギドは山のちょうど中腹あたりを歩いてきたようだった。

一行はやがて、山肌の岩が壺の底のように深くえぐれた窪みへと進み入った。

その窪みにはほどよく乾いたカタビラ草がびっしりと分厚く敷きつめられており、居心地のよい巣穴のようになっていた。

コイツの罅ひびはここだったんだ。

セネ力は疲れきり、半ば麻痺した頭の片端でぼんやりと思った。

ギドが膝を折り、身を屈めた。『下りろ』という合図だ。

セネ力はこわばった四肢を軋ませながら、用心深く巨体の背中を滑り下りた。

地べたに足を着けたものの、体のどこもかしこがぎくしゃくとして、とても真つ直ぐ立っていられなかった。

体が右と左に大きく傾いだが、セネ力は足の指にしっかりと力を入れてこれに堪えた。

ギドはカタビラ草の寢床へそつとアリオンを降ろした。そして、そのかたわらにのつたりと自らの巨体を横たえた。

疲れ知らずの怪物もさすがに夜通し寝ずの逃走は体力の限界だったのだろうか。ギドは干草の上に倒れこむや否や、ものの数分も経たぬうちにいびきをかき始めた。

アリオンはまだぐったりしていた。ギドの轟くような大いびきに目を覚ます気配はない。

セネ力も二人に倣い、柔らかそう干草の上に身を投げたかった。

しかし、目の前の三つ目の怪物に心から信頼を寄せるにはまだためらいがあった。

もしも怪物が豹変し、牙を剥いて襲ってきたら？

油断したスキに頭から喰われるという危険が全くなかったわけではないのだ。

セネ力は、アリオンの剣と上掛けを抱え込んだまま足音を忍ばせ、

窪みから抜け出した。

出来るだけ居心地のよさそうな木の根本を見つけるとそこに身を寄せ、上掛けを体に巻き付けるとセネ力はごろりと横になった。そしてそのまま泥のように眠った。

深く淀んだ眠りの中でセネ力は夢を見た。

目の前を何かが横切った。

鎖だ。とてつもなく太くて、長い。

鎖は一旦地面に打ち付けられてから大きく弾み、鞭のようになつた。かと思つと瞬く間に何本もの連結した長い棒となつた。

目にも止まらぬ速さで棒が回転を始めた。

風がごうごうと暴れ始めた。

荒れ狂う風からかばおうと顔の前にかざした右の腕に突然、鋭い痛みが走った。

見ると草のイバラの蔓つるが巻き付いている。

きつく腕を締め付ける蔓を必死で振りほどこうとしたところへ誰かの手が伸びてきた。

(イレム　！？)

イレムはセネカの手首に絡みついた蔓を取り去り、ちらと視線を投げた。

「早く行きたまえ」

セネカは駆け出した。イレムの顔を見るのはいたたまれなかった。

途中、ゴルバノスとラザレとにすれ違った。

このいかつい連中にはいい加減うんざりしていたので、ゴツい顎といやらしい眼差しを目の端に認めただけで、脇目もふらずに走り続けた。

やがてセネカは立ち止まった。目の前には一張りの天幕があつた。

「何をしておる。早く中へ入らんか」

猛々しい体躯がセネカの脇をすり抜けた。

(ダメだ！ 中へ入っちゃ！)

セネカは慌ててポセイドンの後を追った。しかし。

「ハデス めー！」

目をぎらつかせ、剣を携えたアリオンが真正面からポセイドンに突っ込んでいった。

セネカは堪らずに顔を背けた。

ハデス。知らない名前だ。

そんなにも極悪な輩なのか。剣を刺し向けるほど恨みのある者のだろうか？

分からない。一体、どうして。

「さぞかし儂を……恨んでおろうな」

ポセイドンのくぐもった声が響いた。食い縛った歯のすき間から真っ赤な血を滴らせている。

セネカは目をかたく閉じ、両手で耳を塞いだ。命の灯火が消え行くのを見るのはもうたくさんだった……。

しかし、ポセイドンが喋り続ける言葉は、端々までセネカの耳に届いた。

その口調は愛し児を諭すようでもあり、自らの過ちを悔い、あがなうようでもあった。

「お前と……デメテルを捨てた、この儂を……さぞ

「違います！ 父さん！ これは……これは……」

「……分かっておる。お前はさつきハデスの名を叫んでおったな。ふ……ハデス兄め……とんだ怨み節だ。いいか、聞け。アリオン」

ポセイドンの瞳に一瞬、力強い光が宿った。

「お前たちのことは……ずっと気にかけておった。ずっとだ……」

アリオン。お前に頼みがある。お前は……故郷へ帰れ。そして、デメテルに伝えてくれ。儂は、心からそなたを愛していたと。しかし

深いため息と共に、口からまた血の塊がこぼれ落ちた。

「しかし、そなたの心が、どうあってもプロメテウスから離れぬことを悟り、あのような不埒な所業に出してしまった。と……」

「プロメ……テウス？」

アリオンが思いついたようにたずねていた。

「……そう。ヤツとはかつてダルキアからオリンポスへの遠征の途を共にした仲だ。だが……。ああ、お前にすべてを話したいが……もう時間がない……。いいか。プロメテウス　だ。この名を胸に刻んでおけ」

かたわらに佇んでこの様子を見ていたセネカは固唾を飲んで事の成り行きを見守っていた。アリオンも同様に我を忘れてポセイダンの喋りに耳を傾けていた。

「お前は……デメテルが産んだ双子のひとりだ。そう伝えたな？」

アリオンは同意の意思をこめて小さく頷いた。

「お前と……もう一人は……。双子のかたわれは女だ」

「女……」

「そうだ……。その者はオリンポスに居る　手を尽くし、ようやく……ようやく居所を掴んだのだ。儂はずっと……行方を探していた」

ポセイドンがふと辛そうに目を伏せた。

「占いかぶれのゼウスが、馬鹿げた予言によりにデメテルから奪い取りおった。そしてゼウスはその者の言葉を封じ込めた。だから、可哀想に　その者は口がきけぬ」

「……。口が……？」

「そう……その者の名は、レスフィーナ」

「……！？　レスフィーナ！？　レスフィーナですって！？」

（レスフィーナ！？）

アリオンとセネカは同時に驚いた。

「僕は　会いました！　レスフィーナに。オリンポスで、会った

んです。父さん！」

「……そうか」

ポセイドンの苦悶の表情が一時和らぎ、うつすらと笑みが浮かんだ。

「会ったのか……レスフィーナに。そうか……さぞかし、美しい娘に育っておったであろうな……」

「はい。とても……とても美しい人でした。母さんに似て。……では、レスフィーナと僕は兄妹。血のつながった僕の妹？」

うなずきと共にポセイドンは苦しげに咳き込み、血を吐き出した。顔面が見る間に蒼白になっていく。

「……レスフィーナは、ゼウスの手の者によりデメテルから奪い取られた。だが、お前は……プロメテウスの助けによりデメテルの許へと……戻った。そして……辺境の地、トラキアへと逃れることができたのだ」

「……。はい……」

「レスフィーナは……今、オリンポス　アテナの小間使いとして仕えているはずだ……頼む、アリオン。我が娘のレスフィーナを奪い返してくれ。そして、デメテルの許へ連れ戻してやってくれ……」

ポセイドンの口調は切実に訴えに変わっていた。

「……儂が今、話すことが出来るのは……ここまで、だ。アリオン……どうか、承知してくれ。儂の最初で……最後の願いを、聞き届けてくれ……」

「……。はい。父さん」

アリオンは戸惑いと迷いを振り払うかのように口元を引き結び、きっぱりと言った。その目はまっすぐ父の顔を見据えていた。

「わかりました。父さん。僕は　僕は必ずレスフィーナを助け出して、トラキアにいる母さんのもとへ連れて帰ります」

セネカは胸のあたりが苦しくなって目を醒ました。

ポセイドンとアリオンのやり取りは夢ではなく、昨夜の天幕での出来事を反芻していたのだった。

「そっか……。双子の妹だったんだ。レスフィーナって」

セネカは木の根本に寝転んだまま、口の中でぽつりと呟いた。

陽は高く昇りきっていた。そろそろ昼刻ひるくわなのだろう。

頭の中は霧がかかったようにボヤけていたが、休息したおかげで体力は幾分か戻っていた。

岩場の窪みの中を覗き込むと　アリオンとギドはまだ丸くなつて眠っていた。

セネカは山道を歩き出した。

アリオンの剣は　置き去りにするには忍びなかつたので、しっかりと脇に抱え込んだ。

微かに漂ってくる水の匂いを頼りに用心深く足を運び山の斜面を下りると、徐々に水の流れる音が近づいてきた。

やがて、小さな沢に出たセネカはそこで澄んだ水を飲み、顔を洗った。

右手首がずきずきと痛んだ。

見ると皮膚が青紫色に変色し、腫れあがっている。

悪夢に侵され、狂気に駆られたアリオンに強く握り絞められたところだ。

セネカは手首を冷たい水の中に浸した。傷の痛みがほんの少し和らいだようだった。

もと来た道を辿り窪みに潜り込むと、二人ともまだ眠っていた。

ギドは相変わらず大いびきをかいている。

セネカは音をたてないように気をつけながらアリオンの剣と、小さな荷を干草の上に置いた。

そおつとアリオンの額に掌を押し当てると　あれほどまで高かった熱が下がっている。セネカは小さく安堵の息をついた。

だしぬけにアリオンの両目が開いた。

「！？　あ……起こしちゃった、かな……。ごめん」

「いや……起きてたんだ。さつきから」

アリオンは虚ろな目をセネカに向け、小さく首を横に振って答えた。

抑揚のない呟きは、まるで地鳴りのようなギドのいびきにかき消されそうだった。

「あー。えええーと。仲間がいたってのは聞いてただけどさ

ずいぶんとデツカイ奴だったんだなあ。最初見た時、おいら魔物かと思っただぜ。マジで喰われるかと思っただ。それに、目が三つもあるなんて……ホント珍しいよな」

ちらつちらつとギドの方に目をやりながら、セネカは少しおどけたような口調で喋りかけた。意気消沈しているアリオンの気を少しでも紛らわそうと思っただのことだった。

「……。ギドは、いい奴だ。根はすごく優しいし……君のことを食べたりなんかしないよ。だから心配はいらない」

アリオンがようやく口を開いた。

「ギドは……魔人族の生き残りなんだ。力は強いし勘も鋭い。それに頭もいいんだ。額の所にある目は人の心を読むと言われている」

「へええ！」

セネカは目を丸くして感心した。

「旅の途中でオリンポス兵に襲われて……矢の攻撃を受けて、ギドは崖から落ちたんだ。てつきり死んでしまったのかと思っただ。僕は捕えられてしまったし」

「よかつたじゃんか！ 無事でさあ！ それにこうしてまた会えるなんて、運がいいんだよ。きつと！」

セネカが目を輝かせ、心から喜んでいる様子なのを見て、アリオンの表情がふつと和んだ。

「運がよかつた……。そうだね。そうに違いない」

アリオンがゆっくりと起き上がった。

セネカはかたわらに置いた荷の包みを広げた。ポセイドンの陣営で従者に徹している間ずっと腰に巻き付けてあった更紗布だ。

ルイザの形見の品に包まれた中には、川べりで見つけた木の实がお腹の足しになりそうな分だけ入っていた。

アリオンはぼんやりと木の実に目を落としたあと、ぐるりと辺りを見渡し、最後に自分の？なり？を見つめた。

「……。あー。あのさ。下の方に川が流れてたから。その水で……」

言いかけて、セネカは一旦口をつぐんだ。

「……。水を、飲んでくるといいよ。しゃきつとするぜ？ 顔でも洗ってさ。あー。あと……。体も、洗うといいよ」

アリオンの衣服と体はどす黒い血にまみれていた。

しばらく黙りこくっていたアリオンが弱々しい笑みを浮かべた。

「……。夢なら、いいと思ってた。けど、夢じゃなかったんだ……。僕は……」

絞り出したような細かい声が、ギドのいびきにかき消れた。

アリオンは苦痛に耐えるかねたように固く目を閉じ、手で顔を覆うと深くうつ向いた。

うなだれるアリオンに、セネカは何と声をかけたらいいの分からなかった。

ただ、傍らに置かれた剣を静かに遠ざけた。

もしかしたら アリオンが剣で自ら命を絶つのではないかとの心配が頭をよぎったからだだった。

「まったく、もお……。あのデカブツのヤツ……。こんな生木ばかり……。拾って……。来やがっ……。てッ！」

セネカは、もうもうと煙を立ててくすぶり続ける炊きつけに靴（ぶつ）で風を吹きつけながら悪態をついた。

ゴロ石を集めた急ごしらえの釜戸の上には、水を張った土鍋が置かれ、その脇には串刺しになった肉の塊が火で焙られるのを待っていた。

昼の刻が過ぎた頃。ようやく目を覚ましたギドはのつたりと起き出し、山中へと姿を消した。そして間もなく見事な大きさの山トカゲを捕えてきたのだ。

素晴らしいご馳走を目にしてセネカは驚き喜んだが、すぐにがっかり顔で肩を落とした。

「ダメだよ……。お前はいいかもしんないけどさア。おいらたちは生のままじゃ食べられない」

セネカは火をおこす道具を持っていなかった。もっともあの混乱の中ではとてもそんな旅支度などしている余裕などなかったのだが……。

川べりで採った木の実だけでは十分に胃袋は満たされず、胃袋は先ほどから騒がしく鳴っていた。セネカは今にも空腹にめげそうだった。

しかし、いくらひもじいからといって生の肉にかじりつくのだけは真つ平だ。セネカは肉厚の山トカゲをうらめしそうに眺めた。

するとギドは先ほどの窪みへと戻り、やがて火打ち石を持って現れた。

しかもギドが手にしていたのは火打ち石だけではない。石包丁や土鍋や器など、こまごました道具を両手に抱えていたのだ。

ギドはいかにも得意気な様子だった。

「……って、干し草の中に隠してあったのかよ！？ でも、どうして？ いったいどこで手に入れたんだ！？ これ！？」

「きつと無人の村でかき集めてきたんだろう」

アリオンが沢から戻って来た。汚れていた身なりはすっかり洗い流されている。

「僕たちは旅の途中でそんな 村人たちの居なくなった村をいくつか見てきたから」

アリオンの言葉にギドは同意の気持ちを露にして、にんまりと満面の笑みを浮かべながら頷いた。

「へええ……。そうなんだ……。あ！ あにィ、どこに行くのさ！？」

窪みからしばらく斜面を登った場所　切り立った岩肌には
っかり口を開けたような小さな洞窟があった。

アリオンは「独りになりたい」と言い出し、干し草の敷き詰めら
れた窪みではなく、暗くじめじめした洞窟に引き込まってしまった。

アリオンの心は頑かたくなだった。セネカが何を言っても答えは変わら
なかった。

「独りにしてくれないか、セネカ。僕は少し、考えたいことがある
んだ」

「……。う、うん……」

セネカはとうとう引き下がるしかなかった。

野営場所に戻ると、ギドが器用に大トカゲの皮を剥いていた。

大トカゲはそれから内蔵を取り出されたあと大まかに切り刻まれ、
串を打たれ、釜戸の縁にのせられた。

セネカの奮闘が功を成して枯れ草から小枝へと火が移り、ようや
く焚き火らしくなった。

ギドはその傍らにどさどさと豪快に集めてきた薪を置いた。

「また！？　何回言ったらわかるんだよ！　こんな生木じゃダメだ
って言ったじゃないか！」

セネカは呆れ果て、イライラと声を荒げた。

「乾いた木切れじゃないと、煙ばかり出て火が付きにくいって、
さっき言ったじゃんかよ！　まったくもおお！」

「……ギ、ギギ」

ギドは申し訳なさそうに頭を垂れた。

「やり直し！　コレじゃいつまでたつてもケムたいばかりだ」

セネカが木立ちの方角を指差した。

ふとギドが三つの目を瞬しばたかせてセネカを見つめた。

その視線に気がついたセネカは、さっと右の手を後ろに隠した。

ギドは紫色に腫れあがったセネカの右手首に気が付き、憐れむように目を細めていた。

「な、なんだよ。見せモンじゃないぞ」

その後、ギドはふらりとその場から姿を消した。そしてなかなか戻って来なかった。

「…………たく。どこで油を売ってんだか」

結局、薪になる木切れはセネカが拾い集めてくる羽目になった。

土鍋の湯がぐらぐらと煮え始め、大トカゲの肉が香ばしく焼けてきた頃、ギドはようやく戻って来た。

なにやら草の束を手に行っている。

ギドはその束をげんこつ大の石の上にのせ、力を込めて揉みだし始めた。

「…………？ なんかの呪まじないか？」

訝いぶかしげに眉をひそめるセネカに、ギドはしおれた草のかたまりを差し出した。

「…………？ な、なんなんだよ？ それ」

「ギギ…………。ギ、ギギ…………」

ギドは懸命に身振り手振りで何かを伝えようとしていたが、セネカにはさっぱりその意味を汲み取れなかった。

しきりに自分の手首とセネカの方を交互に指差し、何かを伝えようとしている。

「もお。分かんないって言ってんだろ。一体なんだってんだよ」

「オトギリソウだろう。すり潰して汁を揉み出せば良く効く傷薬になる」

低い声が答えた。

初めて聞く声だった。

セネカはぎよつとして振り向いた。

そこには見知らぬ一人の男が立っていた。

セネ力は驚愕し、大きく息を呑んだ。

いつの間に　！？

目を疑った。

人の気配などまったく感じられなかったし、砂利道を辿る足音さえも聞こえなかった。

なのに、つい先ほどまでは確実に誰もいなかった場所に、あたかもずっと佇んでいたかのように人が立っている。

それに　。

突然現れたその男は、どう見ても人の様相をしていなかった。

男の顔はびつしりと黒い毛に覆われていたのだ。

たてがみ
鬣？

そう。鬣だ。獣のもつ？それ？だ。

その男は漆黒のたてがみに囲まれた獣の顔をしていた。それはまさしく……。

獅子　！？

セネ力は喘ぎながら更に男の姿を凝視した。

男は人の体躯を持ちながら頭部は獅子という異様な姿をしていた。

獅子の顔じゃない。あれは仮面だ　。

セネ力は即座に思った。

二つの眼の部分からは、獰猛な獣面からはおよそ思いもよらない温かな瞳の輝きが放たれていた。

それは間違いなく？人？の眼だ。

「黒、の……？」

仮面の向こうにある温かどこか親しみのこもった眼差しに吸い込まれそうになりながら、セネ力は思わず呟いていた。

その声は奇妙にかすれ、上擦っていた。

「黒の……獅子王？」

「5」（後書き）

アクセスありがとうございます。

この章でセネカ、二人の人物？と出会いました。
今後彼らがどう関わってくるのか。

実は私もとても楽しみにしています^^

更新は相変わらず不定期です。

気長にお付き合いいただけましたら幸いです。

次の章は『諍い』です。

獅子の仮面に穏やかなほほえみが浮かんだような気がした。

セネカは一瞬ぎくりとしたあと恐々と、それでも喰い入るようにその顔を見つめた。

「知っていたのかね？ 私の呼び名を」

獅子の顔の男が言った。

（やっぱり！ 黒の獅子王だ　！）

それまで身体中を取り巻いていた怖気おしげがスツと抜けていくような気がした。

セネカは安堵にも似た奇妙な感覚に包まれながらも好奇心が勝り、黒の獅子王から目が離せずたてがみにいた。

漆黒の鬣たてがみがぐるりと覆う頭部。全身黒くずめの装束を身にまとった体躯。広い肩幅。隆々と筋肉の張った四肢。

腰帯に長い剣を提げているその姿は、獅子の顔を除けば立派な体格をした剣士そのものだ。

心なしかその猛々しさは海軍の王ポセイドンを思わせたが、同じく屈強な体躯であってもポセイドンのような重々しいほどの力強さとは部類が違っていた。

それは刃物のような鋭さでもあり、たくましくもしなやかで均整のとれた肉体でもあり、全身から放たれる強くほとほと進むような気配でもあった。

「アリオンから聞いたのかね？」

黒の獅子王がもう一度たずねた。

言葉を発した口元はまるで動いているかのようだったが、くぐもった声は確かに仮面の奥から発せられている。その声音は優しく、ホツとするようなあたたかさがあった。

息を詰め、まばたきするのも忘れていたセネカはハツと我に返ると、慌ててかくかくと小さなうなずきを何度も繰り返した。

黒の獅子王は、ゆっくりとセネカの際に歩み寄った。

「貸しなさい。みてあげよう」

「……え？」

「ギド。薬草を」

セネカが面食い身動きできないでいる間に、黒の獅子王が腫れ上がったセネカの右手首をそっと取り上げた。

オトギリソウの汁は傷口にひどくしみたが、ずきずきする痛みは嘘のように消えていった。

「どこかに巾はないかね？」

手際良く傷の手当てを終えると、黒の獅子王がたずねた。

昨夜、天幕から持ち出した上掛けの端が細く長く引き裂かれ、にわか作りの包帯となった。

やがてセネカの手首には丁寧な巾が巻きつけられた。

「しばらくそうしていなさい。腫れもじきに引くだろう。痛みはどうかね？」

「あ……う、うん。あ、あの……あのさ。黒の……獅子王？」

セネカは口ごもった。

なぜ突然現れたのか？ なぜ音もなく現れることが出来たのか？ それに。

どうして、この場所を知り得たのか？

セネカの頭の中は疑問だらけだった。

目の前にいる人物は一体何者なんだろう？

それよりも。

なぜ獣の仮面をつけているんだろう？

聞きたいことは山のようにあったが、とにかく傷の手当てをしてくれた黒の獅子王に礼を言わなければと思い、セネカはぎこちない口調で「ありがとう」を言った。

「礼ならばギドに言いなさい。薬草を見つけてくれたのは彼だ」

黒の獅子王が諭すような口調で答えた。仮面の奥の瞳がいたずらっぽく光ったような気がした。

「それに、せっかく仲間になったのだから仲良くしていかなば、な？ ギドは、まがりなりにも命の恩人だろう。違うのかね？」

セネカは曖昧に首を傾げ、うなずいた。

気のせいだろうか。なんだかこちらの心を見透かされているような変な気持ちだった。

「アリオンは あの中かね？」

黒の獅子王が視線を洞窟の方角に移しながら、今度はギドに向かつてたずねた。

ギドは顔を曇らせながらこつくりと頷いた。

「せっかくお前が設えた場所を無下むげにしてあんな所に引きこもるとは」

「あ あにイは一人になりたいんだよ」

セネカは思わず急ぎ込んだ。口を挟まずにはいられなかった。

「今は誰にも会いたくないし、話もしたくないって。だから あんなこと引っ込んだんだよ。しょうがないよ。だって……」

セネカはそのあとの言葉を呑み込んだ。昨晚の惨状が再び頭の中をよぎったので、たまらず顔をしかめた。

黒の獅子王は洞窟の方に向き直ったまましばらく無言で佇たたずんでいたが、やがて静かに口を開いた。

「皆、しばらくはここに留とどまり、互いになるべく離れずにいなさい。私がいいと言うまでは」

黒の獅子王は、追手の目が光っているから用心のためにも決して単独で遠くへ行つてはいけないと二人に念を押した。

セネカとギドはお互いに顔を見合わせた。ギドは神妙な面持ちですぐさま大きく頷いたが、セネカはいぶかしげに眉根を寄せたまま動かなかった。

「狩りは近場で済ませなさい、ギド。遠出はせずに。わかったね？」

「あ 待つて！ 獅子王！」

踵を返しその場を去ろうとする黒の獅子王を、セネ力は慌てて呼び止めた。

「行っちゃうの？ あにイには会っていかないのかい？ 会って、慰めてあげないのかい？」

「……。慰める？」

「そうだよ！ だって だって獅子王は全部知ってるんだろう？ 何があったのか全部お見通しなんだろう？ だったら」

「今のアリオンには慰めが必要なかね？」

その低い声音には射抜くような厳しさがあつた。

セネ力は答えを返そうとしたものの、声が喉の奥に引っ掛かった。
「セネカ」

黒の獅子王が優しい口調で言葉を継いだ。

「お前の気遣いはよく分かる。アリオンの辛い気持ちも、だ。だが

黒の獅子王が洞窟の方向を振り仰いだのでセネカもつられて身をよじり、視線を移した。

「あの者が困難を乗り越え、打ち勝ち、そして自ら立ち直ってくれ
ると 私は信じている」

いきなり風が立った。

辺りの木々の枝がざわつと音を立てた。風にあおられ、羽織っていた更紗布がぱたぱたとはためいた。

顔にふりかかった前髪を払いのけ元に向き直ると、そこには黒の獅子王の姿はなかった。

セネ力はぎよつとなり、また大きく息を呑んだ。

黒の獅子王は突然現れた時と同様に、またもや突然いなくなった。物音ひとつ立てずに、立ち去った気配すらなく。

それはあたかも忽然とかき消えたかのように。

「獅子王は！？」

セネ力は狼狽しながらもギドに急ぎ込むようにたずねた。

ギドは火に焙られ焦げかかったオオトカゲの肉を釜戸から取り外しているところだった。

三つの目を瞬かせながら、ギドは不意打ちをくらったようにきよとんとしたあと、不思議そうに辺りを見回していた。

頭の中は混乱し、ますますわけが分からなくなっていたが、それでも分かっている事が一つだけあった。

黒の獅子王は何もかも判つてるということだ。これは何がどうあつても間違いないと、セネカは確信していた。

「だって……教えてもないのに、おいらの呼び名を知ってるなんて……」

セネカは自問するかのよう小さく呟いた。

「1」（後書き）

ここまでお読みくださってありがとうございます。

お待たせいたしました。久しぶりの更新となりました。

2カ月以上も放置していました……

マイペースにもほどがあるだろう……と、自分でも呆れておりますが、どうかご容赦ください。

第十八章 諍いさかい

黒の獅子王の存在感の大きさを現すことが出来たら、この章は成功かな……。と。

拙いモノですが、ゆるりとお付き合いいただけましたら幸いです。

ブログにて執筆日記やスランプ日記・日々の徒然などを書きつつつづいていきます。

コウミの所在確認や消息、活動を知りたい方、興味などのおありの方、よろしかつたらお立ち寄りくださいませ。

ただし、時々ネタばれしていますのでご注意ください

ブログへは『コウミのページ』の『サイト』の所から飛べます。

「2」

セネカは慌てふためきながらアリオンがこもっている洞窟の中に転がり込んだ。そして、黒の獅子王が突然現れたこと、そして音もたてずに去って行ったことをアリオンに告げた。

案の定アリオンも息を呑み驚きの声をあげたが、洞窟の中は外の明るい日差しがほとんど届かない暗がりだったので、その驚愕の表情はうつすらとしか窺い知ることが出来なかった。

アリオンは呆然としたまましばらく黙りこくっていた。
が。

セネカは一瞬、自分の目を疑った。

暗さに慣れたセネカの目に、まるで嘲あざわらるかのように顔を歪めているアリオンが映ったからだ。

「困難を乗り越える？ 自ら立ち直れだって？ ふざけてる」
声を押し殺し、まるで罵るような口調だった。普段のアリオンからは想像すらできない。

「セネカ。今度獅子王が来たら伝えてくれないか。もう、二度と僕の前に現れるな 顔も、見たくない」

全く予想もしていなかったアリオンの剣幕に圧され、セネカはご馳走が美味しそうに焼けたことを言うのを忘れ洞窟の外に飛び出した。

困惑するセネカに代わってギドが食事時を知らせる役を担ったが、やがてがっくりと肩を落としながら焚場に戻ってきた。

ギドが力なく首を横に振ったので、アリオンの反応はだいたい予想がついた。

「しばらくそつとしておこう。明日になれば気持ちも落ち着いて元気になるよ。きっと……」

セネカは、ギドのしょんぼりした様子あまりにも可哀想だったので同情を込めて言った。

岩のように広大な背中を撫でながら精一杯ギドを慰めたが、なぜアリオンが黒の獅子王に対してあれほどまでに腹を立てているのかセネカ自身もさっぱり分からなかった。

その日、セネカはギドと共にカタビラクサを敷き詰めた居心地のよい窪みで夜を明かした。

ギドは人を喰うことは無さそうだし、気を許しても大丈夫ということが分かったからなのだが……セネカはすぐに後悔した。一晩中ギドのひどいいびきに悩まされたからだ。

セネカは、窪みのなるべくギドから離れた場所を陣取ったもの、まるで地鳴りのような大いびきには閉口した。両手で耳をふさいでもダメだ。指の隙間からしつこく入り込んでくる。

それでも、セネカは意地で眠りをむさぼり、ようやく一夜を過ごした。

白々と空が白む頃、轟々と鳴り響くギドのいびきを背中で聞きながらセネカはそっと窪みを抜け出した。

まだ薄暗く、しつとりとした朝もやのかかる明け方だった。

セネカは大きく伸びをすると、涼やかで芳しい早朝の空気を胸いっぱい吸い込んだ。

まどろっこしい眠気を吹き飛ばしたあと、セネカは朝露にぬれた草地を踏みしめ、アリオンが籠もっている洞窟を訪れた。

一晩経って気分も落ち着いたのでろうし、気持ちの良い朝の空気を吸えばきつと元気を取り戻してくれるに違いない　と、セネカは思っていた。

しかし。

アリオンの心は昨夜から変わらず、心も口も固く閉ざしてしまっただかのように陰鬱だった。

その様子は昼日中を過ぎてても変わることが無かった。

むっつりと口元を引き結び、始終不機嫌で、その具合は獅子王が現れたことを知る前よりもひどい。

それから、アリオンは時折ふらりと洞窟から出てきては、セネカとギドに言葉をかけるでもなく、神経質に辺りを見渡したあと硬い表情のまま、また洞窟に引きこもる。そんなことを幾度か繰り返していた。

やがて、ポセイドン陣営から逃げ出してから三日目の朝を迎えた。

アリオンはやはり相変わらずふさぎこんだままだった。

ギドもそんなアリオンの様子が気がかりなのだろう。すっかり意気消沈し、元気が無かった。

黒の獅子王からは、しばらくここから離れないようにと言いつけられているので足止めを食っていたし……。更には、その肝心の黒の獅子王もあれから姿を現さない。八方塞がりだ。

火を熾し^{おこ}終えたセネカは、絞めたムクドリ^{むくどり}の羽をむしりながら大きくため息をついた。

「お前さあ。黒の獅子王とは昔からの知り合いだったのかい？」

セネカもいい加減いらいらが募ってきていたので、半ば投げやりになってギドにたずねた。

獲物のケナガイタチをぶら下げて狩りから帰って来たギドは、セネカの問いに首を横に振って応えた。

黒の獅子王。一体誰なんだろう？　なんで何でもかんでも知っっているんだろう？

幾度となく繰り返し抱いてきた疑問は解決するどころか、ますます昏迷に陥っていた。

ギドは黒の獅子王に対して絶対的な信頼を寄せているのは間違いなかった。でも、そのいきさつは確かめようがない。ふと、セネカは思い立った。

アリオンから、矢の攻撃を受けて二人が離れ離れになったと聞かされていた事を思い出したのだ。

「もしかしたら……助けられたのかい？　獅子王に」

ギドは嬉しそうににんまりと顔をゆるめながら同意を込めてうな

ずいた。

「……ってことは、もしかしたら命の恩人？」

「ギイ、ギギギ。ギ」

ギドは「そうだ」と言わんばかりに大きく首を縦にゆすった。

「へええ。そうだったんだ」

なんとなく会話になったようでセネカも嬉しくなって、自然に笑みがこぼれた。こんな風に気持ちが和んだのは久しぶりだった。

それからしばらくの間、セネカはギドと話し込んだ。

話し込んだといってもセネカの言う事に対してギドが「そうだ」という時にはうなずき、「違う」という時には首を振り、「分からない」という時には首をかしげるというやり方だ。

三通りの答えだけで会話をするのはずいぶんと骨が折れたが、なんとかお互いの意思が通じ合ったし、お互い友情にも似た親近感も湧いていた。

ギドとの会話で分かった事は　ギドはアリオンが子どもの頃に
出会い、一緒に暮らしていた。二人はとても仲が良かった。そして
二人一緒にオリンポスを目指して旅に出て　その途中で何者かに
襲われ、離れ離れになってしまった……。

そしてひどい怪我を負ってしまったギドは、黒の獅子王に助けられた。

セネカはふつと口をつぐみ考え込んだ。

だとすると。

黒の獅子王はアリオンにとっても命の恩人のはずだ。以前、本人もそう言っていたのだから、間違いない。それなのに……。

セネカは、暗がりの中でアリオンの憎悪を含んだようなあの目つきがまぶたに焼きついて離れなかった。

「とにかくさ。いつまでもこんなトコでくすぶっていらんないよ。

だって、あにイはポセイドンのおっちゃんと約束したんだから

オリンポスに捕まってるレスフィーナを助けておっかさんのに会わ

せるって……」

その時、向かい合わせに座っていたギドがはたとおもてを上げた。セネカの後方を見るその三つの目はまるで安堵しているようだった。

セネカが「もしや」と思い急いで振り返ると、そこには黒の獅子王が立っていた。

何の前ぶれもなく黒の獅子王が姿を現すのは初めてではない。

さほど面くらいはしなかったものの、獣面の奥の眼差しがあまりにも険しく光っていたのでセネカは少しぎくりとした。

ギドもそんな黒の獅子王の緊迫した様子を察知したようだった。

「いつでも出発できるよう、旅支度を整えておきなさい」

黒の獅子王は低く短く言った。

ギドがすぐさま腰を浮かせたが、セネカは思わず驚きの声をあげた。

「えっ？ 旅に、出るの？」

「オリンポスがエリヌースの七人衆を放った。この居場所を嗅ぎつけられるのも、そう先のことではないだろう」

「……エリヌース？ 七人？」

「エリヌースは、オリンポスの王ゼウスの直属の手下で 亡者共だ」

「もう……じゃ？」

「そうだ。既にその身は滅んでいる。だがゼウスの呪術じゆじゆにより奈落の底から甦り、霊体としてこの世にとどまっているのだ。復讐の神々と称してな。もともとはアルカディア王族だったが オリンポスの確立により祖国を裏切り、ゼウスの側についた。そして今もなおオリンポスに居座り続け、ゼウスに与くみする」

「ええ……つと」

黒の獅子王の説明を聴きながら、セネカの眉間にますますシワが寄った。

話がとてつもない次元に及んでいたので、理解が追い付かず頭がくらくらしていた。

「エリヌースは強力な幻術を使う。恐ろしく、そして手ごわい相手だ。狙いはアリオン……。ひとまず連中の目を逃れねばならん」

しかし、黒の獅子王から、アリオンがオリンポスに付け狙われていると聞かされても、セネカにはピンとこなかった。

「でもさ。なんでオリンポスの奴らに狙われるんだい？ おかしいよ。ポセイドン軍の奴らから追いかけられるんならともかく」

「父殺しはテイターンにとって最大の禁忌だからだ。そのような大罪を犯した者をゼウスはみすみす見逃しはしない。然るべき裁きを受けさせるためにエリヌースを遣わせたのだろう。それに　ポセイドン軍は全滅した。もう、追われることはない」

黒の獅子王は重々しい口調で付け加えた。

「え……っ！？　ぜ、全滅！？」

「そう」

息を呑むセネカに、黒の獅子王は更に声を落とし、諭すように続けた。

「真夜中にあの騒ぎだ。アテナ軍の偵察隊が不審に思つのも当然。おそらく陣営に尖兵を潜りこませたのだろう。ポセイドンが討たれたとの報はアテナの側にもオリンポスにも伝わった」

黒の獅子王の口調は語りべのように淡々としていた。

「主を失ったポセイドン軍の兵士たちは戦意を失い、総崩れとなった。兵士たちは皆ちりぢりになって退散した。船を駆って祖国クレタへと取って返す者共もいたが　アテナ軍は反撃は容赦がなかった。ピレウスの浜は今や船の残骸と屍しかばねの山だ。生き延びた者はいない」

「全滅……」

セネカはまだ信じられなかった。

ラザレやゴルバノスのゴツい輩の強面こわもてが目に見えかんだ。

あの厳いかついで兵士たちが　あの屈強で、無敵とさえ思われた強靱な兵士たちが全員やられるなんて……。

「それじゃ……あ、あにイも殺されちゃうの？　その……エリヌースとか言う、ヤツらに見つかったら……」

セネカが、どもりながら怖々^{こわこわ}とたずねた。

「いや　まずゼウスはアリオンをオリンポスへと連行するつもりだ。親殺しの大罪を犯した者として裁きを受けさせるためにな。しかし、下される判決は分かりきっている」

「……」

黒の獅子王の言わんとする意味を理解したセネカは、しばし言葉を失った。

ギドがクズクサの蔓^{つる}を編みこんでこしらえた大ぶりのズタ袋に、がちゃがちゃと音をたてながら道具を放り込んでいた。

火を熾す道具や石包丁、器、土鍋、そして獲物のケナガイタチなど、そこらじゅうのありとあらゆる物全てを収め終えると、最後にアリオンの剣をカタビラクサの中から取り出し、大事そうに荷のかたわらに立て掛けた。

「……。アリオンはどうした？」

黒の獅子王の問いかけに、セネカはためらいがちに、アリオンはまだ洞窟の中にいることを告げた。

「あ！　待って！　獅子王」

セネカは行こうとする黒の獅子王を引きとめた。

「あにイからは……その……会いたくないって、言われてるんだ。そう伝えてくれて。顔も……見たくないからって」

セネカがためらいながら声を落した。アリオンの、あの憎しみのこもった眼差しがちらつと脳裏をかすめた。

「大丈夫だ。二人とも、ここで待っていないさい」

黒の獅子王はしばらく黙考してから穏やかに言った。そして、ゆつたりと洞窟へと向かって行った。

セネカも慌ててその後を追おうと立ち上がった。が　。

「　ッ！　な、なんだよっ！」

いきなり息が詰まり、セネカは大きくのけぞった。ギドの指がセネカが羽織っている更紗布の端をしっかりと掴んでいたのだ。

ギドは敵めしい顔つきでジツとセネカを見つめていた。その目は明らかに「行くな」と言っている。

「離せよ！ お前だつてあにイのこと気になるだろ！？」

ギドは大きくうなずいたあと、大きく首を横に振った。

「……。んだよ。もお！ 分かったよ！」

セネカはこれ以上ないというくらいにしかめっ面を返したあと、ふてくされたようにその場に座りこんだ。

それでもギドはセネカの布の端を掴んだまま離そうとしなかった。

「……。ちえつ。信用ないんだなア」

セネカは不服そうに鼻を鳴らした。

振り返ると黒の獅子王が洞窟の入口をかいくぐるところだった。

気を揉んでも仕方がない。ここは黒の獅子王の采配に任せる他はないだろう。

アリオンも命の恩人に励まされ諭されて、普段の落ち着きを取り戻すだろうし、陰気くさい穴ぼこからも出てくるはずだ。と、セネカは思っていた。

なので、洞窟の中から突然、怒号のような大声が聞こえてきた時には、座り込んだまま飛び上がるほど驚いた。

声の主はアリオンに間違いなかった。明らかに喧嘩腰で怒鳴りちらしている。

ギドの顔色が変わった。

その、うるたえ動揺した隙をつき、セネカはギドに掴まれていた布の端を引っ張った。更紗布は造作なくするりとギドの指をすり抜けた。

自由の身になったセネカは我を忘れて地面を蹴った。

洞窟の中からはアリオンの声しか聞こえてこない。明らかに黒の獅子王に食ってかかっている。

(ケンカしてるんだ　！)

セネカが洞窟の入口に辿り着くと　光の届かない穴の奥、おぼろげな二つの黒い影が見えた。アリオンと黒の獅子王だ。

暗闇に目が慣れるのがもどかしかった。

セネカは何度も瞬きを繰り返しては目を凝らし、前方に佇む二つの人影を見つめた。

「満足してるんだろう。すべてあなたの思い通りに事が運んでえ？　獅子王！？　あなたは　僕が父さんを　ポセイドンを殺すように　仕向けた。次は誰だ？　アテナか？　ゼウスか！？」

アリオンは洞窟の壁を背に立ち、湧きあがる感情を抑えきれない様子で一方的に喚わめいていた。

狂気を含んだその目は黒の獅子王をじっ見据え、セネカの存在に気付いた様子はない。

「運命さだめとか何とか言って　ワケの分からない？　まやかし？　使つて夢に現れて、偽善者ぶって　」

突然　アリオンがヒステリックに笑い出した。

セネカは、アリオンは気が触れてしまったのではないかと小さく息を呑んだ。

「僕は、さぞ動かしやすいコマだったろうな。え？　獅子王！！」
アリオンは今や猛り狂ったように声を荒げていた。

「楽しいのか？　そうやって僕をもてあそぶだけでもあそんで、僕がメチャクチャになっていくのを見るのが、そんなに楽しいのか！？」

「落ち着け。アリオン　」

「？　落ち着け？　だって！？　落ち着いてるさ！　僕は冷静だ。あなたの事だつてすべて見抜いているぞ！　僕の命を救ったのだから、そうやって恩を売ったからだ。恩を売って、そうやって僕を信用させたかったからだ！」

獅子王がぴたりと押し黙った。

セネカはこの諍いいさかの結末がどんなことになるのか気が気でなかった。

もしもアリオンが自らの剣を携えていたならば、間違はなく取り返しのつかないことをしてかすに違いないと思った。そう思わざるを得ないほどアリオンは荒れていた。

黒の獅子王は、まくし立てるアリオンの前に佇たたずみながら静観していた。

「もうあなたの思い通りにはならない。なるもんか！ 僕は 僕は自由だ。誰も、僕の事に何も口出しさせない！ もうあなたが何をしようとか何を言おうと動かない。そうさ 僕は僕だ！ 自分の意志で生きていくんだ。この命だって僕が この命こそ僕だけのものだ！ なんならここで命を終らせることだってできる。そうさ！ そうなればあなたは、もう僕を利用することができない そうですね！ え？ どうだ！？ 獅子王」

刹那の出来事だった。
セネカは、黒の獅子王が剣を抜き払うのを見、アリオンが大きく息を呑むのを聞いた。

一瞬、閃光が流れるように宙を走ったが、黒の獅子王は変わらずその場に立ち据え、その後ろ姿は微動だにしない。

アリオンはというと 向かい合わせに立つ黒の獅子王の影に隠れていたのがセネカからはその様子を窺うことはできなかったが、先ほどまでの威勢のいい喚き声はぱったりと途絶えていた。

その代わりに、アリオンはあえぎながら、不自然に、切れ切れに息を吐いていた。

「……………」

何事が起きたのかセネカにはさっぱり分からなかった。

セネカは恐る恐る洞窟内を進んだ。そして、黒の獅子王の後方から斜め向こう側をそっと覗きこみ、目の前に飛び込んだ光景にぎよつとなつた。

アリオンは洞窟の壁を背にし、礫はらひけに遭ったかのように動くことも、喋ることすら出来なかった。

なぜアリオンがそんな状態になっているのは、すぐに分かった。

黒の獅子王の手には抜かれた剣が握られていた。

しかも、それはまっすぐアリオンに向けられている。

その切っ先は 寸分変わらずアリオンの喉笛を狙い、今にも貫か
んばかりだ。

「ならば証あかしてもらおう」

黒の獅子王の重々しくも低い声音が響いた。

「簡単なことだ。ほんの半歩ばかり前に踏み出せば、お前は確実に
死ねる。造作もない」

アリオンは喉元に突き付けられた剣の鋭い切っ先から逃れようと
ちぎれんばかりに首をのけ反らせていた。

セネカはどうすることも出来ず、ただ立ちすくむばかりだった。

「ちよつとした？意志？と、それをひねり出す？自由？。そのくら
いは、むろん 持ち合わせていよう。どうした？ アリオン。今
のはただの強がりか？」

（正気の沙汰じゃない ！！）

セネカにはワケが分からなかった。フっかけられてヤキがまわっ
たのか、売り言葉に買い言葉なのか それでも、獅子王のこの行
動はあまりにも度を超している。

父親を手につけ、悲観していたアリオンは迷わず死を選ぶ。こん
な分かり切ったことなのに、黒の獅子王はなぜそれが分からないん
だ！？ これでは何のために剣を隠してきたのか分からない！

セネカは矢も盾もたまらず、跳び出そうとした。
ところが。

（……！？ 体が 動かない！？）

セネカはなぜか一歩も前に踏み出すことが出来なかった。それど
ころか、前傾姿勢のまま体が硬直したようにぴくりとも動かなかっ
た。

まるで見えない腕に抱きすくめられたように。

黒の獅子王がさらに凄んだ。

「さあ絶つてみせい！ 運命さだめの糸を！」

セネカはいたたまれなくなり、かたく目を閉じた。

アリオンが命を絶つ瞬間など 見ていられるわけがない。

しかし。

アリオンは大きく喘ぐと、観念したようにうめき声をもらした。

うつすらと目を見開いたセネカは、黒の獅子王がアリオンに突き付けていた剣をすばやく引くのを見た。

アリオンは壁を背にしたまま、そのままずると地面に滑り落ちた。

黒の獅子王が静かに剣を鞘におさめた。

「……そういうものだ。己の自由なぞ 自由がゆえにままならぬもの」

アリオンは喉元を手で押さえ、うつむき、力なくうずくまっていた。

「私を忌み怨みうらみ、それで心を晴らすのを由よしとするかどうかは、己の胸に問うてみなさい。 いずれにせよ、自棄に陥るのはよくない。

何も変わらぬ。そればかりか、前途を閉ざすことになる。 お前にはまだ果たすべき 約束が残っておろう」

黒の獅子王がゆっくりと諭すように言葉を継いだ。

「くじけるでない、アリオン。 強うなれ。 もっともっと 強うなれ」

だしぬけに、セネカは目に見えない束縛から解かれた。

膝ががくと折れ、あやうく地面に倒れそうになるのを寸でこのころで持ちこたえた。

アリオンがうずくまりながら肩を震わせていた。

それは必死で嗚咽をこらえているようにも見えなし、忍び泣いて

いるようにも見えた。

「ここは暗くて、狭くなるしい　息がつまりそうだ。少し外の風の当たりなさい。気分も晴れよう。それに　お前の仲間たちも、お前が出てくるのを待っている」

黒の獅子王が先ほどとは打って変わった穏やかな口調で言った。

セネカはハツとなった。

自分は今、ここにいてはいけなかったのだ。もしもこの一部始終を、つぶさに見ていたことがアリオンに知れたら……。

セネカはそろそろと後ずさりした。

何としてもアリオンに見つかってはならない。

そんな気持ちに急かされ、焦ったせいか用心深く踏み出した一歩が小さなゴロ石をよけ損ねた。

体が大きく傾いだ。

その拍子にセネカは思わず「あっ！」と声を上げてしまった。

洞窟の奥でアリオンが小さく息を呑むのが分かった。セネカも反射的にそちらを振り返った。

アリオンが面をあげていた。

まっすぐにこちらを向いている。

お互いの目と目が合った。

アリオンの瞳が驚きと戸惑いに揺れ動き、そこにサツと嫌悪の色が浮かんだ。

セネカは転がるようにして洞窟を飛び出した。

呪縛のようなアリオンの視線からどのように逃れたのか、どのようにして駆け戻ったのかは良く覚えていなかったが、とにかく来た時と同じように駆け戻り、焚火を前に胡坐あぐらをかいているギドの背中に取り付いた。

ギドが振り向き、こちらを見ていることは分かっていたが、セネカはその顔をまともに見ることができなかった。セネカは後悔で打ちのめされていた。

行かなければよかった。
見なければよかった。
黒の獅子王とギドの指し示した通り、ここに止まっていればよかつたのだ。

また余計なことをしてしまった……。

これでアリオンには確実に嫌われた。セネカの心が鉛のようにずしんと落ち込んだ。

「驚かせてすまなかった」

いつの間にか黒の獅子王がセネカの面前に立っていた。

セネカは打ちひしがれながらも小さく小刻みに首を横に振った。

どうしても顔を上げることができなかった。自責の念で心がくしゃくしゃになっていた。

「時間を要するだろうが、アリオンは必ずや立ち直る。私はそう信じている。もうしばらく そっとしておこう」

黒の獅子王の言葉には強い信念がこもっていた。

ギドは「同意した」とばかりに大きくうなずいたが、セネカ無言のまま背中を丸め俯うつむいていた。

それからのち黒の獅子王は、「すぐ戻るから、皆それまではここを動かないように」と言い残して姿を消した。

残されたセネカとギドは何をするでもなく、山間を流れる風に吹かれながらぼんやりと時を過ごしていた。

焚火の熾きがぶすぶすとくすぶついていた。焙られた獲物の肉は黒く焦げつき、硬くなって金串にはりついていていた。

セネカはギドと背中合わせのまましゃがみ込み、膝を抱えていた。頭の中ではアリオンに対してどのように謝ったらいいものかと、想いをめぐらせていた。

と。

砂利を踏みしめる足音がした。

セネカがゆっくりと面をあげると、そこにはアリオンが立っ

た。

「4」

セネカはアリオンを仰ぎ見た。が　アリオンはセネカを見ていなかった。

アリオンの視線の先には、ギドの巨体の向こう側にある大ぶりのズタ袋　その際に立て掛けてある剣があった。

アリオンは何か言いたげな様子を見せたが、すぐに一旦開けかけた口をつぐみ、足早に荷のそばに歩み寄ると無言で自分の剣を取り上げた。そして鞘に付いた皮紐を腰帯に結びつけている間も、何も喋ろうとはしなかった。セネカとギドはその後ろ姿を固唾を呑んで見つめていた。

「ギド」

おもむろにアリオンが口を開いた。

不意に名を呼ばれ、ギドは打たれたように背筋がしゃんとなった。

アリオンはギドに薪を集めて来るように、命令、した。

「え……！？　って、どうしてだい？　薪なら　ほら。こんなにたくさんあるのに。それに、獅子王からもうすぐ旅に出るからって言われてるんだ。薪はもう必要ない、と……思っけど？」

セネカは、うず高く積まれた薪の山を指差しながら、ギドに代わっておずおずと答えた。薪はすべてギドが集めて来たのだ。

「聞こえないのか、ギド。薪を、集めて来るんだ」

アリオンがギドに向かって、少し語気を強めながら同じ文句を繰り返した。

アリオンは、寒いから暖をとるからだど二人に向かって、投げやり気味に主張した。

しかし、ギドからもセネカからも背を向けたままだ。目を合わせようともしない。

セネカには、アリオンがこちらの言う事に対してわざと聞こえない

いフリを決めこんでいるのは察しがついた。しかし、頑固に薪集めをさせようとするのにはなぜなのか？ セネカは首を傾げるしかなかった。

ギドが、ちらちらと振り返りながら さながら後ろ髪を引かれるような面持ちで焚き場を後にした。

その様子を横目で窺っていたアリオンは、ギドの巨体が木々の間に隠れて見えなくなるのを認めると、待ちかねたように身を翻した。

「あ……っ!？」

セネカは大腿で行きすぎるアリオンの後を慌てて追いかけた。

「ど どこに行くんだよ!? あにイったら! 待ってくれよ!」

アリオンは薪が欲しかったのではなく、ギドを遠ざけるためにひと芝居打ったのだ。

セネカの胸に落胆と困惑とが入り混じった苦々しい感情が湧いた。

「獅子王から言われてるんだ! みんな離れないで、あそこにジツとしてるようになって あにイは獅子王から聞いてなかったのかい? もお 待ってくれたら!」

セネカは、先に行くアリオンに追いつこうと必死で後を追ったが、アリオンは歩調をゆるめるどころかますます速足になっていった。セネカの呼びかけに応じる様子もない。

「僕の前でアイツの事を言うな」
ようやくアリオンが口を開いたのは焚き場からも洞窟からも遠く離れていた。

「あれこれ指図して、結局アイツは僕を思い通りにしたいだけなんだ。ふざけるな だ!」

「でも 命の恩人なんだろう? 黒の獅子王ってさ」

セネ力はすっかり息が上がっていたが、喰いつくように答えた。
先ほどのやり取りで黒の獅子王にすっかりやり込められたアリオンの気持ちは分からなくもなかったが、口出しせずにはいられなかった。

しかし、アリオンは慥然としたままきっぱりと言った。

「助けてくれと頼んだわけじゃない」

「そんな言い方……。あつ！ 待ってよ！ あにイ！」

「君はもう、戻れ。もう僕には 係わらない方がいい」

「でも……」

セネ力は、先ほど黒の獅子王が言っていたオリンポスの刺客のことを思い出した。

「やっぱり ダメだよ！ ひとりでうろろろするの！ だって、

追っ手がそこまで来てるかも知れないし それに、ここまで一緒に旅してきた仲じゃんかよオ！ つれないコト言っつなよ」

「僕はもう、ひとりで生きていくんだ」

アリオンが間髪いれず、毅然とした態度で言い放った。怒りの感情は幾分か抑え込まれていたが、相変わらずの剣幕だった。

「え……でも。人はひとりつきりじゃ生きていけないんじゃないかな」

セネ力はいつかのレダの言葉を思い出していた。

『誰も一人で生きていけっこない』

そつだ。

あの時の自分も意固地で気持ちが尖^{とが}っていて、ひとりで村を出ていくと突っ張っていたのだ。

セネ力は首元に手をやりレダからもらった飾り紐の感触を確かめると、懐かしく安堵にも似た想いに浸った。

「……君まで僕に指図する気か？」

「えっ！？ そ、そんなつもりじゃ……」

怒りの矛先が向けられ、セネカは慌てて首を振った。
アリオオンが再び地面を蹴った。
セネカもそのあとを追いかけた。

父殺しの罪でオリンポスが恐ろしい刺客を放ったことをアリオオンは知らない。

獅子王からはどこにも行かず、皆が離れないようにと念押しされていたのに、あるうことかこうしてちりぢりになっている。

今にもそのエリナントカという刺客が現れるかもしれないというのに……。

セネカはもう気が気ではなかった。

しかし、これらの状況をすべて言い尽くしても今のアリオオンが素直に聞き入れてくれかどうか疑わしい。

思い切ってセネカは発想の転換を図った。

セネカは、仲間であるギドのことを持ち出した。

「だって、ようやく会えたんだろう？ 急にいなくなったら心配するぜ？ きつと」

この作戦はすぐに効果を現した。

アリオオンの前進がぴたりと止まった。

「ギドは」

アリオオンがしばらく押し黙ったあと、自身に言い聞かせるように言葉を継いだ。

「ギドは君に遣^やる」

「……え？」

「ギドは、君にやると言ったんだ」

アリオオンはもどかしげに唸った。

「ギドは忠実な下僕だ。主^{あまじ}言^いうことは何でもきく。君ともウマが合うようだし、きつとうまくやっていけるだろう。僕は、もう誰の助けもいらぬ。ひとり生きていくんだから、もう」

突然、アリオオンの体が、前方につんのめった。

背中を思いきり突かれ、アリオンは前のめりに倒れ込みそうになるのを足を踏ん張ってこらえようとした。が、勢い余って目前の木に肩からぶつかった。

アリオンを後方から力任せに突き飛ばしたのは、セネカだった。

「な、何をするんだ！ セ」

「い　いいかげんにしろよ！！　この　わからずやつ！！」

セネカは怒り心頭で顔を上気させていた。

「なんなんだよ！　その言い草は！　アイツは物じゃないんだぜ？　ひどいじゃないか！！」

セネカは、ギドがアリオンのために甲斐甲斐しく寢床を設えたり、獲物を捕まえてきたり、慣れない薪集めに奔走しているところを思い浮かべていた。

ギドは今もアリオンの身を案じ、言いつけを忠実に守っている。

寒いから薪が欲しいというのはウソだということも知らずにと出会った仲間のために心を尽くしているのだ。それなのに。

セネカはアリオンの心無い言葉にすっかり幻滅し、憤慨していた。

「それに、ひとりで生きていくだって？　ハン！　笑わせんな！

なーんにも知らない世間知らずの山猿のクセに！」

それまで半ば呆気にとられていたアリオンの片眉がぴくりと跳ね上がった。

「なんでえなんでえ！　いつまでも穴ん中でイジイジしちゃってさ

！　この、意地っ張り！　泣き虫！！」

今度はアリオンの顔色が変わった。

「言ったな」

「ああ言ったださ！　悪いかよ。もう一回言っつてやるよ！　あにイなんてな！　わからずやで。意地っばりで。泣き虫だ！」

「なんだって！？　君こそ　君の方こそ何十回も泣いてるじゃないか！　泣き虫は君の方だ！」

「な　！？」

今度はセネカの顔色が変わる番だった。上気した顔がさらに赤く

なつた。

「おいらは何十回もなんて泣いてないからなつ！！」

セネカは 我を忘れたように食ってかかるし、アリオンもこのま
まおとなしく引きさがる気持ちは微塵もなかった。

二人はお互い険悪な顔つきで睨み合っていたが、すぐにアリオ
ンが口火を切った。

「それに 僕が世間知らずだって！？ だったらセネカ、君はな
んだ！？ 君はただのお節介だ！」

「おせっかい！？」

「そうさ！ 君はいつだってひと言多いし、いつも余計なところに
しゃしゃり出てくるじゃないか！ それに あの時。 そうだ

あの時だって 僕は一人であの村を出ていくはずだったのに君は
わざわざ引き返してした。 だから、僕は君を連れて行かなくちゃな
らなかつたんだ！」

セネカの息が一瞬、止まった。

アリオンは咄嗟に口をつぐんだが、一旦口から飛び出した言葉は
もう元には戻らなかつた。

アリオンの顔には後悔の色が浮かんでいたが、かたくなに何も言
わず、口を引き結んだまま再びそっぽを向いただけだった。

一方のセネカは、血の気の失せた顔で地面に目を落としていた。

「君は、戻れ。僕にはもう 係わらない方がいいんだ」

「……………んだよ。カツコつけて、そんなキレイごとばつか並べちゃっ
てさ…………。なんだかんだ言っただって、結局…………おいらのこと、足手
まといつて思ってるだけじゃないか」

セネカは表情は硬いままだった。

「ハッキリ言っちゃえばいいじゃんかよ。足手まといだって。 あん
時は、お情け、だったんだ って。 どうせ…………んなこと…………とっ
くに分かつてたけど…………さ」

独り言のようなつぶやきしかもらすことが出来なかった。

これまでのアリオンの優しい態度や言葉かけの裏に『お節介なヤツ』という気持ちが含まれていたのかと思うと、セネ力は落ち込まずにはいられなかった。

胸の奥から熱い塊がこみ上げ、目の前がぼんやりと霞んできた。

セネ力は慌ててギョツと目を閉じた。

しかし、その意に反して瞳の奥から涙が湧き出し、今にも目蓋の隙間からあふれ出しそうだった。

セネ力は激しくかぶりを振りたてた。

こんなヤツの目の前で涙を見せるなんて　死んでも出来るもんか！　絶対に　！

セネ力は歯を食いしばった。胸が押しつぶされそうに苦しかった。

「お　おせっかいで　悪かったな。こっちだって　こっちだってお願い下げだ。誰が　お前みたいなヤツに、ついて行ってやるもんか！」

セネ力は喉のつかえを呑み下しながら、声の限り叫んだ。

その時　。

アリオンのハツと面を上げた。

いつのまにか周囲の空気は異様なまでに張りつめていた。木々のざわめきや、そよぐ風の流れもぴたりと途絶えている。

アリオンは全神経を集中させて辺りを窺っていた。

セネ力は　それまでの気持ちの昂りが一気に緊張感へと変わっていくのを感じていた。

何か　得体のしれない気配が　一帯を包んでいる。

しかし、それが何なのか　？　セネ力には皆目見当もつかなかった。

うつたえながら、きよろきよろと周囲を見渡すセネ力をアリオンの手が制した。

「動くな、セネ力。近く　に誰がいる」

「え？ 誰か……っ て、誰？」

「シッ！ 静かに」

アリオンはほとんど唇を動かさずに答えた。その声は鋭く、ほとんど囁くようだった。

ある一点を凝視したまま、身じろぎもせずに行ったアリオンの前方に、？それ？は姿を現した。

ごつごつとした細い山道がやや開拓けた場所の、木立と茂みの奥からだ。

？それ？はまるで空中から染み出るように、音もなく出現した。

見間違いではない。

人だ。

？それ？は人の形をしており、頭からすっぽりと丈の長い衣を羽織っていた。

その身にまとった暗黒色の長衣はくるぶしにまで届くほどの丈で、頭巾のように被っている衣の奥　顔面を覆う襜ひだの奥からは不気味に光を宿す両眼が見えるものの、その表情はうかがい知ることが出来なかった。

一見、まるで影のようにゆらりと佇たたずむその様子はあまりにも無防備だった。

事実？それ？は剣を携えていなかったし、武器も何一つ持っていない。

だがしかし、相手は丸腰のはずなのに、？それ？の全身からは強く、そして得体のしれないほどの重苦しい威圧感が迫ってくるようで、セネカは思わず後ずさりした。

「さがっている、セネカ」

アリオンが剣の柄を握る手に力を込めた。

「どこかに隠れているんだ。絶対に、出てくるな」

突然、何の前触れもなく？それ？が動いた。

と、同時にアリオンが剣を鞘から抜き払っていた。

向かって来る？それ？の懐に飛び込むほどの勢いで、アリオンはまっすぐに突っ込んでいった。

振るった太刀筋には何の躊躇いも迷いもない。

瞬く間の出来事だった。

かわす間もなく、まともにもその鋭い太刀先を受けとめた？それ？は、アリオンによって無残にも一刀両断される　はずだった。ところか　。

剣が手ごたえを得られぬまま大きく空振りし、アリオンの上半身が前方に大きく泳いだ。

セネカはアリオンと同様に大きく息を呑んだ。

？それ？がない。

消えた　？　いや、違う。

アリオンが、愕然としながらも斜向かいにそそり立つ岩場の尖端きつりつに屹立きつりつしている？それ？を確認した。

あたかも最初からそこに立っていたかのように？それ？は静かに佇んでいた。

「だ　誰だ！？」

アリオンは振り返り、剣を構え直した。その声は明らかに狼狽し、上ずっていた。

「名まえを言え！　僕にいったい何の用だ！！」

？それ？がゆっくりと口を開いた。

「エリヌース」

「……エリヌース？」

アリオンが怪訝そうに眉をひそめた。

（エリヌース！　エリヌース　だって！？）

セネカは全身に冷水を浴びたような気持ちになった。

最悪の事態だった。

今、対峙しているのは、あの黒の獅子王までもが警戒し、懼おそれていた最も出会いたくない相手だ！

「そう　エリヌース。法の下僕だ。お前がアリオンか　」

エリヌースが低く無機質な口調で続けた。

「お前が間違いなくアリオンであるならば　。神聖なる法の禁忌

を犯した者として、ポセイドンの子　アリオン。お前を裁きの岸へ、連れて行く」

「裁きの……岸？　そうか」

アリオンが何か思いついたように、ふんと鼻を鳴らした。

「オリンポスの　ゼウスの手下だな？　なら、何も怖くないぞ！」
アリオンの態度があからさまに挑発的になった。

「あんな腰ぬけに僕を裁くことなんてできるものか！　三下め！

連れて行けるものなら、さあ！　連れて行ってみる！！」

しばし、不気味な沈黙が流れた。

頭巾の奥、エリヌースの口元がわずかに歪んだような気がしたが、セネカには聞き取ることが出来なかった。

出しぬけに　。

アリオンの体が弾き飛ばされた。まるで何かの衝撃を受け止めたかのように　。

体勢を立て直す間もない。

アリオンの体は弧を描きながら大きく後方にのけぞり、そのまま背中から地面に倒れ込んだ。

あつという間の出来事だった。

セネカは咄嗟にエリヌースを見た。

纏っている衣の袖口からは、しなやかな手首と長い指が垣間見れたが、それだけだ。

道具は何一つ使っていない。強いて言えばエリヌースは腕を軽く振り立てた　たったそれだけだ。

我に返ったアリオンが毒づきながらその身を起こそうとしていた。驚いたことに　アリオンは、体中の至るところから出血していた。

顔面から腕、脚といった全身の皮膚という皮膚にはおびただしい数の傷が切り刻まれ、血が吹き出している。

セネカは戦慄のあまり体が硬くこわばった。

『エリヌースは強力な幻術を使う。恐ろしく、そして手ごわい相手だ。狙いはアリオン』

黒の獅子王の言葉が頭の中をこだました。

勝てない。エリヌースが相手では勝つ見込みすらない！

突然、肉を切り裂くような鈍い音がセネカの耳朵を打った。

アリオンが再びエリヌースに剣を振るうべく、立ち上がった直後だ。

鮮血が飛び散った。

アリオンは左腕で腹部をかばい、信じられないといった形相で目を見開いていた。

しっかりと地を踏みしめていたアリオンの両足ががくがくと揺らぎ、その右手から剣の柄が滑り落ちた。

押さえ込んだ腕と腹部の隙間からは血が滲み出し、みるみるうちに衣服を真っ赤に染めていった。

アリオンは幻術によって腹をかき斬られたに違いなかった。

『エリヌースは強力な幻術を……』

セネカの頭の中に、また黒の獅子王の忠告がよぎった。

これが幻術？

指一本すら触れずに？

エリヌースは腕を軽く振り上げ、空を払うような仕草をして見せた。ただただだ。

ただそれだけなのに。

体中から血を流しながらアリオンは深くうずくまり、虚ろに目をむいた後、ぱったりと前のめりにくず折れた。

気がつくのと、セネカはアリオンに駆け寄っていた。

「絶対に出てくるな」というアリオンの忠告はとうの昔に消し飛んでいた。

アリオンは、目を閉じ、喘ぎながらも小さく肩で息をしていた。虫の息ではあったが生きている。

「何だ、お前は 退^どけ」

冷たく抑揚のない声が響いた。

声の主はエリヌースだ。

セネカの頭の中は真っ白だった。

耳元ではどくどくと心臓が脈打つのが聞こえていたし、鋼が擦りあうような嫌な耳鳴りもしていた。

血まみれで倒れ伏すアリオンを目の当たりにしたショックで忘我の境地に陥っていたが、セネカは立ち上がるや否や、エリヌースと対峙するかのように向き合った。

頭で考えていたわけではない。体がそのように動いてしまったのだ。

お節介だと言われても無謀とも思われても仕方が無い。制御も制止もままならない、どうしようもないことだった。

身体から湧き出す本能に突き動かされるまま、セネカはアリオンの前に立ちはだかった。

両腕を大きく広げて仁王立ちになったセネカを見下すようにエリヌースが小さく肩をそびやかした。

「ど どくもんか!!」

セネカはありったけの大声で怒鳴り返した。

「なんでえなんぞえ！ 陰気くさくて薄汚い、コソ泥みたいな？ なり？ しゃがつて！ 下手なマヤカシなんか使わないで、正々堂々と剣で真っ向勝負しろつてんだ！！ このインチキ野郎め！！ 汚いぞ!!」

エリヌースの体がふわりと浮きあがった。

かと思うと、佇んでいた岩場から音もなく砂利道へと着地した。

セネカとの距離がぐんと縮まった。

その距離は　まとった衣の奥にある皮膚のくすんだ色合いや、頭巾の頭飾りに施された蛇の彫り物が克明に確認できるまでに、だ。セネカは恐怖のあまり両手が白くなるほど強く拳を握り締めていた。

「ち、近寄るな！

あ、あっちに行け！

こっちにく、くる　なあ　ああ　！！」

叫びながらセネカは頭の前からつま先まで、凍えたかのように震えていた。

エリヌースから発せられる重々しく冷酷な気配に芯から怯えていた。

歯の根はまったく噛み合わず、がちがちと音を立て、叫び声はやがてワケの分からないわめき声となった。

セネカは半狂乱となり、喉をからし、立て続けに叫び続けた。

「黙れ」

エリヌースの掌がゆっくりとセネカに向けられた。

「邪魔だ」

頭巾の襷の奥からぞつとするほど低く冷淡な声が発せられたその刹那　まるで雷光のような強烈な光がエリヌースの掌からほとばしった。

それは矢のように真っすぐ飛び、狙いたがわずセネカにぶつかった。

光の束を正面でまともに受け止めたセネカは大きく後方へ弾き飛ばされた。

そして、それきり、何もかも分からなくなった。

「5」（後書き）

アクセスありがとうございます。

第十八章『諍い』ようやく終了いたしました。

アリオンと黒の獅子王との諍い。そして、セネカとアリオンとの諍い。

特に後者は前々から書きたくてたまらない部分だったりします。

セネカにはココのところ突っ込んでもらわなくちゃ、とか、ココに強く反応してほしい。とか。

一方のアリオンにはコレを言ってもらいたいし、コレは言ってもらいたくない。などなど…。

どっぷりと作者の思惑に満ち満ちた諍いでしたが、なんとか形になったようです。

更新頻度はは相変わらず不定期です。

ペースアップは是非とも図りたいところなのではありますが…。

気長にお付き合いただけましたら幸いです。

次の章は『潰えた約束』（仮題）です。

すべてが一瞬の出来事だった。

目が眩むほどの閃光に包まれた次の瞬間、セネカは、まるで熱く焼けた鉛の玉を体全体で受けとめたような凄まじい衝撃を受けた。

しかし、それも一刻の間。

次に気が付いた時には、痺れるような、麻痺したような、曖昧で弱々しい感覚が身体中を覆っていた。

痛みも熱さも感じない。あるのは不可思議極まりない浮遊感のみだ。

セネカはおそろおそろ目蓋まぶたを開いた。

うつすらと見開かれた目前には、暗く淀む塊があった。

成されるがままセネカはそれに吸い寄せられた。あつという間もない。

出し抜けに浮遊感が無くなったと同時に、セネカはものすごい速さで落ちていった。

辺りは漆黒だった。

目を開けているのか閉じているのかも分からないほどの暗闇

そんな中を、セネカは見えない力に手繰り寄せられるかのように落ちていった。

いや、もしかしたら、上昇していたのかもしれないし、流されていたのかもしれない。

どちらが上で、どちらが下という感覚はおろか、自分の身がそこに存在しているのかさえも分からない。

頭の中が恐れと不安で真っ白になった。しかし、セネカは目に見えない奔流に揉まれ流されながらも、身を委ねるしかなかった。

加速がゆるんだ。

それまでの疾走感から、まるでゆらゆらと水の中を漂っているようなゆるやかな感覚へと変わっていき、やがて　　ふわりと着地した。

足が地についているような感触だったが、実際に地面があるのかどうか分からない。しかし、浮いているわけでもない。

不思議だけど心地よい。

周りの空間はあたたかく、柔らかな光で満たされていた。

セネカはその光の中にいた。

辺り一面が野原のように平たく拓けていた。

ここは、どこ　　？

セネカはぐるりと周囲を見渡した。

景色は一変していた。辺り一面が光の野だ。

ごつごつとした岩場も、なだらかに傾斜した山道も、そこを覆う石くれや雑草もない。茂みや木立ちのざわめきも聞こえない。風の臭いもしない。

まるでびたりと時が止まったかのようにだった。

聞こえるのは自分の息遣いだけ　　周りはやわらかな光と静寂に包まれていた。

エリヌース攻撃でどこか見知らぬ場所に吹き飛ばされたのだろうか？　セネカの胸にじわりと恐怖が湧き起ったが、不気味な頭巾姿の人影はおるか、地べたに倒れ伏したアリオンの姿もない。

セネカは一人っきりで立ち尽くし、途方に暮れた。

不意に、誰かに名前を呼ばれたような気がした。

セネカは視線を巡らせた。

川らしき流れがあった。

優しい光を放つ帯のような流れの向こう側に、おぼろ気に佇むのは……。

玉　　？

そう。それは、まるで泡沫うたかたのように淡く儂はかなげな大きな玉だった。セネカは小さく息を呑み、目を凝らした。その玉がみるみる形を変えていったからだ。

玉は幻影のように揺らぎながら、やがて人の形になった。ぼやけていた輪郭がはつきりと人の様相を成していく。

誰、だろう？

セネカはぼんやりと考えた。

姿を現したのは、見知らぬ女性だった。

しかし、知らない人なのに、どこか懐かしい　なぜだか判らなかつたが、とても懐かしい気がした。

どこかで見えたことがあるような……。どことなく誰かに似ているような……。

我を忘れてジツ見つめるセネカに向かい、女性がにっこりと笑いかけた。セネカはどきりとした。

その優しく親しみ深い微笑みに安心感を抱いたものの、心が妙にひっかかった。

やはりどこかで会ったことがある　そんな気がしてならなかつた。

いったいどこで出会ったんだろう　？　どこで　？　いつ……？

「セネカ」

！？

セネカは驚いた。

その人はセネカの本当の名前を知っていた。
なぜ！？　どうして　？

セネカは思わず一歩足を踏み出し、その人に近づこうとした。しかし、ゆらめく川面かわもが行く手を阻んだ。

セネカはどうしても向こう側へ行きたかった。

なので、意を決して河岸に向かって足を一歩踏み出そうとした。

その時。

「セナ。ダメよ」

いたずらっ子をたしなめるような口調で、その人が言った。

どうしてダメなの？　どうして？　どうして　その名前を知

ってるの　！？

セネカは噛み付くようにたずねた。

すると。

「ここは渡れないよ。それに、お前はまだここへ来てはいけない」

聞き覚えのある声が響いた。

穏やかだが力強い声。

向こう岸にいる女性の隣には、新たな玉が現れていた。声の主は

その玉だ。

やがて玉が人の形になった。男性の姿だ。

セネカは驚きのあまり大きく息を呑んだ。

父ちゃん　！

現れた男性は紛れもない。セネカの父親、ムラトスだった。

なぜ？　父ちゃんが、なぜ　？

セネカ動揺のあまり、その場に棒立ちになった。凍り付いたように動けない。

ムラトスがゆっくりと口を開いた。

「セナ。お前に言わんといかんことがある」

ムラトスはふつと顔を曇らせたあと、きっぱりとした口調で言っ

た「すまなかった」

？

セネカは両目をぱちくりと瞬かせた。

「お前にはずつと辛い思いをさせてしまっていたようだ」

ムラトスは物憂げな面持ちで小さくうなだれた。

「すまなかった」

悲しげな様子で謝るのムラトスの傍らに、先ほどの女性がそつと

寄り添った。

なんで？　なんで父ちゃんはそんなに悲しい顔をするの？

ああ……そうか。

セネカは思い出した。ムラトスが時折、自分に対してぞんざいな態度を取ったり、冷たくあしらったりした時のことを。

「そんな……。全然だよ。辛い思いなんてしたこともないさ。だから　そんな悲しい顔、しないでよ！」

セネカの言葉に打たれたように、ムラトスが面をあげた。

その顔にはやわらかな安堵の笑みが浮かんでいた。

隣にいる女性も、にこやかに微笑んでいた。

二人の様子を見ていたセネカの胸には、えも言われぬ切ない感情が湧き出していた。

「よかった。父ちゃんもセナも。二人とも、わだかまりが無くなっ
たみたい」

背後から声が聞こえた。セネカはハツとなって振り返った。い

つの間にか、また、別の玉が現れていた。

玉は霞かすみがかかったように鈍く朧おぼろに光を放っている。

セネカは凝然と立ち尽くしたまま、その玉が人の形に変わっていきのを見つめていた。

しかし、セネカには声が聞こえた時からそれが誰なのかが分かっていた。

やがて、優しい眼差しを浮かべた一人の娘が浮き上がるように姿を現した。

やっぱり　！

現れたのは姉のシンシアだった。

姉ちゃん？　姉ちゃん、なの？

セネカは震える声でたずねた。

「そうだよ。セナ。私のこと、忘れちゃったのかい？」

シンシアが悪戯っぽく笑いかけた。

セネカは大急ぎで首を横に振った。しかし、心の中は驚きと困惑とでかき乱れていた。

信じがたかった。まさか、こんなところで姉と出会うなんて……。

セネカは次の言葉を完全に失っていた。

「私はね」

シンシアが、まるで自分自身に語りかけるかのように言った。

「いつも思ってたんだよ。父ちゃんはいつもあんなだけ可愛がってるって。だから私は、昔からあんなのことを羨ましいって思ってた」

途端にセネカは言葉を取り戻した。

そんなこと　！　ないよ　！　父ちゃんはいつも姉ちゃんのことを一番にかわいがっていたさ　！　うらやましいと思ってたのはこつちだよ　！　だって、だって。

セネカは黙っていられなかった。しかし、気持ちが急くあまり、言葉がうまく繋がらない。

シンシアはしばらくの間セネカをじつと見据えていたが、やがてしたり顔でくすつと含み笑いを浮かべた。

「あんたの言いたい事は分かってる。でもね、私も父ちゃんからは『お前は姉さんなんだからもつとしっかりしろ』とか、いろいろ言われてたんだよ？　あんたが水桶にはまって溺れかけた時なんか、私がひどく叱られたもんさ」

水桶で　？　覚えてない……。

「あんたがまだ小さい時の事だよ。父ちゃんったら『なんで面倒をみててやらなかったんだ』ってね。でも」

シンシアは諭すような口調で続けた。

「父ちゃんは私たち二人を同じように可愛がってた。私たち二人を平等に扱ってたんだって、判ったんだ。それに、ひどく叱ったことも、謝ってくれたよ。父ちゃんはあるがもう少しで溺れ死ぬところだったから、動揺してたんだって」

セネカは、シンシアが真っすぐ目と目を合わせるのを、まばたきするの忘れて見つめ返した。

それまで父に対して抱いていた懐疑的な想いが、音をたてて氷解していくようだった。

「私たちお互いさまだったんだ。なんだか、おかしいね」

シンシアがくすくすと笑った。

セネカも笑みをこしらえようとしたが、心から笑うことはどうしても出来なかった。

川の向こう岸に目をやると、ムラトスも隣にいる女性も慈しみを込めた眼差しを向けて微笑んでいるのが見えた。

「戻りなさい」

彼方側からムラトスが言った。「ここはお前にはまだ早すぎる」

隣にいた女性がいとおしげに手を振った。

二人の輪郭が次第にぼやけ、やがてその姿は幻影のようにゆらめきながら二つの玉に戻っていった。そして、光の中に融け込み、消えた。

セネカは茫然としながらも、その様子を食い入るように見つめていた。

「行こう」シンシアが静かに促した。「近くまで送ってあげるから」

セネカは言われるがまま、シンシアが差し出した手をそうつと握りしめた。

姉妹はしばらくの間、手と手をつなぎながら歩いた。

お互いが無言だった。が、とうとうセネカがためらいがちに口を開いた。

姉ちゃん。

「なんだい？ セナ」

さっきの 父ちゃんの隣にいた女の人。あれ、もしかして……？

セネカは口にするのを迷った。しかし、心の奥底では確信していた。

あの人、もしかして……か、かあちゃん……なの？

シンシアが微笑みながらこっくりと頷いた。

「そうだよ。あの人は、私たちの母ちゃんだ」

セネカは複雑な面持ちのまま、ぼうつと先ほどの女性の顔を思い浮かべていた。

わかっていたのに、なぜ呼んであげなかったんだろう。『かあちゃん』って。

セネカは後悔と切なさで胸がぎゅっと締め付けられた。

どれくらい歩いただろうか。

二人は地面がうつすらと明暗が別れている野原にいた。

「お行き」

シンシアが言った。「ここでお別れだよ」

……姉ちゃんは？

セネカがたずねた。

姉ちゃんはどこに行くの？

「私は、彼方側あつちに行かないといけないんだよ」

あちら側……って。さっきの川みたいなところの向こう側？

セネカの問いに、シンシアがふと寂しげに目を伏せた。が、やがて小さく頷き、それに答えた。

そんな。ずるいよ！

セネカは叫んだ。

「ずるい？」

そうだよ！ 姉ちゃんだけ父ちゃんと……か、かあちゃんのとこに行くなんて、ずるい！ セナも行く……！！

「わがママを言うんじゃないよ。セナ」

シンシアは一瞬、困ったような様子を見せたが、諭すように言った。

「父ちゃんも言っただろう？ あんたにはまだ早すぎるって。それに……ほら。お迎えだよ」

え　！？　お迎え　？

セネ力はぎくりとして振り返った。

後方　明るさと暗さの境界線の辺りに、煙るように佇む黒い影があった。

セネ力にはそれが誰なのか、すぐに判った。

じゃ、姉ちゃんも一緒に行こうよ！　ね！　ね　！

これ以上の名案はない。セネ力は必死になってシンシアの腕に絡みついた。

シンシアは、暗く哀しげな面持ちで深くうなだれた。

「私は……もう、行けない。もう、戻れないんだよ」

なんで　？　どうして　？

「天命……だったのさ。でもね、あんたは違う。戻ることができる。だから　」

シンシアはきっぱりと言った。

「だから、あんたは還^{かえ}るんだよ。セナ」

いやだ　！

セネ力は一段と大きな声を張り上げた。

いやだったら、イヤだ　！　絶対にイヤだ　！！

「私はいつでもあんたのこと、見守ってるよ。ずっとね。それに私だけじゃない。父ちゃんも母ちゃんもだ。いつでもあんたのこと見守ってる」

シンシアは昂ぶるセネ力を落ち着かせるように、妹の両肩に手をかけた。屈み込み、その健気な眼差しをまっすぐ見つめた。

「それに　あの人。優しい人じゃないか。私には分かるよ。あの人はあんたのこと、すごく大切に思っているし、無事に送り届けてくれる」

シンシアがふっと目を逸らせた。セネ力はその視線を辿った。視線の先にある黒い影は、静かに佇んでいた。

セネカの両肩からシンシアの手が離れた。

あ……！！ 姉ちゃん！ 待って ！

しかしシンシアの姿は、またたく間に光る玉へと戻っていった。

待って ！ 待ってよ ！！

セネカは追いかけて捕まえようと手を伸ばしたが、玉はするりとその脇をすり抜けた。

やがて玉はふわりと空に舞い上がり、融けるようにしていなくなつた。

あとに残つたのは、ぽつんと立ちすくむセネカと、一体の黒い影。

セネカは恐る恐る首をめぐらせた。

黒い影は、やはり微動だにせず、そこにいた。こちらに近寄りこともなく、静かに、そつと佇んでいた。

い、いやだ。

セネカはじりじりと後ずさりした。

かえるもんか！ ゼツタイにかえるもんか ！！

喉を振り絞つて力の限りそう叫ぶと、セネカは踵を返し、逃げるようにその場から駆け出した。

「2」

セネ力は必死に駆けた。

駆けながら何度も後ろを振り返った。

黒い影はどこにもいない。

しかし、セネ力はその足をゆるめようとしなかった。

黒い影はついて来ている　そう感じたからだ。

目の前は相変わらず拓けた光の野が続いていた。

セネ力は先ほどの川を目指して走り続けたが、川はどうしても見づからなかった。

もしかしたら同じところをぐるぐる回っているのかもしれない、とセネ力は心配になった。

でも、立ち止まったら引き戻される　。イヤだ！　そんなの絶対にイヤだ　！

頭の中では焦りと不安と恐れとが一緒くたになり、何が何だか分からなくなった。

それでも、がむしゃらに、黒い影から逃れるかのようにセネ力は疾駆した。

突然　。

「セネ力！」

えっ　！？

名前を呼ばれた、と同時に、目の前に光の玉が現れた。

たたらを踏んで立ち止まろうとしたが間に合わない。セネ力は勢い余って玉の中に飛び込んだ。

「おお　やれやれ。元気な子じゃ」

セネ力は誰かの腕に抱きとめられていた。しかも、それは知らない

い人ではない。小さいけれどあたたかくて懐かしい感触。

「久しぶりじゃのお。セネカや？」

セネカの心臓がどきりと一つ大きく跳ねた。それは確かに聞き覚えのある声だった。しわがれていたものの、凜として張りのある声音。

「どれ、顔をあげてごらん」

ああ……。

嬉しさがこみ上げ、喉がぐっと詰まった。

面を上げると、そこには小さな老婆の顔があった。

「ばあちゃん……ルイザはあちゃん！」

喜びと安堵と昂りの感情が一気に噴き出した。

ルイザの胸に埋もれながら、セネカは声をあげて泣いた。

「これこれ、泣かずともよい。さあ、よおく顔を見せておくれ」

ルイザは泣きじゃくるセネカの頭を一しきり撫でたあと、泣きぬれうつむく顔に両手を添えて優しく持ち上げた。

「ほお？ ちいと器量良しになったかの？ それに、背も……少し伸びたようじゃ」

ルイザは、しゃくりあげるセネカを一通り眺めたあと、慈しみを込めた笑みを浮かべた。

「ばあちゃん……ねえ、ここは……どこなの？ ここは……夢の中なの？」

セネカは声を詰まらせながらたずねた。

「んん？ ここか？ ここはな。……黄泉よみ。黄泉よみのくにじゃ」

ヨミ……ノクニ？

「そうじゃ」

ルイザはしっかりと頷いた。セネカは喉をひくつかせながらも涙をぬぐった。

ヨミノクニ って、いったいどこ？ どういうところなの？

「ふむ……。わしの見たて通りじゃな。よおく似合っておる」

ルイザはセネカの問いに答えなかった。その代わりにセネカが肩かけのように羽織った朱色の更紗布を懐かしそうに撫でた。

「ほう　これは、レダの手製の組み紐じゃな？　それに　お前は皆に大切にされておるようだ。ふむ……何よりじゃ」

ルイザは感慨深げに、セネカのなりを見渡していた。

セネカは、自分の首元に結ばれているレダの飾り紐に触れたあと、右腕に巻かれた包帯に目を移した。黒の獅子王に手当てをしてもらった跡だ。

……戻らないから。おいらは絶対に戻らないから　。ばあちゃん
と、ずっとここにいます　！

セネカは、ルイザがこのあと何を言い出すのかは見越し、決然として言い放った。

それに　ここには姉ちゃんも父ちゃんも　かあちゃんもいる

！　だから　だから、絶対に戻らない　！！

セネカの強固な態度にルイザは小さく肩をすくめた。

「ふむ……。確かにここはいいところじゃ。平和で、争いごともない。皆が穏やかで安泰に暮らしておる。病気やけがもないし、気候も暑すぎず寒すぎず、丁度いいあんばいで言う事なしじゃ。だがな

ルイザがややうんざりしたように言葉を継いだ。

「だが　ここは、退屈じゃ。ひどくつまらん。こんなところにおつても

つまらなくてもいい　！　タイクツだつてかまうもんか　！

ルイザの勿体ぶつた物言いを遮るようにセネカが叫んだ。

父ちゃんも姉ちゃんもなんで　なんで同じことを言うんだよ！
ばあちゃんも同じなの？　ばあちゃんもおいらのこと、追い返したいの！？　そんなにおいらのことが嫌いな　！？

ルイザはセネカが一息つくのを待ってから静かに答えた。

「誰もお前のことが嫌いで言うてるのではないぞ？　皆、お前のことがかわいいからこそ言うのじゃ。むろん、わしもそうじゃよ」

でも　でも　。

「お前は、本当に自分が親たちから嫌われると思っているのかね？　んん？　ここはどう思っている？」

言いながらルイザは、突き出した人差指でセネカの胸元をとんとんと叩いた。

セネカは口をつぐみ、訴えかけるような眼差しでルイザを見つめたあと、ふっと自分の胸元に視線を落とした。

口を引き結び黙りこくるセネカを、ルイザは満足気な表情で見つめた。そして、きっぱりと言った。

「^{かえ}還りなさい」

セネカは無言のまま身じろぎもしなかった。

「決めるのはお前だぞよ。それに、ほれ　」ルイザは小さく顎をしゃくった。

セネカはルイザが指し示す方向に視線を移すと、先ほどの黒い影がゆらりと佇んでいた……。

「あの方について行きなさい。優しく強いお方じゃ。お前を無事に還してくれようぞ」

ルイザの言葉を聞きながら、セネカは落胆のあまり全身から力が抜けていくような気がした。

もう、これ以上ここにはいられない。逃げることもできない。せつかく会えた皆と、また、別れなければならぬ……。

視界がじわりと霞^{かす}んだ。こんな悲しい事はなかった。

セネカは力なくうつむき、両目を閉じた。まぶたの間からは涙の粒がいくつもいくつもこぼれ落ちた。

「セネカ、お聞き」ルイザが言った。

「ここにはあの若者はおらん」

セネカは弾かれたように面を上げた。涙はぴたりと止まっていた。えっ！？　あ、あの……若者……って　？

「ほれ。あの　黒髪に、青い瞳の若者じゃ。まつすぐな瞳をしたあの若者じゃよ」

「ばあちゃん　ど、どうして、あにイのこと、知ってるの　！？
「それはな、お前をずっと見守っていたからじゃよ。ずーっと、な」

ルイザは、うろたえるセネカの頭を優しく撫でたあと、もう一度言った。

「あの若者はここにはおらん」
「いない？　ここには……いない……」。

ルイザは笑顔でうんうんと何度もうなずいたあと、夢心地のように呆然としているセネカに向かって言った。

「好いとるのであるう？　あの若者を」
えっ　？　す……す　？

「お前も一人のおなごとして、愛いとしいと思える人ができたか　うむ。喜ばしいことじゃ」
い……いとしい　？

頭の中がのぼせ上ったようにぼうつとなった。

ルイザはにこにここと笑みを浮かべながら、セネカの背中をそっと押した。

ルイザに促され、まるで夢遊病にかかったかのようにふらつきながら、セネカはようやく一歩を踏み出した。が、しかし、すぐにはたと立ち止まった。

でも、ばあちゃん……おいら怖いよ　。　だって……だって、真っ暗で、まるでどっかに落ちていくみたいで　。

「なんの。怖かったら目をつむっておればいいではないか」

ルイザが事もなげに言った。「あつという間じゃよ。来た時とおんなじじゃ」

セネカは再び歩み出すしかなかった。それでも、心に巢食っていた葛藤と不安はきれいに拭われていた。

セネカの気持ちは既に決まっていた。

一步。また一步。

三步あゆみを進めたところで、黒い影がふわりとセネカを包み込んだ。

不思議と懼れはなかった。やさしくあたたかな気配が身体全体を覆い、心にまで沁み込んだ

影に抱きとめられたセネカは安らかに身を委ね、目を閉じた。耳元でごうと風の唸るような音がした。

セネカは闇の中を疾走していた。

その速度といたら 固く目を閉じていても怖くて目を開けられないほどだった。

セネカは自らを庇うように身を縮めたが、身体は震えはおさまらなかつた。

過ぎて行く時間も永遠に続くのかと思われるほど永い。今度は逆に目を閉じているのも恐ろしくなった。

たまらずセネカは怖々と目を開いた。

その時。

地面の上に横たわり、土気色の顔をした自分自身の姿を、見たよ
うな気がした。

そして、セネカは覚醒した。

まず木々の間から漏れる光芒が目の中に飛び込んできた。

一瞬、視界が真っ白に染まった。

しかし、やがてそれも次第に薄れ、ぼんやりと霞む辺りの景色が
徐々に焦点を結んでいった。

セネカはそのあまりの眩さに二つ三つ、目を瞬かせた。
すぐそばで誰かが自分の名前を呼んだような気がした。

セネカは視線をゆっくりと泳がせた。

声が聞こえたのではない。

あたたかで優しく、力強い気配が感じられたのだ。

セネ力はまるで水中に潜っている時のように耳が塞がれ、何も聞き取ることが出来なかった。

耳ばかりではない。

目以外の体中の感覚がすっかり失せてしまったかのように何も感じなかったし、指一本さえ動かすことが出来なかった。

呼吸をしているのかさえも分からない。

ただ視界から飛び込んでくる明るい情景だけが、心の支えとなっていた。

セネ力は名を呼ばれたと思われる方へと視線を動かした。

人影があった。

黒髪に、紺青の瞳の少年。

セネ力はその青い瞳の持ち主が誰なのかをはっきり思い出した。

少年の両目からきらりと光るものが頬をつたって流れ落ちた。

涙？

セネ力は不思議なものを見ているような気持ちだった。

思考がうまく働かない。歯がゆく、もどかしい。

少年が口を開いた。

何かを言っているようだったが、セネ力には何も聞こえなかった。

誰かと話している。何を話してるんだろう？

セネ力はまた唯一動かせる瞳だけを反対方向に向けた。

そこにはごわごわの頭髪を生やした緑色の肌の三つ目の巨体の姿があった。

違う。

少年と話しているのは別の人物に違いないと思い、セネ力はまた瞳をぐるりと移動させた。

すると、ふいに視界を何かが横切った。

人の手だ。

大きくて温かそうな手が、セネ力の額の上に翳かざされていたのだ。

その手がゆつくりと視界から消えた。
間髪入れずに、すさまじい衝撃がセネ力を襲った。

一瞬、自分の体がバラバラに砕け散ったに違いないと思った。それほど耐えがたい苦痛だった。

セネ力はたまらず悲鳴をあげた。

激しい耳鳴りと、脳天がかち割られたと思うほどの酷い頭痛でも開けられない。

体は、まるで内側から炎で炙られたかのようなようだった。熱い！

内臓が熱気で焼き尽くされるような恐ろしい感覚から逃れようと、セネ力は泣き叫びながら地面をごろごろとのたうち回った。

遠くでアリオンの声が聞こえたような気がした。

しかし、耳鳴りが邪魔をするのでよく聞こえない。

今度は別の声が出た。その低く凜とした声色は鮮明にセネ力の耳に届いた。

「先ほどまで骸だった肉体に五感の感覚が一気に戻ったのだ。可哀想だが」

むくろ？

どういうことだろう？ 自分は一体どうなったのだろう？

ぜいぜいと喘ぎ、歯を食いしばりながら、セネ力はようやくすらすらと目蓋を押し開けた。

セネ力が地面に這いつくばっている場所から少し離れて、二つの人影が立っていた。

そのうちの一人が、ゆつくりと背を向けた。

行ってしまっ！

セネ力はあらん限りの声で叫んだ。

「獅子王！！」

黒の獅子王が立ち止まった。

セネカは獅子王に聞きたいことがあった。だからどうしても引き留めなければならなかった。

「ね　獅子王　。さっきの……あれ……あれは　何だったの？」

喉は干上がったようにカラカラだったし、かすれた声を絞り出す度に刺すように痛んだ。しかし、セネカは構わず言葉を続けた。

「ヨミノクニって　何？　ヨミノクニって　さっき。ばあちゃんも言ってた……それ、それって、なんなんだよ。教えてよ！」

これだけ言ってしまうと、地べたにうずくまった。苦痛に押し潰され、今にも気が遠くなりそうだった。

しばらくすると、黒の獅子王の声が静かに響いた。

「黄泉よみのくにとは　死んだ者の魂がいるところ。すなわち、あの世のことだ」

あの世　。死んだ者の魂がいるところ　。

セネカはその言葉と、その言葉の意味を呑み込んだ。

「あの世……。それじゃ」

ルイザと、父親と、母親の面影が順々にセネカの脳裏に浮かんだ。そして、最後にシンシアの顔が浮かんだ時　セネカは身体中の

力がみるみる失せていくのを感じ、だらりとその場にくず折れた。

「2」（後書き）

アクセスありがとうございます。

2カ月も更新が滞ってしまい申し訳ありませんでした。m（――）

m<

今回は、予告タイトルから変更し『ヨミノクニ』としました。

『潰えた約束』は、次の第20章でお送りいたします。

記録を見てみると…今年の2/3には前半部分のプロット完成、とあります。

後半のプロットも3月の第二週目には書きあがってたみたい。

それがようやく昨夜&本日の更新となりました。

オリジナル色がかなり濃いですし、内容が内容だけに、区切りでお待ちさせるのもどうかと思いましたので、間をあまり空けずのupです。

更新の間隔や頻度がまちまちで、ホント申し訳ないですが、本人一

生懸命やっていますのでどうかご容赦を。

次回は第20章『潰えた約束』です。

2011.4.18

セネカは地べたに倒れ伏し、そのまま気を失った。

薄れた意識の片すみに、柔らかな敷き藁わらの寢床にそつと寝かされた感触が残つてはいたが、これ以外のことは覚えていない。

その後、高熱を出したセネカは一晚中熱に浮かされながら何度もうわごとをつぶやいていた　と、あとになってアリオンから聞かされた。

岩陰の窪みまで運んでくれたのはギドだという。

「よかった。また、目を醒まさないんじゃないかと思って心配したよ」

アリオンが小さく安堵の息をついた。

「……なにがあつたの？　なにがなんだか、わかんないよ……」

気分はどう？という、アリオンの問いに、セネカは独り言のようにぼそぼそと応こたえた。

辺りは乳白色の霧もやでうつすらとかすんでいた。

湿気を帯びた空気がひんやりと肌をなで、木々から放たれるすがすがしく芳しい香気が窪みにまで漂っていた。

セネカは窪みの中に敷き詰められた心地のよいカタビラクサに、身を沈ませるように横たわっていた。

体にはすつぽりと上掛けを被っていたので、早朝の張り詰めた空気も、しつとりと草木を湿らす朝露も、まるでよそ事のようにだった。

セネカは一日中熱に侵されたのち、ようやく目を覚ました。

アリオンとギドが代わる代わる介抱をし、二人の献身的な看護のおかげでセネカの熱は一晚でひいた。

しかし、一旦骸むくろとなった体は重く、節々がぎくしゃくとしてぎこちがなかった。

セネカは、自分の体が、まるで自分のものではないような奇妙な感覚に陥っていた。

アリオンが何事かを考え込むようにふっと視線をそらせた。

一体何があったのか　セネカには半分は判っていた。

エリヌースの攻撃を受け、スタズタになつてくずれ落ちたアリオンを目の当たりし、いてもたってもいられず飛び出したこと。

それがためにエリヌースの攻撃に遭い、死んでしまったこと。

一旦は黄泉のくに　すなわちあの世に行ったものの、ルイザに諭され、黒の獅子王の助けでこの世に戻ってきたこと。

そして黄泉のくには父や母、それに姉のシンシアがいたこと……。

セネカは、しかし、それらはすべて夢であつたと。アリオンが、すべて君がみた夢だ　と言つてくれることを、心のどこかで、切実に願い、祈つた。

「君は……」

アリオンが思案顔を解き、ようやく口を開いた。

「エリヌースにやられたんだ」

どこから話しているいいものか　と、アリオンは考えに考え、慎重に言葉を選んでるように見えた。

「君はエリヌースの妖力で吹き飛ばされて……それから　」

「えっ……！？　黒……コゲ！？」

アリオンから事の顛末を聞き、セネカはぎよつとなつた。アリオンは小さく頷いた。

エリヌースはセネカに向かつて火球を放つた。それをまともに浴びたセネカはひどい火傷やけどを負つたのだという。

セネカの体は、まるで炎で炙あぶられたように黒く焼け焦げたのだと。

（そうか。だからあんなに熱かつたのか。熱くて焼け死ぬかと思っ

た……ああ、じゃなくて、一度死んだんだっけ)

セネカは、自分でも不思議なくらいに冷静に感慨深げになりゆきを思い返していた。

「でも……」

セネカがごそごそと上掛けの中をまさぐった。

衣服のしたの皮膚は、いたって普通のように思えた。とても火傷を負ったようには思えないし、今は痛みもない。

「傷跡は黒の獅子王が治してくれたんだよ」

アリオンが気づかうように声を落とす。

不思議そうに目を細めていたセネカは驚きのあまり目を見開いた。

「獅子王が!?! ど、どうやって?」

「……獅子王は、妖力の使い手だったんだ。その力を使って戦うこともできるし、自分の意識体を人の夢の中に現すこともできる。それに 傷ついた肉体の蘇生もできる。ものすごい力の持ち主だ」

黒の獅子王は、黒焦げになったセネカの体に手を翳して火傷の跡をすっかり治癒させたという。

「へえ……すごいんだな」

セネカは、今度は上掛けのしたから右の手首をさすった。

解^{ほど}けかけてはいたものの、包帯はまだ手首に巻き付いていた。

でも、どうしてだろう ? この傷も、なおせたかもしれないのに。

セネカはふと疑問に思った。が、すぐに思い返した。

きつと薬草を探し出してくれたギドの気持ちを汲み取ったのだから。それに。

セネカは黄泉のくにでの事をぼんやりと反芻^{はんすう}した。

あの時、黒の獅子王はその気になれば強制的にセネカを引き戻すことが出来たはずだ。それを、セネカが決め、自ら動き出すまで待っていてくれた。

それに、怯えるセネカを包み込んだあの穏やかでやわらかな気配

。。
すべてが黒の獅子王からにじみ出る優しさのように思えてならなかった。

どこからかギドが香ばしく焼けた肉と、冷たい水を満たした器を持って姿を現した。

ヤマトカゲかムクドリを捌いて、その肉を焙^{あひ}ってきたのだろう。岩肌の向こう側からは、焚き火の煙がたなびきながら空に伸びているのが見えた。いつの間にか周りを覆っていた靄は晴れていた。

セネカが首を巡らせギドの方に顔を向けた。ギドは歯をむき出し、顔をほころばせながら嬉しそうにぐるぐると喉を鳴らした。

串に刺され、こんがり焼き色の付いた肉は見るからに美味しそうだったが、セネカは思わず顔をしかめた。

肉の焼けた匂いがつんと鼻をついた。

そういえばエリヌースにやられた直後、同じような匂いがしたような気がする。

あれは、もしかしたら自分の体が焼け焦げた匂いだったのかも知らない……。

セネカは、ギドの運んで来たご馳走を迷惑そうに一瞥しただけで巡らせた首を元に戻した。

「あいつ エリヌース……って奴は？」

セネカは、今度はエリヌースの事が気になった。

得体のしれない装束に身を纏^{まと}ったその姿と、頭巾の奥から垣間見えた双眸^{そうまう}。

あの冷酷に光を宿した眼差しは、今、思い起こしてもぞくりと身震いがする。

聞くまでもないとは思ったものの、セネカはアリオンにたずねた。アリオンの返答は端的だった。

「エリヌースは、黒の獅子王が倒した」

「ギギ、ギ」

きつぱりと言い切ったアリオンに、ギドが何が言いたげに小声で唸った。

「ああ……そうだね。先に仕掛けたのは、ギドだ」

「へえ……。え？でも……」

「ギドは、僕たちのあとを追って来たんだよ」

アリオンから薪を集めるように言いつけられたギドは神がかり的な速さで薪を集めた後、焚き場に戻り二人がいない事を見届けるやすぐさま後を追いかけてきたのだ。

「ギドはとても鼻が利くんだ。だから、僕たちの居場所をすぐに見つけることができたんだよ」

アリオンが決まり悪そうな笑みを浮かべてギドを見上げた。

嘘についてギドを遠くへ追いやろうとした事はギドにはお見通しだったに違いない。ギドはアリオンに向かい、にんまりと得意げな笑みを浮かべて頷いた。

ギドは、地面に血まみれになって倒れ込んでいるアリオンと、黒く焼け焦げ煙をあげているセネカと、その傍らに立つエリヌースの姿を認めるや全てを察し、怒り狂った。

憤怒の形相で牙をむき、怒り猛りながら手首に提げた鎖を振り回すと、ギドはエリヌース目がけて力の限り鎖を打ち込み攻撃した。

狙いは寸分たがわぬものだったが、エリヌースが咄嗟に跳躍したので、ギドの放った鎖はエリヌースの足元をかすめただけだった。

「でも、ギドの攻撃がエリヌースの護りをゆるがせにした」

固唾を呑んで聞き入るセネカにアリオンは訥々と語った。

ギドの鎖は空しく地面に叩きつけられただけだったが、この隙を ついて黒の獅子王が　まるで風のように現れたという。

真正面から斬り込む黒の獅子王の姿にエリヌースは一瞬ひるんだものの、次の間にはその姿は大きく後方に退いていた。

退きながらもエリヌースは反撃に出た。

立て続けに放たれる火球が黒の獅子王を襲った。が。
「まるで獅子王が何人もいるようだった。あの凄まじい攻撃を瞬時に避けながら、あつという間にエリヌースの懐に取り付いた」
黒の獅子王は、目にも止まらぬ速さで一足飛びに突進し、一気に間合いを詰めた。

その様子は、あたかも複数頭の獅子が乱舞するかのようだったという。

そうして、エリヌースは黒の獅子王が突きあげた剣に胴体を無残にも貫かれ、ひとたまりもなく果てた、ということだった。

セネカは口をあんぐりと開けたまま、目をぱちくりとさせていた。黒の獅子王は、なぜそんなマヤカシのようなことが起こせるのだろうか？

「幻術だ」アリオンが言った。

「でも、この幻術をもつてしても、ギドの攻撃がなかったら勝てなかっただろうと……獅子王は言っていた。それほどまでにエリヌース強く、凶悪な相手なのだ」
セネカはアリオンの説明の一部始終を聞き終わると、ふうと大きくため息をついた。

黒の獅子王は体に負った傷を癒せるばかりか、幻術で敵を翻弄し、さらには夢の中や死の世界　黄泉にまで姿を現すことができる……。

その存在は、あまりにも超人的であり脅威そのものだった。

セネカは先ほどまで優しくてあたたかな人柄と思っていた黒の獅子王に対し、畏れにも似た敬意の念が湧き起るのを感じていた。

それに。

黒の獅子王は一旦は死んだセネカの魂を引き戻した。

セネカにとって命の恩人ということになる。

今度会ったらお礼を言わないといけな。

(お礼だった?)

その時、ふとセネ力の中で誰かが異論を唱えたような気がした。
(せっかく父ちゃんや母ちゃんに会えたの? 姉ちゃんにも会えたの? みんなと離ればなれにさせられたじゃないか。それなのに、お礼を言うのかい?)

そっだよ。だって、獅子王はこうしておいらを生き返らせてくれたじゃないか。
(確かにね。だけど、それで良かったって、本当にそう思ってるのかい?)

そりゃあ……そっだよ。そう……思ってる、さ。
セネ力は湧き起こる内なる声に戸惑い、心が揺らいでいた。

「……あれ?」ふと、セネ力は大切な事に気が付いた。
セネ力は脇にいるアリオンの体をまじまじと見つめた。
その体には傷ひとつない。

あんな大ケガだったのに? 黒の獅子王に治癒してもらったのだろうか?

セネ力がたずねると、アリオンは苦しそうに顔をゆがめ、首を横に振った。

「……違うんだ。セネ力」

「? 何が、違うの?」

「あれは……幻術だ。幻まほうだったんだよ」

「幻術? まぼろし? え……だって……あんなに血が出たのに、あんなに」

セネ力は、無残に斬り刻まれ血まみれで倒れたアリオンの様子を思い起こした。

まるで悪夢を見ているかのようだった。

エリヌースが軽く手を振り下ろした途端、アリオンの体から真っ赤な血が飛び散った。そして、アリオンは、まるで木偶のように

力なく、その場にくず折れたのだ。

「僕も、あの時はもうダメだと思った。もう、おしまいかと……思
った」

アリオンが重々しい口調で言った。その様子は、ひどく辛そうに
見えた。

「でも 獅子王がエリヌースを倒した途端、その術が解けたんだ。
傷も苦痛もすべて消えた いや、もともと傷なんて無かったんだ
よ。斬られてなかったんだから」

セネカが腑に落ちないといった様子で首をかしげた。アリオンは
続けた。

「エリヌースの目的は……父さんを殺した僕を つまり、テイタ
ーン最大の禁忌を侵した僕をオリンポスへ連行することだったんだ。
だから……奴は、僕を生かしたまま 最初から僕を殺すつもりは
なかったんだ」

「えっと。じゃあ、幻術っていうのは……」

「相手の五感を欺き、苦痛を与えて動けなくするだけだ。見た目に
はひどくやられたように見えても、実際には傷なんてどこにもない」
目に飛び込んでくる情景や、肉を断たれたような鈍い音、鼻をつ
く血の臭いや痛み、これらは全てエリヌースによるまやかし い
わゆる幻術によるものだという。

アリオンの説明を聞きながら、ようやくセネカの理解が追いつい
てきた。

「……。そうだったんだ。でも……」

それでもセネカは疑問に思った。同じように幻術にかかったのな
ら、なぜ自分だけこんなひどいことになったのだろうか？

アリオンは、まるで苦悶するような面持ちでこたえた。

「エリヌースは 最初から君を亡きものにするつもりだったんだ。
それで、容赦なく攻撃した。人の感覚を惑わす幻術を使わず、君を
殺そうと。だから、君は 死んでしまったんだ。セネカ」

声を詰まらせながらアリオンが言葉を継いだ。

「すまない。セネカ。本当に……。全部僕が悪かったんだ。君がこんな目に遭ったのは全部僕のせいだ。僕が獅子王の言いつけを守らず勝手に飛び出して、そればかりか、君の忠告も聞かず……」

アリオンは心からすまなそうにセネカに詫びた。

その様子は今にも泣き出しそうなほどだ。

「え……そんな。い、いいよ。もう。あにイったら、そんな顔すんなよ。ほら、おいらご覧の通りちゃんと生き返ったんだからさ」

セネカはおどけたような笑顔を作った。

「それにさ、あにイには隠れてるって言われてたのに、それを守らずに出ていったおいらが悪いんだ。へへ、また、余計なコトしちゃったんだよな。」

「それは違う！ セネカ！ 悪いのは僕だ」

「んなこと言っちゃってさ。どうせまたお節介だっと思ってんだろ？」

「……」

アリオンがまた、辛そうに顔をゆがめたので、セネカは口をつぐんだ。

セネカはエリヌースが現れる直前までアリオンと口喧嘩していたことを思い出していた。

「僕は、君にひどいことを言ってしまった。ごめん……。君を傷つけるようなことを言ってしまった……。それに……」

そう言いかけると、アリオンは気まずそうにセネカから視線をそらせ、何かを思案するように口を引き結んだ。

「……？」

セネカはアリオンのその様子が少し気になったが、そういえば自分もアリオンに対してひどいことを言ったのだった、と思い起こした。

セネカの提案で、あの時の争いについては、この場は「お互い様」ということになった。

「ケンカリヨウセイバイって言うじゃん。これでおあいこさ」

アリオンは、まだ何か言いたげだったが、その顔にようやく安堵の笑みが戻った。

「それより……」

セネカには気になることがまだあった。

黒の獅子王から、エリヌースは、七人いると聞かされていたのを思い出したのだ。

だとすると 残り、あと六人だ。

あと六人もあの不気味で残忍な輩がアリオンを追ってきているということになる。

「君はそんなこと心配しなくてもいい」

「そんな 心配するだろ！ 普通！」

セネカは身を起こそうと体をよじった。

が 思うように体にも四肢にも力が入らない。

「無理に動いちゃダメだ！ セネカ」

アリオンがセネカを押しとどめるように肩に手をかけた。

自力で起き上がるうとするのを諦めたセネカは、齒がゆさと悔しさのあまりいてもたってもいられず唇を噛んだ。

目の前に危機が迫っているというのに、それなのに体が言う事をきかないなんて。

「でも 早くここを出なくちゃいけないんだろ？ こんなところ

でぐずぐずしていたら、すぐに見つかっちゃうよ！ それに も

う、丸一日もムダにしてる……。もしも、あいつらが束になって襲

って来たら

「この一日は全然ムダじゃないよ、セネカ。今、君に必要なのは安静にしてゆっくりと体を直すことだ。無理をしてはいけない。いいね？ しばらく養生して十分に回復させるのが一番の早道だよ」

アリオンが事もなげに言った。

セネカは、一旦は食い下がるのをやめたものの、心の中は自責の念で押しつぶされそうだった。

足手まといになつてる。お節介のツケだ。

「獅子王は？」

セネカは慥然とした口調でたずねた。

「今は、いない」

アリオンが端的に答えた。

黒の獅子王は、アリオンに「しばらくはここを離れず、動かないように」と、これだけ告げて立ち去つたという。

「今は獅子王の言う事をきくしかない。少しの間ジツとしていよう」セネカは獅子王に会いたかつた。会つて聞きたい事があつた。

黄泉のくにでの出来事が本当の事なのかどうかを。

セネカの胸にはかすかではあつたが、疑念の気持ちちが湧きあがつていた。

もしかしたら、幻だつたのかもしれない。黒の獅子王は幻術使いなのだから、もしかしたらあれは幻術ではないだろうか？

セネカの脳裏に父と母と姉の姿が浮かんだ。

内臓がぎゅっと絞られたように苦しくなつた。そして、切なく哀しくなつた。

そつか 姉ちゃん、死んだんだ。探しても、もう、どこにもいないんだ。

セネカは姉のシンシアがどこかで生きてると思つていた。

海辺の村を占拠したオリンポス兵に連れ去られたあと、姉はあのまま城に連れていかれたものだとはかり思つていたので。

姉の笑顔がまた頭の中をよぎつた。

喉の奥が熱くなり、目の前がぼやけてきた。

「お腹すいただろう？ セネカ。何か食べよう。ゆっくり起きてみようか。手を貸すよ」

アリオンが気遣うようにそつと声をかけた。

「……いない」

セネカは上掛けを顔の上まで引きあげ、ミノムシのように体をも

ぐり込ませた。

「何も、食べたくない」

「1」（後書き）

アクセスありがとうございます。

タイトル、またまた変更となりましたが……これで（ようやく）確定です。

第20章『旅、再び』

セネカもアリオンも辛いところですが……この章、2人にはそれぞれ頑張ってもらいます。

コウミ

その日、セネカは窪みの敷き藁寢床に体を横たえたまま、身じろぎもせず一日の大半を過ごした。

木々の間から射し込むまばゆい木漏れ日や晴れわたる空、鳥の囀さえずりにも関心を寄せず、上掛けの中に潜り込み、陰鬱いんうつな面持ちでふさぎ込んでいた。

セネカはすっかり気落ちし、元気をなくしていた。

それは、離ればなれになった姉が　どこかで生きているものと信じていた姉のシンシアが既に亡くなっていると判ったからだだった。姉とは生きていればきつといつか会えるということを中心の拠よりどころとしていただけに、セネカの負った心の傷は深かった。

そして悪いことに、落ち込んだのは気持ちばかりではなかった。

黄泉のくから戻り、眠りから目覚めてからというものの、セネカは食べ物は一切口にしようとしなかった。この事はセネカの体の回復を遅らせる原因のひとつだった。

セネカは、肉の類たぐいはがんとして受け付けなかったし、木の実も喉を通らないからと言い、ほんの少し口にしただけでそっぽを向いた。まるで小さな木の実一粒ですら食べる事を拒むかのように、気持ちが頑かたくなだった。

少しでも沈んだ気分を紛らわそうとオリオンが積極的に声をかけたが、セネカはそれにも応えず貝のように黙りこくっていた。

すっかり心を閉ざし、一切の物事から自分を遮断するかのようにな上掛けに包まるセネカをオリオンもギドも心配そうに見守るしかなかった。

セネカは昼夜関係なく、うつらうつらと浅い眠りを繰り返しながら一日を過ごした。

やがてエリヌースに襲われてから数えて三日目の朝が訪れた。

「……アソス？」

ギドが運んできた食べ物と水に、ちらりと一瞥を投げただけのセネカが、アリオンの言葉に反応した。

「そう　アソス。霊峰アソス山だ」

セネカがようやく口を開いたので、アリオンは安堵し、嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「リュカオンという老人が、そのアソス山の中腹に住んでいるらしいんだ。」

アリオンによると、そのリュカオンという老人は元はオリンポス一帯を治めていたアルカディア族の王であったという。それが、自ら王を廃し、山に籠ったのだと。

しかし、セネカにとつて、なぜその老人が王位を棄ててまで単身山籠りをするに至ったのか。歳老いてはいるものの、リュカオンは衰えを知らぬ知恵者であり、とてつもない「力」の持ち主だということ　など、どうでもよかつた。

そんな見ず知らずの御隠居の事よりも、セネカには気になる事があつた。

「獅子王が？　来たのかい？　ここに？」

説明の途中でセネカが問いかけた。アリオンが「そうだ」と、小さくうなずいた。

黒の獅子王は、やはり唐突に現れて、リュカオンの事やこれらの事を啓示したのち、音もなく去って行ったのだという。

「なんで……教えてくれなかつたんだよ。獅子王が来たってこと」
セネカがカタビラクサの一点を見つめながらつぶやくように言った。その声は明らかに不満気だつた。

「聞きたいことがあつたのに……」

低くつぶやきながら、セネカは抱え込んだ膝を両手でぎゅっと握り締めた。

セネカは寢床から起き上がっていた。その背中には干し草を詰め

た麻袋があてがわれてあつた。心地のよい弾力のある麻袋は、ギドが丹精込めてこしらえた逸品だ。

「あ、ああ、すまない。せつかく眠っているのを起こしちゃ悪いかと、思つたんだ……。獅子王と話がしたかつたんだね？　じゃ、今度来たときには必ず」

セネカはいら立ちのあまり唇を強く噛みしめた。

自分だけ話をするなんて！　こつちは聞きたい事が山ほどあるっていうのに　！

セネカは聞きたかつた。

黒の獅子王はどうしてあのような‘まやかし’を見せたのか。

なぜ黄泉のくになどという嘘の幻影を見せて自分をだますようなことをしたのか。

セネカは自分でも制御できないほど猜疑心さいぎしんに満ち、やさぐれ、意固地になつていた。

アリオンが焚き場で焼いてきた肉をすすめた。

「いらない」

セネカは相変わらずかたくなな態度で、言葉ずくになに答えた。

「……。君は目を覚ましてから何も食べていないじゃないか。それじゃ体がもたない。弱つて、死んでしまう」

「死んだっていい」セネカは、またきつぱりと言つた。

（そうだ。死んだら母ちゃんや父ちゃんや姉ちゃんに会えるんだ。だから、死んだっていい。死んだって、構わないんだ）

一瞬、絶句したあと、アリオンが声を落した。

「せつかく獅子王が君の命を救い出してくれたのに」

「おいら救ってくれて頼んだわけじゃないんだ。獅子王が勝手にやったことだ」

「そんな言い方、するもんじゃない」

アリオンの眼差しが鋭くなった。そして、なんの躊躇もなく言い放つセネカに対して、こわばつた口調でたしなめた。

セネカはぶいと横を横を向いた。

アリオンは小さくため息をつく、今度は諭すように語気をやわらげた。

「少し無理してでも何か食べておかないと元気も出ないよ？」

「元気なんて出なくつたっていい」

セネカは投げやりにそう答えると、ごろりと横になり頭から上掛けを被った。

「置いてけよ」

「……え？ なんだって？」

「おいらなんて置いてさっさと出発すればいいんだ。こんなトコでぐずぐずしてたらまたエリナントカに襲われちまう。そいつらあと六人もいるんだろ？ 本当ならすぐにでもここを畳んで、ひとまず逃げなきゃならないんだろ？ どうせ、おいらは足手まといで、体だつて こんなんだし。返ってせいせいするだろうさ」

「……。君を、置いていけるはずないじゃないか、セネカ」

「ふん。どうだか」

「……」

アリオンはとうとう口をつぐんだ。

言いながらセネカは後悔していた。

心配してくれているアリオンに対して心無い事を言う自分に、命を救ってくれた黒の獅子王に対して疑いの心を持つ自分に嫌気がさしていた。

獅子王が、まやかし、をみせて自分を騙すなんてことはない。嘘をつくはずが無い。だって嘘をついたって獅子王には何の得もないのだから。

しかし、行き場のない哀しみと憤りの感情は抑えようもなく胸の中に渦巻き、吐き出さずにはいられなかった。

一旦外れた感情の箍たがをどうやって修復していいものか、セネカは自分でもまったく分からなくなっていた。

気晴らしに少し外に出てみようか　というアリオンの提案も辛辣に断り、セネ力は自分の力に閉じこもった。

「じゃ、少し眠るといいよ。獅子王が姿を現したら起こしにくるから。君が、聞きたい事があると言っていたって」

アリオンがそっとかけた言葉に、セネ力は上掛けの中に潜り込みながら無言で応えた。

（何を聞くんさい？　黒の獅子王に）

……なに、つて。……それは。

（そうだな。黒の獅子王はなんでも知ってるし、なんでもお見通しなんだから、聞けば本当のことを教えてくれるだろうさ）

セネ力の奥底から声が響いてきた。

その声は、赤裸で、正直な心情の部分をむき出しにしたもう一人の自分の声のようだった。

（知りたいのは、姉ちゃんが死んだのは本当かどうか　つてことかい？）

違う。獅子王は嘘をついて人をだますなんてこと、ない。だから姉ちゃんが本当に死んじまつたつてことは……分かつてる。

（だよな。本当に聞きたいのは、そのことじゃないよな？　本当に聞きたいのは）

セネ力は上掛けに包まりながら、自分で自分をぎゅっと抱きしめた。

（あの日、あの時、おいらが逃げたせいで姉ちゃんが死んだのかどうか　それが聞きたいんだろう？）

胸がえぐられるような鈍い痛みが走った。

（あの時　オリンポスの兵士は剣を抜こうとしてた。ちゃんとこの目で見ていたことだ。それを見ておいらは怖くなって逃げたんだ。そのせいで姉ちゃんは殺された）

ち、違う　！

（なにが違つんだよ。喰い物にしようとしたおいらに、まんまと逃げられてシヤクに触つた兵士が、腹いせに姉ちゃんを剣で刺して殺したんだ。そうに決まつてる）

違つ！ うるさい　！　黙つてろよ　！！

（でも、そう思つてんだろ？　おいらが逃げたせいで姉ちゃんが殺されたつて）

違つ！　やめろ！　もう　聞きたくない！　聞きたくない　！

セネカは両耳を掌で押さえた。胸が今にも張り裂けそうだった。　　。

あの日、あの時、姉ちゃんはやらしい兵士からおいらを逃がしてくれたんだ。だから、逃げたんだ　でも……。

（でも、そのために姉ちゃんは殺された）

また声が出た。その口調があまりにも当たり前のように、淡々としていたので、余計にセネカの胸に、無情な仕打ちのごとく突き刺さった。

セネカは激しく頭を振りたてた。

違つ　違つ　！！

（でも、それ以外姉ちゃんが死んだ理由が分からないじゃないか。だから獅子王に聞くのと同じことしてんだろ？　でも、怖くて聞けないもんだからおいらは獅子王を逆恨みして、それで　　）

バカッ！！　お前なんて、もう　消えろ　！

セネカは、もう一人の自分に心の中で罵声を浴びせた。

セネカは寢床に横たわりながら息が乱れていた。

確かに黒の獅子王に聞くのが恐かったし、自分のせいで姉が死んだのだという事実は、変えがたいように思えて仕方がなかった。

姉の死の原因が自分にある　　。

どんなに打ち消しても、頭から否定しても、もうそれ以外に考えられない。

考えれば考えるほど辛かった。自分自身がまるごと見えない重圧

に押しつぶされそうだった。

(逃げなければよかったんだよ。おいらが逃げなければ、姉ちゃんは死ななくてよかった。殺されずにすんだんだ。)

再びもう一人の自分の声が心の中に響き渡った。

自責の念が熱のように疼き、セネカを激しく痛め付けた。

セネカは焦点の合わない視線で空を仰ぎながらぐったりとしていた。

やがて浅い眠りを貪りながら、セネカは夢を見た。

母がいた。

横たわるセネカのかたわらに寄り添い、母はセネカを労いたわるような慈いつくしむような眼差しで見つめていた。

セネカはその童こわのように愛くるしく親しみのある顔立ちを見返しながら、ためらいがちにつぶやいた。

「……かあ……ちゃん？」

母が小さくうなずいた。

「……ね。かあちゃん、教えて」

母がまた小さくうなずいた。

「姉ちゃんが死んだのは、おいらのせいなの？」

母は穏やかな面持ちのまま、今度はゆっくりと首を横に振った。

「本当？ 本当に本当に本当？」

セネカはむくつと起き上がり、母にすがりつきながらその瞳を見つめ返した。

母はしっかりとセネカを見据えながら、こくりとうなずいた。

「本当？ ウソじゃないんだね？」

「母ちゃんはね、あんたに嘘なんかつきはしないよ」

母の声が心の奥にまで沁みるように響いてきた。どこか懐かしくて聞き覚えのある声音だった。

セネカは、体がじんわりとあたたまるような、何とも言えない悦うれびに浸っていた。

「行っちゃうの？」

セネカが母に問いかけた。母の体はふわりと宙に舞い上がり始めていた。

「待って、母ちゃん。お願いが、あるんだ……」

セネカの引き止められて、母の上昇がとまった。セネカの体もふわっと浮き上がっていた。

「ねえ……かあちゃん。お願い。あのね……あのね……」

母に面と向かったセネカはためらい、はにかみながら小さくぼつりつぶやいた。

「抱っこして」

母はにこやかな笑みをたたえて両手を大きく広げた。セネカはその胸に飛び込むように顔をうずめた。

母の懐に擁いだかれながら、セネカは赤ん坊のように体をまるめていた。包みこむ腕かひなはあたたかくて柔らかかった。

とろけるような甘美な感覚に包まれながらセネカは心から安堵していた。

(かあちゃんは嘘をつかない。嘘をつくはずがない)

ふと、頭を撫でられる感触がした。

セネカは目を開けた。

かたわらにはアリオンがいた。

「あ……。起こしちゃったかな……」

アリオンが申し訳なさそうに謝った。そして、ぼんやりとしたまどろみから抜けきらない様子で寢床に寝転がっているセネカにたずねた。

「お母さんの夢を見ていたのかい？ 何度もお母さんの名前を呼んでた……」

『どうだっただい』と言いたい意固地な自分を出し抜いて、素直な自分がこっくりと小さくうなずいた。

「おいら……かあちゃんの顔を知らなかったんだ。だって、おいら

が赤ん坊の時に死んじゃったんだもん」セネカが独り言のように小さくつぶやいた。

「でも、ヨミノクニで初めて会った時、なんとなく分かったんだ。もしかしたらこの人が、かあちゃんなんじゃないかなあって……」

セネカは寢床に寝そべったまま、ぼつりぼつりと話し始めた。

黄泉のくいで出会った母はとても穏やかな顔つきだったこと。とても優しいので、にこやかに話しかけてくれたこと。

アリオンはセネカの言葉に耳を傾けながら、時々小さくうなずいては静かに見守るように聴き入っていた。

「あにイは、故郷くこにおつかさんがいるんだらう？」

アリオンがハツとなったあと小さくうなずいた。

「いいなあ……あにイは。故郷くこに帰ればおつかさんに会えてさ。おいらなんてもう会いたくても、もう会えないのに……いいな。うらやましいよ……でも」

少し困ったような複雑な表情を浮かべていたアリオンが口を開く前に、セネカが言葉を継いだ。

「でも、おいら母ちゃんとは夢で会えるからいいや。かあちゃん、また夢の中に出て来てくれるかもしれない。そしたら、いつでも会える。頭もなでもらえるし、抱っこだってしてもらえるんだ。かあちゃんの抱っこはやわらかくて……あつたかかった……」

アリオンが、再びセネカの頭を優しく撫でた。

セネカは、ようやく上掛けの端で涙にぬれた頬をこしこしとこすりつけた。

不思議とアリオンに泣き顔を見られても恥ずかしいとは思わなかった。

セネカは少しだけ元を取り戻した。

すると、今、自分はとてもお腹がすいていることに気がついた。

そう言えばここ何日かロクに食べ物食べていない。

セネカはようやくむっくりと起き上がり、敷き藁の寝床から這い出した。

食べ物を欲しがるようになったセネカを見て一番喜んだのはギドだった。

ギドは勇んで狩りに出かけた。

アリオンの「遠出はしないように」という呼びかけも耳に入っただろうか分からないくらいの張り切りようだった。

しかし、獲物をうまく具合に捕まえることができなかつたらしく、ギドはしばらく戻って来なかった。

セネカはアリオンの採ってきた木の実を食べた。

実のほとんどは未熟だったが、セネカは一言も文句を言わなかった。

今の時期、熟れた実が収穫できる時ではないのは分かっていたし、そんな青い実の中からアリオンは食べやすそうなものを選んでくれることをよく知っていたからだ。

セネカは硬い実にかじりつき、奥歯ですりつぶしては一粒ごとに水と一緒に飲み込んだ。

胃袋の中で果肉がごろごろと蠢くようだった。セネカは半ばげんなりしながらも、最後の一粒を口に運んだ。

そこへアリオンのやって来た。

手には器を大事そうに持っている。

「いいものを持ってきたよ。セネカ」

アリオンは、込み上げる喜びを抑えきれないといった様子で、にこやかな笑みを浮かべていた。

「いいもの？」

渋い実を食べつくし、口の中がすっかり酸っぱくなっていたセネカは、口をすぼめながら首を傾げた。

「なんだい？それ」

アリオンはセネカの問いには答えず、にっこりと微笑むだけだった。アリオンはセネカの際に膝をついた。

セネカは怪訝顔でアリオンとアリオンが持っている器とを交互に見つめた。

器からは温かそうな湯気がたっている。覗き込むと　中身は液体のようだった。

「いいものだよ。とつても」

アリオンはそれだけ言うと、器にふうふうと息を吹きかけ始めた。器からはなんともいえない甘く芳しい匂いが立ち込めた。

器の中のものは、どうやら飲み物らしかった。が、それが何なのか、アリオンは教えてくれなかった。

アリオンはしばらく器の中の飲み物を冷ましたあと、ひとくち口に含み満足気な笑みを浮かべた。

「よし！　ちょうどいい。セネカ、さあ飲んでごらん」

アリオンから半ば強制的に差し出された器を受け取ったものの、セネカは器の中身をしげしげと見つめながら戸惑うばかりだった。

中の液体は濃い飴色をしている。

「冷めないうちに、さあ」

アリオンに促されるまま、セネカはおずおずと器の端に口をつけ、ゆっくりと傾けた。

ひと口飲んだ途端　とろりとした甘い味わいが口いっぱい広がった。

「……………！　なに……………？　これ……………」

セネカはもうひと口すすった。

「……あまい」

「おいしいかい？」

「うん！」

セネカの声が一段甲高くはね上がった。

「おいしい！ あまくて、すごく　　すごくおいしい！」

セネカは夢中になって、こくこくと喉を鳴らしながら器の中身を飲んだ。

「あわてないで。ゆっくりおあがりよ」

アリオンが言った。

しかしセネカは、息を継ぐのも忘れるほどの勢いで器の中身を一気に飲み干してしまった。

最後の一滴まで飲み終え、ふうと大きく息をついたあとセネカはアリオンにたずねた。

「これって、いったい……？」

「蜂蜜だよ」

「ハチミツ？」

アリオンが嬉しそうにうなずいた。「蜂蜜を湯で溶かしたものだ。ギドが蜂の巣を見つけてきたんだよ」

セネカはアリオンから、ギドが狩りに出かけた先で大きな蜂の巣を見つけて持ち帰って来たのだと聞かされた。

蜂の巣は焚火の煙でいぶされ、蜂を追い出したあと中から蜜を絞り出したのだという。

大きな巣からは瓶をほぼ半分満たすほどの蜂蜜が採れた。それをひとかたまり掬い取^{すく}って熱い湯で溶いたものがセネカの元に運ばれたというわけだ。

セネカはアリオンの説明を聞きながら器の底に溶け残った蜂蜜のかたまりを指でくぬぐい取り、ぺろぺろとなめた。こんな甘くておいしいモノは今まで食べたことがなかった。

「体に障るといけないからあまりたくさんはあげられないんだ。今

日はこれだけだよ」

少し意地汚かったかなと、セネ力は気恥ずかしくなって明後日の方に首をめぐらせた。

と。

岩場の凹みからギドがちらりと顔をのぞかせているのが見えた。

その顔はにんまりと歯をむき出し、満足気な笑みを浮かべている。

セネ力はギドの姿を見てどきりとした。

遠目から見ても、緑色の皮膚のあちこちが赤く腫れあがっているのが見て取れた。おそろく……。

「あいつ、八手に……刺されたのかい？」セネ力は際にいるアリオンにたずねた。

「ああ そうだ。巣を抱えこんだ時にひどく刺されたんだ。あ

でも手当はしてあるから大丈夫。ギドのことは心配はいらない

よ」

顔を曇らせるセネ力を気遣うようにアリオンがこたえた。

「顔色が良くなってきたね、セネ力。よかった。この調子ならじきに体も元に戻るはずだ」

目と鼻の奥がじんと熱くなった。アリオンとギドの二人の優しさが胸の奥にまで沁みてくるようだった。

「あ、あのさ……あにィ。あの……」

「？ なんだい？」

「……」

セネ力は少しためらったあと、くぐもった声で小さく「ありがとう」と言った。

「……あ！ あと、お礼を言いたいんだ。ギドに。だから……」

まだひとりで歩くことが難しかったので、セネ力はアリオンの腕につかまりながら窪みから外に出た。そしてゆっくりと焚き場に向かった。

目を覚ましてからずっと窪みに引きこもっていたセネ力は、何日かぶりに眩しい陽の光を浴び、新鮮な空気に触れた。肌にあたる風

の感触はとても快く、身体の内まであら浄あらわれるかのようにだった。

薄い陽光がゆっくり西に傾き木立ちの向こう側に見えなくなると、アリオンとギドとセネカの三人はほとんどひとかたまりになって小さな焚き火を囲み、暖をとった。

ゴロ石を積み重ねてしつらえた釜戸の中では明々とした炎がその舌先を伸ばし、上に置かれた串刺しの肉片をじりじりと炙っていた。あたり一面に香ばしい匂いが漂い、肉がこんがりといい具合に焼きあがると、お腹を目一杯空かせたギドが待ちかねたとばかりに脂のしたたる獣肉の塊にかぶりついた。

そのかたわらではセネカが甲斐甲斐しくギドの手当てをしていた。

ギドの肌には、蜂に刺された跡が数えきれないほど残っていた。セネカはギドの赤くなつた皮膚に、ハツカ草の葉をよく揉んだものを一枚一枚ていねいに貼りつけた。これはアリオンから教わつた処方だつた。

揉み出されたハツカ草の汁は刺し傷にしみるはずなのだが、ギドは特に意に介している様子はない。

蜂に刺されてデコボコになつたギドの肌は腫れも引き、少しずつだが傷も癒えてきているようだつた。

藍色の空全体に星のまたたきが覆う頃、それまで用心深く辺りに目を配りながら口を閉ざしていたアリオンが静かに切り出した。

それは黒の獅子王から示された事柄で、これから自分たちが向かうべき道であつたり、心しておかねばならない警告だつた。

アリオンはオリンプスから放たれた刺客エリヌースから執拗につけ狙われていた。しかもエリヌースは得体のしれない妖力の持ち主であり、アリオンの今の力ではとても太刀打ちできない。そんな輩の目から逃れるため、向かう道筋には細心の注意をしなければな

らない。

と、ここでセネカは聞きなれない人の名前を耳にした。

「アポロン？」

セネカは目をぱちくりさせた。

聞き慣れない　　というよりも、初めて聞く名前だった。

アリオンは小さくうなずき、淡々とした口調で語り始めた。

「アポロンはエリヌースよりも、もっと強い。もっと強くて、恐ろしい力　秘力の持ち主だ」

獅子王は、アポロンこそ真の相手となるだろう、とアリオンに啓示したという。

「今から僕たちはアソス山を目指す。そこに住むリュカオーン王に教えを乞うんだ」

「教えを？　どんな？」

「ゼウスを倒す方法と、アポロンとエリヌースの秘力の正体だ」
力を込めて応じたアリオンだったが、その言葉尻には若干の脅威きょごういしているようにも感じ取れた。

セネカの前では弱気を見せたり不安めいたことを口にすることは出来ないと思つての虚勢だったのだろう。

しかし、アリオン自身も判つていたはずだった。

そのようなとてつもない力を持つ相手に対して、付け焼き刃の攻撃手段では決して敵かないはしないということ。

「でも……進むしかないんだ」

アリオンは、決然とした面持ちで焚き火の炎を見つめていた。

発せられている言葉は、まるでセネカに向かって　　というよりも、自分自身に言い聞かせるかのようだった。

セネカはハツカ草の葉を貼りつける手を止めアリオンを見た。

焚き火の照り返しを受けたアリオンの顔は一心不乱に何かを考えているように見えた。セネカは何かを言おうとしたが、ふさわしい言葉がどうしても見つからなかった。

セネカはギドを介抱する手を休め、膝を抱えて座り込んだ。

ギドは相変わらずがつつと、骨をも食いつくす勢いで肉片にむしゃぶりついている。

三人の間に奇妙な沈黙が流れた。

セネカは、拭い切れないある疑問を抱いていた。

黒の獅子王だ。

黒の獅子王は、アリオンをリュカオンの所へ導こうとしていて、その事をアリオンに伝えるために姿を現した。

どうやらリュカオンは、アリオンの今後について導き、指南してくれるであろう頼りになる味方であるらしい。

それはセネカにも分かった。が、しかし、どうしてそれだけなのだろう。

獅子王はすべてをお見通しなのに、なぜ？

「獅子王つてさ。あっちに行けとかこっちに行けとかいうけど、どうして理由を教えてくれないんだい？ ただ一方的に言われるだけじゃ、こっちはまるで命令されてるみたいだし、ワケ分かんないじゃないか」

セネカはアリオンにたずねた。アリオンは夢から醒めたように面をあげた。

「ああ、そう……そうかも、しれない。でも 僕は、獅子王のことについては、そうじゃない違うことを考えいるんだ。セネカ」

「え？ そうじゃない違うこと？……って、どんな？」
虚を付かれ、セネカは驚きの声をあげた。

「獅子王は言っていた。『私は予め識る者^{あらかし}ではある。が、それを教え諭するのが役目ではない。私は道を示すのみ。ただそれのみ。それが使命であり役割である』と」

アリオンが諳^{そん}じている祈りの文句のように言葉を継いだ。

「……ヘンなの。要するにケチなんじゃないの？」

セネカが納得しかねるといった半ば呆れたような言い方に、硬かったアリオンの表情がふつと和らいだ。

「僕は」

アリオンは、半ば訴えるようにセネカを見据えた。セネカはどきりとしながらも、そのまっすぐな視線を受けとめた。

「なぜ獅子王はそうまでして僕を救うのか判らないんだ」

「そうまでして？」

アリオンはこくりとうなずいた。

「獅子王は話してくれたんだ。これまでのこと　僕が生まれくる前のことから、生まれてきた時のこと　そして、自分の身を犠牲にしてまで、母さんや僕やレスフィーナを救^{たす}ってくれた」

「レスフィーナ……」

セネカがその名前を口の中で繰り返した。

「あ　ああ。レスフィーナというのは僕の」

「知ってるよ」

セネカはポセイドンが今際^{いまわ}の際に、苦しい息の元から迸^{はな}り出た、哀願にも近い話の内容と言葉の数々をアリオンに聴かせた。

レスフィーナはアリオンの双子の妹であること。口がきけないという障碍があること。今はオリンポスに居るとのこと。そして、トラキアにいる母親の元に還してほしいとポセイドンに頼まれたこと。

その頼みは、ポセイドンにとって息子に向けた最初で最後の願いであったこと。

「そうか……。君は全部、聴いていたんだね」　アリオンがぼつりと言い、目を伏せた。

セネカは申し訳ないという気持ちになったが、今となっては仕方がないことだった。

もしもセネカがあの場合に居合わせなかったら、誤って父を討ち、呆然自失のアリオンは一步も動けなかったに違いない。

『なぜそうまでして』

アリオンの抱いている疑問を顧みたま時、ふとセネカの脳裏にはレ

ダの姿が浮かんでいた。

セネカはレダのことも含めて世話になった村での出来事や、かわった人たちの事を、ここしばらくの間忘れかけていた。

かつて暮らしていた村でレダは何かと気に掛けてくれた。ルイザが亡くなつてからというもの、村はずれの家に足しげく通い差し入れなどをしてくれたし、困った時には助言もしてくれたのだ。かたくなに意地を張るセネカに対しても親身になり、心を寄せてくれたのだ。

今となると、なんとなくわかる気がした。

きつと放っておけなかったのだ。

ひとりしておくとか危なっかしいから、というのもあったのだろう。でも、やはり気にかけてくれる理由は きつと。

セネカは首にそつと手をやった。

レダからもらった手製の飾り紐は今でもしつかりと結び目をつくり、セネカの細い首元を縁どっていた。

エリヌースに身を灼かれた時、一緒に燃えてしまわなくてよかった と、セネカは少しホツとした。

出口のない迷路に迷い込んでしまったかのように半ば途方に暮れ、お互いが再び沈黙した。

ギドはあらかた肉を食らい尽くし満足気に伸びをした後、丸太のような四肢を伸ばしくつろいでいた。

「そうだ。セネカ」

アリオンは突然、思い出したかのようにセネカの方を振り向いた。

「あの時の約束は忘れていないからね」

「え？ 約束……って？」

「ほら、オリンポスに行ったら、君のお姉さんを探すという約束だよ。僕たちはこれからリュカオン王と会ってからその後はオリンポスへ向かいことになるはずだ。オリンポスに到着したらまず、最

初に君のお姉さんを捜そう。オリンポスの兵士たちに連れて行かれたとなると、きっと、君の姉さんは城下にいるんじゃないかと思う。だから……？ セネカ？ どうしたんだい？ セネカ！」

目の前の焚火とアリオンと周囲の景色とが一緒くたになり、ぐにやりとひしゃげたような感覚だった。

かろうじて「なんでもない」と、噎れた声^かを絞り出したものの、セネカはぐらつく頭と体を支えることができず、隣にいるギドに寄り掛からねばならなかった。

異変を感じ取ったギドが、うずくまるセネカの小さな体を庇うように掌^{てのひら}の中に包み込んだ。

心配そうに呼びかけるアリオンの声が、やけに遠くから響いてきた。

アリオンは、姉のシンシアが亡くなっているということを知らなかった。

セネカはすぐにでも、姉の死を 姉がすでに死んでいることをアリオンに伝えなければと思った。

姉はもう死んだのだから、オリンポスのどこを探しても無駄なのだということを、だから自分はオリンポスへは行く必要がないということを。

しかし。

セネカは喉元まで出かかった言葉を押し戻した。

もしも、本当のことを口にしたならば、これからの二人の繋がりがどうなるのかを咄嗟に覚ったからだ。

姉の死を伝えること、すなわち約束が無かったことになるというのは、自分とアリオンとを結ぶ絆を完全に断ち切ることになるのではないだろうか？

姉の死はセネカにとって胸が張り裂けそうなほど辛い事実だった。しかし、アリオンとの繋がりが無くなってしまうのも同様に、いやそれ以上に辛い事実なのだということにセネカは打ちのめされていた。

た。

まるで足元の地面が傾ぎ、そのままがらと音を立てて崩れていくかのようだった。

セネカは奈落の闇の中へ落ちこんでいくような、底知れない不安に取りつかれていた。

「4」（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。
ようやく更新が叶いました。
お待たせいたしました。

ちよつと中だるみの章となつてしまつたかな…と；
次の章ではがつつり大きく動かしたい！と、思っております。

年内のuppは難しいかもしれませんが、
環境の変化などがあり、執筆が思ふように進みません。
『Sena』を可愛がつてくださる方には申し訳ないと思つて
います…；

今後ともゆるりと気長にお待ちいただけましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3774e/>

Sena

2011年12月15日00時51分発行